フィロロギカ ― 古典文献学のために

（I）

2006

フィロロギカ編集委員会

フィロロギカ　第I号

（編集責任）
『フィロロギカ』編集委員会
事 務 局 長：葛西 康徳
名誉編集委員：久保 正彰、E. Craik
編 集 委 員：安西 眞、大芝 芳弘、納富 信留、佐野 好則

フィロロギカ　第I号

I　(古典の受容)

堀尾耕一：プロギュムナスマタ文献の伝承について………………………1

久保正彰：ヤコブス・ホイエルとホメロス研究

—「フィロロギカ」の歩みとともに—　第1章………………19

久保正彰：ヤコブス・ホイエルとホメロス研究

—「フィロロギカ」の歩みとともに—　第2章………………43

II　(古典の本文)

本城大一：Hesiodus, *Theogonia* 576-7: 二重の冠？……………………53

安西　眞：Sophocles, *Ajax* 1373……………………………………67

安西　眞：エウリピデスと οὔ που 疑問文…………………………75

佐野好則：Aristophanes, *Pax* 1268-1304

—叙事詩およびエレゲイア詩のパロディーについて……………89

納富信留：プラトン『国家』の新しい校訂版について

－ S. R. Slings, *Platonis Rempublicam*, OCT －………………99

資料：プラトン『国家』第一巻のテクストについて

—Slings 新校訂と旧校訂との異同—……………………………113

Elizabeth Craik : The Text of the Hippocratic *Treatise On The Eye*……121

日向太郎：トロイアの存亡にかかわる教え

Ovidius *Ars Amatoria* 3, 439-440……………………………137

プロギュムナスマタ文献の伝承について

堀尾耕一

はじめに

かつてストア派のゼノンは、弁証学 (dialectica) と修辞学 (rhetorica) との違いを喩えるのにみずからの手を示して見せ、拳を握った場合が前者、手のひらを開いた場合が後者であると説いたという。弁証学では簡潔な言葉が凝縮して扱われ、かたや修辞学では多彩な言葉が押し広げて用いられる、ということがまずは語られているのだろう。けれどもそれと同時に、この比喩には、切ってもきれない両者の隣接性がうまく含意されているように思われる。なるほど、弁証学と修辞学とでは、それぞれの指向性の違いははっきりしているものの、その扱うべき領域に関しては重複する部分が少なからずある。そして、そこにあえて線引きを施そうとすれば、その基準はむしろ恣意的な性格を帯びたものとならざるをえないだろう。ところで、本論で扱うプロギュムナスマタとは、ちょうどこの両者の交錯する場所に求められるような言語的営みであったと、言えるのではないか。

西暦紀元前後、ギリシア人によって修辞学の予備訓練として確立されたこの方法は、帝政期のバイリンガルな状況においてラテン知識人にもひろく知られていたらしい。けれども、やがて東西ローマの分裂と共に、西のラテン語圏ではこの教育課程は次第に忘れ去られ、中世に入るとわずかにその残滓が認められるばかりとなる。これに対して東のギリシア語圏においては、プロギュムナスマタは修辞学を構成する一部門として扱われ続け、ビザンティウムの終焉を迎える15世紀に至るまで、文芸活動全般にわたって大きな影響を及ぼすことになるのだった。

では、どうしてこのような違いが生じたのか。そこに、弁証学と修辞学との領域区分をめぐる問題が関わってくるのだと思われる。すなわち、東のギリシア語圏と西のラテン語圏とのあいだに、この二つの学に関する認識の隔たりが生じてしまい、そしてそのことが、プロギュムナスマタという教程の扱われ方に大きく影響したと考えられるのだ。本論では、東西それぞれにおけるプロギュムナスマタの位置づけられ方をまずは文献の伝承という観点から整理したうえで、その違いの意味するところを理論的側面からあらためて検討する、という手順で話を進めていく。なお、問題が主として中世と呼ばれる時代に関わる以上、ここでのギリシア語圏 / ラテン語圏という区分けはおよそ「ビザンティウム」および「ラテン中世」という呼び方に対応し、必ずしも古代のそれと一致するものではないことをあらかじめ断っておきたい[1]。

---

(1) 修辞学の歴史におけるプロギュムナスマタの意義を論じた先行研究としては、月村辰雄「プロギュムナスマタ・ある修辞学の練習問題集をめぐって」レトリックとフランス文学、平成5年度科研費研究報告書 (1994) がある。なお本論の構想は、東京大学文学部 月村辰雄・片山英男 両教授の助言に負うところが大きい。記して謝意を表したい。

1. 伝承の概観：東のギリシア語圏

(1) プロギュムナスマタ諸文献

プロギュムナスマタ (προγυμνάσματα) とは、文法教師のもとで一通り読み書きの教育を終えた青少年が、修辞学者に師事したのち、本格的な模擬弁論 (μελέτη: declamatio) に取り組むのに先だって修めるべき「予備的訓練」を意味し、ローマ帝政期にはひとつの教育課程となっていた。のちにプロギュムナスマタ教科書の定番となった4世紀のアプトニオスに従うならば、この教程は以下の14課題によって構成される。すなわち、寓話 (μῦθος)、語り (διήγημα)、要録 (χρεία)、格言 (γνώμη)、論駁 (ἀνασκευή)、確証 (κατασκευή)、汎用の論法 (κοινὸς τόπος)、称賛 (ἐγκώμιον)、中傷 (ψόγος)、比較 (σύγκρισις)、さらには性格づけ (ἠθοποιία)、描写 (ἔκφρασις)、一般論題 (θέσις)、そして、法案 (νόμου εἰσφορά) である。このうち、寓話や格言といった課題には文法学の延長という色合いが強く見受けられる一方、確証や論駁、そして一般論題などは、はっきり弁証学に由来する方法であったのに違いない。おそらくはもともと出自を異にする諸課題が、修辞学の予備訓練としての有益性という実践上の要請によってとりまとめられ、紀元前後にひとつの教程として定着したものと考えられる[2]。こうした事情は、逆にこれらの課題の結びつきが絶対的なものではないことを意味し、後に見るように、状況によっては単独の課題ごとにふたたび分解されてしまう可能性を含んでいたのだった。

さて、これらの課題についての定義および実作上の要諦を示した教科書として、テオン (1世紀)、ヘルモゲネス (2世紀)、アプトニオス (4世紀)、ニコラオス (5世紀) の4点が、今日まとまったかたちで伝わっている。また、それに準拠する言わばお手本作文のみを集めたものとして、リバニオス (4世紀) による著作が伝存する[3]。このうちアプトニオスのものは、個々の課題について、理論的な要点を示したうえで原則ひとつずつの簡潔なお手本を収録しており、この点で他の文献にはない扱いやすさを示している[4]。おそらくはこうした体裁が重宝された結果として、アプト

---

(2) G. Reichel, *Quaestiones Progymnasmaticae* (Leipzig 1909). なおプロギュムナスマタ文献の成立事情については、機会を改めて論じる予定である。

(3) 現代の校訂版テクストとしては、それぞれ M. Patillon & G. Bolognesi, *Aelius Theon: Progymnasmata* (Paris 1997); H. Rabe, *Hermogenis Opera* (Leipzig 1913); H. Rabe, *Aphthonii Progymnasmata* (Leipzig 1926); J. Felten, *Nicolai Progymnasmata* (Leipzig 1913); R. Foerster, *Libanii Opera,* vol. 8 (Leipzig 1915). このうち、ヘルモゲネスに帰されるものは真作とは見なされていない。またリバニオスのものには、作者不詳の練習作文が数多く含まれる。このほかにも、ミヌキアヌスをはじめとする帝政期のギリシア修辞学者によっていくつかのプロギュムナスマタが書かれていたことが、『スーダ』の報告によって知られる。H. Rabe (1926), pp. 52-57.

(4) こうした体裁には、彼の師と伝えられるリバニオスの教育活動が反映しているものと考えられる。なお、アプトニオス『プロギュムナスマタ』の構成は以下の通りである。 1.< 寓話 > 習性型の寓話「蟻と蝉、若者たちへの労苦の勧め」2.< 語り > 薔薇についての語り、戯曲風　3.< 要録 > 発話型の要録「イソクラテスは、教育の根は苦いがその実は甘い、と言った」4.<格言>勧奨型の格言「貧乏を逃れようとあらば、キュルノスよ、口を開いた大海へと、切立つ岩場からなりと飛び降りよ」5.< 論駁 >「ダプネにまつわる話が道理にかなっていないこと」6.< 確証 >「ダプネにまつわる話が道理にかなっていること」7. < 汎用の論法 > 独裁者に対する汎用の論法　8.< 称賛 > トゥキュディデスの称賛 / 知恵の称賛　9.< 中傷 > ピリッポスの中傷　10.< 比較 >

ニオスの『プロギュムナスマタ』はその伝承の過程で特別な扱いを受けることになる。テオン、ニコラオスを伝える中世写本はいずれも2、3点にすぎず、ともに本文は不完全なかたちでしか伝わっていない[5]。またヘルモゲネス作とされるものについても、15世紀以前に作られた写本は5ないし6点にとどまる。それに対してアプトニオスのものは数十点が伝存するが、数の多さもさることながら、注目されるのはその伝承形態である。有力写本をはじめとしてほぼ例外なく、この著者のプロギュムナスマタは「ヘルモゲネス修辞学体系」(Corpus Hermogenianum) と呼ばれる写本に収録されているのである[6]。以下では、ビザンティウムの修辞学教育において中心的役割を担ったこの「ヘルモゲネス体系」の伝承について検討する。

(2) ヘルモゲネス修辞学体系

この修辞学体系を構成するのは、次の五つの著作である。まず (1) アプトニオスの『プロギュムナスマタ』がはじめに置かれる。ついで、(2)『争点 (スタシス) 論』(*Περὶ στάσεως*)、(3)『発想論』(*Περὶ εὑρέσεως*)、(4)『文体論』(*Περὶ ἰδεῶν*)、(5)『能弁の方法』(*Περὶ μεθόδου δεινότητος*) がこれに続く。この四点はいずれも2世紀の修辞学者ヘルモゲネスの作として伝えられるが、このうち真作とされているのは (2) と (4) の二点であり、(3) と (5) については4世紀以前に別の作者によって書かれたものと考えられている[7]。さらに、これらを基本としつつ、それぞれの著作についての導入もしくは要約的な記事が著作の合間に挿入された写本を数多く見出すことができる[8]。現存する諸写本の伝承は大きく二つの系統に分かれるが、10ないし11世紀に作成された Parisinus 1983、11世紀の Parisinus 2977 に代表される P の系統、およびいずれも11世紀の Urbinas 130、Basileensis 70、Ambrosianus 523 に代表される V の系統の双方、つまりは有力写本のすべてがこの五部の体系を収録していることから、10世紀以前にこの「ヘルモゲネス体系」が出来上がっていたことは確実である[9]。

では、この五部構成の体裁はいつ頃にまで遡るのか。H. Rabe によれば、P と V という二つの伝承経路の独立性は高く、したがってその親となる写本はかなり古い時代に求められることになるという。また、たとえば有力写本のひとつ Parisinus

---

アキレウスとヘクトルとの比較　11.< 性格づけ >「子供たちが死んだとき、ニオベはどんな言葉を発するだろうか」12.< 描写 > アレクサンドリアの神殿およびアクロポリスの描写　13.< 一般論題 >「結婚すべきか」14.< 法案 > 姦通現行犯はその場で殺されるべしとする法律の非難 .

(5) このうちテオンについては、6世紀頃に作成されたアルメニア語訳の伝承によって、ギリシア語写本に欠落している後半部の復元が初めて可能となった。M. Patillon & G. Bolognesi (1997).

(6) Rabe (1926) がアプトニオスの校訂に用いている24写本のうち21点がヘルモゲネス体系 (もしくはその部分) を構成する。ただ、伝存する体系写本の数そのものはこれを大きく上回ることが確実である。cf. H. Rabe (1913), pp. XV-XIX; I. Mercati & al., *Codices Vaticani Graeci*, t. 1 (Roma 1923).

(7) H. Rabe (1913), pp. VI-XII.

(8) これらの周辺的な記事は、H. Rabe, *Prolegomenon Sylloge* (Leipzig 1931) に収録されている。

(9) H. Rabe, 'Rhetoren-Corpora' RhM 67 (1912), pp. 321-357.

1983には、本体となる五編のテクストのほかに一覧(πίναξ)、導入(εἰσαγωγή)、序説(προλεγόμενα)、摘録(ἐκλογή)といった記事が都合19点を数えるなど、10ないし11世紀の段階ですでに多くの付加的記事が伝えられていることが注目される。なかでも、11世紀の写本Vaticanus 107に収録されたアプトニオスへの序説(προλεγόμενα)にはこの五つの著作への明確な言及が見出されるが、Rabeはこの記事が書かれたのを6世紀前後としたうえで、体系の成立を5世紀頃と想定する(10)。この年代設定そのものは必ずしも確定的とは言いがたいけれども、ヘルモゲネスの諸著作とアプトニオスのプロギュムナスマタとがごく早い時期から一連の教科書として扱われていたと考えることには、かなりの蓋然性があると見てよいだろう。こうした一体性は、アプトニオスがそもそもヘルモゲネスによる一連の修辞学書のためにプロギュムナスマタを著したとする『スーダ』の記事を生み出すほどだった。

さて、これら五つの著作の配列を一瞥しただけでも、この体系が修辞学の学習課程を強く反映したものであることが窺われよう。まず(1)『プロギュムナスマタ』において弁論の基本となる諸課題が扱われたのち、(2)『争点(スタシス)論』ではもっぱら法廷弁論を念頭に置いた争点ごとの整理がなされ、ある犯罪を当該の人物が「やったのかどうか」という事実性に関する争点(στοχασμός)、やったとして「何をやったのか」という定義に関する争点(ὅρος)、さらにそれが「いかなる性質の行為なのか」という法的性質を問う争点(ποιότης)、あるいは係争自体の正当性を問う管轄移転の争点(μετάληψις)という大きな四区分のもと、個々の争点が細目に分けて示される。つづく(3)『発想論』においては、緒言、叙述、論証といった、弁論を構成する各部分ごとの要諦が示され、(4)『文体論』では主としてデモステネスの弁論作品をもとに、広く文章表現の全般が、明瞭(σαφήνεια)、偉大(μέγεθος)、優美(κάλλος)、機敏(γοργότης)、品性(ἦθος)、率直(ἀλήθεια)、そしてそれらの上位に立つ能弁(δεινότης)という七つの概念のもとに整理される。この最後の能弁に特化したかたちで本来の(5)『能弁の方法』は書かれていたはずであるが、大系に収められているのは補足的な事項について漫然と論じたものに過ぎない(11)。

この一連の教程で目指されていたのは、ひとことで言うならば、古典期のアッティカ風の文体に習熟し、それを模範として読み書きする能力を養うことに尽きていたと思われる。古典的な文体でものを書く能力は、文人たちにとってばかりでなく、行政に関わる者にとっても必須の条件とされていたらしい(12)。東のギリシア語圏におけるこうしたアッティカ散文至上主義は、帝政期の初めから15世紀に至るまで、一貫して維持されることになる。皇帝を戴くビザンティウムにおいて、あるいは民主的な政体を賛美し、あるいは専制君主を非難する作文に青年たちが汲々とする姿は、いささか滑稽であり、また異様とも映るだろう。ただ、こうした時代錯誤的な営みを抜きにして、古典期のアッティカ弁論作品が今日にまで伝承されるなどということは、まずありえなかったのも確かなのである。

(10) H. Rabe (1931), pp. XIX-XXIII; XLVI-XLVIII.

(11) この体系に関する包括的な解説としては、G. A. Kennedy, *Greek Rhetoric under Christian Emperors* (Princeton 1983), pp. 52-122; M. Patillon, *Hermogène: L'art rhétorique* (Paris 1997).

(12) L. D. Reynolds & N. G. Wilson, *Scribes & Scholars*[3] (Oxford 1991), pp. 51-52.

ところで、いわゆる自由学芸 (artes liberales) という考え方がビザンティウムにおいて受け入れられていたのかどうかについて、その正確なところは不明であるけれども、学校教育の場において文系三学科 (trivium) にほぼ相当する内容の教科が扱われていたのは間違いない[13]。このうち「文法学」(γραμματική) としては、トラキアのディオニュシオスが著した文法書から入り、まずはホメロスのとりわけ『イリアス』を学ぶ。また、三人の悲劇詩人およびアリストパネスの作品をそれぞれ三篇一組 (trias) で読むという習慣が、パライオロゴス朝の時代までに定着したようである。散文ではデモステネスの作品が圧倒的な地位を占め、ちょうど「詩人」といえばホメロスを指すように、単に「弁論家」といえばこのデモステネスを指すことになった。これに平行して「修辞学」(ῥητορική) の理論が学ばれたはずであり、その教科書がアプトニオスおよびヘルモゲネスの諸著作だったということになる。「弁証学」(διαλεκτική) についてはアリストテレスのいわゆる「オルガノン」が、ポルピュリオスによる注釈ともども主要な教科書として扱われていたらしい。

なお、修辞学関連では、この他にもいくつか言及に値する著作がある。たとえばメナンドロスの著作などは、賞賛弁論の教則本としておおいに利用されていた形跡がある。ただ、これが「ヘルモゲネス体系」のように注釈の対象とされることはなかった。また、アリストテレスの『修辞学』はいわゆる修辞学書として扱われていたというよりも、むしろ弁証学に強く関連づけて読まれたようである。『修辞学』および『詩学』については、いわゆる「オルガノン」に含まれるべきか否かが古代後期の新プラトン主義者たちの主要な関心事だったといい、そして中世においてこの『修辞学』が再び研究の対象となるには、12 世紀を待たねばならなかった[14]。いずれにせよ、修辞学部門において「ヘルモゲネス体系」が一貫して中心的な役割を演じていたことは、疑う余地のないところである。

さて、こうした修辞学教程の予備部門として位置づけられたアプトニオスのプロギュムナスマタは、当然のことながら、学問の在り方全般にひろくその影響を及ぼすことになった。ビザンティウムの学芸におけるアプトニオスの影響力を大きく見積もりすぎるということはありえないとは、この分野では先駆的な業績を残している G. L. Kustas の言である[15]。いまはその詳細に立ち入ることはできないけれども、このことは、たとえば中世を通してアプトニオスへの注釈書が 3 回ほど作成されているという事実からも窺えるだろう。このうち、9 世紀のサルディスのヨハネによる注釈は古代末期の新プラトン主義的な傾向を強くとどめるのに対し、10 世紀のゲオメトレスのヨハネによるそれは、ギリシア教父からの引用が見られるなどキリスト教的色彩が濃厚である。この両者の成果を取り入れた形で、さらに 11 世紀にはドクサパトレスのヨハネが 3 番目の注釈書を著すことになるのだが、同時に彼は、ヘルモゲネスの『争点論』、『発想論』、および『文体論』への注釈も手がけている。

(13) N. G. Wilson, *Scholars of Byzantium* (Baltimore 1983), pp. 18-27.

(14) G. L. Kustas, *Studies in Byzantine Rhetoric* (Thessaloniki 1973), pp. 7-8; T. M. Conley, 'Aristotle's *Rhetoric* in Byzantium', Rhetorica 8 (1990), pp. 29-44.

(15) G. L. Kustas (1973), p. 22, n. 1. なおアプトニオスがビザンティウムの文芸活動全般に与えた影響については、E. Jeffreys (ed.), *Rhetoric in Byzantium* (Aldershot 2003) に収録された諸論文に詳しい。

ビザンティウムにおける以上のような修辞学事情は、「ヘルモゲネス体系」の写本がイタリア半島に伝えられる15世紀に至るまで、基本的には変化しなかったようである。そして、この体系の体裁は、1508年ヴェネチアのアルドゥスによって出版された『ギリシア修辞学集』(*Rhetores Graeci*)の初刊本(editio princeps)にも踏襲されることになる(16)。基本となる五つの著作が第1巻に収められたばかりでなく、翌年出版されたその第2巻には、アプトニオスへの序説(προλεγόμενα)、あるいはヘルモゲネス『スタシス論』への注釈(σχόλια)など周辺的記事までが収録されている。また、1569年にポルトゥスが出版した『修辞学選集』でも、やはりこの五部構成は揺らぐことがなかった。これら二つの刊本の出版にあたって、ともにクレタ島出身のギリシア人が編集に当たっているという事実は、少しばかり興味深い。16世紀に入ってなお、彼らには「ヘルモゲネス体系」が強く意識されていたと理解できるのだ(17)。後に触れるように、これに前後してラテン語に移されたアプトニオスのテクストは、むしろこの体系とは切り離されたかたちで人文主義者たちに受容されていくことになるのだった。

ここまで、プロギュムナスマタ文献のうちアプトニオスのものがある時期を境にビザンティウムにおいて独占的な地位を獲得したこと、さらにはそれが15世紀に至るまで修辞学の体系を構成する不可欠の一部門であり続けたという事実を、まずは確認することができた。そこで、こんどは西のラテン世界におけるプロギュムナスマタ文献の扱われ方に目を転じてみたい。

2. 伝承の概観：西のラテン語圏

(1) プリスキアヌスの翻訳

帝政期ローマにおいてラテン修辞学者たちのあいだにもプロギュムナスマタという教育課程が知られていたことは、クィンティリアヌスおよびスエトニウスの証言するとおりである。けれども、ひとたびギリシア語教育という文脈を離れた場合に、プロギュムナスマタがラテン語教育の現場においてもひとつの教程として定着していたのかどうかについては、やや疑問の余地が残る。クィンティリアヌスによれば、同時代の修辞学者たちのあいだには、初等課題をないがしろにしてより高度な模擬弁論(declamatio)のほうを教えたがる傾向が顕著であり、このため本来は修辞学者が扱うべきプロギュムナスマタの課題を文法学者たちが奪ってしまうという現象が起きていたという(18)。また、2世紀初頭にスエトニウスが一連の課題に言及する際、ラテン語における修辞学教育の方法が必ずしも一様ではなかったことを指摘したうえで、一般論題をはじめとするギリシア式の練習があまり実践されなくなっていた

(16) M. Sicherl, *Griechische Erstausgaben des Aldus Manutius* (Paderborn 1997), pp. 310-340.

(17) すなわち、アルドゥス版の校訂作業に携わったDemetrios DukasおよびMarcus Musurus、そしてポルトゥス版のFranciscus Portusは、いずれもクレタ島出身のギリシア人である。cf. D. J. Geanakoplos, *Greek Scholars in Venice* (Cambridge Mass. 1962), pp. 138-141. ちなみに前者の出版準備期間中、アルドゥスの工房にはエラスムスも居合わせていた。ibid. p. 264 n.39.

(18) Quint. *Inst.* 2. 1. 1-3.

ことを窺わせる書き方をしている点も無視できないだろう[19]。なお、古代においてプロギュムナスマタの教科書がラテン修辞学者の手でまとめられたという事実は、およそ確認されていない。

ラテン中世に受け継がれたプロギュムナスマタ文献は、先に挙げた現存する四点のギリシア語著作のうち、ヘルモゲネスに帰されているものの翻訳であった。訳者はプリスキアヌス、6世紀初頭にビザンティウムを中心に活躍した文法学者で、中世を通してラテン語文法教科書の定番となる『文法学教程』(*Institutiones grammaticae*) の著者として知られる。このプリスキアヌス訳『プロギュムナスマタ』(*Praeexercitamina*) を伝える写本は、8世紀に作成されたものが1点、9世紀が12点、10世紀が3点、10ないし11世紀が2点、11世紀が4点、以降は12世紀と14世紀のものがそれぞれ1点ずつ[20]。こうした写本の分布状況から、この著作が読まれていたのが中世の比較的初期であったことが窺われよう。なかでも、8世紀に作られたParisinus Lat. 7530は特筆に値する。この写本はもともとベネディクトゥスの創建したモンテ・カッシーノ修道院に所蔵されていたことが知られており、プリスキアヌス訳のほかにも、他の経路では伝わらない修辞学関連の著作を数多く収録している。そこには、エンポリウスの作という「性格づけ」や「汎用の論法」に関する著述、あるいは無名氏の「称賛」および「比較」を扱った断片など、プロギュムナスマタの名残をとどめる記事を見出すことができる[21]。中世の入り口において、修道院の営みが古典修辞学を後世に伝えるうえで大きく貢献したことを物語る、ひとつの貴重な事例と言えよう。

ただ、これらの著作はどのような読まれ方をしていたのだろうか。プリスキアヌスの訳したヘルモゲネスに帰される『プロギュムナスマタ』は、伝存するプロギュムナスマタ文献のうちでもことのほか簡潔であり、アプトニオスのそれのような教育的実用性を期待できるほどの書物とは言いがたい。たしかに、E. R. Curtiusの『ヨーロッパ文学とラテン中世』においては、中世のいくつかの韻文作品がこのプリスキアヌス訳プロギュムナスマタに関連づけて論じられている。とりわけ、「称賛」、「描写」あるいは「性格づけ」といった課題が文学作品に与えた影響を無視することはできないに違いない[22]。けれども、むしろここで問題にしたいのは、はたしてこれらの課題がひとつの教程を構成しているという認識があったのかどうか、という点なのである。

たとえば、7世紀前半にセビリアの司教イシドルスによって著された『語源誌』

(19) Suet. *Rhet.* 1. 8.

(20) M. Passalacqua, *Priscianus: Opuscula,* vol. 1: *De figuris numerorum; De metris Terentii; Praeexercitamina* (Roma 1987), pp. XXIX-XXX.

(21) L. Hortz, 'Le Parisinus Latinus 7530, synthèse cassinienne des arts libéraux', Studi Medievali 16 (1975), pp. 97-152. なお、無名氏の「称賛・比較」断片 [= C. Halm, *Rhetores Latini Minores* (Leipzig 1863) pp. 587-588] については、近年、テオン『プロギュムナスマタ』の部分的なラテン語訳であることが判明した。U. Schindel, 'Ein unidentifiziertes "Rhetorik-Exzerpt": der lateinische Theon', Nachrichten der Akad. der Wiss. in Göttingen (1999), pp. 55-81.

(22) E. R. クルツィウス (南大路ほか訳)『ヨーロッパ文学とラテン中世』(みすず書房 1971), p. 95; 月村 (1994), pp. 14-15.

(*Ethymologia*) 第2巻の前半部は「修辞学」にあてられているが、その第11章から第14章にかけては、それぞれ「格言」(sententia)、「確証と反駁」(catasceua et anasceua)、「人格創作」(prosopopoeia)、「性格づけ」(ethopoeia) となっている。これらがプロギュムナスマタ起源の項目であることはおそらく間違いあるまい。が、「修辞学」部門の中でこれらがどう位置づけられているのかについては、少しばかり注意を払うべきだろう。すなわち、「弁論を構成する四部分」、あるいは「修辞学的三段論法」といった項目に後続するかたちで、これら「格言」以下の記述が位置しているのである。こうした配列から見るかぎり、一連の項目に本来の「予備訓練」としての機能が期待されていたわけではなかったと判断せざるをえない。また、やはりプロギュムナスマタを構成する課題とされていたはずの「寓話」および「歴史(=歴史記述的な語り)」の項目が、「修辞学」ではなく「文法学」部門において扱われている点も注目される。もともと帝政期のラテン修辞学者たちのあいだでも、これらの課題が修辞学では扱われない風潮があったことはすでに指摘したが、そうした線引きが中世の入り口でいよいよ固定化されていることになる。いずれにせよ7世紀のイシドルスが筆を進める際に、プロギュムナスマタというひとまとまりの教程がその念頭にあったとは、まず考えにくいことである。

ところで、これに前後して西のラテン語圏において修辞学書の定番としての地位を獲得したのが、キケロの『発想論』であり、またそれに強く依拠するかたちで書かれたボエティウスの著作であった。修辞学の教育課程という観点からすれば、プロギュムナスマタとこれらの著作との関係が当然ながら問題となりうるが、残念ながらプリスキアヌス訳の『プロギュムナスマタ』とキケロの『発想論』等がギリシア語圏における「ヘルモゲネス体系」のように一体として扱われた形跡はおよそ見当たらない。それどころか、この『発想論』には、プロギュムナスマタを修辞学の領域からむしろ排除してしまうような考え方が含まれていたとさえ見なしうるのである。ともあれ、キケロおよびボエティウスの著作が中世を通して修辞学教育において獲得した地位について、まずは確認しておかなければなるまい。

(2) キケロ『発想論』とボエティウス

キケロがまだ十代の頃に書いたとされる『発想論』(*De inventione*) は、彼自身が後にその内容に関して不満を表明しているにもかかわらず、古代末期にはすでに注釈の対象となり、やがてラテン中世において「キケロのレトリカ」(Ciceronis Rhetorica) といえばこの『発想論』を指したほど広く読まれることになる。ただ、いわゆるカロリング・ルネサンス期の傑出した文人のひとり、フェリエールのルプスが残した書簡には、この『発想論』の他に『弁論家について』への言及が見られるほか、別の書簡ではクィンティリアヌスの『修辞学教程』(12巻本) にまで触れられているから、9世紀前半の段階ではまだ必ずしも『発想論』一辺倒というわけではなかったことになる[23]。

(23) P. M. Marshall, *Servati Lupi Epistulae* (Leipzig 1984), Epist. 1, 'Tullii *de rhetorica* liber ... eiusdem auctoris de rhetorica tres libri in disputatione ac dialogo *de oratore*'; Epist. 62. 'Quintil<iani> *instit<utionum>* *or<atoriarum>* libros XII'.; C. S. Baldwin, *Medieval Rhetoric to 1400* (Gloucester Mass. 1959), p. 143. なお、このルプス自身の筆写した*De oratore*の写本が大英博物館に伝存する。L.

『発想論』の読まれ方の推移は、現存する写本の状況からある程度まで窺うことができる。制作年代を 9 世紀から 12 世紀に限った場合でも、この『発想論』の写本は 166 点を数えると報告されているが、とりわけ 12 世紀には 100 を越える写本が集中して作られ、さらに質的に見ても、それまでの欠損のある写本に代わって完全なテクストを伝えるものが出回るようになったという(24)。また、やはりこの時期以降、『発想論』に続けて『ヘレンニウス宛修辞学』(*Rhetorica ad Herennium*) を収録した写本が数多く作られている。この著作はキケロ本人が後年に『発想論』を書き改めたものと信じられていたことから「新修辞学」(Rhetorica nova) の名で呼ばれ、前者と併せて広く読まれることになった(25)。

けれども、この時期よりやや下ってヨーロッパ各地に成立した大学において、これらキケロの修辞理論そのものが広く学ばれていたかというと、必ずしもそうとは言い切れないようである。上記のような写本の作成は、主として修道院のいわゆる写本室 (scriptorium) において受け継がれた営みであったという事実を、ここであらためて想起しておくべきなのかもしれない(26)。中世の大学では、よく知られるように、七つの学科からなる自由学芸 (artes liberales) が教えられていたことになっている。が、神学を頂点とする学問体系にあって、教育の重点は文系三学科 (trivium) のなかでももっぱら論理学 (= 弁証学) に置かれ、修辞学の地位は我々の想像する以上に限定的なものにとどまっていたらしい。

1215 年に教皇使節ロベール・ド・クールソンによって策定されたパリ大学の規約 (statutum) は、いわゆる「カリキュラム」の最初の例として知られるが(27)、そこには読まれるべき教科書を指定する以下のような記載がある。それによれば、ラテン語の習得はもっぱら文法学の範囲に限定され、「二つのプリスキアヌス」の両方、少なくともそのいずれかを学ぶことになっていた。この「二つ」という言い方は、『文法学教程』のうち前半 16 巻を「大プリスキアヌス」(Priscianus maior)、末尾の 2 巻を「小プリスキアヌス」(Priscianus minor) と呼び慣わしていたことによる。なお、ここに件の『プロギュムナスマタ』は含まれていない。主要科目である論理学については、アリストテレスの「旧 / 新弁証学」(Dialectica vetus / nova) が指定されている。これはそれぞれ、「オルガノン」とポルフュリオスの『入門篇』(*Eisagoge*) のいずれもボエティウス訳によるラテン語版を指し、それらを通常科目 (ordinarie) として扱うことが定められている。これに対して祭日用 (in festivis diebus) という副次的な扱いを受けているのが、哲学書、修辞学書、および理系四学科である。そ

D. Reynolds & N. G. Wilson (1991), pp. 103-105.

(24) B. Munk Olsen, ‘La popularité des textes classiques entre le IX^{e} et le XII^{e} siècle’, Revue d’Histoire des Textes, t. 14-15 (1986); G. Achard, *Cicéron: De l’invention* (Paris 1994), pp. 30-40.

(25) この著作がキケロの真作であることを疑われるのは、15 世紀末以降である。J. J. Murphy & M. Winterbottom, ‘Raffaele Regio’s 1492 *Quaestio* doubting Cicero’s authorship of the *Rhetorica ad Herennium*: Introduction and Text’, Rhetorica 17 (1999).

(26) 修道院の文化的伝統とスコラ神学との質的な違いについては、J. ルクレール (神崎ほか訳)『修道院文化入門』(智泉書房 2004) を参照されたい。

(27) H. Rashdall [F. M. Powicke & A. B. Emden eds.], *The University of Europe in the Middle Ages* (Oxford 1936), vol. 1, pp. 439-450.

して、修辞学関連で具体的に書名が挙げられているものとしては、ドナトゥスの「野卑な語法」(barbarismus) の巻、および「トピカ第４巻」(quartus topicorum) が確認されるにすぎない[28]。意外なことに、そこにはキケロの名前にすら言及がないのである[29]。

さて、実質的には文法学に属するドナトゥスについては今は措くとして、問題は「トピカ第４巻」である。この「トピカ」が、アリストテレスやキケロのそれではなく、ボエティウスの『トピカの差違について』(*De differentiis topicis*) を指すことはまず確実である[30]。この著作は一般に「ボエティウスのトピカ」(Topica Boetii) として知られていたが、その第４巻は修辞学部門に焦点を絞った内容となっている。キケロの『発想論』とこの「ボエティウスのトピカ」第４巻とを併せて収録している写本が 12 世紀以前のものに限定しても 20 点ほど現存していることから、すでに大学組織が成立する前からこのボエティウスの著作が修辞学の領域において一定の影響力を持っていたものと想像される[31]。そして、クールソンの規約に記載されて以降、ルネサンス直前の時期に至るまで、この「トピカ第４巻」は各地の大学において一貫して修辞学部門の教科書として扱われ続けることになる。また、この著作の「最初の三つの巻」は論理学の教科書としてやはり不動の地位を占めることになるが、こちらはやや下って 1252 年にパリ大学イングランド同郷団 (natio anglicana) によって作成された規約に明記される[32]。つまり、カリキュラムから判断する限り、論理学および修辞学に関しては、実質的にこの「ボエティウスのトピカ」全４巻が大学教育において独占的な地位を占めていたということになる。

こうした事情は、すでにルネサンスの思潮がはっきり現れていたはずの 1431 年に策定されたオクスフォード大学の規約を見ても、大筋では変わっていない。そこには文系三学科 (trivium) について、以下のような教科書の指定がある。

(28) H. Denifle & A. Chatelain, *Chartularium Universitatis Parisiensis*, t. 1 (Paris 1889), #20, p. 78, ‘Et quod legant libros Aristotelis de dialectica tam de veteri quam de nova in scolis ordinarie et non ad cursum. Legant etiam in scolis ordinarie duos Priscianos vel alterum ad minus. Non legant in festivis diebus nisi philosophos et rhetoricas, et quadruvialia, et *barbarismum*, et *ethicam*, si placet, et quartum *topichorum*.’ なお、ここで哲学書に該当する著作として *ethica* という書名が挙げられているが、これはアリストテレス『ニコマコス倫理学』の第２および第３巻を訳した、一般に *Ethica vetus* と呼ばれたものを指すらしい。*Aristoteles Latinus*, XXVI, I-3, Fasc. 1 (1974), pp. LVII-LVIII.

(29) パリ大学に関する限り、これ以降 15 世紀に至るまで、規約の文面にキケロはおろかアリストテレスの『修辞学』さえ見出すことはできない。ただし、イタリアではキケロ修辞学の伝統がより根強く生きていたことも、ここで指摘しておかねばなるまい。たとえばボローニャ大学では『発想論』および『ヘレンニウス宛修辞学』が講じられていたようである。Rashdall (1936), p. 248.

(30) cf. J. J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages* (Berkeley 1974), p. 68.

(31) B. Munk Olsen, *L’étude des auteur classiques latins aux XI^e et XII^e siècles*, t. 1: *Catalogue des manuscrits classiques latins copiés du IX^e au XII^e siècle* (Paris 1982), p. 132, #499.

(32) H. Denifle & A. Chatelain (1889), #201, p. 228, ‘libros videlicet tres primos *topicorum* et librum *divisionum* semel ordinarie vel ad minus cursorie.’

文法学　プリスキアヌス、大もしくは小
修辞学　アリストテレス『修辞学』、「ボエティウスのトピカ」第4巻、
キケロ「新修辞学」、オウィディウス『変身物語』、
ウェルギリウスの詩作品、のうちいずれか
論理学　「ボエティウスのトピカ」全巻もしくは最初の三つの巻、
アリストテレス『分析論前書』または『トピカ』、のうちいずれか

ここに至って、修辞学の項にはたしかにいくつかの変化が認められる。けれども、挙げられている書名は、この規約以前にこれらの著作のすべてが講じられていたことを意味するものではまずあり得ない、と J. J. Murphy は強調する(33)。本来は文法学で扱うはずのウェルギリウス等が修辞学教科書の選択肢として挙がっていることも、むしろ修辞学部門が一貫した理念を伴っていないことの反映であるという。そして確実に言えるのは、この段階でもやはり「ボエティウスのトピカ」全巻が相変わらず重要な地位を占めていた、ということであろう。

ちなみにこれより以前の1416年には、すでにポッジオ・ブラッチョリーニがザンクト・ガレンにおいてクィンティリアヌスの完全な写本を見出しており、これはルネサンスにおける「再発見」を語る際の、ひとつの有名な逸話となっている。また、1421年にはキケロの『弁論家について』および『弁論家』の完全なテクストに加えて、それまで知られていなかった『ブルートゥス』を含んだ写本が発見されてもいる(34)。こうした状況を考えるならば、同時代の人文主義者たちの目に、大学規約に示されているようなボエティウス中心の教育がいかにも時代遅れと映ったのは確かだろう。旧態依然とした「スコラ学の牙城」を前にして、ロレンツォ・ヴァッラのようにボエティウスをはっきり敵と見なす傾向が現れたのも、むしろ当然のなりゆきだった(35)。

ここまで、西のラテン語圏における修辞学をめぐる事情のあらましを、プロギュムナスマタの伝承に関係する範囲で概観してきた。カロリングの時代までは、複数のラテン修辞学、およびプロギュムナスマタを含めたいくつかのギリシア修辞学に由来する著作が、まだかろうじて古代の延長線上にその残滓をとどめていた。けれども、時代と共にキケロの修辞学といえば『発想論』を指すようになり、『ヘレンニウス宛修辞学』を別にすれば、その他の古典修辞学書は次第に読まれなくなっていく。12世紀以降、西ヨーロッパ各地に大学が成立するが、そこでは『発想論』さえも教科書としての指定を受けていたわけではかならずしもなく、少なくともカリキュラムに表れている限りでは、ただボエティウスだけが、論理学にとどまらず修

(33) J. J. Murphy, 'The Earliest Teaching of Rhetoric at Oxford', Speech Monographs 27 (1960), pp. 345-347.

(34) L. D. Reynolds & N. G. Wilson (1991), pp. 136-140.

(35)『弁証学および哲学の再編』(*Repastinatio dialectice et philosophie*) において、ヴァッラはボエティウスおよびそれ以降のスコラ的諸概念を、主としてクィンティリアヌスを典拠に「正しいラテン語」という次元に引き戻して解体する。G. Zippel, *Laurentii Valle Repastinatio dialectice et philosophie* (Padova 1982); B. P. Copenhaver & C. B. Schmitt, *Renaissance Philosophy* (Oxford 1992), pp. 209-227.

辞学の領域においても不動の地位を占めることになった。

ところで、中世の入り口においておびただしい数の修辞理論書のうちからキケロの『発想論』が選び取られ、さらには「ボエティウスのトピカ」が修辞学教科書の地位を占めたという事実は、修辞学の扱うべき領域そのものに関わるような、ある重大な問題を孕んでいた。そして、『発想論』に端を発し6世紀のボエティウスによって再確認されることになったその認識こそ、プロギュムナスマタが修辞学の一部門として存立することにとって、じつはほとんど致命的ともいうべき性質を帯びたものだったのである。以下では、西のラテン語圏と東のギリシア語圏とのあいだに生じた、修辞学の領域に関わる認識の違いについて、理論的側面からその事情を検討してみたい。

3. 修辞学の定義とプロギュムナスマタ

問題の記述は、『発想論』第1巻の冒頭部に見出される。修辞学の扱うべき対象を論じるにあたって、先行する前2世紀のギリシア修辞学者ヘルマゴラスの理論を、キケロは以下のとおり激越ともいうべき口調で批判している。

> ヘルマゴラスは弁論家の扱う素材を個別案件 (causa) と一般論題 (quaestio) とに分割しているが、自分でも何を言っているのか分からず、何を提供しようとするのか理解できていないと見える。彼によれば、個別案件とは、特定の人物を介在させる仕方で、言論によって立てられた争いをその内に含むようなものであるという。これが弁論家の仕事であることは私も認める (実際、先述の法廷・審議・演示の三領域を考えるのだから)。それに対して一般論題とは、特定の人物を介在させない仕方で、言論によって立てられた争いをその内に含むようなものであるという。例として、「名誉のほかに善はあるか」、「感覚は偽らないか」、「世界の形状はどのようなものか」、「太陽の大きさはどれくらいか」。こうした一般論題が弁論家の職務から遠く隔たったものであることは、誰にでもすぐに分かるはずだろう。これらの事柄については哲学者たちが大変な努力をしながらその才能のかぎりを傾注しているものと理解されるのだから、それをあたかも些事であるかのごとく弁論家に帰属させてしまうのは、まったくの不見識だと思われる(36)。

ここではいくつかのことが言われているが、まず批判の対象とされているヘルマゴラスの理論を整理してみよう。いわゆる「スタシス」理論の創始者として知られる彼の著作は残念ながら散逸したが、いくつかの証言によれば、そこではまず修辞学の扱う対象が大きく市民的課題 (ζητήματα πολιτικά: quaestiones civiles) と規定され、それが一般論題 (θέσις: quaestio) と個別案件 (ὑπόθεσις: causa) とに区別される(37)。この区分け自体は、『発想論』の記述のとおり、特定の人物が介在するのかど

(36) Cic. *De inv.* 1. 8.

(37) D. Matthes, *Hermagorae Temnitae Testimonia et Fragmenta* (Leipzig 1962), fr. 6. なお θέσις の訳語として、『発想論』においては quaestio が用いられているが、そ

うか、あるいはこれをやや敷衍して、ひとつの類型として語るのかそれとも個々の状況を考慮に入れるのかの違い、と説明されるのが通例である。たとえば「妻を娶るべきか」は一般論題 (thesis)、「ソクラテスは妻を娶るべきだったのか」は個別案件 (hypothesis) ということになる。そして先取りして言うならば、一般論題もまた修辞学の対象であることは、ギリシア・ラテンを問わず、帝政期の修辞学者たちのあいだでほぼ常識として定着することになるのだった。

ところがこのヘルマゴラスの理論を受けて、ここでのキケロは、個別案件を修辞学の対象とすることには何の異存もないけれども、一般論題については、これはあくまで哲学者の領分であって弁論家が扱うべき素材ではありえない、とはっきり断じてしまっている。ここに挙げられている例のうち、「感覚は偽らないか」以下のものが排除されるのはまだよいとしても、最初に挙げられた「名誉のほかに善はあるか」という例までが斥けられているのは、修辞学にとってはじつに「狭い」定義になっていると言わざるをえないだろう。

もっとも、逆に哲学の側からすれば、ヘルマゴラスの理論が自分たちの領分への不当な侵犯と映ったとしても不思議なはい。実際、ストア派のポセイドニオスが一般論題に関するヘルマゴラスの見解を難じて講演を行った、という話も伝わっている[38]。一般論題をめぐるこうした認識の食い違いこそ、時代を問わず、哲学と修辞学との境界争いの火種であり続けることになるのだった。『発想論』の哲学的背景に立ち入る余裕はないけれども[39]、ともあれ、ここでのキケロは

一般論題 (thesis):	哲学 (philosophia)
個別案件 (hypothesis):	修辞学 (rhetorica)

という図式で整理していることを、まずは確認しておきたい。

こうした「狭い」見解に関しては、しかしながら、すでに後年のキケロ本人が事実上撤回していると考えて差しつかえないだろう。たとえば『弁論家について』には、理想の弁論家はひろく一般論題の練習に親しむべきだ、という趣旨の記述が繰り返し見られる[40]。また、こうした認識の延長線上に、最晩年の著作『トピカ』が構想されてもいる。キケロ自身が『発想論』に対して批判的な距離を置くようになったのも、単にこの著作がごく若い時代に書かれたという理由によるばかりでなく、むしろ修辞学という学問領域の定義そのものに関わるような重大な問題を孕んでいたことが大きかったと思われる。キケロ修辞学の第一の後継者とも言うべきクィンティリアヌスも、この『発想論』冒頭の記述については明らかに困惑の色を示しているが、上述のような当人の「転向」への言及をもって、この「狭い」定義への評

の上位概念である ζήτημα の訳語との混同を避けるためであろう、キケロ後年の著作では propositum というラテン語が宛てられている (*Top.* 79 ほか)。ただし帝政期以降の修辞学書では、thesis / hypothesis とギリシア語を音写したままのかたちで用いている例が多い。

(38) Plut. *Pomp.* 42. 5.

(39) この問題については、C. Brittain, *Philo of Larissa: The Last of the Academic Sceptics* (Oxford 2001), pp. 296-343 を参照されたい。

(40) e. g. *De orat.* 3. 80; 107-110; 125. なお、キケロが一連の教程としてのプロギュムナスマタに言及している例は見つからない。

価に代えている(41)。それ以降のラテン修辞学者たちも、修辞学の定義を語る際に、基本的にはヘルマゴラスの説明を踏襲している場合が多い。たとえば先に言及したイシドルスにおいても、一般論題と個別案件の双方が修辞学の対象と見なされている(42)。

けれども古代も末期になると、政治情勢の流動化に伴って、ラテン語圏においては弁論教育を支えた学校制度そのものが崩壊の危機に瀕することになる(43)。また、ギリシア語圏との交渉がなくなるにつれて、修辞学者たちが典拠とする著作も徐々に限られていったと想像される。そうしたなか、『発想論』的な「狭い」定義の図式をあらためて追認したのが、6世紀のボエティウスにほかならなかった。すなわち、『トピカの差違について』第1巻には「一般論題は哲学者に、個別案件は弁論家に割り当てられる」と記されている。また第4巻の冒頭部には「弁証術はただ一般論題だけを考察する。一般論題とは状況を伴わない問題のことである。修辞学は個別案件、すなわち状況の多様性を含んだ問題を扱い、かつ論じる」という定義も見られる(44)。さきに『発想論』において確認した図式が、ここではっきり再現されているのが見て取れよう。なお同巻においては、この二つの学がお互いの対象とする課題を取り入れること自体は必ずしも否定されていないが、その場合にも、その固有の本分に資する限りにおいて相手のものを利用する、という位置づけがなされている(45)。いずれにせよ、そこで一般論題が修辞学固有の対象と見なされていないのは確実である(46)。

これに対して、プロギュムナスマタの諸課題は、その定義上、まさに「狭義の」修辞学から斥けられているところの一般論題 (thesis) の領域に属する言説であったことを、以下で確認していきたい。

まず第一に、「一般論題」はプロギュムナスマタの諸課題のうちでも要に位置するものであり、論駁 (ἀνασκευή) や確証 (κατασκευή) といった練習も、本来はこの課題に固有の方法だったと考えられる(47)。プロギュムナスマタの教科書においては、「一般論題」は観照的なもの (θεωρετικαί) と実践的なもの (πρακτικαί) とに区分けされ、

(41) Quint. *Inst.* 3. 5. 12-15.

(42) Isid. *Orig.* 2. 15. ほかに、Aurelius Augustinus, *De rhetorica*; Sulpitius Victor, *Institutiones oratoriae*; Martianus Capella, *De arte rhetorica.* いずれも Halm (1863) 所収。

(43) H. I. Marrou, *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*[5] (Paris 1965), pp. 485-499.

(44) Boethius, *De differentiis topicis* I, *PL* 64, 1177D; ibid. IV, *PL* 64, 1205C.

(45) ibid. IV, *PL* 64, 1205D, 'Rhetorica vero si thesim assumpserit, ad hypothesim trahit, et utraque suam quidem materiam tractat, sed alterius assumit, ut proniore in sua materia facultate nitatur.'

(46) なお、アリストテレスにおいて修辞学に固有の説得手段とされていたエンテューメーマ (ἐνθύμημα) がいわゆる「省略三段論法」と同義とされるのも、この「ボエティウスのトピカ」においてである。ibid. II, *PL* 64, 1184B, 'Enthymema quippe est imperfectus syllogismus, id est oratio in qua non omnibus antea propositionibus constitutis infertur festinata conclusio, ut si quis ita dicat: homo animal est, substantia igitur est.'

(47) G. Reichel (1909), p. 10, 'Progymnasma vetustissimum θέσις esse videtur'; H. Throm, *Die Thesis: Ein Beitrag zu ihrer Entstehung und Geschichte* (Paderborn 1932).

前者が哲学に、後者が修辞学にそれぞれ対応するという説明が与えられる。したがって、この段階で『発想論』に挙がっていたうちの「感覚は偽らないか」以下の論題は斥けられても、「名誉のほかに善はあるか」というテーマは残るのである。テオンはこの図式をまず認めたのち、前者についても修辞学者が手がけることは充分に可能であるとも主張している(48)。

つぎに、一般論題と個別案件という区別を立てた場合に、プロギュムナスマタという教程の全体が前者に属するという認識をはっきり示している証言として、4世紀のラテン修辞学者、スルピティウス・ヴィクトルの『修辞学教程』(*Institutiones oratoriae*) の記事が注目される。ここでは、基本的にはヘルマゴラスの定義が踏襲されつつも、一般論題と個別案件の違いがその目的という観点から区別され、前者が認識 (inspectio) に、後者が判定 (iudicatio) に関わるという通常とはやや異なった解説がほどこされる。そして、前者すなわち一般論題に相当する言説として、プロギュムナスマタの諸課題が列挙されているのだった(49)。なお、この著作はラテン語で書かれているとはいえ、実質的には2世紀のギリシア修辞学者ゼノンの教則を引き写したものと考えられている。

そして第三に確認したいのが、「狭義の」修辞学にとって固有の領分とされた個別案件の側にはむしろ立ち入らないということが、プロギュムナスマタの要件とされている点である。たとえばテオンはその緒言において、著述の意図を「個別案件より以前に理解しまた適切に訓練すべきことの提供」としている(50)。また、通常プロギュムナスマタの最終課題とされる「法案」(νόμου εἰσφορά) の定義において、アプトニオスは次のように記している。「法案についても、これを課題のひとつとする場合がある。ほとんど純然たる個別案件に等しいのだけれど、かといって個別案件としてのすべてを満たしてはいない。そこには人物が持ち込まれるものの、その全体がつまびらかにされてはいないのだ。ゆえに個別案件に属するというよりも、むしろ一般論題のうちに含まれることになる。総じてある型の人物を容れる点では一般論題を超えていても、はっきりした状況を伴わないために、個別案件には満たないのである。(51)」ここにも、プロギュムナスマタは個別案件の領域には立ち入らない、という考え方をはっきり読みとることができよう。同様の認識は、一連のプロギュムナスマタ文献に例外なく共有されている(52)。

---

(48) Theon, *Prog.* 121. 7.

(49) Sulpitius Victor, *Institutiones oratoriae*, Halm 314, ‘Habebit autem thesis inspectionem, hypothesis iudicationem, ut iam supra dictum est. Itaque **hypothesin** sciemus quidem in controversiis et litibus esse, sive actionibus atque causis, **thesin** vero in κατασκευαῖς et ἀνασκευαῖς, itemque in his, quas Graeci χρείας vocant, cum disputatur, rectene quid dixerit Diogenes vel Socrates: item laudes et vituperationes videntur ad thesin pertinere. Iam illa quidem certe thesis sunt propria, an uxor ducenda, an navigandum; nam legis vel κατασκευαὶ vel ἀνασκευαί, hoc est aut reprehensiones aut confirmationes et suasiones, ad thesin pertineant necesse est, loci quoque communes; nam invectivae accusationis sunt portio.’

(50) Theon, *Prog.* 59. 1.

(51) Aphth. *Prog.* 46; cf. n. 4.

(52) e. g. Hermog. *Prog.* 26, ‘ἐν γυμνάσμασι δὲ ... ἄνευ καιροῦ καὶ τῆς ἄλλης περιστάσεως.’;

以上を総合するならば、我々がこれまで問題にしてきたプロギュムナスマタとは、その定義上、ヘルマゴラスの図式のうち『発想論』のキケロが斥けたところの一般論題の範疇に属する言説とされていた、と理解するほかないのである。

では、東のギリシア語圏において個別案件を扱う「狭義の」修辞学に相当するのが何であったかといえば、それがすなわちプロギュムナスマタに後続するヘルモゲネスの諸著作だったということになる。逆に、キケロの『発想論』はその扱う対象を個別案件に限定している以上、当然ながら、内容的にプロギュムナスマタをその記述の対象に含めることはしていない。これを『ヘレンニウス宛修辞学』と併せて図示するなら、次のようになるだろう(53)。

	ヘルモゲネス体系	キケロ『発想論』	『ヘレンニウス宛』
一般論題	『プロギュムナスマタ』	—	—
個別案件	『争点(スタシス)論』	○	○
	『発想論』	○	○
	『文体論』	—	○
	『能弁の方法』	—	○

修辞学は一般論題と個別案件とを扱う、というヘルマゴラスの見通しに立ってこそ、プロギュムナスマタは初めてひとつの教育課程として存立することができた。そして『発想論』およびボエティウスの見解にしたがうならば、プロギュムナスマタという教程そのものが修辞学の領域から追いやられてしてしまうことが、いまや明らかとなったはずである。

西のラテン語圏において、中世の半ば以降、数ある修辞学文献のうち『発想論』が主要なテクストとして選び取られ、また「ボエティウスのトピカ」が大学において文科系教育の基本教科書としての地位を得たという事実は、修辞学という学問領域そのものに、ある恣意的な線引きが施されたのに等しかった。一般論題を弁証学に固有の領域とし、修辞学の領域は個別案件であるとする図式のなかで、後者に諸学の基礎を提供するような普遍的役割を期待することは、ほとんど不可能だったと見るべきだろう。これに対して東のギリシア語圏においては、一般論題と個別案件の双方を視野に収めた「ヘルモゲネス体系」が学校教育の場において読まれ続けたことによって、修辞学が哲学を含む文科系学問の基礎としてより広汎にわたって機

Nicol. *Prog.* 5, 'ὥσπερ γὰρ τὸ ἐν ταῖς τελείαις ὑποθέσεσι δυσχερὲς φεύγοντες εὗρον τὴν τῶν προγυμνασμάτων χρείαν οἱ ταῦτα διατάξαντες, κτλ.' また、リバニオスにおいて『プロギュムナスマタ』と『デクラマティオ』とが別個のものとして伝承されている事実にも、一般論題と個別案件という二分法の反映を認めることができる。

(53)『ヘレンニウス宛修辞学』においては、一般論題と個別案件の違いといった問題には一切触れられず、いきなり個別案件の三区分 (tria genera causarum) から話が始まっている。したがって、実質的には『発想論』と立場を共有していることになる (*Rhet. Her.* 1. 2)。なお、この著作は「発想」(inventio) だけでなく「配置」(dispositio)、「文体」(elocutio)、「記憶」(memoria) から「発表」(pronuntiatio) までをひととおり視野に収める。また、ギリシア修辞学において「スタシス」は「発想」と独立して扱われるのが一般だが、この二つのラテン修辞理論書においては前者が後者に包摂されている。

能することになった。東西におけるプロギュムナスマタ文献の伝わり方の相違は、修辞学という学問のあり方そのものの違いの、端的な表れにほかならないのである。

おわりに

ひるがえって、ルネサンス期の人文主義者たちがこのプロギュムナスマタに着目したのも、こうした背景からすればおおいに頷けることであった。アンジェロ・ポリツィアーノに帰されるアプトニオスの部分的な訳も伝わるが(54)、その全体をラテン語に移したのはネーデルラント出身のルドルフ・アグリコラがおそらく最初であり、フェラーラ滞在中の1470年代後半、グァリーノ・ダ・ヴェローナが所有していた写本をもとに翻訳したとされている(55)。同郷の後輩にあたるエラスムスは、その書簡において、少年の頃デフェンテルの修道院で一度だけこのアグリコラにまみえたことを述懐しており、その段階でアプトニオスに接した可能性が高いと見られる(56)。それを裏付けるかのように、16世紀のごく早い時期にエラスムスの知的サークルではプロギュムナスマタという言葉そのものが一種の流行語となった観を呈し、たとえばトーマス・モアはウィリアム・リリーと共同で編んだ習作的な訳詩集に、またトーマス・リナカーはジョン・コレットが創設したセント・ポール付属校向けに用意したラテン語初等教科書に、それぞれ「プロギュムナスマタ」という名前を与えている。エラスムス自身、リバニオスの『プロギュムナスマタ』をすでに1503年の段階で抄訳してもいる(57)。さらに、アグリコラの名を冠したアプトニオスのラテン語訳は1530年代に初めて出版されて以降、17世紀の後半にかけて、延べ70を越える版を重ねることになるのだが、これはほぼ同時期に設立されたイエズス会が修辞学教科書としてこのアプトニオスを指定したからにほかならなかった(58)。15世紀に東のギリシア語圏から伝えられたプロギュムナスマタが、それまでの西ヨーロッパにおける修辞学のあり方を一変させたことは、すでにこれらの事例からも推して知られよう。

(東京大学)

(54) cf. *Progymnasmata Aphthonii sophistae. partim a Rodolpho Agricola, partim a Ioanne Maria Catanaeo latinitate donata* (Frankfurt 1546), ‘exemplum narrationis’.

(55) J. Ijsewijn, ‘Agricola as a Greek Scholar’ in F. Akkerman & A. J. Vanderjagt eds., *Rodolphus Agricola Phrisius (1444-1485)*, (Leiden 1988), pp. 25-26.

(56) P. S. Allen, *Opus epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, t. 1 (Oxford 1906), p. 2, ‘Rodolphus Agricola primus omnium aurulam quandam melioris literaturae nobis inuexit ex Italia.’; 月村 (1994), pp. 15-16.

(57) *The Complete Works of St. Thomas More*, vol.3, part II (New Haven 1974), pp. 12-17; *Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, I-1 (Amsterdam 1969), pp. 175-192.

(58) D. L. Clark, ‘The rise and fall of Progymnasmata in sixteenth and seventeenth century grammar schools’, Speech Monographs 19 (1952), pp. 259-263; cf. n. 54.

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] (New Haven 1970) [illegible]

[illegible]

ヤコブス・ホイエルとホメロス研究
—「フィロロギカ」の歩みとともに— 第1章

久保正彰

ヤコブス・ホイエルは、17世紀後半オランダの古都ユトレヒトに本拠をもつ法曹家であり、古代ギリシア文学の研究者であった。彼のホメロス研究の足跡研究は、今日まで5年間にわたる「フィロロギカ」研究会の進展と奇しくも歩みを共にしつつ進められてきた。最初は全く雲をつかむような探索であったが、その後の遅々たる研究の成果にたいして報告発表の機会が毎年与えられてきたことは、報告者にとってはこの上ない励ましとなった。今回、現段階に至る探索経過をまとめて、「フィロロギカ」の読者諸賢のご高覧に供するに際して、同研究会の幹事諸氏から賜ったご好意に対して、ここに深甚の感謝の意を表したい。

ヤコブス・ホイエル(Jacobus Goyer, 1651 ~ 1689)が、ギリシアの詩聖ホメロスの研究に没頭していたのはその短い生涯の最後の数年間であった。かれが引用している約100種の文献の中で、最も年代の新しいものは、1689年ユトレヒトで刊行されたC. サルマシウス著(L. サルマシウス編),『同名異種の薬草論』初版からの一節である。この事実から推して、かれのホメロス研究はその没年まで続けられており、その時点ではなお未完であったことがわかる。

ヤコブス・ホイエルのホメロス研究をわれわれに伝えているのは、かれの論文や著作・翻訳の類ではない。かれが残しているのは、1517年のアルド版『ホメロス作品集』の欄外余白に記入した、ギリシア語・ラテン語(一片はフランス語)による約500片の注記と、行間に附記した約2,000片に及ぶ訂正記号である。後者はアルド版の誤植、誤綴、脱字を初め、句読点や疑問符の是非をも指示する詳細を極めたものである。注記の頻度、訂正記号の丁寧さは必ずしも濃淡一様ではないけれども、『ホメロス作品集』に収録されている『イリアス』『オデュッセイア』『蛙鼠合戦』『讃歌集』の詩作全編にわたって附記されている。しかし『ホメロス伝』の諸篇などの散文記述には注記は施されていない。また、欄外注記に先んじて、まず詩作品の各巻、各篇には、ヤコブス・ホイエル自身の朱筆で詩行数が欄外右側に附記されている。行数が、かれ自身の数えによるものであることは、稀にではあるけれども、数え違いが散見される事実から推定される。

ホメロス叙事詩の物語りの進行の順を追って附記されている断片的メモや記号が、かれが残している全てである。ヤコブス・ホイエルのホメロス研究の全容、いやそのごく一面でも、これらの断片的資料をもとにうかがい知ることが出来るであろうか。もし、かれがホメロス研究を一巻にまとめたものが、かつては存在していたが、今は湮滅してしまった、という状況であれば、残っている覚書きやメモをもとに、幻の著作の復元を試みることも困難ではあろうが、不可能ではないだろう。しかし全体の構想が示されたこともないものを、メモや記号の断片的集積から推定できるであろうか。

以下の調査報告は、ヤコブス・ホイエルのホメロス研究の完成図の復元を意図す

るものではない。かれが最終的に明示しえなかったかれのホメロス像を、われわれの想像力によって創りだそうとするものではない。そうではなくてただ、かれ自身が明細に記録しているホメロス研究の資料を正確に理解することを目標とする。かれがどのような文献資料を参考としていたのか。その一々を、どのような角度から観察しているのか。出来るかぎりその点を明らかにしていきたい。かれの生きた17世紀末の欧州諸地において、ようやく形成されつつあった古代ギリシア文学研究の道筋の上の、どの位置に、かれの欄外注記があるのか、あわせてその点をも明らかに出来れば幸いである。そのような考えから、本稿の表題も、“ヤコブス・ホイエルのホメロス研究”とはせず、“ヤコブス・ホイエルとホメロス研究”とした。

ヤコブス・ホイエルの肉筆注記を記載したアルド版『ホメロス作品集』を発見、入手したのは、1994年夏ブリュッセルの古書店であった。その注記の内容は、古代より17世紀までの間に、ホメロスの詩句について何らかの言及をしたり、あるいは翻訳(ラテン語訳)、あるいは模倣した諸々の詩人文人や研究者たち80余名の諸作110篇余からの抜萃ないしは言及からなっている(この人数と作品数は概略のものであり、数え方によって多少の変動がある)。注記事項の総数は、ホメロス全作品を通じて、約500片、全て欄外余白に同一の筆跡で記入されている。その他に約2000箇所に及ぶ訂正記号が行間余白に記入されているが、これらについては、後段別項において報告することとしたい。

欄外余白の注記の出典追跡と内容確認の手立ては、主として次の二種の資料によって与えられた。

(I) 東京大学文学部西洋古典学研究室所管の「チャールズ・ブリンク文庫」の蔵書6,000巻、とりわけ、1500年～1750年間に欧州諸地で刊行された約350種の古代ギリシア、ラテン文献とその研究書、これは、1994年死去されたケンブリッジ大学ラテン文学教授、チャールズ・ブリンク氏が、残したものである。その集書構成については、岩波書店「図書」01年5月号に概略が記されているが、なお詳しくは、「フィロロギカ」第一回の研究会(01年11月8日、於北海道大学開催)において説明の機会を与えられている。次にこの蔵書集成と、ヤコブス・ホイエルの足跡追跡との交錯点について、簡単に記しておきたい。

ブリンク文庫を一見して目立つ特色は、第一は、ブリンク教授の学生時代より終生の関心事であり研究課題でもあった、アリストテレスとその学派諸流に関するもの。続いてこの流れを継承したキケロ、ホラチウスらの、ラテン語文人、詩人、思想家たちの諸作。そして第三の集成としてベルリン大学の恩師、同僚、弟子たちの主たる業績やミュンヒェンの「古代ラテン語集成」編纂に直接関連をもつ文献類。そして教授が第二の故郷と定められた英国のギリシア・ラテン学研究史を飾る大学者たちの代表的著作を網羅するものが最後の一群となっている。

これらの中に、17世紀オランダのヤコブス・ホイエルがホメロス研究に用いた文献の殆ど全てのものが含まれていた、ということは俄に信じがたく思われるかもしれない。しかしブリンク教授が鋭意集められた1500～1750年の刊行になる諸巻は、西洋古典学のDNAとも称すべき研究を網羅している。例えばI.カソボン校訂注釈のディオゲネス・ラエルティウスの『哲学者列伝』(1615)、同じくストラボンの『地誌』

(1620)、スエトニウス『皇帝列伝』(1595) などの名著がそろっている。いずれもヤコブス・ホイエルが頻繁に引用しているものと同年同版のものである。これらの古典諸作はヤコブス・ホイエルの時代から今日まで、異なる編者・校訂家たちの手を経て、幾度も版を重ねてきているのであるが、かれのホメロス研究の後を追う為には、どうしても、かれが用いた版本と同一のものが必要となる。ブリンク教授のコレクションはその点で、正に無二の助けとなったのである。少し詳しく説明したい。

かれのホメロス本の欄外注記にはしばしば、ギリシア・ローマ古典作家の言葉—つまり古典作品の本文そのものが記されている。例えば『イリアス』1. 234 ～ 39 の欄外には、“これに倣ってワレリウス・フラックスは次のように語る”として『アルゴナウティカ』3. 707 ～ 711 の本文を記している。また『オデュッセイア』1. 1 ～ 5 の欄外には、“これらの詩行はホラチウス『書簡詩』1. 2 において次のごとくにラテン語に訳されている”として同詩の 18 ～ 22 詩行が記されている。いわば‘本歌取り’ともいうべき形で、ホメロス詩句に源泉を仰ぐ、後世作家たちの作品からの引用文が、欄外に記されているのである。

これだけのものであれば、殆どどのような版本をもちいても、ヤコブス・ホイエルの注記、ひいてはかれの知的背景の探索は可能であろう。しかしかれの欄外注記の半ばは、そのような‘本歌取り’の類ではなく、特定の校訂家ないしは注釈家が、自分独自の研究や解釈として附記している部分に注目している。上記のカソボンのストラボン『地誌』では、ヤコブス・ホイエルの注意は、ストラボンよりもカソボンの注記に傾いている。版をおこし、注釈を施した学者の意見や研究が、欄外注記の中心を占めることになる。

例えば、T. スタンレーの『アイスキュロス悲劇集』校訂・注釈が引かれている『イリアス』2. 326 ～ 9 では、アイスキュロスはさして問題ではなく、注釈者スタンレーが、1628 ～ 9 年に刊行された「アルンデルの大理石碑文」を用いて、トロイア戦争の年代とその継続期間の推定を下している段が中心となっている。アイスキュロスの名が記されているのは、その悲劇作品『アガメムノーン』の一節に附して、スタンレー自身の研究が披露されているからであって、アイスキュロスがヤコブス・ホイエルの関心を占めていたからではない。(なお後日明らかになった一点を附記しておきたい。ヤコブス・ホイエルの中心的興味は「アルンデルの大理石碑文」に刻まれた年代記にあった。これは今は「パロス島大理石碑文」として知られる有名な年代記資料の前身であるが、初版 (1628 ～ 29) は、高名なる英国の学者 J. セルデンの校訂によって出版された。後日発見されたヤコブス・ホイエルの蔵書目録 (下記 (II) 参照) の中には、セルデンの初版は見出せないが、J. プリドーの改訂新版 (1676) が含まれており、この大理石碑文にに寄せられていたヤコブス・ホイエルの興味と関心がスタンレーの注記のみに留まるものでなかったことが察知される。)

同じように、I. フォシウスの校訂・注釈の『カトゥルス詩集』(1684) のばあいも、これにヤコブス・ホイエルが言及する場合、カトゥルスの詩そのものは殆ど完全に関心の対象とはならず、校訂・注釈家フォシウスの研究や知見からの引用が、ホメロス本の欄外余白を埋めている。例えば、『イリアス』1. 423 行で「ゼウス神は大海原の方へ、咎めなきアイティオペスらのもとへと去っていく」、というくだりがある。しかし咎めなきという読み以外に、メムノンとゆかりのアイティオペスとい

う読みを伝える古い写本がある。“ローマの詩人カトゥルスは後者の読みを伝えるホメロス写本を使用していたかもしれない”という見解を注釈者フォシウスは述べており、そのフォシウスの見解をヤコブス・ホイエルは引いているのである。紀元前一世紀中葉、カトゥルスの時代のホメロス本は、今日ごく微細な断片状のものしか伝存せず、フォシウスの解釈の当否を最終的に決定する手段はない。しかしその蓋然性も否定されえず、今日使用されているO.C.T.版本にも、メムノンとゆかりのという読みは、欄外に“旧写本読み”として記録されている。これを見ると、330年前のヤコブス・ホイエルの当該欄外注は、悠々今日までなお有効、と言うことができる。

同じくI.フォシウスの『ポンポニウス・メラ注釈』を引く、ヤコブス・ホイエルの『オデュッセイア』4. 354～59の欄外書き込みは比較的簡略である。しかし‘見よ’と指示されている『ポンポニウス・メラ注釈』、第2巻第7章を見ると、驚くべきホメロス批判論が展開されていることがわかる。『オデュッセイア』4. 354～59という箇所には、“エジプトの沖合にファロスという島があり、強い風が後ろから帆に吹き込む時に、まる一日の船旅で辿りつく”という有名な記述がある。ヤコブス・ホイエルは、その欄外余白に“ここでエジプトというのは、ナイル河口の町ペルシアクムであると、(フォシウスは)解している”と記し、上記フォシウスの注釈書の巻・章を記している。指示の通りフォシウスの著述を開いてみると、ホメロスの詩句の正しい理解には至らぬままに安易な盲信に陥り、合理性を無視することも嫌わぬ“ホメロス教信者”どもに対する、容赦ない攻撃文を発見する。

素直にホメロスの言葉を理解すれば、ファロスまで強風時に一昼夜の航程といえば、ナイルの三角州の東端に位置するペルシアクム以外の場所はない。ところが、盲信者どもは昔ナイルの河口はメンフィスの辺にあったが二千年も時が経つうちに、ナイルの運ぶ土砂が海岸線を北に押し出した、という。その為に、ファロス島はアレクサンドリアの目と鼻の距離に近づいたのだ、と言っている。これは全くのナンセンスだ、とフォシウスは批判攻撃しているのである。今は古典研究史の彼方にかすんで見えるこの論争であるが、これに寄せられた当時の学者たちの熱い関心は、このフォシウスの注釈を眼のあたりにすることによって、はじめて甦る。またここにヤコブス・ホイエルの地誌・地理学的興味の由縁を辿り直すことも可能となる。

ブリンク文庫の蔵書と、ヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記との交錯点の幾つかは以上の数例からある程度、具体的に示されたと思うが、最後にもう一例だけ説明しておきたい。C.サルマシウス校訂・注釈『博学者ソリヌス』(初版1629. 再版1689.)である。この大著については、ただ単にヤコブス・ホイエルとの関連について論ずることは当を失することになろう。何故ならば、サルマシウスは初期吟誦詩人たちやその口誦叙事詩群と、今日伝承されているホメロス叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』との間に違いがあったことを指摘する。この問題はヤコブス・ホイエルよりも100年後、18世紀末になってはじめてドイツの古典学者F. A.ヴォルフが正面きって取り上げるところとなり、サルマシウスの論点は、ヴォルフ以降のいわゆる『ホメロス問題』の嚆矢となった観があるからである。サルマシウスからヴォルフまでの約170年ばかりの丁度中間点のあたりに、ヤコブス・ホイエルのホメロ

ス欄外注記が位置する事に注意を払いつつ、サルマシウスからヤコブス・ホイエルが何を読みとっているか、簡単に見て行くことにしたい。

ソリヌスは西暦200年頃の学者で、今日の刊本では200頁足らずの『世界地理』の編者である。また“地中海”という呼称を初めてつかった人としても知られている。かれが草した当時の『世界地理』は、リウィウスの大著『博物誌』と上にも挙げたポンポニウス・メラの『地誌』に関する部分を抜萃・要約した小冊である。小冊である故に、古代末期から大航海時代が到来するまでの約1500年間、ラテン語世界の各地に写本が伝わり広く読まれたことが知られている。サルマシウスの『ソリヌス』(1629)は、この小冊の『世界地理』に対して、今日の版にすれば、3000〜4000頁もの紙幅を要するほどの注釈を施したものである。『世界地理』の注釈という範囲をはるかに越えて、古今の人間世界に於いて生じた全ての事象を、地図という平面の上に展開して見せた。大部な百科辞書にも相当する凡百の知識を地図面の解説として盛り込んでいるのである。

ヤコブス・ホイエルはサルマシウスのこの『世界地理』注釈を、正に一つの辞書として、ホメロス詩中に現れる様々の稀語の解釈に役立てている。例えば、ギリシア語・ラテン語における「栗毛色」などの色彩語彙の解説などである。また地名、部族名やその伝説的背景をさぐる百科辞書としても使っている。例えば『イリアス』2. 852に現れるエネトイ人の出自や、それが後世アドリア海北端に住みついたウェネトイ人の祖かどうか、又、ウェネティアという地名もこの一族に由来するものかどうかの説明も、サルマシウスの注釈に求めている。さらにサルマシウスの著述は、凡百の道具の説明にも及ぶ。二頭立ての馬車の構造と、これを牽引する左右両側の馬の性格や優劣までも詳述し、その記述どおりに、ヤコブス・ホイエルは『イリアス』23. 338行目の馬車競技の描写に注を施している。『オデュッセイア』に於いても、同じようにサルマシウスの百科辞書的知識が活用されている。特筆すべきは『オデュッセイア』21. 47〜49において、ペネロペーが手にする鍵と錠前との構造解説である。サルマシウスの微に入り細をうがつ解説も大したものであるが、これを正確に要約してホメロス本の欄外余白に記載しているヤコブス・ホイエルの力にも敬意を表せざるを得ない。

このように多種の文献と、ヤコブス・ホイエルのホメロス注記との重層的な交錯が可能となっているその背景には、かれの少年期より培われた学習システムが作用していたのではないかと思われる。後日判明したことであるが(後段25ページ参照)、かれが10才代後半に記した自筆の講義ノート数冊の各巻巻末には、かれ自身が作成した綿密な用語索引が附記されている。これら少年時代の訓練の跡をもとに類推をたくましくすれば、かれはアルド版ホメロスを基準として自作の用語索引をあらかじめ準備しており、それを常時、脳裏に甦らせながら、百種に及ぶ文献を次々と渉猟していったものと思われる。かれの非凡なる記憶力については、後段28〜29ページにゆずりたい。

しかし他面、300余年後の今日の視点からみれば、ヤコブス・ホイエルの欄外注記の及び得なかった事項を指摘することも容易である。例えば、上にも記した「エネトイ — ウェネティ — ウェネティア」に関わるサルマシウスの解説の中では、次の事柄にふれる一節がある。ギリシア語では語頭が母音ではじまる単語の幾つかの

ものを、これと同意・同義と目されるラテン語の単語と比較してみる。するとラテン語単語の語頭母音のさらに前にV-音が記されていることが多い、という指摘がある。この綴字上の違いは、古くはギリシア語の場合にも語頭にV-音を冠する単語があったけれども、早く、とくにイオニア地方のギリシア語ではこの音が消滅し、語頭には母音だけが残った為である、というのが今日では定説となっている。この消滅した古い音素(ディガンマ)とその名称に関する説明は、古くローマ帝政初期から知られており、ハリカルナッソスの学者ディオニュシオスの、『ローマ古代史』第1巻20節にも記されている。ヤコブス・ホイエルは、この歴史書にも通じていて、幾度かホメロス注記において引用している。従ってこの音素(ディガンマ)が古期ギリシア語において存在していたことは、かれにとっても熟知の事実であったのに違いないのであるが、その音素が果して、ギリシア語最古の記念碑ともいうべき、ホメロス叙事詩において、その痕跡をとどめているかどうかという重大な問題点には思い至らなかったのではないか。たとえそれを察知していたとしても、その音素をϜという字で明示して、ホメロス叙事詩の幾つかの単語の語頭に附記するという暴挙には、とうてい至らなかっただろう。第2章において詳記する、ヤコブス・ホイエルの訂正、補正の痕跡から判断する限り、ディガンマ(= Ϝ)の介在を念頭にすることはなかったと判断してよい。

古代ギリシアの都市や村落についてヤコブス・ホイエルは『ストラボン』、『ポンポニウス・メラ』、『パウサニアス』、『ソリヌス』などの、地理・地誌関係の資料を、博捜している。それら地誌家の記述が及ばない、当代事情の記述、例えば、かつての古代都市の名残りをとどめる町や村の、17世紀における人口や住居の規模についての証言を、リコーの『トルコ帝国史』やスポーンの『地中海東部諸地紀行』に求めている。ホメロスの世界を、17世紀の地中海地図の上に投影し、その実在性を確かめようとする意欲が強くうかがわれる。この点に限ってみれば、ヤコブス・ホイエルは、かれより約100年後、ホメロス叙事詩を片手に、ホメロスの故里やその叙事詩が伝えるギリシア諸地の実情を見極めようと旅立った、ロバート・ウッドの心情的先駆けであったと言えるかもしれない。

ウッドの『詩人ホメロスの独創的天才を訪ねて』(1776)の一節とヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記とを比較してみよう。ウッドは『オデュッセイア』15. 403～4について次のように述べる。これは主人公の留守を守る豚飼いのエウマイオスが、自分の故郷シュリエーについて語る一節である。「その島こそが太陽の曲がる道(トロパイ)、オルテュギエーの北の方」。ウッドは、太陽の曲がる道とは“冬至の回帰点であり、ホメロスの故郷キオスの小高い山頂から、冬至の陽が沈む方を眺めれば、そこにはシュロス島の山影が眼に映る。これは単なる類推ではあるが、シュリエーとはシュロスのことであり、ホメロスは故郷の夕陽の眺望を語っているのではないだろうか、”と書いている(同書、16頁)。ウッドの臨場感みなぎる着想を素直に諒とする現代の学者はいない。しかしギリシアの太陽と島影の中に、ホメロス叙事詩を置いて考えてみたいという願いは今日も根強く残っているせいか、ウッドの解釈は立証されないままに語り伝えられている。これに比べて、ヤコブスの欄外注記はどうか。かれは『オデュッセイア』15. 403行の「シュリエー」の下に、二本の細いアンダーラインを引いている。しかしそれに関する特段の注記は一語も

記入していない。後日何か自分の調査と考案の結果を記入する為の目印としたのであろう。彼がウッドのようにホメロスを片手にギリシアまで出かけていったという証拠は見つかっていない。でももしその機会があたえられていたならば､必ずやウッドのようにかれもエーゲ海の諸地を歴訪していたに違いない。

ヤコブス・ホイエルの欄外注記の中には、僅かではあるが、その後百年のホメロス研究の道筋を予告するかのような明白な痕跡が含まれている。年代学、碑文学、言語学、地理・地誌学などは、いずれも客観的資料をもとに、ホメロス叙事詩が伝える往古の世界を解き明かす学問的方法として、18 世紀以降今日に至るまで、ホメロス研究を拓いてきたものである。17 世紀末、正確には 1685 年頃から 1689 年までにヤコブス・ホイエルが、アルド版ホメロスの欄外に記入した諸種の注記の間には、間もなく生まれ出ずるべきホメロス学の曙光がさしている。しかし、以上幾つかの例によって説明したように、それらはあくまでも一条の曙光であり、学問の行方のすみずみまでを明るく照らすほどの決定的な力には欠けている。何よりも残念に思われるのは、かれの注記は 1689 年で途絶えており、かれが意図した完結点には至っていないことである。

(II) 以上は、ヤコブス・ホイエルの欄外注記と、ブリンク教授の 16 〜 18 世紀コレクションの中にあるいくつかの交錯点を拾い、そこに窺見されるヤコブス・ホイエルの関心の所在を辿ったものである。この両者間の照合と確認が決定的になる為には､さらに第三の資料が必要であった。それが､ロンドンの大英図書館所蔵の､『ヤコブス・ホイエル博士蔵書目録』と題された小冊子である (S.C.(803).2)。ヤコブス・ホイエルは 1689 年に死没しているが、死後 16 年間、その蔵書は母ゲルトルーダの死 (1705) まで、ユトレヒトのヨハネス教会と公園をはさんで向いするその旧邸の書斎におさめられていた。母の死後、ホイエル家の家具、什器、絵画、鏡面など全てが競売に附されたが､「書籍、肉筆写本類」はその中の第 13 番目のグループにまとめられて、1706 年 5 月 3 日、故人の旧宅において競売に附された。その為の蔵書目録がユトレヒトの出版者ファン・デ・ワーテルによって整えられ、希望者に配布された。その一冊､30 頁ばかりの刷物が､大英図書館に保存されていることを､筆者に教えてくれたのは、ケンブリッジ大学のディッグル教授であった。

目録の書目は 3 項目に大別され､(A) 法律関係 (149 書目)､(B) ギリシア語刊本 (169 書目)、ギリシア語肉筆写本 (14 書目)、(C) 雑書目 (ラテン語、英語、仏語、西語、伊語、蘭語)(474 書目) に分類されている。

ヤコブス・ホイエルは、1672 年ユトレヒト大学の A. マタイウス教授の下で、法律学の学位を取得しており、ローマ法の専門家としての訓練をうけていた。ユトレヒト大学図書館にはかれの筆写による、マタイウス教授の『パンデクタエ (ユスティニウス法典) 講義録』が残っている。約 1500 頁の紙片を綴じた部厚いノートはまさしくヤコブス・ホイエルの筆跡であり、随所に挿入されたインターリーフの補注も、巻末に附けられた綿密な事項・語彙の索引も、かれの筆になるものであることが判る。かれの学位論文は「姦通罪に関するユリウス法」を論ずるものであったとする公式記録は残っているが、論文そのものは見附かっていない。かれが advocatus として、どのような活動を遂げたのか、それを証拠づける記録もまだ実見するには至っていないが、かれの蔵書目録の (A) 項目は、専門研究者の識眼を借

りることが出来るならば、そこからヤコブス・ホイエルの法曹家としての輪郭を浮かび上がらせることも出来るのではないかと思われる。『パンデクタエ』に関する、諸々の法曹学者たちの注釈や見解をまとめた書目が散見されることからも、当時オランダ諸邦に共通の法的基礎はローマ法であったことが窺われる。しかし、箇々の州やその法廷では、多様な慣習、先例、判例、また高名な法学者の意見や論文が、法の具体的運用に際しては、法に準ずるべきものとして実際に援用されていたのであろう。その種の書目も多数含まれている。150冊の書名からだけでは、詳しい内実を知ることは専門外の人間には不可能である。けれども、何時の日か、17世紀オランダ諸邦の法曹事情に詳しい専門家からの教えを仰ぎ、ヤコブス・ホイエルの法曹家としての姿を、その輪郭だけでも捉えてみたいと願っている。

目録の項目 (B) は1500年以降1600年代末までに刊行された古代ギリシア語文献の代表的なものをほぼ全て含んでいる。ホメロス、アイスキュロス、ピンダロス、カリマコスの四詩人の版本は異なる校訂になるものが複数集められている。目録の記載によれば、"故人の肉筆注記多数あり"という但書がついているのも、この四人各々の作品集である。それら以外には、版本は一種のみであるが同じように故人の注記多しの記載をもつ『アリストファネス喜劇集』と『ルキアヌス作品集』がある。この (B) 項目の183の書目のうち、現在、実物の所在が知られているのは、1517年アルド刊『ホメロス全集』、1607年ビセトゥス校訂ジェネバ刊『アリストファネス喜劇集』、そしてヤコブス・ホイエル肉筆書写の『ギリシア語語源辞典』の三点のみであるが、探索の進行次第でその数は増加する可能性はある。

ヤコブス・ホイエルがホメロス注記で引用している文献は殆ど全部この (B) および下記の (C) に含まれており、それらはみなかれの書斎の棚に並んでいたことが判る。しかしかれが頻繁に引用しているにもかかわらず、かれの蔵書目録の中に見当らないものが二点ある。

(a) エウスタティオスの『ホメロス注釈』4巻。これは1542～50年の間、継続的にローマで刊行され、マヨラーヌスとデヴァリウスという二人の学者がその校訂と索引作成に当っている。ヤコブス・ホイエルは、『イリアス』の注記に2回、『オデュッセイア』の注記には6回これを用いているが、かれの蔵書目録中にエウスタティオスは含まれていない。

(b) ホメロス欄外注記の中で、ヤコブス・ホイエルが、'sch. mss.' という略号を用いて、『イリアス』注記中だけでも、128回にも及ぶ頻度で引用している文献がある。この略号は"肉筆古注" (scholia manuscripta) を表し、後段第2章で詳述する通り、現在ライデン大学写本室に於て「フォシウス旧蔵ギリシア語写本64」として保存されている、『イリアス』写本の欄外注記である。1689年その旧所有者のフォシウスが死去するまで —即ちヤコブス・ホイエルの生存時期には— この写本は英国ウィンザーのフォシウスの書斎にあり、これを閲読する為にヤコブス・ホイエルはウィンザーを訪ねてフォシウスのもとに留ることがあったに違いない。上記 (a) においてヤコブス・ホイエルは二度だけ『イリアス』注記にエウスタティオスを引いている旨を記したが、それは『イリアス』最終巻の初めの処で、ちょうどそれはライデン写本が欠落している部分に該当している。注記に際してライデン写本の古注を使うことが出来なかったので、エウスタティオスを使ったのかとも思われる。ライデン

写本は『イリアス』本文及び注記のみを記載しており、『オデュッセイア』を伝えていない。

他方、蔵書目録に記載されているホメロス関係の書目で、ヤコブス・ホイエルの欄外注記には一度も言及されていないものもある。書名だけ挙げておきたい。

(i) L(iber). G(raecus). Dd(Duodecimo) et M(inore). Nr. 15 et 20. Homeri Ilias et Odyssea. cum notis manuscriptis viri docti (ギリシア語刊本、小版、ホメロス『イリアス』『オデュッセイア』、故人の肉筆書込みあり).

(ii) L. G. O(ctavo). Nr. 87. Scholia in Homerum. Straetsb. 1527 (ギリシア語刊本、オクタヴォ版、『ホメロス古注』、ストラスブルク版 1527 刊).

(iii) L. G. O. Nr. 75. Didymi Scholia in Odysseam Homeri. Graece. Aldus 1528 (ギリシア語刊本、ディデュモス著、ホメロス『オデュッセイア』古注、全文ギリシア語、アルドゥス 1528 年刊). これは恐らく Adams Nr. 443 と同一の版。もしそうであったなら、その中にポルフュリオスの『ホメロスに関わる諸問答』も含まれていた。ポルフュリオスの同著からの引用は、ヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記の中で 11 カ所に於いて認められる。

(iv) M(anu). S(criptus). F(olio). Nr. 7. Emanueli Moschopuli Technologia in Homeri Librum Primum et Secundum (肉筆写本、フォリオ版、エマニュエル・モスコプロス著『ホメロス第一巻及び第二巻に関する技巧的考察』).

(v) L. G. O. Nr. 70. Clavis Homerica (ギリシア語刊本、オクタヴォ版『ホメロスを解く鍵』その性質と用途は、初心者向けのもの、ギリシア語本文の行間に、各ギリシア語単語に対応するラテン語訳語が mot à mot に印刷されている。(詳しくは、G. Finsler, Homer. Von Dante Bis Goethe, 1912, 1973 Hildesheim. pp. 150 〜 151 参照).

(vi) M. S. Q(uarto). Nr. 14. In Homero Vossiano Ilias A (ギリシア語肉筆写本、「フォシウス所有のホメロス本における『イリアス』第一巻」、詳細は不明であるが、これはライデンのフォシウス旧蔵の『イリアス』写本の第一巻の本文を、ヤコブス・ホイエル自身が書写したものであった可能性が大である).

上記 (i) 〜 (vi) の中、(iv) と (vi) は肉筆写本であり、(A)、(B)、(C) の大分類中の (B) に附随する 14 書目中に属している。これら 2 書目以外に、(B) に記載の写本中、現在所在が確認されているものは、次の一点で、ユトレヒト大学図書館写本室に収蔵されている。

L. G. Ms. in Folio. Nr. 7. Etymologicum Graecum Patr. Societatis Jesu Antverpiae, Nitidissime scriptum, 3 vol. (ギリシア語肉筆写本、フォリオ版、『ギリシア語語源辞典』3 巻 (アントワープ、イエズス会所有の原本の写し)、ユトレヒト大学図書館 Ms. 9 (I.A.4-6)).

このヤコブス・ホイエル自筆の写本について、1711 年にユトレヒトを訪ねたツァハリアス・フォン・ウッフェンバッハは、次のような報告を残している。かれは、ドイツのフランクフルト・アム・マインに住む、愛書家であり、中世写本の蒐集家としても知られた人物である。当時ユトレヒト大学のオリエント語学の教授であったアドリアン・リーラント (1667 〜 1718) の案内のもとに図書館を見学した機のことである。“その後随分苦労して、遂に他のどの収蔵書にも増して是非とも見たいと

願っていた二種の最も貴重な書物を発見することが出来た。一つは『Etymologicum Graecum』のみごとな写本で、これについて、リーラント教授は大そう誇らしく思っているようだった。かれの説明によれば、ある時、グレーヴィウス教授(J. G. Graevius, 1632～1703)がその原写本をアントワープのイエズス会から期限3週間という条件の下に借り出した。そしてこの短時日の中に――これを聞いたときの私の驚きは、言葉にもならなかったが――デ・ホイエルという名の、ユトレヒトのとある弁護士が、その筆写を完成した、というのである。その成果は、各巻とも指三本重ねたほどの部厚さのフォリオ版写本三巻からなるが、ただ細密な書写というにとどまらず、極めて美麗な書体で書かれていた。このデ・ホイエルという人物は、自分自身のためにも、別の一式を書写した。この自分用の写しは、かのホイエルの死後その蔵書が競売に附された際、これが汚穢されることを危惧したP. ブルマン氏(1668～1741)の仲介によって、ユトレヒト市当局が買上げて、大学図書館に寄贈する運びとなった、という。のちに、リーラント、キュスター(おそらくL. Kyster, 1670～1716)の両氏は、この写本と他の諸辞典との文言校合を試みたが、この写本と、かの有名な『大語源辞典』(Etymologicum Magnum)との間には、部分的に類似点は認められるものの、両者は全くの別種であるとの結論に達した、という。以上の話の信憑性については、リーラント教授のみならず、図書館長自身も保証してくれた。このデ・ホイエルという人は学問の造詣深く、卓越したギリシア語学者であったという。その後で、図書館長は私たちに一巻の『アリストファネス』の刊本を見せてくれたが、この本にも随所にデ・ホイエルが書き込んだ、綿密な、ときには冗長な注記があるのを実見した。この書物は1607年カルダリーナ協会発行のジェネヴァ版『アリストファネス』であった。”(『低ザクセン、ホラント、及び英国にまたがる特記すべき旅行談義』Merkwürdige Reisen durch Niedersachsen, Holland und England. 3巻 1753～54、ウルム刊、以上はその第3巻711～717頁からの引用試訳)。

ヤコブス・ホイエル筆写の3巻の辞書を目前にしてフォン・ウッフェンバッハは驚嘆している。しかし今日それを前にしたときわれわれが感ずる驚きよりも大きかったとは思われない。ウッフェンバッハは驚きのあまりか、その話には多少混乱がある。事実は、ヤコブス・ホイエルは、部厚い辞書の写しを二部作った。一部はグレーヴィウス教授の為に3週間で写しとり、後日それをもとにもう一部自分用に写しを作製した。大学図書館に寄贈され、ウッフェンバッハが閲覧し、また今日われわれが実見できるのは、3週間で写しとった最初の写しではなく、ヤコブス・ホイエルが後日、改めて、自分自身の為に作製した第2の写本である。第2の写本の為にかれが、どれだけの時間を費したか、それは実は不明である。ちなみに、18世紀終り頃、英国の大学者R. ポーソンは、フリュニコスの辞書一冊(『Etym. Gr.』の1/3ほどの)を書写する為に6ヶ月を費したと伝えられている。

しかしそれにしても、ヤコブス・ホイエルは、その第1の写本作業をどういう方法によって僅か3週間の時間で完了し得たのか。それが可能であったのは、かれがこの辞書を文字通りアルファからオメガまで完全に暗記していたから、と考えるほかはない。かれは原本を一字づつ眼で追いながら写しとったのではなく、自分の記憶の正しさを原本によってチェックしながら、ひたすらペンを走らせ続けたに違い

ない。3週間でこの写本作業を完成するには、それが絶対の条件のように思われてならない。とすれば、それまで原本はアントワープのイエズス会に保存されていたのであるから、ヤコブス・ホイエルは、幼少の時代にアントワープまでおもむき、そこでギリシア語の習熟期間を過ごし、大冊の辞書三巻を諳ずるに至っていたと考えねばならない。

また同じ時にウッフェンバッハが見せて貰ったという、ヤコブス・ホイエルの欄外注記入りの『アリストファネス』一巻は、今日ユトレヒト大学写本室に保存されている (UBU. ABHSS. MS. 1496 (I.A.21))。これについての調査はまだ終っていない。

ウッフェンバッハの旅行記の一節には、図書館長、案内役を勤めたアドリアン・リーラントや、ヤコブス・ホイエルの蔵書競売の現場にいて、かれの肉筆写本がユトレヒト市に買上げられるように仲立ちをしたピーター・ブルマン、ユトレヒト大学のグレーヴィウス教授、などの名が登場するが、かれらの名前は、ヤコブス・ホイエルの葬儀の列席者名簿にも記載されており、生前より故人と親密な間柄であったと思われる。グレーヴィウス教授の、「スエトニウス」、「フロルス」、「テレンチウス」などの講義に列した際の、ヤコブス・ホイエルの綿密な講義筆録は、今日もユトレヒト大学図書館に保存されている。その子テオドル・グレーヴィウスも葬儀参列者の一人である。リーラントはヤコブスより15才年下、ブルマンは17才年下であった。リーラントは旧約聖書学者として、ブルマンは古典学者として後世にまで知られている碩学たちである。またリーラントと協力して両『語源辞典』の文言校合を試みたというL. キュスターは、ヤコブス・ホイエル没後にユトレヒトに学んだドイツ人古典学者である。かれが1696年に発表した論文「Historia Critica Homeri」(「ホメロスに関する批判的史実」)、1705年の『スイダス辞典』校訂・注釈、ならびに1710年の『アリストファネス』注釈・校訂などは、後世の古典学史上有名な著作である。しかしホメロス、アリストファネス両詩人については、すでにヤコブス・ホイエルが1689年以前に、厖大な参考資料を集め、それを両詩人作品集の欄外注記の形で残しているし、少くとも『アリストファネス』の場合、ヤコブス自筆注記を記載したジェネヴァ版は、大学図書館に残されていた。L. キュスターはヤコブス筆写の『語源辞典』の文面を精査した人である。同じようにかれはヤコブスの『ホメロス』本と『アリストファネス』本の注記類をも眼を皿のようにして熟読検証していたのではないか。この点については、今後の調査によって是非とも明確な結論を得たいと思う。

ともあれ、ウッフェンバッハの旅行記の一節は、卓越したギリシア学者ヤコブス・ホイエルの思い出が、かれをなつかしむ年下の友人たちの間で没後20年余の後、1711年頃まで語り継がれていたこと、そしてその思い出が外国からの訪問者にまで披露されることがあった有様をよく伝えている。

かれの蔵書目録の中に見出される次の写本二点も、かれのギリシア学の驚くべき実体を告げるものではないかと思われる。

(i) L. G. Ms. F. Nr. 6. <u>Anthologia ex Bibliotheca Vaticana</u> (ギリシア語写本、フォリオ版、ヴァティカン図書館に原本所在の『ギリシア詞華集』より).

(ii) L. G. Ms. F. Nr. 8. <u>Anthologia ex Bibliotheca Palatina</u> (ギリシア語写本、

フォリオ版、パラティナ図書館に原本所在の『ギリシア詞華集』より).
(i)、(ii) 両写本のいずれも、残念ながら、今日なお失なわれずに存在しているのかどうか、いずれの所在も、全く不明である。『ギリシア詞華集』は、1607年頃サルマシウスがハイデルベルク大学図書館において発見したものであるが、版本として世に広められることなく、原写本は1623年ローマに持ち去られ1797年まで人の眼に触れることもなくヴァティカン図書館に収められていた、と言う。ところがヤコブスの蔵書目録の題名から想像すると、『詞華集』原本がハイデルベルクの「パラティナ」図書館に収蔵されていたときに作製された写しと、それとは別に、原本がヴァティカンに移された後に、ローマで作製された写本一巻と、計二巻の写本が、ヤコブス・ホイエルの書斎に収まっていたとの印象をうける。何時、誰が写しを作り、どのようにしてそれぞれがかれの書斎に届けられたのか、全く不明であり謎である。ユトレヒトは宗教改革後もヴァティカンとは特別の関係にあったと言われており、人を介して写本を手に入れることも可能であったかも知れない。或いはヤコブス・ホイエル自身、ヴァティカンを訪ねて写しを作製することも出来たのかも知れない。何時の日か、両写本の片方でも所在が明らかになれば、この謎も氷解することになるだろう。

ヤコブス・ホイエルの蔵書目録の分類 (C) 雑書474書目の中、その半数以上のものは古典ラテン語文献の校訂・注釈・研究に関わるものであり、'雑書' という分類は、必らずしも内容を正確に表示するものではない。先に簡単に触れたサルマシウスの大著『ソリヌス研究』(1629) や『同名異種薬草論』(1689)、フォシウスの『ポンポニウス・メラ注釈』(1658) や、同『カトゥルス研究』なども、かれの雑書中に含まれていたことがわかる。また近世のラテン語著述家の諸作の中では、エラスムスの『対話集』(Colloquia, 1635 Elzevier 版) や、同『手紙作法』(年代・版 不詳)、エラスムス『生涯と書簡集』(1607 ライデン版) や、グロチウスの『詩集』(年代・版 不詳) や『書簡集』(1687 アムステルダム版)、デカルトの『プリンキピア・フィロソフィカ』(1664 アムステルダム版) などをはじめ、多数の17世紀欧州各国の碩学たちの著した代表的な書名が含まれている。

"雑書" という未整理の分類は、ヤコブス・ホイエルの学問的興味があまりにも多岐にわたり、法学、ギリシア学以外には、細分が短時間の中には困難であった為かも知れない。假りにその他の "人文学" とでも称すべき大項目を設けて細分を試みるならば、古代ラテン文学以外のかれの蔵書集成は次のような展望を見せている。

(a) 碑文学、古代貨幣学、紋章学など、近世考古学の前史を形作るもので、代表的一作を挙げるならば、E. スパンハイムの『古代貨幣の秀逸性と効用について』(1664年 ローマ刊) で、これはホメロス欄外注記にも引用されている。ホメロスやナウシカの肖像も、古代貨幣の刻印を参考にしているのである。

(b) キリスト教学に属すると目される約50の書目中には、アウグスティヌス『神の国』(年代不詳)、トマス・アキナス『キリストのまねび』にはじまり、ギリシア語新約聖書 (恐らく1549 アルド版)、カルヴィンの『Institutiones』(恐らくラテン語版 1534年)、反宗教改革派の雄とされるC. バロニオの『教会史』(1617 ケルン版)、さらにカルヴィン派のオランダにおける諸流に属する作者たちの著作が網羅されており、ここにはユトレヒトを中心とする複雑な新旧両派の思潮が映しださ

れている。これらの書目がホメロス欄外注記に引用されることは皆無に近く、唯一回『殉教者ユスティヌス』(1551 パリ版)からの一節が引かれているに過ぎない。

(c) 欧州各国歴史関係書目の中で、最大部分はオランダ各州の歴史書である。報告者は 50 書目以上にのぼる文献をここに紹介する専門知識を全く欠いており、何時の日か識者の助けを借りて、ヤコブス・ホイエルの歴史的知見の輪郭なりを明らかにしたいと願っている。ただ、オランダの歴史は、古代ローマに端を発する頃より、同一系統の民族が複数の異なる統治組織の下に分れ、原初的連邦制の下に近世に至るまで推移しており、その間、幾度も近隣のスペイン、フランスなどの大国から干渉をうけてきた。ヤコブスの蔵書の書目からも、その凡その歴史的変遷を窺うことができる。イタリア、スペイン、フランスの歴史書が多く散見されるのは当然としても、その中に混って、ヴェネチア共和国と、ヘルウェティア(スイス)連邦史などが、かなりの部分含まれていることが注意を引く。やはり連邦共和国であったオランダ史との共通点などに関心を寄せていたことが窺われる。ヤコブス・ホイエルの眼が南欧にむけられているのは、当時のオランダの文化的風潮が然らしめたものか、あるいはかれの場合、ギリシア、ローマ学との関わりからそうなっているのか、いずれかであろう。海峡を隔てた隣国イギリスの場合には、ブキャナンの『スコットランド史』(年代不詳)、キャムデンの『英国年代史』(年代不詳)などの数書目を数えるにすぎない。

(d) 歴史関係の書目にみられる南方重視の傾向は、ヤコブス・ホイエルが所有していた文学書に於いても認められる。50 書目以上にのぼる文学関係のものの中、大多数はペトラルカ以降のイタリア文学作品であり、その間に 16、17 世紀のスペイン、フランスの有名作者の作品が散見される。ここでも英国文学の作品は絶無に近い。シェイクスピアもミルトンも見当らず、辛うじてホッブスの『レヴァイアサン』(1651) が只一巻含まれている。

(e) 16、17 世紀はオランダの海外雄飛の最盛期であり、時代の風潮はヤコブス・ホイエルの蔵書の一部にもよく反映されている。25 ほどの書目には、マルコ・ポーロの『航海記』(イタリア語、フォリオ版、刊行年不詳)に続いて、デ・ラート『西インド紀行』(1625 ライデン刊、フォリオ版)、同『アメリカ原住民諸部族の起源について。グロティウス説に対する反論』(年代不詳)などのアメリカ大陸関係のもの、さらにショウテン『東インド海航海記』(1676)、ダッパー『中国への使節』(1665 アムステルダム、フォリオ版)、同『中国への第 2 回、第 3 回の使節』(1670 アムステルダム、フォリオ版)、同『アフリカ論』(1680 フォリオ版)などである。これだけを見ても、オランダ東インド会社の最盛期に、ヤコブス・ホイエルは生きていたことが判る。かれのホメロス欄外注記の中には、スポーンの『イタリア、ダルマティア、ギリシア、レヴァント旅行記』(1679 アムステルダム)やリコーの『トルコ帝国史』(1670 パリ)など、東地中海の旅行記録からの引用がしばしば見られる。当時の広凡な旅行記資料に広い関心を持っていたから、ホメロス世界の把握に際してもスポーンやリコーの旅行記に注意を怠らなかったのであろう。

(f) その他諸般の学問の中でも、植物学、金属(鉱山)学、地図(測量)学、動物学(鳥類学)、医学など、当時新進の自然科学(博物学)の諸分野にも、かれの関心がむけられていたことは、幾冊かの蔵書から察知される。しかし (a) 〜 (e) の書目にみられ

るような、集中的な傾向は認められない。他方、近代欧州諸地の言語の習得の為に用いられた、辞書・文法書や会話習熟の為の語学書が目立っている。ラテン語とフランス語の習得は恐らく幼少時から始められていたらしく、語学書レベルの書目は見当らない。ヤコブス・ホイエルの語学書目20余冊は、イタリア語、スペイン語、ヘブライ語に集中している。しかもそれらは皆、仏・伊、伊・西、西・仏であって、オランダ語を介した学習書はない。英語辞典一冊も、英語・ラテン語辞典である。またヤコブス・ホイエルは1676年頃、英国旅行記に附して自筆の‘英語文法要領’を草しているが、これも全文ラテン語で記述したものである。

また、現代欧州語の実践的読解資料として集めたものであろうか、かれは当時の諸国語に翻訳された新約聖書の殆んど全てではないかと思われるほど多数の俗語訳聖書を蔵書中に所有していた。しかし、ヤコブス・ホイエルは単なるPolyglottaでなく、古代ギリシア語に関する限り、当時第一級の識見を有したことは既に述べたところである。それのみか、やがて展開する比較言語学に対しても関心を寄せていた。そのことは、ホメロス欄外注記の中で、メリック・カソボンの『四種の言語に関する注釈』の第2部(1650年 ロンドン刊)に含まれている「サクソン語」の一節を引いて、ホメロス叙事中の稀語の解説を試みている点からも充分に想像できるのである。

以上は、かれのホメロス欄外注記と蔵書目録との交錯点とを手がかりとしながら、「ヤコブス・ホイエルは学問の造詣深い人であった」と、アドリアン・リーラントが1711年に洩らした言葉を証明してみた次第である。

[附記] ヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記に使用されている文献一覧表と略号について、具体例を1、2用いて説明させて貰いたい。

Aeschylus, <u>Tragoediae</u> [L.G.Q. 50 c. Schol. Gr. Stephanus 1557; DdM. 22. A. Soph. Eur. Trag. Select. Stephanus; L.G.DdM. 31. A. Trag. W. Canter, Plantin, 1580; L.G.F. 80. A. Trag. c. Sch. Gr. T. Stanley. Lond. 1663 (#264)] Ag. 40 (B 327) .....Cho. 163 (h.Herm. 331) etc..

アイスキュロス悲劇集の場合、ヤコブス・ホイエルの蔵書目録中には同一書名のもとに、[　　]の4種の版本があり[L.G. = ギリシア語版本; Q = クワルト版、F = フォリオ版、O = オクタヴォ版、DdM. = 1/12あるいはそれ以下の小版; 続く番号は蔵書目録内の通し番号; A. = アイスキュロス、Soph. = ソフォクレス、Eur. = エウリピデス; c. Sch. Gr. = ギリシア語古注附き; (#264) = ブリンク文庫中の蔵本通し番号264]; Ag. 40 (B 327) は悲劇「アガメムノーン」40詩行目に附されたスタンレーの注記がホメロス『イリアス』(アルド版 1517年)の第2巻327行目の余白に転写されていることを示す。

例2としてサルマシウスの『ソリヌス』注記をとりあげる。

Salmasius, C. <u>Plinianae Exercitationes in Solinum</u>, Paris, 1629 [L.M.F. 93, 2vol., {Trajecti ad Rhenum 1689 (#269)}], p.846 {= 608 in ed. Traj. Rh.} (Flyleaf I (a)); p.390 {= 219 ~ 20} (Λ 773).....

〃 <u>Exercitationes de Homonymis Hyles Iatricae</u> [L.M.F. 94, ... Traj. ad Rhenum 1689 {bound together with In Solinum in (#269) supra.}] p.100,

b C-F (ϵ 255).

C. サルマシウス『ソリヌス』注釈 [L.M. = 雑書分類; フォリオ版 第93、2巻、1629、パリ版、{但し、検証に使用した版はユトレヒト、1689年版、ブリンク文庫通し番号 269}]、p.846, パリ、1629年刊、846頁 {= 608頁 ユトレヒト版}、(巻頭見開き遊びの第1頁第1項目); 1629年版 390頁 {ユトレヒト版 219～20頁}、『イリアス』第11巻773行余白に引用注記さる、の意。

次にC. サルマシウス[雑書項目、フォリオ 94番、ユトレヒト 1689年刊—これはサルマシウスの一子ルイが父の遺稿中から発見した論文を、1689年はじめてユトレヒトで印刷し、先行の『ソリヌス』注釈 #269 と合本して刊行したものである。] その100頁右欄のCからFまでの記述が、『オデュッセイア』第5巻255行目の余白欄外に転写引用されているという意味である。

他の諸項目の記事も上の二例に準じた形式で記載されているが、不整合の点もあろうかと危惧する次第である。宜しく御賢察賜わりたい。なおこの一覧表は、第3回「フィロロギカ」研究集会 (2003年6月6日 於成蹊大学開催) において提出したものをもとに、新たに整理したものである。今日もなお、未確認の書名一点がそのままに残っている (Tabern(?) Itiner. Persica III (『イリアス』第2巻546行注記)。これも将来解決されるべき課題の一つとして、そのまま一覧表中にとどめておくことを許して頂きたい。

INDEX FONTIUM

Aelianus, Variae Historiae [L.G.Q. 69, Roma 1545 (#116); L.G.Q(incert.). Venet. 1552; L.G.O. 65, J. Scheffer. Argent; L.G. DdM(incert.). T. Faber], Lb. xiii. c. 22 (Flyleaf I (d))

Aeschylus, Tragoediae [L.G.Q. 50, c. schol. Gr. Stephanus 1557; DdM. 22, A. Soph. Eur. Trag. Select. Stephanus; L.G.DdM. 31, A. Trag. W. Canter, Plantin. 1580; L.G.F. 80, A. Trag. c. Sch. Gr. T. Stanley, Lond. 1663 (#264)], Ag. 40 (Β 327), Ag. 45 (Β 759), Ag. 52 (λ 125), Ag. 587 (γ 273-4), Cho. 163 (h.Herm. 331), Pers. 128 (Β 87), Sept. 147-8 (Δ 101), Sept. 283 (Κ 461)

Apollinaris Sidonius, [Sid. Apoll. Opera, J. Sirmondus, Paris 1652 (#247)], Ep. xxiii, V. v. 135 (Flyleaf I (f))

Aristoteles, Rhetorica [L.G.F. 69, Arist. Op. Omn. Gr. Lat. Paris 1654, 2vol.], Γ 3, 1406^{b} 12-13^{c} (Hyp. Od. α)

Arrianus, De Exped. Alex. M. [L.G.O. 54, Arrian. de Exp. Alex. Magni, c. n. Blancardi. Gr. Lat., Amsterd. 1668], I. ii. 5 (Β 698), I...(Κ 460-1, Stanley, Sept. 283), IV. i. 112 (Ν 6, Ν 11-2), V. vi. 5 (γ 300), VII. xiv. 8 (Τ 209-10), VII. xiv. 14 (Ψ 141)

〃 Indike (~ Lb VIII. Exp. Al. M.) (κ 239)

Bochart, Samuel, Geographia Sacra, Accesserunt in fine eiusdem auctoris epistolae duae: 1. de quaest. Num Aeneas umquam fuerit in Italia?. 2. 2pt. J. D. Zunneri, Francof. a. M. 1674 (1681^{2}); id. Tit. Hymn. in Apoll. (3) [cf. Od δ 354-57 (18) note by Is. Vossius]. The date of pub. 1674 stands in need of revision, for his work is quoted by Vossius' Pomp. Mela. (first 1658).

Callimachus, Hymni [L.G.Q. 53, Callimach.: Gr. Lat. c. sch. Gr. Stephanus, 1578 c. n. mss. v.d. (cum notis manuscriptis viri docti (ヤコブス・ホイエル自筆の注記ありの意)); L.G.DdM.37. C. et Moschi. Plantin, 1584 (#5); L.G.Q. 71, Call. Annae Fabri, Gr. Lat. Paris 1675 c. n. mss. v. d.; M.S.G.Q. 11, Meursius in Call.], in Iovem (δ 78), in Apoll. v. 25 (δ 78)

Casaubonus, I., v. Diogenes Laertius, Strabon, Suetonius, Theocritus (Lectiones Theocriteae)

Casaubonus, M., De Lingua Saxonica [(in: De quatuor linguis commentationis pars II), Lond. 1650 BLC: 996. 6. 24], p. 348 (Β 595)

Catullus [L.M.O. 41, Cat. Tibul. Prop. Graecii, 2 vol. 1680, c. n. mss. v. d.; L.M.Q. 177, Catullus c. n. Vossii, Lond. 1684 (#45); DdM. 118, Cat. Tib. Prop.], Epith. Th. et Pel. 203-5 (Α 529-31) v. Vossium. I.

Cicero [L.M.Q. 112, Cicer. Op. Omn. c. n. Gruteri Amsterd. Elzevier, 1661; O. 46, Epist. ad Att. ex Recens. Graevii, 2 vol. Amsterd. 1684 (#239); L.M. O. 47, Epist. ad Fam. Graevii, 2 vol. Amsterd. 1687; L.M.DdM. Epist. ad Fam. Manutii (Cic. Epist. Fam. Pauli Manutii, Plantin Antw.

1568 (#105)), Cic. de Officiis, ex Recens. Graevii, 1688 (#159, Amsterd. 1691)], Ep. I. ad. Att. l. 1. (X 33), De Divin. II. xxx. 64 (B 327), De Fin. V. xxiii. 49 (μ 184-91), Tusc. Disput. III. lxiii. 77 (Z 201)

Cuper G,. De Consecratione Homeri [L.M.Q. 174, Amsterd. 1683], p. 63 (Flyleaf I. (b)), p. 78 (Hyp. ad Od. α), p. 108 (Hyp. ad tit. h.Apoll.), p. 130 (ad tit. ΚΑΤΑΛΟΓΟΣ ΝΕΩΝ)

Dio Chrysostomus [not in Catalogus Librorum], Or. II. c. 29. 22 (Flyleaf I. (b)), Comae Enc. {Appendix I. p. 307-8 ed. Arnim} (X 402), cf. Leopardus, Em. II. xix, infra.

Diodorus Siculus [L.G.F. 70, Diod. Sic. Bibliotheca Historica Rhodomani, Gr. Lat. Hannov. Wechel 1640], I. xlv. 6 (I 381), I. xcvi (ω 11-3), III. (A 423), III. lii (B 814); III. lix. 6 (B 595), III. lxvii. 3 (B 594-600), IV. iv. 6 (B 662), IV. xxxix. 2 (λ 601-2), IV. lxxxv. 1-7 (λ 572), V. ii (ι 109-11), V. xvi. 23-24 (B 519), V. xvi. 56 (I 404), XV. xv. 52 (M 243)

Dionysius, Orbis Descriptio (Περιήγησις) [L.G.O. 61, Dionysii Orbis Descriptio c. com. Hil, Lond. 1679], III. 871 (Z 201)

Diogenes Laertius, Vitae Philosophorum [L.G.O. 74, De Vitis Philosophor. c. n. Casauboni 1615 (#211, 1692); L.M.DdM. 58, De Vit. Philos.], VI. 53, Diogenes Cynicus (Θ 95)

Dionysius Halicarnasseus, De Compositione Verborum [L.G.F. 71, Scripta quae extant omnia Historica et Rhetorica Sylburgii, Gr. Lat. Francof. Wechel 1586], iii (π 16), iii (π 176), xv (X 476), xv (P 265), xv (X 220-1), xv (ι 415-6), xv (Σ 225), xvi (Π 361), xvi (M 207), xvi (E 402), xvi (λ 282), xvi (ι 289-90), xvi (B 211), xvii (ι 39), xx (λ 593-4), xxxiv. 4-8 (Flyleaf I. (d)), xvi (Δ 452-3)

〃 Antiquitates Romanae, I. lxii (Υ 219), I. lxiii (B 327), VII. lxxii. 3 (Ψ 710), V. lxxiv (A 238), VII. lxxiii. 2 (Π 165-7), Vii...? (Z 479. The only case where J.G.'s reference is not justified)

De Demosthene (περὶ τοῦ Δημοσθένους δεινότητος) {Opusc. vol. 1 p. 220. 5-8. ed. Usener} (Flyleaf II (b))

Ennius, Annales [L.M.Q. 149, cum comm. Columnae, Neap. 1590; L.M.Q. 149 <sic> , c. comm. Merulae. LB. 1595], ii {= p. 683ff. ed. Skutch} (Z 506-11, cf. N 130)

Etymologicum Magnum [L.G.F. 77, Etym. Magn. Aldo 1549 {798. 45 ed. Gaisford}], (P 105), κύπρις (h.Aphr. 57-8)

Eustathius, Commentarii in Homeri Iliadem et Odysseam (Παρεκβολαί) ed. N. Maioranus et M. Devarius, Roma 1542-1550 [not in Cat. Libr.], ε 281, κ 124, κ 464-5, π 403, φ 15, φ 296, Ω 23-30, Ω 130-2.

Faber, T. vide Longinum et Lucretium.

Florus, Res Romana [L.M.O. 79. Florus Freinshemii Argent. 1655 (#153)], Lb. III. c. iii. p. 222 (O 684)

Gellius, Noctes Atticae [Stephani Paris 1585 (#23, 1573)], IX. ix. 12 (ζ 102-8: Aen. I. 502 ff.), IX. x (Ξ 353)

Harpocration, Lexicon [c.n. Maussaci et Valesii, LB. 1683 {p. 121 ed. Bekker}], Λικνόφορος (h.Herm. v. 21)

Herodotus, Historiae [L.G.F. 45, Herodotus, Gr. Lat. Francof. 1608; L.G.F. 44, Lond. 1679, ed. Jungermann], II. 50. 1.2.3 (ξ 327-8), II. 112 (δ 365-6), II. 116.3 (Z 289-92), II. 116 (δ 227-30), II. 116 (δ 351-2), IV. 28-9 (δ 85), II. 49 (λ 290-7)

Hesiodus, Erga kai Hemerai [L.G.Q. 65, ed. D. Heinsius, Plantin, Antw. 1603; L.G.O. 84, ed. J. G. Graevius, Elzevier], Erga v. 496 (ρ 225)

Hesychius, Lexicon Graecum [ed. K. Schrevelius, LB. 1668, c. n. mss. v. d. (#279)] ἀγανοί (N 5), ἀγκαλόν (h.Herm. 82), ἀναπλήσας (h.Herm. 41), ἐρεχθομένη (h.Apoll. 358), ἐπηλυσίη (h.Herm. 37), ἠπέδανος (h.Apoll. 316), κρεμβαλιάζειν (h.Apoll. 162), ληνοὶ (h.Herm. 104), λίκνῳ (h.Herm. 21), ὄγμος (h.Lun. 11), ὀρσολοπεῖται (h.Herm. 308), πλαταμών (h.Herm. 128), πρόκας (h.Aphr. 71), ῥικνοί (h.Apoll. 317), σαῦλα (h.Herm. 28), σατῖναι (h.Aphr. 13), τρώκτης (ξ 289), φηληταί (h.Herm. 49), φλίη (ρ 221), ψαφαλότριχα (h.Pan 32)

Hirtius, De Bello Hispanico [not in Cat. librorum], xxxi. 7 {Vol. III. p. 158, ed. A. Klotz}, (N 130)

Holstein, L. "Holsteinius in Stephanum de Urbibus [Gr. Lat. LB. 1684]", p. 121 (h.Nept. 3), p. 174 (h.Apoll. 446), p. 178 (h.Apoll. 26), p. 202 (h.Artem. 3), (vide Stephanum)

Homeri Vita (Vita Herodotea) {Homeri Opera V ed. T. W. Allen}, p. 195, l. 61ff. (β 225), p. 209 (H 220)

Horatius [L.M.Q. 146, Horatius c. comm. Cruquii, Antw. 1578 (#183); L.M.DdM. 55, Horatius, Juvenalis, etc. c. n. Rutgersii, Rigaltii ap. Stephanum], Ep. Lb I. Epist. II. 18-22 (α 1-22), Ep. Lb. II. Epist. II. 213-16. c. Cruquii notis ad 214 (ο 373), Sat. II. 6. 102-3 (Ι 200), Sat. II. 3. 9 (Β 597)

Julianus, Symposion vel Caesares [L.M.Q. 119, Les Cesars de l' Empereur Julien par E. Spanheim, Paris 1683], vide Spanheim.

Justinus Apostolus [L.G.F. 55, Justinus Martyr, Graece ex Bibliotheca Regia, Paris apud Stephanum 1551], Epist. II. c. ii b: 4 (Θ 13)

Leopardus, P. F., Emendationum et Miscellaneorum Libri Viginti [L.G.Q. 81, Plantin, Antw. 1568], II. c. xix (X 402), viii. c. vi (ε 60)

Livius, Ab Urbe Condita [L.M.O. 50, cum notis Variorum et Gronovii, 3 vol. 1664, Elzevier, Amsterd. 1678 (#37)], vii. ix. 8 ~ x. 1 (H 92)

Longinus, De Sublimitate [L.G.DdM. 16, Dionysius Longinus ed. T. Faber. Gr. Lat. Salmurii 1663], viii (Hyp. ad Od. α), viii. 2 (λ 315-6), viii (λ 543), ix. 6 (Υ 54-65), ix. 10 (P 645), ix. 11 (O 605-6), xvii (κ 251-3)

Lucianus, Dialogus Mortuorum [L.G.F. 61, Luciani Opera Graece apud Aldum, Vent. 1503, c. n. mss. v. d.; L.G.O. 59, Lucianus Benedicti Gr. Lat. Salmur. 1619, 2 vol.], xix (Β 698-702)

Lucretius, Rerum Natura [L.M.Q. 105, c. n. Tanaquilli Fabri, Salmurii, 1662, c. n. mss. v. d.; L.M.DdM. 117, ed. Lambinus, Paris 1565 (#18)], II. 24-26 (η 100-2), III. 1078 (Ζ 488)

Macrobius, Saturnalia [L.M.O. 53, Macrobii Opera c. n. Variorum etc. Recens. J. Gronovii 1670], V. c. ii (Φ 362-5), V. c. xxviii. 1 (Α 423), VI. c. 1. 31-35 (Ν 130-1)

Martialis, Epigrammaton Libri, etc. [L.M.Q. 107. Vicenti Colesso in usum Delphini, Paris 1680, c. multis n. mss. v. d. ; L.M.DdM. 60 c. n. Scriverii et aliorum LB 1619 (#36), c. n. mss. v. d.; L.M.F. 103, Variorum Lutet. 1617; L.M.O. 77, Farnabii, Janson, Amsterd. 1645 (#21); L.M.DdM.115], Epigramm. VIII. Ep. 6. 11-2 (Ι 203), Apophoreta Ep. 81 (ad Tit. Batrach), De Spectaculis Lib III. v. 4 (Ν 5)

Meursius. J., Cyprus [L.G.Q. 89, Meursii, Creta, Cyprus, Rhodos], I. c. xiv et xv (θ 363), I c: xiv et xv (h.Aphr. 57-8)

Miscellanea Laconica [L.G.Q. 95, Meursii Misc. Laconica], xiv c. xi (h.Apoll. 411)

Ovidius, Amores [L.M.DdM. 41, Ovidii Opera c. n. Heinsii, 1661. apud Elzevier 6 vol. cf. ed. P. Burmann Amsterd. 1727 (#298)], III. ix. 25-6 (Flyleaf I (e))

Metamorphoses [L.M.F. 113, Ovidii Metamorphoses Farnabii, cum figuris; L.M.DdM. 116, Metam. Farnabii], ix. 217-8 (Ν 205)

Palladas, ex Anthologia Graeca [MS. Gr. F. 6, Anthologia ex Bibliotheca Vaticana; MS. Gr. F. 8, Anthologia ex Bibliotheca Palatina] l. 1. p. 153 {X 50. ed. Tauchnitz} (κ 338)

Pausanias, Periegesis [L.G.F. 64, Pausanias Xylandri, Gr. Lat. Francof. Wechel 1583], I. (Attica) ix. 3 (Ι 381-2), I. xvii. 5 (κ 513-4), II. (Corinth) xxi. 10 (Ω 609), II. xxv. 5 (Β 571), II. xxvi (Δ 194), III. (Laconia) ii. 4 (Τ 179), III. ii. 7 (Β 584), III. xxi. 5 (Β 583), III. xxv. 7-8 (Ι 292), III. xxvi. 8 (Ι 292), IV. (Messen.) xxxi (Ι 293), VIII. (Arcad.) xvii. 6 ~ xviii. 6 (Β 755), V. (Elis) xiv. 2 (Ν 389-90), V. xxiv. 11 (Τ 266), VI. (Elea) iii (Ε 395-7), VII. (Achaia) i.1-4 (Β 575), VII. xxiv. 5 (Υ 404), VII. xxvi (Φ 75); VII. xxv. 13 ~ xxvi (Β 573); VIII. (Arcad.) xiv. 4-8 (Β 605); VIII. xvi. 3 (Β 604), VIII. xxiv. 7 (Ω 527), VIII. xxv. 7-8 (Ψ 346), VIII. vi. 6 (Β 606), IX. (Boiot.) xxix. 6-7 (Σ 570), xxxv. 4 (Ξ 267), v. 6-7 (λ 263), xxxvi. 3 (Ν 301), xxxx (Β 101), X. (Phoc.) iv. 5 (λ 576-7), vi. 5 (μ 45-6), vii. 13 (υ 301-2), xxix. 4 (λ 325)

Persius, Satirae [L.M.DdM. 110, Pesius c. n. Bond; cf. Persius Casauboni, Paris 1615 (#50). p. 306-8], III. 105 (Τ 212)

Petrus Apostolus, Epist. II.c. 2 (cf. Steph. Thes. G.L.,vol. III, 1248G.)

Pindarus, Carmina [L.G.Q. 69, Pindarus c. sch. Gr. Romae ap. Calergum, 1515, c. n. multis mss. v. d.; L.G.Q. 64, Benedicti, 1620; L.G.DdM. 35, et 36, Pind., Sapph., Simonid., ap. Stephanum], Nem. VII. 20-2 (δ 724), Nem. VII. 53-54 (Ν 636-7), Pyth. II. 88 (δ 78), Pyth. IV. 277-9 (Ο 207)

Plato, Hippias Minor [L.G.F. 42, Platonis Opera Omnia c. n. Serrani Gr. Lat. ap. Stephanum, 1578], 363b 1-4 (Hyp. ad Od. α). cf. Cuper. De Cons. Hom. p. 78

Plinius, Historia Naturalis [L.M.O. 43, Plinius c. n. Variorum etc. LB. et Roterdam, 1669, 3 vol. (in Bibl. Wist.)], II. 107 (Ε 7), V. 37 (Ζ 201), VIII. 48 (Τ 126), X. 29 (τ 518-21)

Plutarchus [L.G.F. 49, Plutarchi Opera Omnia, Gr. Lat. LB 1655, 2 vol. {ed. Reiske, Lips., 1777}], Alexand. M. {vol. IV. p. 122 (54)} (Φ 107), De Fortuna (vel Virtute) {vol. VII. p. 345} (Ε 340), Pyrrus {vol. II. p. 788} (Μ 243), Sertorius {vol. III. p. 507-8} (δ 272), De Cupid. Divit. {Delacy et Einarson VII. 527 E. p. 34} (δ 74)

Pomponius Mela, De Situ Orbis [L.M.O. 84, Pomp. Mela, Gronovii; L.M.Q. 97, Pomp. Mela Vossii, Hagae Comitis, 1658 {cited by J. G. ad δ 356-7}; L.M.Q. 98, Vossii ad Pomp. Melam Appendix et Responsio ad Petr. Simonium (in Pomp. Mela ed. Abraham Gronovius, LB. 1722, #189)], Lib. II. vii. l. 50f. (δ 355-7).

Porphyrius [non in Cat. Libr.; probabiliter ex Sch. Gr.in Cod. Leid. Voss. Gr. F. 64], Ε 453, Ζ 234, Η 336-7, Ι 61-73, Ι 381-2, Λ 354, Μ 258, Ν 443, Ρ 143, Τ 72, Χ 431.

Propertius, Elegia [L.M.O. 41, Catullus, Tibullus, Propertius c. n. Variorum et Graevii. 2 vol., 1680, c. n. mss. v.d.], III. ix. 40 (Β 824)

Ricaut, P., Histoire des Turcs [L.M.O. 107 {probabiliter, Histoire de l' état présent de l' Empire Ottoman, contenant les maximes politiques des Turcs, etc., Traduit de l' Anglois de Monsieur Rycaut, par M. Briot, Paris 1670; nouvelle edition, Amsterd. 1678, Dd.} BLC. <150. g. 3>], tom III, p. 24 (Β 821)

Salmasius, C., Plinianae Exercitationes in Solinum, Paris 1629 [L.M.F. 93, 2 vol. {Trajecti ad Rhenum 1689 (#269)}], p. 846 {= 608 in ed. Traj. Rh.} (Flyleaf I (a)), p. 390 {= 219-20} (Λ 774), p. 572 {= 403bG-404aB} (Ο 717), p. 810 et 860 {= 569bB et 604bAB} (h.Artem. 5), p. 888 {= 624aF-G} (Β 852), p. 899 {= 632aCDE} (Ψ 338), p. 927 {= 650bEFG} (φ 47), p. 928 {= 651aBCDEF} (Μ 455), p. 950 et seq. {= 668 et 669bG} (ε 60), p. 946 {= 664aE} (ζ 318), p. 1009 {= 710aF} (Κ 335), p. 1329 {= 935aA} (Ψ 454), p. 1331 {= 935bE} (Ψ 454)

" Exercitationes de Homonymis Hyles Iatricae [L.M.F. 94, De Homonymis etc., et de Manna et saccharo, Trajecti ad Rhenum 1689 {bound together with In Solinum in #269, supra}], p. 100 bC-F (ε 255)

Scaliger, J., In Catalecta [L.M.O. 277, Catalecta Vergilii c. n. Scaligeri LB.1617, c. n. mss. v.d. {#169, Scaligeriana vol. 2, 1. p. 21}], p. 164 (Batrachom. 35)

Scholia in Apollonium Rhodium [L.G.Q. 51, Apoll. Rhod. Argonautica c. sch. Gr. Stephanus, 1574], II. 942 (B 855)

Scholia in Aristophanem [L.G.F. 76, Aristophanes Comoedia c. Scholiis Antiquis et n. Biseti. Geneva 1607, c. multis n. mss. v.d. = UBU. ABHSS. MS. 1496 (I.A. 21)], p. 273 (I 270-1), in Acharn. 3 (Υ 157)

Scholia in Homeri Iliadem Manuscripta, in Cod. Leid. Voss. Gr. F. 64 {cf. L. C. Valckenaer, Opuscula Philologica Critica Oratoria, Tom. II. 1-152, Lips. 1809}: B 456-7, B 478-9, B 685, B 867, E 734, Z 4, Z 179, Z 226, H 99, H 198, H 298, H 409, H 433, Θ 58, Θ 158, Θ 189, Θ 203, Θ 368, Θ 444, I 378, K 384, Λ 390, Λ 574, Λ 597, Λ 629, Λ 637, M 459, N 6, N 563, N 576-7, N 588-9, N 683, N 685, N 686, N 773, Ξ 16(a), Ξ 16(b), Ξ 26, Ξ 36, Ξ 142, Ξ 179, Ξ 271, Ξ 383, Ξ 413, Ξ 433, Ξ 465, Ξ 479, Ξ 499, Ξ 509, O 36, O 71, O 88, O 94, O 146-7, O 445, O 449-51, O 511, O 541, O 563, O 597, O 598, O 610-4, O 628, O 645, O 657, O 712, Π 31, Π 150, Π 174, Π 228, Π 233, Π 261, Π 378-9, Π 475, Π 491, Π 504, Π 558, Π 569, Π 639, Π 642, Π 672, Π 825, P 128, P 393, P 564, P 663, P 761, T 1, T 68, T 131, T 152, T 183, T 221-3, Υ 125-8, Υ 404, Φ 542-3, X 147, X 165, X 251, X 295, X 318, X 325, X 328, X 356, X 375, X 408, X 414, Ψ 21, Ψ 29, Ψ 91, Ψ 157, Ψ 243, Ψ 330, Ψ 365, Ψ 368, Ψ 396, Ψ 420, Ψ 451, Ψ 506, Ψ 574, Ψ 677, Ψ 683, Ψ 730, Ψ 765, Ψ 791, Ψ 826, Ψ 845, Ψ 870, Ψ 871.

Scholia in Nicandri Pharmaca {cf. Erbse V. p. 68, Testim. ad Υ 125.; cf. Schol. in Nic. Alexipharmaca 138G} (Υ 425)

Scholia in Pindari Pythionicae Odam [{Vol. II. 65-76 ad Pyth. III. 14. ed. Drachmann}] γ 1-3 (h.Asclep. 1-2), in Nemeonicae Odam β init. (h.Apoll. 1). Vide Pindarum.

Scholia in Theocritum, Eid. 1. ad 34 {Casaubon, Lectiones Theocriteae ch. ii; cf. γενειάδες in Etym. M.} (π 176)

Seneca, Heracles Furens [L.M.DdM. 102, Senecae Opera Omnia, Lipsii, 1628; L.M.O. 171, Senecae Tragoediae, c. n. Scaligeri, Heinsii, etc.; L.M.DdM. 45, Senecae Tragoediae Farnabii, Elzevier, Amsterd. 1678, (#33)], 188-90 (Z 488)

〃 De Ira {Lb. I. ch. xx. 8, ed. A. Bourgery, Paris 1941}, Lb. I. (T 369 et Ψ 724)

Servius, Commentarius in Vergilium [non in Cat.] {Thilo-Hagen. Vol. I. p. 349, 20-22}, ad Aen. III. 67 (λ 36), ad Ecl. VIII. 55 {p. 101 Thilo-Hagen} (h.Apoll. 411)

Sextus Empiricus, Πυρρώνειοι ὑποτυπώσεις, III. xxiv {= p. 170, 27-8, ed. L. Bekker}, (Θ 13)

Silius Italicus, Punica [L.M.DdM. 172] III. 134 (Ζ 488) {cf. D. Heinsii Crepundia Siliana (#34) Cantabrigiae 1646, p. 40, on Silius III. 134, quoting Ζ 486-9}

Solinus Polyhistor [Salmasius, Exercitationes in Solinum], ch.1{= p. 26, 21-25, ed. Th. Mommsen, 1895^{2}} (Ψ 764), ch. xxxix {= p. 183 Mommsen} (Ζ 179)

Spanheim, E., De Praestantia et Usu Veterum Numismatum, Roma 1664, 1671^{2} [not in Cat.; in Wisteriana]. p. 487-8 (ad Hyp. Iliadis Α), p. 479 (λ 520)

" Les Cesars de l' Empereur Julien [L.M.Q. 119, Paris 1683], p. 419 et seq. (Ε 734), p. 341 (σ 354-5), p. 403 (Ι 375-7), p. 330 (Ι 71), p. 334 (Ι 200), p. 459 et seq. (Γ 228), p. 60 (h.Herm. 499-50)

Spon, J., Voyage d' Italie, de Dalmatie, de Grèce et du Levant, 2 vol., Amsterd. 1679 [L.M.DdM. 119] V. de Grèce, p. 42 et p. 56 (Β 519), p. 179 (Β 547), V. de Negrepont. p. 245 (Β 537), p. 264 (Β 540), Retour à Ligur. p. 367 (Β 520), Description de la ville d' Athen., Salamis p. 200 (Β 557), p. 205 (Β 562 Aigina) {The same transcription from Spon is found on Aigina in Aristophanes' Batrachoi, annotated by J.G.}, Voyage de Dalmatie, p. 101 (Β 632)

Stanley, Th., Commentarius in Aeschylum [L.G.F. 80, Lond. 1663, sic CAT.; 1664 (#264)], p. 699f. <Cho. 16> (h.Herm. 331), p. 741 <Sept. 147-8> (Δ 101), p. 744 <Sept. 283> (Κ 460-1), p. 783-4 <Ag. 40> (Β 327), p. 784a <Ag. 45> (Β 759), p. 784b <Ag. 52> (λ 125), p. 797 <Ag. 587> (γ 273-4)

Statius, Thebais [L.M.DdM. 109, ed. J. F. Gronovius, Amsterd. 1653], IV. 178-9 (Β 593)

Stephanus Byzantinus, De Urbibus [L.G.F. 51, ed. L. Holstenius, LB. 1684], p. 25 (h.Apoll. 243), p. 174 (h.Apoll. 446), p. 321 (h.Apoll. 224), p. 353 (h.Apoll. 425)

Stobaeus, Eclogae [G.L.F. 79, ed. W. Canter, Plantin, Antw. 1575], Lb. 50 (Tyrtaios) (Δ 447-8)

Strabon, Geographia [L.G.F. 58, Strabonis Geographia Libri xvii. c. n. Casauboni, Gr. Lat. Paris 1620 (#268)], I. p. 5 A-B (μ 1-2), III.p. 173C-174A (43BCD-44A) (μ 237-40), VII. p. 296-300 (Ν 5-7), VII. p. 330 (Β 850) (l.v.), VIII. p. 338 (Β 659) (l.v.), VIII. p. 342 (γ 366) (l.v.); VIII. p. 348 (Η 135) (l.v.), VIII. p. 365 (γ 251), VIII. p. 370 (Δ 171) (l.v.), IX. p. 399 (Τ 445), XII. p. 765 (Β 855) (l.v.: cf. Meineke, Vol. I. p. 765), X. p. 476 (τ 179), XI. p. 504 (Τ 189), XIV. p. 651-55 (Β 867, cf. Meineke, Vol. III. p. 908-13), XVII. p. 798 (δ 477)

Suetonius, Vit. Caesarum [L.M.Q. ed. Casaubon, Geneva 1595 (#65); L.M.Q. ed. Graevius, Utrecht 1672 (#91)], Aug. 65 (Τ 40) (l.v.), Tib. 21 (Κ 246-7), Cal. 22. 1, 22. 4 (Β 204, Ψ 724, σ 84 (l)); Claud. 42 (Ω 369), Nero 49 (Κ 535), Galba 20 (φ 426), Vesp. 23 (Η 213), Domit. 12 (Β 204)

Suidas, Lexicon [L.G.Fol.73 Porti. 2voll. Genev. 1619], ἀπείρητος (cf. Nr.3133, Vol.1. p. 281. ed. Adler) (h.Aphr. 120)

Tabern. Itiner. Pers. III. (B 546) (not identified)

Theocritus, Eidylion xvi [L.G.Q. 70, ed. D. Heinsius 1604; L.G. ... ed. Casaubon 1596], (Flyleaf II (a))

Thucydides, Historiae [L.G.F. 60, ed. Aem. Portus, Francof. Wechel 1594, in Wisteriana], III. 104 (h.Apoll. ad tit., 146, 165-72) (vv.ll.)

Valerius Flaccus, Argonautica [L.M.O. 179, D. Heinsius, Amsterd. 1680, Utrecht 1702 (#26)], III. 707-11 (A 234 ff.)

Velleius Patroclus {ed. G. Vossius, LB. 1654 (#79); ed. N. Heinsius, Amsterd. 1678 (#20)}, I. ch. 5. p. 4 (Flyleaf I. (c))

Vergilius, Aeneis [L.M.O. 42, c. n. Variorum 3 vol., 1680; L.M.DdM. 47, Farnabii ... ; L.M.DdM. 96, Heinsii, Elzevier, Amsterd. 1636, 1704 (#22)], III. 81 (B 327), IV. 365-67 (Π 33-35), VII. 462-66 (Φ 362-65), VIII. 208-9 (h.Herm. 73-4), VIII. 404-6 (Ξ 353), X. 361 (N 130-1), X. 467-8 (Z 488), X. 492-7 (Z 506-11)

〃 Georgica, I. 281-2 (λ 315-6)

Vossius, I. Catullus et in eum Observationes [L.M.Q. Lond. 1684 (#45)], p. 12 (ε 260), p. 78 (Θ 41), p. 79 (Δ 223), p. 153 (Λ 62), p. 201 (λ 325), p. 212 (Φ 59), p. 220-1 (T 140), p. 231 (μ 61), p. 247 'Schol. vet. in Hom. hactenus inedita' (Z 4, Z 402-3, Υ 74), p. 271 μετὰ Μέμνονας Αἰθιοπῆας (A 423), p. 296 (Z 480)

〃 In Pomponium Melam de Situ Orbis {cur. Abr. Gronovii, LB 1722 (#189)}, II. c. 7. l. 50-57 (δ 354-57); I. c. ix 4 Vossii obs. p. 362-73 (δ 477); II. c. 3 p. 455 (#45) (B 594); I. c. 9 (I 381)

〃 In Scylacem, p. 9 (B 712)

〃 De Nilo, (δ 477)

Weller (Wheler), G., Voyage de Dalmatia (cf. Spon, supra), I. p. 49 (η 112)

〃 Itinerarium no. 39, 40, 42 (ad Hyp. Iliados A)

Xenophon, Hellenica [L.G.F. 52, Opera Omnia Paris 1625], VII. 2. 9 (κλαυσιγέλως) (Z 484)

(日本学士院)

ヤコブス・ホイエルとホメロス研究
—「フィロロギカ」の歩みとともに— 第2章

久 保 正 彰

上記標題の「第1章」のもとに進められた探究は、主としてヤコブス・ホイエルのホメロス欄外注記の出典とその抜粋の主旨を確認することに焦点を絞って行われてきた。この基礎作業は、主として東大文学部所管の「ブリンク文庫」の蔵書をもとにしており、補完的資料をユトレヒト、ライデン、アムステルダム各大学の図書館および大英図書館の所蔵する関連書籍から得ている。この基礎的作業は05年8月の時点でほぼ完了し、これによって、ヤコブス・ホイエルの知見の範囲とその背景が判明し、かれの判断材料のほぼ全容が浮かび上がった。

しかしながら、かれが残しているのは欄外注記だけではない。かれが用いたアルド版ホメロスの行間のいたるところ約2000を越す箇所には、本文の誤字、誤植、脱字などを正す訂正が、極細字のペンで記入されている。これらは、かれのホメロス措辞に関する知見や判断の直接的表明である。またアルドが印刷したホメロス詩の句読点の是非や、文中や文末の疑問符の用法についても、綿密な指示や訂正を施している。問題箇所については、コンマやピリオッドの存否や位置を問い、直接疑問か間接疑問かの別を問い直している。かれの訂正や附加の記号の一つ一つは、ホメロス詩の文法構造について、かれが有した明確な理解と判断を裏づけている。それればかりか、近世人がホメロス詩を音読したときに初めて意識される古代詩人の息遣い、声の強弱・抑揚、そして時には、一連の語りの段落の切迫感までをも、文字面に織り込む手段があるとすれば、それは句読点であることをかれは伝えようとしている。

今回の報告は、欄外注記の文献学的考察ではない。句読点と疑問符の訂正記号を手がかりにして、ヤコブス・ホイエルのホメロス研究の一面を明らかにしてみたい。そのためには、どうしても幾種類かの写本や版本との比較検討が必要である。その必要性をみたす一便法として、今回検討の具体的対象を『イリアス』第XXII巻に求めることとする。使用する文献は以下の5種である。

1. V.A.: Codex Venetus A Marcianus 454の略。使用するのはその写真復刻版(1901 ライデン刊)。ドミニコ・コンパレッティの解説が附く。原本は現存するホメロス諸写本中、随一の高い評価を受けている。10世紀ビュザンティン帝国主都コンスタンチノポリスにおいて筆写。欠損部分は後世補筆されている。ベッサリオンがヴェネチア共和国に寄贈した蔵書コレクションに含まれていたと言われている。1488年デメトリオス・カルコンデュレスがホメロスの初版本(フィレンツェ刊)を編んだとき、これを参考にしたと伝えられるが、詳細不祥。復刻版に序言を附しているコンパレッティによれば、18世紀末のCaspare D' Ansse de Villoisonに至るまで、それ以前にこの写本を精密に検討した学者はいなかったと記されている(序言xii〜xiii参照)。それよりも100年も遡る17世紀末、ヤコブス・ホイエルがヴェネチアの聖マルコ教会図書館を訪ねて、

この写本を検証したことを跡づける証拠はまだ発見されていない。

2. Valck.: L.C. Valcknaer (1715 〜 1785) の略。かれの『イリアス』XXII 巻研究に含まれる本文の読みを指す (「ホメロス叙事詩第 XXII 巻『ヘクトルの最後』について」。これは『文献学、本文批判、修辞学に関する論文集』第 2 巻 15 〜 51 頁所収、1747 年学位論文、1809 年ライプチッヒ刊。) ファルケナールは、ライデンのホメロス写本 (ギリシア語写本 64 番フォシウス旧蔵本) の本文及びその欄外余白の古注を精査した。その成果をまとめた上記の論文は、ホメロス原文と古注の伝承に関する近世最初の学術的研究として高い評価をうけている。

   このライデン写本と、これを使用した 17 世紀の学者たちについては、第 3 回「フィロロギカ」研究集会 (03 年 9 月 13 日於東京都立大学) で紹介した処である。ここでは、次の 2 点のみを特記して、Valck. を参考・比較のために使う理由としたい。(a) このライデン写本に伝わる古注が、ヤコブス・ホイエルがホメロス欄外注記において、“肉筆古注” (sch. mss.) と表記し、128 箇所の抜粋を留めている原本であること。(b) ヤコブス・ホイエルが、『イリアス』第 XXII 巻の本文に記入した句読点、疑問符などに関する訂正の中、その大多数のものは、60 年後の Valck. 本文にも現れていること。しかし、Valck. のいずこにも、ヤコブス・ホイエルについての言及はない。

3. Eust.: コンスタンチノポリスの学僧 Eustathios が 12 世紀末に完成した『ホメロス注釈』の初版本 (1542-1550 ローマ刊) の頁を追って挿入されている、ホメロス叙事詩の本文。『ホメロス注釈』三巻と同書索引一巻はマヨラーヌス (N. Majoranus) とデヴァリウス (M. Devarius) の二名の編者によるものであるが、これを印刷に附するに際して、注釈文に対応するホメロス本文の該当部分を適宜に配分して刷り込んでいる。この本文部分は、アルドの第二版 (1517) に改良を加えたものと言われるが、今回の調査によってその言の正当性が確認されている。同版ホメロス本に加えられたヤコブス・ホイエルの訂正の跡と比較対照するために、本稿において、Eust. の略号を使用している。ヤコブス・ホイエルの方では、エウスタティオスの『注釈』を、『オデュッセイア』欄外余白に抜粋記入しているが、『イリアス』の場合、僅か 2 ケ所で用いているに過ぎない。

4. Ald.: マヌチオ・アルド編『ホメロス作品集』ウェネチア 1517 年刊の本文。

5. J.G.: ヤコブス・ホイエル自身による訂正、Ald. の誤字、脱字の訂正ならびに句読点、疑問符の修正や附記の指示。アルドの印刷記号と J.G. 肉筆記号との判別が困難である場合には、手元のアルド版と、アムステルダム大学蔵の同年同版本 (OK66-140) とを逐一対比照合の上、J.G. の肉筆記号と確認されたもののみを、以下に J.G. として用いている。

以上の 5 種の訂正グループの間には、ごくゆるやかな依存関係が認められるに過ぎない。例えば、V.A. は年代的に最古であり、カルコンデュレスの初版 (1488) を介して Ald. 初版 (1504)、そして Ald. 第 2 版 (1517) へと続く流れの源に位置するけれども、字句の異同、とくに句読点、疑問符の存否など細部に関しては、その間 600 年間に生じた変化は極めて大きい。同様に、Ald. (第 2 版 1517) の改良版であ

る Eust. (ホメロス本文) と、J.G. の訂正との間の相互の関連も、密接というわけではない。V.A. とは別系統のライデン写本の本文と古注については、ヤコブス・ホイエルも、かれより 60 年後のファルケナールも、共にこれを精査しているのであるけれども、両者とも同じ程度にライデン写本に依存しているかといえば、決してそうではない。そのように全てがいわば混流状態であり、その中から個々の訂正者の独自の見解を摘出することは困難である。だが混流のありさまを見究めることは不可能ではない。『イリアス』第 XXII 巻における 5 者間の読みの異同、句読点と疑問符の存否・異同の分布対照の概況を以下に列記する。

① J.G. のみが独自の読み・句読点・疑問符を提示して、他の諸本すべてがこれと異なる諸例 :
J.G. > < V.A., Ald., Eust., Valck: 136, 202-204, 218, 284, 324, 326, 344, 418, 450 (アラビア数字は『イリアス』第 XXII 巻の詩行番号)

② V.A. と J.G. は合致しているが、他は全部これと異なる諸例 :
V.A., J.G. > < Ald., Eust., Valck.: 143, 222

③ V.A., Ald., Eust. の合致に対して、J.G., Valck. が異なる例 :
V.A., Ald., Eust. > < J.G., Valck.: 416

④ V.A., Ald., J.G. 3 者の合致に対して Eust., Valck. が異なる例 :
V.A., Ald., J.G. > < Eust., Valck.: 225

⑤ V.A., J.G., Valck. 3 者の合致に対して、Ald., Eust. の両者が異なる諸例 :
V.A., J.G., Valck. > < Ald., Eust.: 2, 183, 190, 236, 261, 292, 310, 381, 423

⑥ V.A., J.G., Eust., Valck. の 4 者が、Ald. と異なる証言を記し、その誤りを指摘している諸例 :
V.A., J.G., Eust., Valck. > < Ald.: 23, 43, 49, 57, 59, 60, 71, 108, 111, 123, 144, 178, 201, 206, 209, 234, 280, 285, 295, 296, 325, 332, 334, 363, 374, 402, 409, 446, 458, 488, 495, 499, 502, 504

⑦ V.A., Eust., Valck. の 3 者の合致に対して、Ald. と J.G. の 2 者が異なる例 :
V.A., Eust., Valck., > < Ald., J.G.: 247

⑧ Eust., J.G., Valck. の 3 者一致に対して、V.A., Ald. の 2 者が異なる諸例 :
Eust., J.G., Valck. > < V.A., Ald.: 122, 385

⑨ V.A. の 1 者に対して、Ald., Eust., J.G., Valck. の 4 者が異なる例 :
V.A. > < Ald., Eust., J.G., Valck.: 180

5 者間の証言の錯綜は以上の如くである。次にヤコブス・ホイエルが底本として用いている Ald. を中心に、細部の具体的事例を検討する。上記の諸例の中、⑥は、Ald. の誤植、誤記に対して、他の諸本が一致して正しい読み方を示している例であるが、その細部は下記の通りである (下線は違いを見分け易くする為の補助)。

23　τι ταινόμενος Ald.: τιταινόμενος cet.
43　κείμενον ἣ κε μοι Ald.: κείμενον,_ἣ κε μοι cet.
49　μετὰ στρατῷ ἣ τ' ἂν Ald.: μετὰ στρατῷ,_ἣ τ' ἂν cet.
57　Τρῶας καὶ Τρωας Ald.: Τρῶας καὶ Τρω<u>ὰς</u> cet.
59　με τὸν δύστ νον Ald.: με τὸν δύστηνον cet.

60 ἐπὶ γήραος οὐδῷ·_Ald.: ἐπὶ γήραος οὐδῷ cet.

71 ἐν προθύρησιν_νέῳ δὲ Ald.: ἐν προθύρησι,_νέῳ δὲ cet.

108 πολυκέρδιον εἴη Ald.: πολὺ_κέρδιον εἴη cet.

111 ἀσπίδα καταθείωμαι Ald.: ἀσπίδα μὲν καταθείομαι cet.

123 ἵκωμαι ἰων Ald.: ἵκωμαι ἰὼν cet.

144 ὑπὸ Τρώων Ald.: ὑπὸ Τρώων,_cet.

178 κελενεφὲς Ald.: κελαινεφὲς cet.

201 μάρψαι ποσὶν οὐδ' Ald.: μάρψαι ποσὶν,_οὐδ' cet.

206 οὐδ' εἴα Ald.: οὐδ' ἔα cet.

209 ἐτίτανε τάλαντα Ald.: ἐτίταινε τάλαντα cet.

234 ἡ δὲ Ald.: ἠδὲ cet.

280 τὸν ἐμὸν μόρον Ald.: τὸν ἐμὸν μόρον,_cet.

285 θεός Ald.: θεός·_cet.

295 ἢ τεε Ald.: ἤτεε cet.

296 φρεσὶ Ald.: φρεσὶ,_cet.

325 λευκανίης Ald.: λαυκανίης cet.

332 ἔσσεσθ' Ald.: ἔσσεσθ',_cet.

334 γλαφυρῆσιν,_Ald.: γλαφυρῆσιν cet.

363 γοόσα Ald.: γοόωσα cet.

374 ὅ τε Ald.: ὅτε cet.

402 πίπναντο Ald.: πίλναντο vel πίτναντο cet.

409 οἰμογῇ Ald.: οἰμωγῇ cet.

446 Ἀχιλλῆος·_δάμασεν Ald.: Ἀχιλλῆος δάμασεν cet.

458 μένεανδρῶν Ald.: μέν' ἀνδρῶν cet.

488 κῆδ' ὀπίσσω Ald.: κῆδε' ὀπίσσω cet.

495 ἐδίηνε Ald.: ἐδίην' cet.

499 δακρηόεις Ald.: δακρυόεις cet.

502 παῦσαι τό τε Ald.: παύσαιτό τε cet.

504 μαλακῇ Ald.: μαλακῇ,_cet.

以上の諸例は、Ald. の誤植、誤記の指摘であるがいずれも容易に訂正可能なものばかりであり、ホメロスの措辞・語法について一通りの知識を有するものならば正すのは簡単である。したがってこれらの諸例に関しては、Ald. 以外の四種の証言一致をもたらした依存関係を追跡することは行わない。

次に上記⑤の諸例を取り上げる。これらは Ald. とその改良版である Eust.(ホメロス本文) (1549) の両者に共通する読みと句読点に対して、J.G. と Valck. が一致して訂正の跡を留めている例である。またこれらの諸例においては、J.G. と Valck. の共通例は、古く V.A. の読み・句読点とも一致しているが、J.G. と Valck. がこれらの修正に際して、V.A. を実地検証したことを裏附ける証拠は、現在のところ見附かっていない(下線は違いの見分けの為の補助)。

2 ἱδρῷ Ald., Eust. > < ἱδρῶ J.G., Valck.

183 τριπτ-, τριττογένεια Ald., Eust. > < τριτογένεια J.G., Valck.

190 εὐνῆς διά Ald., Eust. > < εὐνῆς,_διά J.G., Valck.

236 εἵνεκ' ἐπεὶ Ald., Eust. > < εἵνεκ',_ἐπεὶ J.G., Valck.

261 μή μοι ἄλαστε Ald., Eust. > < μή μοι,_ἄλαστε J.G., Valck.

292 ὅπτι Ald., Eust. > < ὅττι J.G., Valck.

310 ἀμαλὴν Ald., Eust. > < ἀμαλὴν J.G., Valck.

381 εἰ δ' ἄγε_τ' Ald., Eust. > < εἰ δ' ἄγετ' J.G., Valck.

183, 292, 310, 381 の諸例の訂正はほとんど自明であり特記に値しない。2 は文法と律格にもとずく訂正であり、正確な知見の理由附けがある。190, 236, 261 は、文法というよりも、むしろ音読に際しての声調、抑揚に配慮してのコンマの附記であろう。

Ald. の訂正に焦点を合わせながらも、ヤコブス・ホイエルの眼は万能ではなく、又かれの集中力も稀に途絶えているときがある。

162 ἀεθλοφόρι Ald., J.G. > < ἀεθλοφόροι V.A., Eust., Valck.

253 ἀλοίμην Ald., J.G. > < ἀλοίην V.A., Eust., Valck.

255 ἁρμωνιάων Ald., J.G. > < ἁρμονιάων V.A., Eust., Valck.

257 καμμωνίην Ald., J.G. > < καμμονίην V.A., Eust., Valck.

以上の 4 例の誤植は全く自明のものばかりであるが、J.G. はこれらを完全に見落としている。

次に V.A., Ald., J.G. の 3 者に共通の誤りとして、以下の一例がある。

225 στῆ δ' ἄρ', ἐπὶ μελίης χαλκογλώχινος ἐρισθείς·

V.A., Ald., J.G. は ἐρισθείς·, Eust. はこれを改めて ἐρεισθείς とし、Valck. もこれに従っている。この場合 J.G. は誤植とは見做さず、動詞現在形 ἐρίζομαι に由来するアオリスト分詞と解したのではないかと思われる。なおここで J.G. は ἐπί の ί が長母音と見なされるべきことを示すために Iota s.s. を附記している。

次に、Ald., Eust., Valck. 3 者においては句読点 (コンマ) が打たれていない箇所で、V.A. と J.G. に於いてのみそれが打たれている 2 例を挙げる。

143 ὡς ἄρ' ὅ γ' ἐκμεμάως, ἰθὺς πέτετο. τρέσε δ' Ἕκτωρ

222 ἀλλὰ σὺ μὲν νῦν στῆθι, καὶ ἄμπνυε, τόνδε δ' ἐγώ τοι

ἐκμεμάως, と στῆθι, の各々のコンマは V.A. と J.G. のみに共通で他の 3 者にはない。文法的にはフレーズの切れ目をマークする為、音読者には声調、とくに息の切れ目として注目すべき点を明示している。V.A. を J.G. が現場で検証したという証拠はない。

最後に、V.A., Ald., Eust. の 3 者に於いては記入されていないコンマ (,) が、J.G. と Valck. に於いて記入されている例としては、次の一例のみである。ἐάσατε, がそれである。

416 σχέσθε φίλοι, καί μ' οἶον ἐάσατε, κηδόμενοί περ,

文法上と言うよりも、音読者の声調の変化点を指示する為であったのかと思われる。ここにコンマを入れた Valck. が J.G. に倣ってそうしたのかどうかは、不明である。

疑問符 (;) が何時頃どのように使われるようになったのか、現在の調査段階に於いては不明である。トラキアのディオニュシオス、ないしはこれに詳細な注記を附したニカノールなどが、“疑問文” のカテゴリーを確立した後であろうと思われる。

ともあれ、10世紀筆写のV.A.の『イリアス』では、疑問符は見当たらず、当時はまだ古典作品の写本伝承の中では使用されることはすくなかったのではないかと思われる。そしてAld. (1517) においても、まだその使用は限られている。疑問文であっても、その文末には疑問符ではなく、コンマやピリオッドが打たれている場合が多い。同じアルドの刊本でも、ホメロス本は、ラテン語古典作品 (例えば、オウィディウス『恋愛詩集』(1502) この場合、疑問符は ?)、あるいはギリシア語の場合でも演劇作品 (例えば、ソフォクレス『アイアス』(1502) 疑問符は ;) の諸例とは、明らかに異なる趣を呈している。叙事詩は“物語り”であって、“対話”を主体とする他の文芸形式とはことなる、という諒解にもとずく慣行があったのではないかと思われる。

ともあれ、Ald. の改良版であるEust. になると疑問符の用例はやや増加し、そしてJ.G. に至るや、疑問符を附記することはかなり自由になっている。下記の箇所では、V.A., Ald. ともに行末に疑問符は打たれていないが、Eust., J.G., Valck. では3者とも、行末に疑問符 (;) が記入されている。

122 (= 385)　ἀλλὰ τίη μοι ταῦτα φίλος διελέξατο θυμός;

他方次の場合には、V.A. 以外の諸本は全て、疑問符を行末に記している。

180　ἄψ, ἐθέλεις θανάτοιο δυσηχέος ἐξαναλῦσαι;

ヤコブス・ホイエルが『イリアス』第22巻の、詩行行間に附記した各種の訂正指示は、総数70箇余を数える。その中で、J.G. 独自の知見と判断によって記入したものを確定するのは難しいのであるが、V.A., Ald., Eust. の3者の読み、句読点とは異なる指示を残している例は次の如きである。

(a) 136　Ἕκτορα δ' ὥς ἐνόησεν ἕλε τρόμος· οὐδ' ἄρ' ἔτ' ἔτλη

V.A., Ald., Eust. の3者はみな以上のように句読点を附している。これでは ἐνόησεν の主語がアキレウスであるかの如き印象を一瞬与えるかも知れない。この一行に交錯するヘクトルの知覚と恐怖を際立たせる為に、J.G. は次のようにコンマ (,) を2度これに加える。

136　Ἕκτορα δ', ὥς ἐνόησεν, ἕλε τρόμος· οὐδ' ἄρ' ἔτ' ἔτλη

一行の音読に4度の声調の変化が緊迫感を高めることとなる。Valck. は (O.C.T. も) これに従っている。

(b) 202-4　πῶς δέ κεν Ἕκτωρ κῆρας ὑπεξέφυγεν θανάτοιο,
εἰ μή οἱ πύματόν τε καὶ ὕστατον ἤντετ' Ἀπόλλων‹›
ἐγγύθεν, ὅς οἱ ἐπῶρσε μένος λαιψηρά τε γοῦνα·

上記はV.A., Ald., Eust. が3者各々の本文に記している本文と句読点である。‹› は、Ἀπόλλων の後にはいかなる記号も附記されていないことを、便宜的に示している。Valck. もまた、上記3者と、読み、句読点ともに同一である。どこにも疑問符をつけていない。これらに対して、J.G. はかなり大胆なマーキングを施している。202-203 は他の4者と同じままであるが、204 は、

204　ἐγγύθεν; ὅς οἱ ἐπῶρσε μένος λαιψηρά τε γοῦνα;

一行の中に2度、疑問符を記入している。

202 πῶς ではじまる、3詩行にまたがる長い文章は、疑問 (202)、そして驚くべき事態をもたらした条件 (203)、さらにその具体的結果 (204) と、文意を展開して

いく。構文上の展開と同時に深まる話者アキレウスの驚きと意外の念を、J.G. は ἐγγύθεν の後と、行末 γοῦνα の後に疑問符を記すことによって、視覚的にも明示し、強調しようと試みたのであろう。ちなみに 300 年後の O.C.T. は、204 行行末の γοῦνα; を採用しているが、ἐγγύθεν の後には疑問符を打っていない。O.C.T. は 202-204 を一連の平板な疑問文と見做したのであろう。

(c) 218 Ἕκτορα δηιώσαντε μάχης ἆτόν περ ἐόντα·
V.A., Ald., Eust. は上記の句読点を保持し、Valck. もこれに従う。ただ J.G. のみは δηιώσαντε の後にコンマ (,) を打ち、caesura を強調している。

(d) J.G. の訂正指示の意図は、殆ど全ての場合、簡単に理解できる。しかし『イリアス』第 22 巻中の次の 2 例の場合は例外である。

284 ἀλλ' ἰθὺς μεμαῶτι διὰ στήθεσφιν ἔλασσον· / εἴ τοι ἔδωκε θεός·
諸本は 284 行末の ἔλασσον の後に (·) を打つ、あるいは、(,) を記している。文章は 284 では完結しておらず、285 に後置された条件文の終わりをまって完結される。284 で終わっているのは前置 (倒置) された帰結文であるから、その後には何らかの句読点 (,) あるいは (·) があって然るべきであろう。諸本はその考えに従っていると解される。ところが J.G. は Ald. の当該の箇所に刷られていた (·) を消去するように指示している (/)。その意図はにわかに解し難い。全く同様の難点が 344 にも認められる。

344 τὸν δ' ἄρ' ὑπόδρα ἰδὼν προσέφη πόδας ὠκὺς Ἀχιλλεύς·
この定形句的表現の後には (·) あるいは (,) を打つのが諸本の例であり、これは今日に至るまで変らない。ところが何故か J.G. は、Ald. に印刷されている (·) を除去するように指示している (/)。この訂正は誤りであり、必要は無かったと目される。

(e) 324 φαίνετο δ' ᾗ κληῗδες ἀπ' ὤμων, αὐχέν' ἔχουσι ‹› V.A.
φαίνετο δ' ᾗ κληῗδες ἀπ' ὤμων αὐχέν' ἔχουσι, Ald., Eust., Valck. (O.C.T.)
J.G. は φαίνετο δ', ᾗ κληῗδες ἀπ' ὤμων κτλ. と句読点を打ち、“鎖骨が両肩から首をわけているあたりの”、その咽喉の部分があらわになったことを示す。φαίνετο δ', のコンマ (,) は、次行 325 行初の λαυκανίης を部分属格と解するべきことを一層容易ならしめる為に附記されたと思われる。

(f) 326 τῇ ῥ' ἐπὶ οἷ. μεμαῶτ' ἔλασ' ἔγχει δῖος Ἀχιλλεύς· V.A.
τῇ ῥ' ἐπὶ οἱ μεμαὼς ἔλασ' ἔγχει δῖος Ἀχιλλεύς Ald., Eust., Valck.
ἐπὶ οἷ の後に (.) を附している V.A. の意図は不明。現代版 (O.C.T.) は、οἷ. の (.) を除いた読み方によって、両雄が挑みあい、槍が交錯するさまをよく明らかにしている。J.G. もそのようにこの文脈を解したのであろう、τῇ ῥ', と ῥ' の後にコンマを附し、οἱ を reflexive (> Achilleus) (= οἷ) と解したものと思われる。J.G. のこのようなコンマ (,) の使用例は、上記 (a) 136 や (e) 324 に於いても類似のものが見い出される。もしヤコブス・ホイエルが V.A. を実地に検証していたならば、μεμαὼς (Ald., Eust., Valck.) ではなく、μεμαῶτ' (V.A.) の方が、かれの解釈に適合することを見てとり、-ὼς を -ῶτ' に改めていたに違いない。

(g) 375 ὡς ἄρα τις εἴπεσκε καὶ οὐτήσασκε παραστάς
この詩行について読みや句読点、疑問符の是非に関する指示はないが、詩行全体を指して “ἀθετεῖται Sch. mss.” というヤコブス・ホイエルの附記が欄外に残っている。

この古注は、Allen も O.C.T. の apparatus criticus に於いて指摘しているように、ライデン写本に附記された肉筆古注以外には何処にも伝わっていない特殊なものであり、これがヤコブス・ホイエルが“肉筆古注”として引用している文献を同定確認する重要な手がかりとなっている。375 行に対してこの古注を附したのは 13 世紀のコンスタンチノポリスの「セナケリム」と称する学僧である。かれについては、G. Krumbacher, *Geschichte d. Byzantin. Literatur,* Vol. 1., p.478 および p.541 に詳しいが、ヤコブス・ホイエルやまたその 60 年後これを精査したファルケナールの時代にはまだ全く何処の誰とも判らぬ人物であった。ともあれホイエルもファルケナールも、ここに附記された古注に深い感銘を受けたことは確かである。375 行目は、倒れたヘクトールの屍に対して、ギリシア側の誰も彼もが、嘲りの言葉をあびせ、これを槍の穂先で傷つけるさまを語る。古注の記者セナケリムは、これほど無残に、ホメロス詩の称揚する人間の気高さを破壊し去っている描写は、除去されて然るべしと、断じている。かれの言葉使いから察するところ、ロンギーノスの『崇高論』にも通じていた大学者であったらしい。ヤコブス・ホイエルは極く簡単に ‘ath.’ (除去) と記しているだけであるが、ファルケナールは詳しく、その古注全文に対するかれ自身の評釈を加え、‘セナケリム’ の探索に情熱を燃やしている。(『ライデン写本及び未刊行ホメロス古注に関する論』(『論文集』ライプチッヒ刊、第 2 巻、xix. pp. 134-138 参照))。しかし苛烈な戦場描写のリアリズムにこそホメロス叙事詩の偉大さがあると見るのか、現代の校訂家たちは 375 行を除去しようとはしていない。

(h) 402 κυάνεαι πίπναντο· κάρη δ' ἅπαν ἐν κονίῃσι

上記は Ald. の本文である。その πίπναντο と印刷された文字の上に πίλναντο という語が、また左側の欄外余白には πίμπλαντο という語が J.G. によって書き添えられている。πίλναντο は V.A. 及び、Eust. が注釈内で、異読として伝えている処であり、またライデン写本の読みでもある。他方 πίμπλαντο は、幾つかの系統の写本群の伝える読みであるが、J.G. の根拠は恐らく、ハリカリナッソスのディオニュシウスの『文体論』18a が引用しているホメロス本文であったろう。J.G. は欄外余白にレオパルドゥスの『本文修復論』*Emendationes* (1568 年アントワープ刊) 巻 2. 11 節から、次のような長文の引用を附記している。“「毛髪讃美」におけるシュネーシオスの言によれば、プルーサのディオ (クリュソストモス) はヘクトールの毛髪について語るホメロスの詩句を ἀμφὶ δὲ χαῖται κυάνεαι πεφόρηντο として引用しているとし、だがこのような詩行をホメロス叙事詩の中で発見することはできないとシュネーシウスは言っている、” とラテン語で記しその後にシュネーシウスの原文をギリシア語で引用している。即ち、“ヘクトールについてのホメロスの言葉とされている (シュネーシオスは言うのだが— J.G. ラテン語注) ἀμφὶ δὲ χαῖται κυάνεαι πεφόρηντο であるが、—それがホメロスの吟唱詩 (rhapsodiae) のどこにあるのか、知っている人がいれば教えて貰いたい。いやあの高名な吟遊詩人のイオンだとて、これを見附けることはあるまいと思う。” 下線を附したギリシア語引用文に続いて、J.G. は次を附記する (ラテン語)、“しかしかれがどうして誤りをおかしたのか、それについては Leopardus の *Emendat.* 2 巻 11 節を見よ。”

J.G. の指示に従って、開いてみると (アムステルダム大学図書館蔵、登録番号 1737D.4)、シュネーシオスがギリシア語で引用しているホメロスの一行に、

Circum autem crines caerulei ferebantur というラテン語訳が附されているという一点を除外すれば、そこまでのレオパルドゥスの説明は J.G. によって殆ど字句通りに引用されている。

レオパルドゥスは更に続けて自分の見解を述べる、“しかし何故かれが、『イリアス』第 22 巻の一句を記憶していなかったのか合点がいかない。つまり、ἀμφὶ δὲ χαῖται κυάνεαι πίμπλαντο であるが、(そこで πίμπλαντο の代りに) ディオが、πεφόρηντο といっているとしても、その意味が外れているわけではない。吟遊詩人イオンというのはホメロス全詩作を諳んじていたという人物で、その名にちなむプラトン作の対話篇がある。ついでながら、οὗ という語についてのスイダスの記事には誤りがある。また、そこに引用されている文では、ἐξευρήσειν (未来時称不定法) の代りとして ἐξευρεῖν (アオリスト時称不定法) が読みとして採用されている、” と。

つまりレオパルドゥスの指摘は、“シュネーシオスはディオが引用している句はホメロスの中には存在しないとは言うが、一部分違いで同じ意味の句がある” ということである。つまり、異読 (lectio varia) の介在を知る人であればシュネーシオスの言分は当らないことが判る。J.G. はその点だけを重視したと思われる。しかし、J.G. の欄外や行間の注記を見る限り、そこに記されている πίλναντο, πίμπλαντο, πεφόρηντο の 3 種の異読の中のどれを正読として、第 402 詩行において採用するべきであるか、その点についての指示を見出すことはできない。

3 種の読みの中、先行 2 者のいずれかを伝える写本の系統が複数あることは、今日知悉の通りであるが、第 3 の読み方はシュネーシオスの中でしか知られていない。J.G. より 60 年後、ファルケナールも J.G. と同じようにレオパルドゥスの見解に大層興味を抱き、とくにシュネーシオスが伝えている (ディオの引用とされている) πεφόρηντο という語をもとに想を廻らし、ここは自分の考えとしては πεφόρυντο と読むのが正しいと注記の中で言っている。(上記『論文集』p. 62)。しかし本文内での読みは、諸本 (V.A. を含む) が伝える πίλναντο (= J.G. interlin. s.s.) を採用している。

このように諸説入り混じるのを眺望した後にもう一度 Ald. の印刷面を見ると確かに πίπναντο となっていて、これは明らかに誤植である。1517 年、もしマヌーチオ・アルドがまだ存命していたならば、これを訂正したに違いないのであるが、J.G. や Valck. と同じような訂正を施したであろうか。Ald. の誤植の中では、上記 183 ‹τριπτο-› ‹τριτο› や 292 ‹ὅπτι› ‹ὅττι› にもあるように、‹π› ‹τ› の刷り違いが頻繁に認められる。402 も、πίπ̲ναντο は πίτ̲ναντο の誤植であったのではないだろうか。πίτναντο はアリスタルコスの読みとして、これを伝えている写本の系統も複数知られている。ちなみに現行の O.C.T. もこれに従っている。大学者マヌーチオ・アルドの名誉のために、ヤコブス・ホイエルが施した誤植の訂正 (πίλναντο) そのものが、アルドの意図したところを捉えそこねた訂正であるという可能性を、蛇足と知りながら附記しておきたい。

(i) 418　λίσσωμ' ἀνέρα τοῦτον, ἀτάσθαλον, ὀβριμοεργὸν,

V.A. のこの読み (λίσσωμ' ἀνέρα) は大多数の写本の系統によって伝えられており、Valck. も、λίσσωμ' と読んでいる。他方 Ald. は λίσσομ' ἀνέρα と読み、Eust. (本文) もこれに従ったままの形であるが、これでは六脚詩の律格に合わない。合わせると

すれば、V.A. その他のように、ο を ω に改め、λίσσωμ' と読む他はない。しかし J.G. はこの方法をとらず、Ald.　λίσσομ' の右肩に小さく -μαι を附記し、ここは λίσσομ' ではなく λίσσομαι を読めばよいとと指示している。ホメロスの詩法では、ἀνήρ の対格形の ἀνέρα において語頭の α は常に長母音と見做されることをよく知っていたのであろう。λίσσομαι の語尾の -αι は、続く長母音 α の前で律格上短母音の扱いとなり、λίσσομαι ἀνέρα (– ⏑ ⏑ – ⏑ ⏑) という準正則の形に復する。J.G. の修復案を支持するような読み方を伝えている写本の系統も複数ある。しかし 418 の J.G. の指示は、そのような写本のいずれかに従うものというよりも、ホメロスの詩法に関しての、かれ自身の知見と判断にもとずく修正提案であった可能性が高い。

(j) 450　δεῦτε δύω μοι ἕπεσθον· ἴδωμ' ὅτιν' ἔργα τέτυκται.

ここで、V.A., Ald., Eust., Valck. の 4 者はみな ὅτινα と読み、今日 O.C.T. もこの読みに従っている。今日、ホメロス叙事詩における ὅστις の複数対格形は ὅτινας (15 巻 492)、ὅτινα (第 22 巻 450) とするのが定説となっている (P. シャントレーヌ『ホメロス文法』第 I 巻 280 頁参照)。しかし 450 行では、ἅτινα という複数形を伝えている写本の系統も複数あり、J.G. も恐らくはかれ自身の判断と思われるが、Ald. の印刷面に現われている ὅτινα を ἅτινα に改めている。

以上 (a) ～ (j) までの 10 例が、J.G. が『イリアス』第 22 巻のアルドの印刷面に附した 70 箇所の訂正指示の中で、他の諸本とは共通性のない、J.G. 独自のものと推定される。これらはみなかれの判断の結果を明示している。現時点においては、かれがライデン写本 (64) 以外のホメロス写本を実地検証したことを示す証拠はない。またライデン写本にしても、かれが鋭意研究していたのはその欄外に記入された古注記事のみであって、ライデン写本の本文に対する言及 (と思しきもの) は、上記 402 の行間に附された πίλναντο の一語のみであり、これも実はライデン写本からのものではなく、Eust. 本文の流れを引くものであったかも知れない。つまり、J.G. はいずれかの写本との照合によって、本文を訂正しているのではなく、かれ自身のホメロス措辞・語法に関する知識を杖として、誤植や誤記を訂正し、自分が音読朗誦する際の声調、息使いなどを判断の頼りとして、句読点や疑問符を消したり加えたりしていったのではないか。そのように思われてならないのである。上記においては具体例として『イリアス』第 22 巻からの 70 例のみを検討の対象として提示したに過ぎないが、かれの判断のレベルの高さと、訂正や附記の質と一貫性は、両叙事詩や讃歌集の約 2000 箇所を通じて変るところなく維持されている。17 世紀後葉、ホメロス研究の黎明期を告げる、画期的な第一歩をここに認めてもよいのではないだろうか。「古代人の書物の誤写を糺し、古の輝きを復することを目標とするこの学 (ars) は、前人より学び習いしものに非ず、精根こめて己が創出したるものなり」。古典学誕生を告げるフランチェスコ・ロボルテッリのこの誇らかな宣言に、静かに耳を傾けているヤコブス・ホイエルの姿が眼前に浮かぶようである (F. Robortello, *De Arte sive Ratione corrigendi Antiquos Libros Disputatio, nunc primum a me excogitata,*　この小論文はブリンク文庫のコレクションの中では、A. Schoppius, *De Arte Critica,* 1672, Amsterdam に合本された形で保存されている)。

(日本学士院)

Hesiodus, *Theogonia* 576-7: 二重の冠？

本 城 大 一

ヘーシオドス『神統記』のプロメーテウス・エピソードの一部である 570-84 では、ゼウスの意図に従って、ヘーパイストスが人間に与えられる禍としての女性を作り、さらにアテーネーとヘーパイストス自身が、その女性を装身具で飾る様が語られる。

αὐτίκα δ' ἀντὶ πυρὸς τεῦξεν κακὸν ἀνθρώποισι·
γαίης γὰρ σύμπλασσε περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις
παρθένῳ αἰδοίῃ ἴκελον Κρονίδεω διὰ βουλάς·
ζῶσε δὲ καὶ κόσμησε θεὰ γλαυκῶπις Ἀθήνη
ἀργυφέῃ ἐσθῆτι· κατὰ κρῆθεν δὲ καλύπτρην
δαιδαλέην χείρεσσι κατέσχεθε, θαῦμα ἰδέσθαι·
ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης,
ἱμερτοὺς παρέθηκε καρήατι Παλλὰς Ἀθήνη·
ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνην χρυσέην κεφαλῆφιν ἔθηκε,
τὴν αὐτὸς ποίησε περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις
ἀσκήσας παλάμῃσι, χαριζόμενος Διὶ πατρί.
τῇ δ' ἔνι δαίδαλα πολλὰ τετεύχατο, θαῦμα ἰδέσθαι,
κνώδαλ' ὅσ' ἤπειρος δεινὰ τρέφει ἠδὲ θάλασσα·
τῶν ὅ γε πόλλ' ἐνέθηκε, χάρις δ' ἐπὶ πᾶσιν ἄητο,
θαυμάσια, ζωοῖσιν ἐοικότα φωνήεσσιν. (Hes. *Th.* 570-84)

そしてすぐに、(ゼウスは)人々に火の代わりに禍を作った。
すなわち、名知れ渡る足曲がりの神が、大地から、
乙女の姿に似た物をつくった、クロノスの子の意のままに。
そうしてまた、輝ける眼の女神アテーネーは帯を巻き
白銀の衣服で飾り付けた。そして、頭から巧みに作れる
覆い布を手で垂れかけさせたが、それは見るも驚くべきもの。
そして、パッラス・アテーネーは、草の花の愛らしい
青々とした巻き飾りを、彼女の頭の周りに巻き付けた。
そして、金の冠を、彼は頭の回りにつけた、
それは、名知れ渡る足曲がりの神が自ら作りしもの。
その手で、父たるゼウスに気に入られるよう、細工した。
それには、多くの細工が作られていたが、それは見るも驚くべきもの、
陸や海が養う限りの恐るべき獣たちが彫られていた。
かの神はそれらを数多く彫り込んだ、そして優美さは全てに息づき、
驚くべきものであり、声を発する生き物に似たものであった。

この部分には細かい本文の問題が多くあるが、本稿では特に576-7を取り上げる。この2行は、F. A. Wolf (*Theogonia Hesiodea.* Halle, 1783. 筆者未見)によって初めて改竄と判断された後、現在は、学術的校訂本ではないSchönbergerのそれを除き、殆どの校訂本は、Wolfの判断に同意して、この2行を[ ]で囲っている。本稿では、この2行を、真正のものとして弁護することを試みたい。

1. Hes. *Th.* 576-7が削除される理由

まず、一番最初に目につく問題は、576では、明らかに花冠と思われるστεφάνουςが女性の頭に巻かれた後に、578では、金製のおそらく平たい板状の冠であるστεφάνηνが、同じ女性の頭につけられる、つまり、一人の女性に二つの冠がつけられることである。後から頭につけられるστεφάνηには、ヘーパイストスによって、様々な陸海の怪物が描かれるため、ある程度以上の大きさのように思われ、最初につけた花冠の意味は視覚的には余り意味が無いように一見思われる。しかも、ここでは「花冠」はστεφάνουςと、複数形で現れており、花冠だけでも2つ以上あるように理解できる可能性がある。

次に、576と578では、ἀμφὶ δέ οἱ στεφάν... が全く同じで、これはあたかも改竄者が578に倣って576を作ったように思わせる現象である。

その上、576のστεφάνουςの語そのものにも問題がある。Westは、花冠はヘーシオドスでは*Op.* 74-5 ἀμφὶ δὲ τήν γε | Ὧραι καλλίκομοι στέφον ἄνθεσι εἰαρινοῖσιν·「そして麗しいホーラ達は、彼女の頭を春の花で巻いた」に唯一例があるのみとして、この行の真正を疑う根拠の一つとしているが、確かに、ホメーロスでは花冠は出て来ない(ただし註4参照)。そもそもστέφανοςの用例は、ホメーロスでは一つしかなく、そこでは輪状のもの一般を指している(これについては後述p.59)。そして、ヘーシオドスの*Op.* 74-5では、花で巻いたと記しているだけで、花冠は何と呼ばれるのか明記されていない。στέφανοςが明らかに花冠を意味する例は、サッポーらの時代にならなければ見出されない(後述p.60参照)。

冠に関わる問題以外では、Westは、アテーネーが573で出て来た後に、再度576-7でも出てくることも、弁護できないとしている。

以上が、校訂者たちが述べている576-7の問題であるが、さらにホメーロスとの比較をすると、確かに576は578から二次的に作られたものではないかと思われる点が見出される。すなわち、*Il.* 10. 257≒10. 261は、*Th.* 578と多くの部分で共通している。

Th. 576 **ἀμφὶ δέ οἱ στεφάν**ους νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης,
577 ἱμερτοὺς παρέθηκε καρήατι Παλλὰς Ἀθήνη
578 **ἀμφὶ δέ οἱ στεφάν**ην χρυσέην κεφαλῆφιν ἔθηκε,

Il. 10. 257 καὶ σάκος, ἀμφὶ δέ οἱ κυνέην κεφαλῆφιν ἔθηκε.
≒ *Il.* 10. 261 καὶ ξύφος, ἀμφὶ δέ οἱ κυνέην κεφαλῆφιν ἔθηκε.

そして盾 (剣) を (貸し)、そして、彼の頭に兜を置いた。

これらの行の共通点を互いに比較するなら、*Th.* 578 は *Il.* 10. 257 と 261 を参考にして作られた可能性が高いといえるだろう。つまり、*Th.* 578 のほうは、イーリアスの例では第 2 脚にある ἀμφὶ δέ οἱ を冒頭に移動し、κυνέην を στεφάνην χρυσέην に変更し、κεφαλῆφιν ἔθηκε は行末にそのまま使われる、という具合によってである。一方、*Th.* 576 のほうは、このようにして作られた *Th.* 578 の前半を共有していることから、これは *Il.* 10. 257 から作られた *Th.* 578 から、さらに作られたと考えられる。

構文の点でも、*Th.* 576-7 のほうは、ややぎこちなさが感じられる。すなわち、νεοθηλέας の後、ἄνθεα ποίης の同格が続いた後に、στεφάνους にかかるべき ἱμερτοὺς が次の行にあらわれ、しかも asyndeton で続いているのである[1]。

また、*Th.* 573-5 で、アテーネーがこの女性につける装身具は、技芸の女神であるアテーネーに相応しいが、576 の素朴な花冠とアテーネーとの特別なつながりは考えにくい。その後の 578 から、ヘーパイストスの技術を凝らした黄金の冠が出てくることを考えると、この印象はさらに強くなる。むしろ花冠を与えるのは、*Op.* 75 のように、ホーライが適当であろう。あるいは、誘惑的なものを意味する ἱμερτοὺς と、νεοθηλέας ἄνθεα ποίης から考えると、花冠を与えるものとして、アフロディーテーが考えられるかもしれない。

2. これまでの解決案

以上で見たように、*Th.* 576-7 は削除されるのが一般的である。

Solmsen のように、578-84 のヘーパイストスの頭飾りとその説明を全て削除して、少なくとも頭に 2 種類の冠をつけるのを回避する方法はあるが、上述のように、イーリアスの例との比較からは、一次的なのはむしろ 578 と考えられるため、こちらを削除すべきという判断には同意できない。また、多くの行を削除するという以上に、その絵の描写の暗示的な意味、つまり女性の性質を獣の描写で暗示しているという、意味深い部分を削り取ってしまうことになる。

576-7 を残すための意見は次のようなものがある。

Verdenius は、アテーネーが 2 度出てくるのは、類例がないことではないとしている。Verdenius は *Th.* 25, 29 κοῦραι Διός を引用しているが (ad loc.)、ヘーシオドスでは clausura が近くで繰り返される事は全く珍しいことではなく、アテーネーの繰り返しは、それ自体としては問題にはならないだろう。

同じ Verdenius は、West が主張した、花冠はホメーロスにはない、という論点

(1) ἄνθεα ποίης は，パピルス断片の伝える読み (West では Π[13]) であるが，写本の読みは ἄνθεσι ποίης を伝えている。写本の読みは確かにこのぎこちなさを緩和しはするが，ἄνθεα ποίης が *Od.* 9. 449 の clausura と一致すること，それから，このパピルス断片が他の場所でも，比較的良い読みを回復している (例えば 582 の写本の πολλὰ は明らかにすぐ上の行の πολλὰ に影響されて誤写されたもので，このパピルスの δεινὰ が正しい読みであろう) を考えると，これが恐らく本来の読みであったと思われる。

に対し、*Op*. 75 にある当の花冠がそのパラレルだと主張している。これは反論としては有効に見えるが、ヘーシオドスに、頭に花を巻くということがあったことの主張にはなるものの、στέφανος という言葉が「花冠」という意味でヘーシオドスに認められることを保証するものではない。つまり Verdenius の反論は、West の主張の半分にしか答えていない。

Fink は、複数の花冠 στεφάνους については、詩人は可能な限りの花環をかけて、美しくしようとした (T. Fink. *Pandora und Epimetheus*. Erlangen, 1958. 筆者未見。Verdenius ad loc. による引用を参照した) と主張する。もちろん、その可能性は否定できないが、これについては、Verdenius の引用によるかぎり、類例は挙げられていない。

特別な解釈で、問題を回避する方法も提案されている。Neitzel は、この箇所を書く時にヘーシオドスが参照したと思われる *Il*. 14. 178-85 を引き合いに出し、στεφάνους を耳飾りと解釈し、これによって頭に 2 種類の飾りが来る問題と、στεφάνους の複数の問題を回避しようとしている (Neitzel pp.24-5)。このイリアースの箇所では、女神が身繕いする様が描かれており、その中には確かに耳飾りをつけるところもある (182 ἐν δ' ἄρα ἕρματα ἧκεν ἐυτρήτοισι λοβοῖσιν | τρίγληνα μορόεντα·「そして、よく穿たれた耳たぶには耳輪が来る。それは光り輝く三重の輪」)。一方、ヘーシオドスの女性の原形の耳には、飾りはつけられていない。しかし、だからといって、στεφάνους がそれにあたると判断することは、飛躍があると言わざるを得ない。ここで出て来ているのは τρίγληνα μορόεντα という耳飾りを意味する全く別の語である。万一 στεφάνους が耳飾りを意味できたとしても、それが花によって出来ているというのは、やはり奇妙に思われる。

3. 二つの冠の存在について(2)

576-7 が削除される理由を見、それに対する反論を見た限りでは、今までのところ、この 2 行を保持する試みは、一部の削除の理由にしか、反論できていないようである。以下では、この二重の冠を弁護できる、今まで見過ごされて来た事実がないか、探って行く。

3.1. 美術資料

まず、二重の冠は、果たして奇妙であるかどうか。

完全な平行例になるわけではないが、ギリシアの美術資料などを見ると、頭に二重の飾りをつける例はないわけではない。

ピサの洞窟で発見された、紀元前 540 頃のものと推定されている奉納のタブレッ

(2) この部分について、都立大学博士課程浜本裕美氏に、エウリピデースとピンダロスの例、ならびに、筆者未見であった絵画資料を紹介している Llewellyn-Jones、Oakley-Sinos の有用な研究書を紹介していただいた。また、残念ながら全ては本稿で反映できなかったが、貴重な御意見を下さった事に、多大な感謝をしたい。

トには、頭に恐らく巻布をした上に、木の枝でできた冠を被った女性が描かれている (Andronicos-Chatzidakis-Karageroghis, p.69)。

Athenian red-figure stamnos signed by Smikros as painter, last quarter of 6 BC, Musées Royaux d'Art et D'Histoire, Brussels (A 717) (Osborne, Plate 72) では、宴会で笛にあわせて唱おうとしている男性の頭に、明らかに飾り布が頭に巻かれた上に、花冠がかけられている。

もう少し後の時代になると、頭に巻布をして、オリーブの冠を被ると言う構図はストックとなっているようで、紀元前5世紀後半からはかなり多くの例が見られる(3)。たとえばAthenian red-figure vase by the Meidias Painter: Aphrodite and Phaon, Florence, National Museum (Boardman, Plate X 139)には、首飾りを持っている女性と、楽器を弾いている男性が描かれているが、その頭飾りを見ると、二重になっているのがわかる。ここでは男性と女性が、おそらく幅の広い飾り布を頭に巻いており、その布の周りから、葉が見えているのが見て取れる。女性のほうも、恐らく同じように布を巻いて、こちらも頭飾りの上の方に葉がでているのがわかる。宙を飛んでいる女神（ヒメロス）は、明らかに花冠を持っており、それはオリーブの実を付けている。男性のほうの布の周りには、このオリーブの実が見えていることから、花冠を巻いた上に飾り布（あるいは女性に関しては頭飾り）を巻いていると（おそらく女性も）考えられる。これは、順番からいうと、問題の箇所の冠の順番に平行していると言える。

もう一つ、紀元前430年頃の製作になる、Staat. Mus., Berlin F 2372では、花嫁が馬車の車駕に立っているが、この女性は頭にベールと、金属製と思しき冠を被っているが、さらにこれに女神が植物の冠をかぶせようとしている (Llewellyn-Jones, p.243, Fig. 158, またはOakley-Sinos p.90 Fig.72)。また、同様に、Athens, National Museum 1454では、すでに頭に巻布を巻いた花嫁を別の女性が抱きかかえながら、恐らく金属製の髪飾りをかぶせようとしているが、同時にエロースがその上に植物の冠をかぶせようとしている (Oakley-Sinos p.66 Fig.28, 29)。

もちろん、これらの例は、ヘーシオドスの時代のものではなく、当然、改竄を行ったものが、これらの例にならって付け加えた可能性はなくはない。問題の2行が真正である根拠はこれ以外にも求めなければならないが、もし真正であれば、最後の2例が示しているように、このような複数の冠をつけることは、花嫁の飾り付けの際に、特に好んで行われたものではないだろうか。

3.2. 文学的資料

これも年代的にはヘーシオドスより下ることになるが、二重の冠と思われる箇所が2つ見い出される。

エウリーピデースの『エーレクトラー』では、使者がアイギストスがどのようにオレステースに殺されたのかを報告する場面があるが、その中で、アイギストスの殺害後、その張本人が、実は帰って来たオレステースであったことを家来達が認めて、一転歓喜することが報告されている。その際、報告者はオレステースに、彼ら

(3) 例えばシャルボノー - マルタン - ヴィラール pp.269 以下参照。

が頭の飾りを捧げたと言っている。

στέφουσι δ' εὐθὺς σοῦ κασιγνήτου κάρα
χαίροντες ἀλαλάζοντες ... (E. *El.* 854-5)
彼らは喜び声を上げて、すぐにあなたの弟の頭に冠を巻いた

その後で、エーレクトラーはこの報告に喜び、頭の飾りを彼の為に取って来ようと言う。

φέρ', οἷα δὴ 'χω καὶ δόμοι κεύθουσί μου
κόμης ἀγάλματ' ἐξενέγκωμεν, φίλαι,
στέψω τ' ἀδελφοῦ κρᾶτα τοῦ νικηφόρου. (E. *El.* 870-2)
さあ、実に私が家に持ってしまっている
髪飾りを、我々は持って来ましょう、
そして勝利した弟の頭に巻くとしましょう。

つまり、オレステースは、まず家来たちに、飾り物を巻いて貰った上に、さらにエーレークトラーが持っていた飾り物を巻くことになる。前者の飾り物は花冠あるいは、勝利の印のオリーブや月桂樹の冠であろうが、後者はおそらく植物などから出来たものではなく、金属などの冠などであることは間違いないであろう。しかも、στεφάνους あるいは κόμης ἀγάλματ' ἐξενέγκωμεν とあり、どちらも複数である。つまり、もしこの複数を実際の複数にとるなら、頭に4つ以上の飾りがつけられることがここから読み取れる可能性もある。

ピンダロス『イストゥミア』第5歌の末尾では、詩人は、おそらくコロスに対して、競技の勝利者であるピュラキダースに、やはり2種類の頭の飾り、この場合は花冠と羊毛の巻布をつけるよう勧めている。

λάμβανέ οἱ στέφανον, φέρε δ' εὔμαλλον μίτραν,
καὶ πτερόεντα νέον σύμπεμψον ὕμνον. (Pi. *I.* 5. 62-3)
彼のために花冠をとれ、そして、よき羊毛の巻き飾りを持って行け、
そして翼ある新しき賛歌を送れ。

以上の美術資料と、文献の例から、2つ(あるいはそれ以上)の頭飾りが同時に頭に置かれるということが、あり得たことを我々は確認できたと思う。もちろん、ヘーシオドスと同時代の資料がない以上、ヘーシオドスの時代に遡るものかどうかは、確定できないが。

4. ホメーロスとの整合性

語としての στέφανος が、ヘーシオドスでは、それ自体で、花冠を指しえたかど

うかは、先に述べたように、確証はない。年代設定には大いに問題のあるホメーロス讃歌を除くなら、花冠と思われるものを指すのに使われる στέφανος は、ヘーシオドスのこの箇所が唯一の例である。

しかし、ホメーロスでの用例と、矛盾しない形で、ヘーシオドスの問題の箇所で στεφάνους を花冠と理解することは、できないことではない。

> πάντῃ γάρ σε περὶ στέφανος πολέμοιο δέδηε· (*Il.* 13. 736)
> 実に一面お前の周りには戦いの輪が燃えている。

> ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης,
> ἱμερτοὺς παρέθηκε καρήατι Παλλὰς Ἀθήνη· (Hes. *Th.* 576-7)
> そして、パッラス・アテーネーは草の花の愛らしい
> 青々とした巻き飾りを、彼女の頭の周りに巻き付けた。

ホメーロスにおいても、στέφανος はこれが唯一の用例だが、ここでは στέφανος πολέμοιο という表現から、στέφανος は、輪状のもの一般を指していると思われ、Janko も注釈ではそのように理解している (Janko ad *Il.* 13. 736-9)。それが πολέμοιο によって、どのような輪なのかが説明されていると解釈できるだろう。ヘーシオドスの問題の箇所も、στεφάνους は輪であり、それが花で出来ていることを、νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης が示していると考えるならば、この箇所は特にホメーロスと異なった στέφανος の用例ではないと思われる(4)。

(4) 実は、もし West が 576 の στεφάνους で感じた問題を、578 の στεφάνη 自体に投げかけるならば、こちらもホメーロスとどれぐらい一致しているのか、慎重な考察が必要になるだろう。

ホメーロスでの στεφάνη は、実は殆ど全て、女性の頭の装飾具とは関係がなく、ヘルメットの縁、あるいはヘルメットそのもの (*Il.* 7. 12, 10. 30, 11. 96)、それから岩石の縁 (*Il.* 13. 736 おそらく比喩的用法) であり、唯一、女性につけられる頭の飾りとして使われるのは *Il.* 18. 597 だけである。

> καί ῥ' αἱ μὲν καλὰς στεφάνας ἔχον, οἱ δὲ μαχαίρας
> εἶχον χρυσείας ἐξ ἀργυρέων τελαμώνων. (*Il.* 18. 597-8)
> στεφάνας] στεφάνους *Z*
> そして、女達は美しい στεφάνη を持ち、男達は
> 銀の下げ緒から金の刀を下げて持っている。

これらはヘーパイストスが盾に描いたところの有名なエクフラシスの一場面、年頃の男女の相手探しの場面であるが、この２行を、文献学者アリストファネースは、婚礼に剣を持つのはおかしいとして、改竄と見ている。この部分については行の真正を疑われることはないため、現在の研究者は、アリストファネースの見解にほとんど与することはないが、στεφάνας についていえば、ヘルメットの縁としてではなく、女性の飾りについて言われているのは、少なくともホメーロスでは例外的である。

女性の στεφάνη が金属の頭飾りを意味する例として、West が挙げている、このホメーロスの例以外のもう一つの例は、*h. Hom.* 6. 7 (短いほうのアフロディーテー讃歌) κρατὶ δ' ἐπ' ἀθανάτῳ στεφάνην εὔτυκτον ἔθηκαν | καρὴν χρυσείην である。しかし、これをホメーロス、ヘーシオドスと同格にみなすのは極めて危険である。この短いアフロディテー賛歌の前にある、*h. Ven.* は古典期にまで成立時代が下る可能性が高いと思われるが (cf. 泰田伊知郎「中世写本の総祖本に認めうる詩行の文献学的処置

στεφάνους の複数については、上述のエウリーピデースの例とともに、本来の複数であるかどうかというのは問題ではあろうが、おそらく poetic plural であると考えて問題はないだろう。時代が下るが、紀元前 6 世紀頃にはサッポーに (すでに στέφανος を独立して花冠として使っている箇所ではあるが) 同様の poetic plural の例が見つかる。

σὺ δὲ στεφάνοις, ὦ Δίκα, πέρθεσθ' ἐράτοις φόβαισιν
ὄρπακας ἀνήτω συναέρραισ' ἀπάλαισι χέρσιν.
(Sapph. 81 Lobel-Page, 78 Bergk, 80 Diehl)
だが、貴女は、おおディカ、髪に愛らしい花冠を巻きなさい
ういきょうの枝を柔らかい手で撚りなさい。

ここでは、このういきょうの枝を撚ったものが στεφάνοις で、それを頭に巻くことが意味されているが、この場合には στεφάνοις が実際の複数であると考える必要はないだろう。サッポーの例での複数は、恐らく複数の撚りあわせられる枝のイメージによるものでもあろうが、もっと直接的な理由としては、ここに韻律上ロンガが要求される事によると思われる。

5. 残された問題

以上で、複数の頭飾りが同時に頭にあることが、少なくとも不可能ではないということを、美術資料と文献資料の観点から検討し、さらに、στεφάνους は輪であって、それに続く νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης によって、ホメーロスでの用法と食い違うことなく、花冠となるのではないか、という解釈の可能性を提示した。

しかしながら、実際に複数の冠がかぶせられるとしても、まだ次のような問題が残されている。先に見たように (p.54)、576-7 は恐らく二次的に作られた句である。その際、全く同じ前半部で、しかもぎこちなさを伴うような状態のものをあえて作り、残したのかが不明である。また、なぜ技芸の女神アテーネーが、素朴な野の花の冠を作るのか、という問題 (p.55) もある。わざわざ、ヘーシオドス自身が、この 2 行を書き足す必然性が、頭に複数の頭飾りを置きたい、という以上にあったのだろうか。

こういった問題が起こっていることこそが、実は 576-7 がここに真正のものとし

について―*h. Ven.*136-136a 行目を題材に―」『西洋古典学研究』54 (2006) 14-26) が、*h. Hom.* 6 も、決して古い状態にまでは遡るものではない可能性が高いだろう。ここでは深くは立ち入らないが、年代特定の指標となるのは、ἐδεξιόωντο (16) で、一見ホメーロス風の形をしてはいるが、δεξιόω という語は、この 1 例を除き、初期叙事詩には登場せず、古典期以降にのみ見られる。

もし *h. Hom.* 6 が平行例として相応しくないとすれば、*Il.* 18. 597 は、女性の頭につけられる στεφάνη の孤立した用例となり、そこでの恋人選びという場面を考えると、*Il.* 18. 597 の στεφάνας を花冠ととる可能性も否定できない (松平 ad loc. においても、花冠と訳されている)。

て書かれた理由なのではないかと、筆者は考える。

既に指摘されていることだが、ヘーシオドスには独特の作詩技法が観察される。それは、語句や内容の繰り返しを用いた技法で、特にその中には、シンメトリーをつくり出す技法が顕著に見られる。問題の箇所の前後は、以下のように分析できるだろう。

αὐτίκα δ' ἀντὶ πυρὸς τεῦξεν κακὸν ἀνθρώποισι·
γαίης γὰρ σύμπλασσε περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις
παρθένῳ αἰδοίῃ ἴκελον Κρονίδεω διὰ βουλάς·
ζῶσε δὲ καὶ κόσμησε θεὰ γλαυκῶπις Ἀθήνη
ἀργυφέῃ ἐσθῆτι· κατὰ κρῆθεν δὲ καλύπτρην
δαιδαλέην χείρεσσι κατέσχεθε, θαῦμα ἰδέσθαι·
ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης,
ἱμερτοὺς παρέθηκε καρήατι Παλλὰς Ἀθήνη·
ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνην χρυσέην κεφαλῆφιν ἔθηκε,
τὴν αὐτὸς ποίησε περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις
ἀσκήσας παλάμῃσι, χαριζόμενος Διὶ πατρί.
τῇ δ' ἔνι δαίδαλα πολλὰ τετεύχατο, θαῦμα ἰδέσθαι,
κνώδαλ' ὅσ' ἤπειρος δεινὰ τρέφει ἠδὲ θάλασσα·
τῶν ὅ γε πόλλ' ἐνέθηκε, χάρις δ' ἐπὶ πᾶσιν ἄητο,
θαυμάσια, ζωοῖσιν ἐοικότα φωνήεσσιν. (Hes. *Th.* 570-84)

570-84 の、禍としての女性を作る場面の中で、576 ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους ... と、578 ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνην ... は、ちょうどこの段落の中央に来る。つまり、576-8 の 3 行の前後は、ちょうど 6 行ずつある。

West が問題視していた Ἀθήνη の繰り返しは 573/77 だが、その周りに、571/579 で、1 行ずつ間を置きながら、περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις が 573/77 を取り囲んで、これも行末で繰り返されている。さらに、573/577 の Ἀθήνη の繰り返しは、ちょうどアテーネー女神の女性の飾り付けの行の始めの行と終わりの行に対応している[5]。さらに、このシンメトリーを縫うような形で、θαῦμα ἰδέσθαι が 2 つの Ἀθήνη にはさまれた真中に、つまり両方から 1 行ずつ置いた行である 575 に来た後に、最後の περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις から 1 行ずつ置いた後に現れている。

これらのことを考えると、ἀμφὶ δέ οἱ στεφάν... の行頭での繰り返しと、行末の Ἀθήνη の繰り返しは、単なる偶然や稚拙な表現ではなく、シンメトリーを利用した図形的な語句の対応をつくり出すための繰り返しであったと考えられるのではないだろうか。

(5) ちなみに、578 行の、ヘーパイストスの飾りを頭につけるのがどちらの神かも、些細な事だが、例えば Evelyn-White ではアテーネー、Schönberger ではヘーパイストスと取っており、翻訳者によって異なっている。もしこの Ἀθήνη の繰り返しがその仕事の始めと終わりという意識を詩人が持っていたとすれば、578 はヘーパイストスが頭に飾りをつけることになると解釈できる。579 の αὐτός もこの解釈を支持するだろう。

このようなシンメトリーは、ここだけで見るなら、偶然に見えるかもしれないが、ヘーシオドスには他にもシンメトリーを意図して書かれたと思われる部分が幾つかある。

Schwablは、617-724のティターン族との戦いについての、これらの繰り返しの詳細に分析する論文を書いている。その論文の冒頭(Schwabl pp.176-8)で、例としてあげている31-42のシンメトリーのSchwablの理解をまとめると、以下のようになる(6)。

ὣς ἔφασαν κοῦραι μεγάλου Διὸς ἀρτιέπεται,
καί μοι σκῆπτρον ἔδον δάφνης ἐριθηλέος ὄζον
δρέψασαι, θηητόν· ἐνέπνευσαν δέ μοι αὐδὴν
θέσπιν, ἵνα κλείοιμι τά τ' ἐσσόμενα πρό τ' ἐόντα,
καί μ' ἐκέλονθ' ὑμνεῖν μακάρων γένος αἰὲν ἐόντων,
σφᾶς δ' αὐτὰς πρῶτόν τε καὶ ὕστατον αἰὲν ἀείδειν.
ἀλλὰ τίη μοι ταῦτα περὶ δρῦν ἢ περὶ πέτρην;
τύνη, Μουσάων ἀρχώμεθα, ταὶ Διὶ πατρὶ
ὑμνεῦσαι τέρπουσι μέγαν νόον ἐντὸς Ὀλύμπου,
εἴρουσαι τά τ' ἐόντα τά τ' ἐσσόμενα πρό τ' ἐόντα,
φωνῇ ὁμηροῦσαι τῶν δ' ἀκαμάτος ῥέει αὐδὴ
ἐκ στομάτων ἡδεῖα· κτλ.

このように、偉大なゼウスの、言葉に長けた娘達は言った。
そして、私によく茂った月桂樹の枝を折って杖として下さった、
素晴らしい枝を。そして、私に神の声を吹き込まれた、
これからある事と、これから起る事も讃えるように、
そして私に常世にいます至福の者の種族を歌うように促した、
そして、最初と最後に彼女ら自身を常に歌うように、と。
だが、なぜ私に樫や岩についての事を語る必要があるだろうか。
さて、ムーサから私は始めよう、彼女らは父たるゼウスを
歌って喜ばせる、オリュンポスにおわすその神の偉大な心を。
今ある事もこれからある事も以前あった事も
声をあわせて讃え歌って、そして彼女らの疲れを知らぬ声は流れ出る、
その口より甘美に。……

ここでは、完全な行の一致は32と38にあり、他は部分的・内容的一致である。すなわち、32-34の行末では、33とその前後の行の部分的一致、34と36の行頭では「始まり」の意味の上の一致、33と37ではὑμνεῖνの動詞の一致、37-39では、より漠然とした「語る」ないし「歌う」という動詞の一致である。

(6) ただし、Schwablは、問題の*Th.* 576-7については、彼の構造の分析(Hesiods *Theogonie: Eine unitarische Analyse.* Wien, 1966)から、削除を提案しているようである。この論文については筆者未見、筆者はNeitzel p.23, pp.26-7から知った。

429-36 では、語句の一致によるシンメトリーが明確に観察される。これについては、West が既に指摘しているところである(7)。

ᾧ δ' ἐθέλῃ, μεγάλως παραγίνεται ἠδ' ὀνίνησιν· 429
ἔν τε δίκῃ βασιλεῦσι παρ' αἰδοίοισι καθίζει, 434
ἔν τ' ἀγορῇ λαοῖσι μεταπρέπει, ὅν κ' ἐθέλῃσιν· 430
ἠ δ' ὁπότ' ἐς πόλεμον φθισήνορα θωρήσσωνται
ἀνέρες, ἔνθα θεὰ παραγίνεται, οἷς κ' ἐθέλῃσι
νίκην προφρονέως ὀπάσαι καὶ κῦδος ὀρέξαι. 433
ἐσθλὴ δ' ἱππήεσσι παρεστάμεν, οἷς κ' ἐθέλῃσιν· 439
ἐσθλὴ δ' αὖθ' ὁπότ' ἄνδρες ἀεθλεύωσ' ἐν ἀγῶνι· 435
ἔνθα θεὰ καὶ τοῖς παραγίνεται ἠδ' ὀνίνησι· 436

だが、彼女（ヘカテー）が望む者には、彼女は側に立ち助力をする。 429
裁判の時にも、畏るべき貴族の側に座り、 434
集会場でも、その者は人々の中で目立つのだ、彼女が望むものは。 430
あるいは、男達が人を滅ぼす戦に向けて武装する時、
その時、その女神も、助力をする、彼女が
勝利を喜んで与え、誉れを与えることを望むものには。 433
騎手にとっても、彼女は優れて助力をする、彼女が望むものには。 439
人々が競技で力を尽くす時にも、彼女は優れている、 435
その時、その女神はまた彼らの側に立ち助力をする。 436

429 と 436 によって囲まれたこの部分の中では、434 と 430 の行頭の ἔν τ'、439 と 435 の行頭の ἐσθλὴ δ'、そして、430、432、434 の行末の κ' ἐθέλῃσιν が、完全なシンメトリーになっている。この箇所では、ヘーシオドスがシンメトリーの構造を意図的に使ったことは明らかだろう。

もう一つ、問題の箇所にとって重要な語句の対応がある。これは実は同じプロメーテウスの逸話の中で、問題の箇所の少し前の 540-61 に出てくるものである。

τῷ μὲν γὰρ σάρκας τε καὶ ἔγκατα πίονα δημῷ
ἐν ῥινῷ κατέθηκε, καλύψας γαστρὶ βοείῃ.
τῷ[8] δ' αὖτ' ὀστέα λευκὰ βοὸς δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ (a) 540

(7) この箇所の、行の移動は殆ど確実だと思われる。West が言うように、434 は、写本の位置では、武装の時のヘカテーの助力の後に、内容的に無関係に登場するが、430 の前では、内容の点でもアナフォラの点でも相応しい。439 のほうも同様だが、この場合は、435 は 439 の後でなければ、ἐσθλὴ の内容である παρέσταμεν を欠くことになる。その他の行の移動の根拠については、West の該当箇所を参照。

(8) 写本の読みのままを採用する。West はこの 540 の τῷ は、「人間たち」でなければならないとして、複数の τοῖς にしている。また、West 以前は、多くの校訂者らは、538 の τῷ のほうを「人間たち」とすべきとして、τοῖς に変えて読んでいた（この判断は、U 写本に見られる行の上の書き込み οἷς にも恐らく影響されていたと考えられる）。どちらの処置も、プロメーテウスが肉を取り分ける相手の一方をゼウス (τῷ)

εὐθετίσας κατέθηκε, καλύψας ἀργέτι δημῷ.
δὴ τότε μιν προσέειπε πατὴρ ἀνδρῶν τε θεῶν τε·
"Ἰαπετιονίδη, πάντων ἀριδείκετ' ἀνάκτων,
ὦ πέπον, ὡς ἑτεροζήλως διεδάσσαο μοίρας."
ὣς φάτο κερτομέων Ζεὺς ἄφθιτα μήδεα εἰδώς· (b)
τὸν δ' αὖτε προσέειπε Προμηθεὺς ἀγκυλομήτης,
ἦκ' ἐπιμειδήσας, δολίης δ' οὐ λήθετο τέχνης.
"Ζεῦ κύδιστε μέγιστε θεῶν αἰειγενετάων,
τῶν δ' ἕλευ ὁπποτέρην· σε ἐνὶ φρεσὶ θυμὸς ἀνώγει."
φῆ ῥα δολοφρονέων· Ζεὺς δ' ἄφθιτα μήδεα εἰδὼς (b')
γνῶ ῥ' οὐδ' ἠγνοίησε δόλον· κακὰ δ' ὄσσετο θυμῷ
θνητοῖς ἀνθρώποισι, τὰ καὶ τελέεσθαι ἔμελλε.
χερσὶ δ' ὅ γ' ἀμφοτέρῃσι ἀνείλετο λευκὸν ἄλειφαρ,
χώσατο δὲ φρένας ἀμφί, χόλος δέ μιν ἵκετο θυμόν,
ὡς ἴδεν ὀστέα λευκὰ βοὸς δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ. (a')
ἐκ τοῦ δ' ἀθανάτοισιν ἐπὶ χθονὶ φῦλ' ἀνθρώπων
καίουσ' ὀστέα λευκὰ θυηέντων ἐπὶ βωμῶν.
τὸν δὲ μέγ' ὀχθήσας προσέφη νεφεληγερέτα Ζεύς·
"Ἰαπετιονίδη, πάντων πέρι μήδεα εἰδώς,
ὦ πέπον, οὐκ ἄρα πω δολίης ἐπελήθεο τέχνης."
ὣς φάτο χωόμενος Ζεὺς ἄφθιτα μήδεα εἰδώς.

というのも、一方には肉と脂肪で油ののった内臓を
皮に包み、牛の胃袋に隠して置いた。
だがまた一方には、策略の技をもちいて、牛の白い骨を、
白光りする脂肪に隠して立たせて置いた。
まさにその時、彼に人々と神々の父は言った。
「イーアペトスの子よ、全ての主人に優るものよ、
わが友よ、なんと不公平に取り分をわけたことか」
このように、彼をいなしつつ、尽きる事ない謀知るゼウスは言った。
彼に答えて、策に長けたプロメーテウスは言った、
軽く笑いながら、だが策略の技を忘れずに。
「最も名高いゼウスよ、常世の神々のうち最も偉大な者よ、
だがこれらのうちどちらか、あなたに心の中で気持ちが命ずるものを取り給え」
実に彼は策を弄しつつ言った。だが尽きる事ない謀知るゼウスは
その企みを認め、見抜かずにはいなかった。そして、心に人々への
禍を謀ったが、それはまた成し遂げられる運命であった。

とし、一方を人間達 (τοῖς) とするためのものである。しかし、本稿がここで主張するように、もしヘーシオドスが文法的な完全性よりも、対称性を優先する傾向があると考えるなら、ここでも恐らく 538 と 540 の τῷ の繰り返し、そして 539 と 541 の κατέθηκε, καλύψας の繰り返しの対称性が意図されていると思われ、538 と 539 は、写本の読み τῷ のままにすべきだと考える。

そして、彼は両の手で白い脂肪を取り上げ、
胸の中で怒った、そして怒りは彼の心に達した。
策略の技をもちいて(隠された)牛の白い骨を見た時に。
そしてその時以来、地上で人々の種族は不死なる神々の為に
白い骨を香しき祭壇で焼くのである。
彼に、雲集めるゼウスは大いに気分を害して言った。
「イーアペトスの子よ、尽きる事ない謀に長けた者よ、
わが友よ、実に全く策略の技を忘れずにいたものだ」
このように怒りつつだが尽きる事ない謀知るゼウスは言った。

この部分では、繰り返しを利用した図形的な語句の配置が3つ確認される。つまり、538-541の中、543-5と559-61、そして540/555 (a, a') と545/550 (b, b') のシンメトリーであるが、特に注意したいのは、最後のそれである。上の引用中で、二重の実線と波線で強調したように、540/555 ὀστέα λευκὰ βοὸς δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ は、545/550 Ζεὺς ἄφθιτα μήδεα εἰδώς の外側にあって、540, 545, 550, 555 はそれぞれ5行置きに現れていることが観察される。ここで注目されるのは、555 の ὡς ἴδεν ὀστέα λευκὰ βοὸς δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ である。この部分は、「策略の技を用いて(隠された)牛の白い骨を見た時に」となるが、繰り返しの一部である δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ は、文法的には浮いてしまっている。つまり、この前置詞句には、関係する動詞的な要素が必要になる(翻訳では「隠された」を補った)。West もこの「埋め草」については、注釈で認識している (West ad loc.) が、どうしてこのような文法的に帰属が曖昧な語句まで繰り返したのか、理由は述べていない。しかし、上で見たように、ヘーシオドスの、語句の繰り返しの図形的な配置、特にシンメトリーをつくり出す傾向が幾つか観察されるところを見るなら、これはヘーシオドスが、この部分でシンメトリーをつくり出すために、あえて文法的に曖昧なまま、δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ を繰り返したと考えられる。

もし、555で、ヘーシオドスがあえて文法を犠牲にしながらシンメトリーを優先させたとすれば、問題の576-7が、先に指摘したように、二次的に作られたもののようでもあり、そこに、構文のぎこちなさや、またアテーネーの花冠のやや不自然なことが観察されても、それはシンメトリーをつくり出すためにあえて許容した代償であったと考えるべきで、後世の挿入と考える必要はないのではないか、と思われる。

参考文献

本文中では、太字で示した以下の略号が用いられている。

校訂本・註釈・翻訳

Evelyn-White: Hugh H. Evelyn-White ed. and trans. *Hesiod, the Homeric Hymns and Homerica*. Loeb C. L. Cambridge Mass.: Harvard U. P.;

London: Heinemann, 1914. Reprint 1977.

Rzach: A. Rzach ed. *Hesiodus Carmina.* 3rd ed. Bibliotheca Teubneriana. Stuttgart: Teubner, 1958.

Janko: Richard Janko. *The Iliad: A Commentary.* Vol.IV: Books 13-16. Cambridge: Cambridge U.P., 1992.

Solmsen: Friedrich Solmsen ed. *Hesiodi Theogonia, Opera et dies, Scutum.* R. Merkelbach et M. L. West. *Fragmenta selecta.* OCT. Oxford: Clarendon Press, 1970.

West: M. L. West ed. *Hesiod, Theogony.* Oxford: Clarendon Press, 1966. Special edition Sandpiper, 1997.

松平：松平千秋訳『ホメロス：イリアス(下)』岩波文庫．東京：岩波書店，1992.

美術資料

Andronicos-Chatzidakis-Karageorghis: Manolis Andronicos and Manolis Chatzidakis and Vassos Karageroghis. *The Greek Museums.* Athens: Ekdotike Athenon S. A., 1975.

Boardman: John Boardman. *The Oxford history of classical art.* New York: Oxford U. P., 1993.

Llewellyn-Jones: Lloyd Llewellyn-Jones. *Aphroditeュs Tortoise: The Veiled Woman of Ancient Greece.* Swansea: The Classical Press of Wales, 2003.

Oakley-Sinos: John H. Oakley and Rebecca H. Sinos. *The Wedding in Ancient Athens.* Wisconsin Studies in Classics. Wisconsin: U. of Wisconsin P., 1993.

Osborne: Robin Osborne. *Archaic and classical Greek art.* Oxford history of art. Oxford and New York: Oxford U. P., 1998.

Reilley: Joan Reilley. "Many Brides: "Mistress and Maid" on Athenian Lekythoi." *Hesperia* 58 (1989): 411-4, Plates 73-81.

シャルボノー-マルタン-ヴィラール：ジャン・シャルボノー，ロラン・マルタン，フランソワ・ヴィラール著　村田数之亮訳『ギリシア・クラシック美術(前480-前330)』東京：新潮社，1973.

その他

Neitzel: Heinz Neitzel. *Homer-Rezeption bei Hesiod: Interpretation ausgewährter Passagen.* Abhandlungen zur Kunst-, Musik-, und Literaturwissenschaft 189. Bonn: Bouvier Verlag, 1975.

Schwabl: Hans Schwabl. "Beispiele zur poetischen Technik des Hesiod." Ernst Heitsch ed. *Hesiod.* Wege der Forschung 44. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1966.

Verdenius: W. J. Verdenius. "Hesiod, *Theogony* 507-616: Some Comments on a Commentary." *Mnemosyne* 4th ser. 24 (1971): 1-10.

(北海道大学)

Sophocles, *Ajax* 1373[(1)]

安西眞

アイアスの死体をめぐるギリシア軍全体の対応をどうするかが、ソフォクレス『アイアス』の後半部の展開の軸となっている。その対応をめぐる争いに決着をつけるのが、アガメムノンの、下に引いた台詞である。

簡単に、状況を説明しておく。アイアスの死体を名誉ある形で葬ろうという決意を表明し、それを推進しようとするのは、アイアスの母違いの弟で、部下でもあったテウクロス。だが、メネラオスとアガメムノンが次々に登場し、この死体を軍における反乱者すなわち敵として処理するよう(鳥たちの餌－ 1165)命じる。非勢ながら、軍の指揮者たちと対峙しつづけるテウクロスだが、最後に現れた味方が、オデュッセウスである。彼は、トロイアを前にしたギリシア軍の最高指導者であるアガメムノンを、引用文にみられるように、最後にはなんとか説得する。アイアスは、確かに自殺に至る最後の一連の行動に関する限り、ギリシア軍の敵であったし、特に自分の直接の敵対者であった。だが、その自殺した死体を、軍として葬る(つまり味方として)か、鳥どもの餌になすべく(つまり敵として)放置するか、という問題になれば、指揮にあたる者としてその敵味方認定基準はおのずから異なるべきだ、というのが、オデュッセウスの説得の論理の大枠と言ってよいであろう。ふたりの争いは、長い台詞を含んだ不規則な行数による言い争い(1318-1345)から、一行対応(スティコミュティア、1346-1369)へ、という悲劇の言い争いの場面で通常とられる形で進行するが、その最後を締めくくるのが、このアガメムノンの台詞なのである。

(1) 本稿は、2002年6月21日、W. Burkert チューリヒ大学名誉教授が北海道大学文学研究科において行った講演の際に、同じ会において読まれた本稿と同名の研究発表をもとに成立している(研究会の名称：北海道大学文学研究科主催シンポジウム「古代の宗教を照らす」)。ちなみに、その会で Burkert 氏が読んだのは、"Problems of Animal Sacrifice: 'Homo Necans' Revisited" であった。その他、筆者のものと、納富信留慶応大学助教授による「クセノパネスは如何に語ったか」と、佐藤知己北海道大学助教授による「口承文学に見られるアイヌの信仰」とが読まれた。それぞれ、Burkert 氏の専門に比較的近いことがらに関係する内容のものであったことは、題名からも理解していただけるであろう。同研究会は、「フィロロギカ」臨時研究会として、北海道大学文学研究科の支援のもとに行われたこと、司会その他で、葛西康徳氏(新潟大学教授)、大芝芳弘氏(都立大学[現首都大学東京]教授)も、ご参加下さり、議論を盛り上げてくださったことを記し、感謝したい。本稿筆者の発表に対しては、佐野好則都立大学助教授(現国際基督教大学助教授)から、発表後会場で、詳しいご批評をいただいた。発表原稿は大幅に書き直されているが、議論の対象となっているアガメムノンの発言がなされた文脈を比較的詳しく書き込んだのは、同氏のご批判をうけいれた結果であることをここに感謝とともに記しておきたい。北海道大学文学研究科にとっても「フィロロギカ」にとっても何らかの形で記録にとどめておくべき会がかつて持たれたということを、このような形で記録できることは、筆者の喜びとするところである。

Αγ. ἀλλ' εὖ γε μέντοι τοῦτ' ἐπίστασ', ὡς ἐγὼ
σοὶ μὲν νέμοιμ' ἂν τῆσδε καὶ μείζω χάριν,
οὗτος δὲ κἀκεῖ κἀνθάδ' ὢν ἔμοιγ' ὁμῶς
ἔχθιστος ἔσται. σοὶ δὲ δρᾶν ἔξεσθ' ἃ χρή.

1373 χρῇς Dindorf

「しようがないな。ただ、このことだけは知っておけよ。おれは、おまえになら、これも、そしてこれよりもまだ大きな報酬も支払ってやろうとも思うが、あいつは、おれには、あの世にいようと、この世にいようと、とうてい受け入れ難い敵なのだ、ということをな。おまえは、せねばならぬことを、すればいいだろう。」

上の本文は、小さな改定を除けば(2)、中世写本の伝えるままを印刷している。校訂注に示されているように、19世紀に Dindorf が、χρή を χρῇς（おまえが欲する）と読み替えるように提案した。この読み替え提案が、最近100年あまり、ほぼ一貫して主要校訂本に採用されている（後述参照）。その読み替えに、解釈上の意図があるとすれば、ここに示されたアガメムノンの台詞の根底には、オデュッセウスへの好意（もちろんアイアスへの敵意に対する対照の形で）の表明がある、という読み方をするべきだ、ということではないかと思われる。しかし、それは悪しき判断であって、中世写本の伝える読みに戻すべきである、という主張をすることが本稿の目的である。

Dindorf の読み替え提案は、Thesaurus Linguae Graecae VIII-1649 (1865) に見ることができる。この S. *Aj.* 1373 だけに該当する彼の判断を取り出す形で説明する。1　中世写本が一致してここで伝えている読み (χρή) は適当でない (inepte)。2　χρῇς は *Ant.* 887 へのスコリアや、Suidas を典拠とする限り、χρῄζεις または、θέλεις の意味で使用可能であったし、また、ここでは、オデュッセウスの欲していることという形で死体の埋葬を指示したほうが適当である。もちろん、両者 (χρή / χρῇς) が視覚上非常に近いということがこの提案の前提であることは言うまでもない。下書きのイオタは、中世写本では極めて不安定な伝わり方をしていた、という事実を考えれば、両者は実際にはもっと近い、とも言いうる。

以降、彼の見解は、少なくともこの箇所に関する限り非常な説得力を持ちつづけた。『アイアス』を含む、この提案以降に出版された、ap.cr. を備えた主要校訂本は、Campbell (1881), Jebb (1896), Pearson (1924), Dain (1958), Dawe (1975), Lloyd-Jones と Wilson (1990) による6種(3)であるが、Dain を除く5種は、中世写本の伝える読みを不適当であると判断している。その中でも、Campbell を除く

(2) いくつかの写本で ὅμως というアクセントが打たれている。

(3) L. Campbell, *Sophocles, Plays and Fragments* vol.2 Oxford 1881, R. Jebb, *Sophocles, the Plays and Fragments* vol. 7 Cambridge 1896, A. Pearson, *Sophoclis Fabulae* Oxford 1924, A. Dain, *Sophocle* vol.2 Paris 1958, R. Dawe, *Sophocles Tragoediae* vol.1 Leipzig 1975, H. Lloyd-Jones et N. Wilson, *Sophoclis Fabulae* Oxford 1990. なお、注7も参照 .

(後述参照) 4種は、Dindorfの名をap.cr.に掲げた上でその読み替え提案を本文に印字している。Dainは、上に本稿が提示したとおりの本文を印刷し、Dindorfの名をどこにも出していない。何らかの意図がそうすることにあったのかも知れないが、彼の処置は無視された、と言ってよい。特に、Daweによる校訂版の同箇所のap.crには、Dindorfの名がcorr(exit)とともに記されている。誰かが何か重要なことを言わないかぎり、この傾向は今後も長く続くであろうことは、容易に予想できる。

ここの読みに関する判断の核心は、文脈上、χρή が inepte (不適当な) な言葉であるかどうか、という点にかかっている。δρᾶν ἃ χρή (1373) が、アイアスの埋葬を実際には意味していることは誰の目にも明らかなことであろう。そのことに関する念押しの意味もあって、この台詞に至る状況をやや念入りすぎるかも知れないほどに説明しておいた。

そして、説明したごとくに、オデュッセウスは、その埋葬の必要性をアガメムノンを相手に説得してきたのである。だから、その埋葬を、「(おまえにとっての) 当為ないしは義務 (ἃ χρή)」と表現すべきではなくて、「おまえの欲していること (ἃ χρῇς)」と表現したほうがはるかに適当なことである、というのが、Dindorf以降の校訂者たちのほぼ一致した見解ということであるだろう。そしてそれは表面的には説得的な判断でもあるように思われる。

しかし、それは、χρή をいったん現代語 (「…ねばならぬ」、must, should, is necessary etc.) に置き換えた上での判断に対して言いうることであって、χρή の持つ前5世紀的な意味に私たちがもう少し接近をした上でそうすればそういうことにはならないのではないだろうか。

まず、私たちは、Barrettが明らかにしてくれた χρή という語彙の使用分布に関する特異な現象を思い出すべきだろう。彼は、E. *Hipp.* 4を伝えるふたつの伝承 (χρή L-P: δεῖ cett.) があることに関して、そこでは、L-Pの伝える χρή を採用すべきだと断言している。そして、ついでに、χρή というギリシア語について大変重要な事実を指摘している。すなわち、1　この語は、確かに「…ねばならぬ」であるが、「…」に補わなければならない行為や判断は、多く moralityとか、divine orderとかといった key-wordでくくれるものであり、 2　また、この語は、前4世紀以降、急激に δεῖ にとってかわられる場合が多くなる、という2点である。

ひとつの語の、ひとつの作品のひとつの箇所での伝承をめぐる問題に関しての文章にすればいくらか大袈裟すぎるかもしれないことを、簡略に指摘したい。大袈裟かも知れないが、しかし、いくつかの悲劇本文の箇所に見られる χρή ＞ χρῇς あるいは文脈によれば χρή ＞ χρῇ という読み替え提案は結局その「大袈裟なこと」に響いて来ざるをえない、という見通しが筆者にあるからそうするのだ、と理解して欲しい(4)。

第一に、ギリシア悲劇は、それを上演すべく運営し、またそれを享受すべく運営したポリス・アテナイという共同体と密接に関わるものであるという前提のもとで

(4)　例えば、Soph.については、F. Ellendt, *Lexicon Sophocleum,* Berlin 1872 s.v. χρή を見れば、近代の校訂者たちの処置がどんなにこの χρή という語をS.の本文から見えにくくしているか、よくわかるだろう。

読み解かれねばならない、という主張が最近頻繁になされている。いわゆる、ギリシア悲劇＝共同体言説行為論である。これだけで悲劇というテクスト群を断じようとするのは明らかに単純すぎることだが、そのことにさえ注意すれば、方向そのものは極めてまっとうな主張であると、私は考えている。第二に、これと関連してアテナイが祭政一致の社会であったという事実がある。第三に、ギリシア悲劇が前4世紀にはいって急激に創作力を失ったという、誰もが嘆く現実がある。第三の事実は、第一、第二と切っても切れない関係にあるだろう。ギリシア悲劇の没落には、それに関わった詩人たちの資質などというものとは無関係な部分もある。ギリシア悲劇を支えたポリス・アテナイという社会の構造の変質と連動した歴史的な現象としてギリシア悲劇の没落が起きた部分もある、と私は思うのである。χρή の使用の激減は、そういった歴史的な事実と連動しているのではないか。少なくとも、歴史的には、期を一にしている。

つまり、χρή という語は、古典期(前5世紀)アテナイ市民の社会生活、政治行動、個人としての生活の核心とあまりにも密着しすぎた語になってしまったので、そのひとつの社会が変質してしまうと、使用することができない語になってしまったのではないか。あまりにもひとつの時代の中心と深い関係を持ってしまった語彙は、その時代の終わりとともに使用そのものが困難になってしまうという事情は、近代人である我々はいやというほど見て来たはずだ。ここでは、ちょっと大袈裟に過ぎると叱られてしまうようなことを書いてしまったが、最初に、χρή ＞ χρῇς の読み替えに感じた私の疑問の一部は上に書いたようなことでもあったので、記した。

純粋に本文批判的な水準では、ことははるかに簡単である。すでに記したように、Campbell は、続く4人の英国人校訂者とは違う対応をしている。彼は、χρή に crux を付けて本文に印刷し、χρῇς を印刷していない。そして、注では、χρή は、not inexpressive, possibly right であると記している。彼が感じた本文批判上の躊躇は正しいところをついていたと私は思う。ただ、not inexpressive, possibly right と判断しながら、χρή をそのまま印刷してもよいかもしれない根拠として彼があげた平行例ないしは参照例は、彼自身を説得できなかったように、彼以降の校訂者たちを説得できなかった。彼があげたのは、S. *El.* 606 である(5):

Ελ. τοῦδέ γ' οὕνεκα
κήρυσσέ μ' εἰς ἅπαντας, εἴτε χρὴ κακήν,
εἴτε στόμαργον, εἴτ' ἀναιδείας πλέαν·

606 χρῇς Wunder

「・・・・・そのことに関してなら、
誰にでも行って告げるがいい。必要なら、私を悪い女だと言えばいいし、
また、口汚いとでも、恥じ知らずとでも言えばいい。」

ここの χρή についても、Dindorf 以降の、19-20世紀の校訂者たちは、*Aj.* 1373 と全く同じ対応をしている。ただ一点、読み替えを最初に提案したのが、Dindorf ではない点が異なるだけだ。

(5) S. *El.* 606 でも Campbell は χρή に crux を付けて印刷している。

Campbell の平行例は効を奏さなかった。その理由は明らかであるように思われる。χρή は、上に記したように、古典期のポリス社会の人間の祭政一致的な水準での行動上の「しばり」(あまり適語とは思えないが、仮に、共同体構成員が共有する社会的・宗教的な行動を判断する際の規範意識を本稿ではこう表現することにする)を根本的には、あるいは社会的に最も重大な場面では、指していると私は判断している。しかし S. *El.* 606 の χρή は、その「しばり」の根源的な場所とはとうてい言えそうでない場所で使われている。幾重にも屈折した説明が恐らくその使用については、弁護として(もし、ここで χρή を読むべきだ、と主張しようとすれば)必要であろう。ここでも写本の読みを回復すべきだ、と私は信じるが、回復するなら、*Aj.* 1373 を先にすべきだろう。なぜなら、こちらの方がごく根っこにあたるところで使われているので、回復は簡単だからだ。根っこの部分が回復されれば、自然に枝葉の部分の回復もされるというものである。

χρή がひとびとの宗教的行動に関する「しばり」を表現していると思われる例は、つまり、*Aj.* 1373 の χρή の平行例となるべきは、以下のごとくであるべきだろう(訳は、それひとつで決定的だと思われる最初の例にだけ付す):

S. *Ant.* 245-7

Αγγ. Καὶ δὴ λέγω σοι· τὸν νεκρόν τις ἀρτίως
θάψας βέβηκε κἀπὶ χρωτὶ διψίαν
κόνιν παλύνας κἀφαγιστεύσας ἃ χρή.

「あなたに言います。言いますよ。死体を、だれかが、いましがた、
埋め、皮膚の上には、乾いた土をふりかけ、
しかるべき、きよめのことをしたうえで、去ったというあとがあります」

E. *El.* 1140-1

Ελ. μή σ' αἰθαλώσῃ πολύκαπνον στέγος πέπλους.
θύσεις γὰρ οἷα χρή σε δαίμοσιν θύη.

E. *IA* 721

Αγ. θύσας γε θύμαθ' ἁμὲ χρὴ θῦσαι θεοῖς.

さしあたり、その文脈中に使われた他の語彙から見て、ギリシア悲劇の同時代人たちの宗教的な行動に際する「しばり」を意味するものであることが明らかな、上のようないくつかの χρή を引けば十分だろう。あるいは、もっと簡単に言ってしまえば、Campbell が、*Aj.* 1373 の χρή を弁護し、平行例として同じく「人は人をしかるべく埋葬せねばならない」という原則の上に立つ χρή — 表現(例えば上に引用した Soph. *Ant.* 245-7)を引いた上で、*Aj.* 1373 本文に χρή を印刷してさえいれば、それ以後の校訂者たちも、彼に従ったに違いない、とも思える。このふたつの例から、同胞とみなす者の死体を鳥や犬(や恐らく敵たち)による辱めから守る為に、埋葬しなければならないということ (mos, χρή)、そして、その為のなすべき行為がひと

つの行為一覧[6] (ἅ χρή) として確立していたこと、あとの２例からは、神々にささげものをするべきこと、そしてその儀式的行為には、これも行為一覧が確立していたことを推定しても行き過ぎではあるまい。むろん、これらの例を使わなくとも、それぐらいのことはどこからでも確言できるのだが。そして、θῦσαι ἅ χρή (神々に捧げるべきものを、しかるべき手続きでささげる) とか、δρᾶν ἅ χρή (宗教的行為をしかるべき式次第を満足させつつしかるべくとりおこなう) とか ἐφαγιστεῦσαι ἅ χρή (死体に対してなすべききよめの行為をしかるべくとりおこなう) とかという、宗教的な意味合いの強い、あるいは祭政一致的な意味合いの強い行為を表現するのに、当時のアテナイに、宗教行為を表す動詞 + ἅ χρή で、「しかるべく…する」という、簡略化した多かれ少なかれ慣用的な一連の表現が成立していたことをこれらの例から推定しても過つことはないだろう[7]。

Aj. 1373 では動詞に非常に一般的なものが選択されていることが *Ant.* 247 と違う (*Ant.* 247 では読み替えが提案されてない[8] ！) が、その理由のひとつは、その idiom が占めるべき韻律上の場が異なることがあげられる。もうひとつは、延々と続けられてきた死体をめぐる態度に関する議論が『アイアス』のこの場面ではすでにあり、ここであらためてその行為の対象が死体の埋葬その他の宗教行為であることをわざわざ表現する必要がなかった、ということがあげられるだろう。さらにもうひとつ、*Aj.* 1373 では、同胞の死体に対してなすべき行為を広く意味する動詞 (δρᾶν) で表現しなければならなかった点にもそれを求めることができるだろう。オデュッセウスは、血族的な関係からすれば、埋葬行為の中心をになう実行主体ではありえず、σοὶ δὲ δρᾶν ἔξεσθ' ἅ χρή (1373) に含まれた行為は、極めて広い意味で埋葬行為に関連するもの (埋葬儀式への協力、参加等) まで含んでいるはずだからである。

アガメムノンは、指揮系統が乱されたことに対して、指揮をとる者が感じる不快感から、アイアスの死体に対する処置を決めようとしている。これに対してオデュッセウスは、もう一歩下がって、さらに広い視点から、すなわちオリエント系非ギリ

(6) 行為一覧という複数の行為を推定させる用語を使ったのは、この種の慣用的に見える表現では、複数形が使われることがほとんどだからである。そして、言うまでもなく、こういった宗教的な儀式は複数の行為からなっている。

(7) 同じくアイアスの死体を埋葬するという行為を、この論争の直後に、オデュッセウスがテウクロスに、同じく χρή を使って、しかし極端には短縮しない形で表現している：ὅσων (= ἅ) χρὴ τοῖς ἀρίστοις ἀνδράσιν πονεῖν βροτούς.「人間なら、良きひとに対して当然せねばならないことども」(1379-80)。この例もまた、アイアスの死体を埋葬するという行為に対して χρή の語が使われることの正しさを証しているだろう。なお、ap.cr. を含まないので、Dindorf 以降の校訂本の中に勘定しなかったが、Stanford, *Ajax,* London 1963 は、まさしくこの例を引いて写本の読みを弁護し、印刷している。なぜ、校訂者たちが Stanford の見解に耳を貸さなかったのか？何らかの根拠があって、1379-80 を平行例としては認定しなかったのであろうが、これ以上ここでは踏み込まない。想像をもとにした議論になりかねないからである。ただ、少なくとも、Stanford の処置が正面からの議論という形をしていないことは確かである。

(8) S. *Ant.* 247 で読み替えが提案されていないのは、ここでは、そういう行為をした者が正体の分らない人物 (τις) だからであり、その人物の意志 (埋葬的行為を欲するか否か) は、文脈上想定することが唐突だからであろう。

シア語民族 (barbaroi) であるトロイア人を前にして戦争をしているギリシア人、つまり悲劇作者たちが使った語彙に従えば、θῦσαι ἃ χρή、δρᾶν ἃ χρή を共有する人間たちを指揮しているのだ、という視点から判断せよ、と迫ったというのが、ふたりの言い争いの根本的な構造であろう。

上のような説明はあるいは文化人類学を経た近代的な知性によるまとめかたに過ぎるかもしれない。オデュッセウス自身の語彙に従って、彼の主張を整理するならば、彼の比較的長い説得文 (1332-1345) と、それに続くスティコミュティアによる論争 (1346-1369) での彼の語彙の偏りを次のように簡単に指摘すれば、オデュッセウスの主張を浮き彫りにするのに足りるように思う：神の秩序 (τοὺς θεῶν νόμους 1342)、その下に成立する人間たちの世界の正義およびその系列語 (τὴν δίκην 1335, ἐνδίκως 1343, ἄνδρα δίκαιον 1344, ἄνδρας ἐνδίκους 1363)、それに従う形で成立する人間の行為に対する「よきこと」「よきひと」という判断 (τὸν ἐσθλόν 1345, καλόν 1347, τοῖς μὴ καλοῖς 1349, γενναῖος 1355)、そしてそういう判断と一体の形で成立するべき敵・味方の区別 (ἔχθιστος 1336, τοῖς φίλοις 1351, ὅδ' ἐχθρὸς 1355, τῆς ἔχθρας 1357, φίλοι 1359, φιλῶ 1361)。彼の主張の基調はこの異常な語彙の偏りから明らかであろう。

アガメムノンは、実は、最初のオデュッセウスの「演説」(1332-45) を聞いた時点で相手の論理にほとんど説得されてしまっていたのだ：τόν τοι τύραννον εὐσεβεῖν οὐ ῥᾴδιον 「いやまったく、王にとって神の秩序に従うのは容易ではないな」(1350)。ひとつの共同体の支配者は、当の共同体を支えている社会の論理に従わざるをえない。アイアスがやったことをどれほど個人的には苦々しく思っていても、である。アガメムノンはオデュッセウスの論理に屈服しなければならないことを、論争のはじめから覚悟していたということをこの発言は示している。

なぜか？オデュッセウスは、個人としての一時の感情ではなく、彼ら (この彼らを特定することはここでは試みない。とりあえずは、ここで議論しているふたりが属している社会の人間たち) が共有していたはずの社会行動上の原理あるいは規範に従えという、正気の人間なら抗うことの出来ない説得の論理をここで駆使しているからだ。アガメムノンのオデュッセウスに対する抵抗はもともと勝ち目のない議論なのである。アガメムノンがオデュッセウスの説得すること (アイアスの死体の正当な埋葬) を、ἃ χρή「(人間ならば) せねばならないこと」と自ら規定したうえで、屈服する (1373) のはある意味では、論争が始まった時点で決まっていたことを確認したにすぎないともいえるだろう。

Dindorf 以来採用されてきた読み替えは、アガメムノンの屈服を、オデュッセウスに対する単なる好意の付与を意味するものだと(9)、読ませかねないものであり、そういう意味で二人の論争の枠組みを見えにくくしかねないものである。そして、先の「大袈裟な」指摘をもう一度繰り返せば、ギリシア悲劇をより正確に時代に即して読むことを可能にするてがかりを、私たちの目から隠しかねないものなのである。

(北海道大学)

(9) もちろんそういう含みも明かにある。1371 参照。だから、本稿の主張は、好意の付与だけだと読めば、大事な点を見逃すことになる、という主張になろうか。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

エウリピデスと οὔ που 疑問文

安西眞

1

エウリピデス (以下 E.) が使った οὔ που で始まる直接疑問文の問題に関しては、Page (以下、研究者名による引用については、文献表参照のこと) 122, Diggle *Studies* 58, Zuntz 196n., Kannicht 2. 54-5 で言及されている。このうち最も詳細な言及は Kannnicht によるものである。その要点を繰り返す。1 οὔ που で始まる直接疑問文は、古典期のギリシア語作家の中で、E. の作品にだけ使用した痕跡が残されている。2 このやや異様に見えるかもしれない使用分布にもかかわらず、E. が使用したという事実に関しては、諸般の事情から疑いをさしはさむ余地はない (οὔ τί που 疑問文という、類似する用法については、第 3 章参照)。3 οὔ που 疑問文は、いわゆる「選集[1]」による伝承の部分では伝えられていない。この系統で伝承された悲劇では、ἦ που という組みあわせを使って οὔ που を置き換えたと考えられる。οὔ που は古典期以降も使われなかったので、あやまったギリシア語の使用であると、「選集」を伝承した書写者たちが判断した為である。その際、ἦ που が置き換えの道具として使われたのは、韻律上の価値が同一であったこと、意味が比較的よく似ていたことによると見られる。4 伝承の過程での介入の痕跡も残されている。すなわち、古代期では、D. Chr. が E. *El.* 235 (「選集」外の作品であり、L は、οὔ που を伝えている[2]) を ἦ που を使って間違えて引用しており、*Med.* (「選集」に属する) 1308 を伝える P. Harris 38 は、本文の部分では οὔ που を書写しているが、本文上部に ἦ που を書き加えている[3]。また、中世伝承については、写本 L の複数の箇所での Triclinius による修正の試みがその痕跡に該当する。

我々が現在校訂本をつうじて読んでいる E. 本文は、οὔ που ないしは ἦ που を使った直接疑問文に関してかなりゆれている。上のような事情で生じた不安定な写本伝承への対処法をめぐって、ルネサンス以来の校訂者たちの判断が必ずしも統一した観点のもとになされてこなかったことがある。また、現在でも、我々の目の前にある諸校訂本の編集者たちの判断は必ずしも細かいところまで一致していない。この 2 つが「ゆれ」の原因である。現在の最有力校訂本である Diggle *OCT* にも、本稿

(1) この用語についての最も身近な記述は、Barrett 50-53 であろう。さらに、Wilamowitz 1. 206-220 をも参照。

(2) L (Laurentianus 32.2) と P (Palatinus gr.287+Laurentianus conv.soppr.172) の関係については、Turyn 264-306 とその説を覆した Zuntz 16-180 を参照。現在の定説では (つまり Zuntz)、P は「選集」以外の E. 作品に関して、L のある段階 (Tr. による L 改変の最初の介入の後、2 回目の介入の前) の写しだということになっている (その他、例えば、Diggle *Euripidea* 298-304)。まだ、この問題について (ある説では、P と L は、同じ本から生じた兄弟) は、決着がついたとは言えない。本稿では定説の方によって記述している。つまり、P にどう書写されているかは無視している。

(3) 注 14 参照。

筆者の納得できる一定した判断が展開されているとは見えない。

本稿の目的は、両者のどちらを読むべきかを判断する際の、できるだけ客観的な、信頼できる手続きで導き出された基準を立てることにある。ただ、紙幅の関係上、すべての「ゆれ」に対して解答を出すには至らない。あくまでも基準を導くことを主眼にし、解答については、E. *Tr.* の2箇所を中心とし、それに関連するものについて、ついでに少し論じるという形にしたい。本稿筆者がたまたま同作品の校訂・注釈本を作成するという作業のごく初期的な段階にあることも、この形になったことについては、影響がある。

E. *Tr.* の該当する問題を含む2箇所を巡る Diggle の判断 (A では οὔ που、B では ἦ που) に本稿筆者は疑問を持っている。結論を先取りして、読むべき本文をまず提起する(カッコ内の A, B 等は引用文への通し番号の代用であり、また ap.cr. は当該の問題に関するものだけに限ってある):

(A) *Tr.* 59-62

Πο. ἦ πού νιν, ἔχθραν τὴν πρὶν ἐκβαλοῦσα, νῦν
ἐς οἶκτον ἦλθες πυρὶ κατηθαλωμένης;
Αθ. ἐκεῖσε πρῶτ' ἄνελθε· κοινώσῃ λόγους
καὶ συνθελήσεις ἂν ἐγὼ πρᾶξαι θέλω;

59 οὔ Wecklein (et Diggle)

— ひょっとしたらきみは、あれ(トロイア)に、灰になってしまったというので、
かつての敵意を捨てて、同情をおぼえるようになったのだろうか?
— 最初にあのことにもどりなさい。わたしと相談をする気があるのか?
そして、わたしがやろうとしてることに協力するつもりがあるのか?

(B) *Tr.* 161-3 (Anapaest)(4)

Χο. οἴ 'γώ, τί θέλουσ'; οὔ πού μ' ἤδη
ναυσθλώσουσιν πατρίας ἐκ γᾶς;
Εκ. οὐκ οἶδ', εἰκάζω δ' ἄταν.

161 οὔ Wecklein: ἦ VPQ

— なんてこと。なにをあのひとたちしようとしてるんでしょう。まさか。この
父祖の地から、もう、わたしを連れて行こうとしているのでは?
— 知りはしない。だが、災難が来てることは間違いなさそうだ。

上の2文が解答である。以下、その解答を導く為に、基礎とすべき例を全てあげる。L 写本に οὔ που という文字の痕跡が確実に残るものだけを一次的な資料とするべきであろう。分類については Kannicht に従っている(5)。

(4) まず、Wecklein は本文では写本の一致して伝える ἦ που を読んでいる、ということを報告しておく。その他にも、ap.cr. には問題はある。というのは、Wecklein は確かに ap.cr. に οὔ που を読むべきかもしれない、という見解を披露しているが、しかし、それは、本文の大幅な改定とともに「もし、οὔ που を読むのなら、こういう形で」というような含みで表記している。本稿筆者は ἦ που > οὔ που の書き換えだけで良い、と判断しているので、Wecklein の名のかわりに Anzai と表記すべきかもしれない。

(5) 本文と ap.cr. は、基本的に Diggle *OCT* に従っている。それで、例えば E-M に対する Kannicht の判断(分類はこれに従って行った)と、表示した ap.cr. の記述が食い

οὔ που の文字がそのまま L 写本に残されているもの：

(C) *El.* 235-6

Ηλ. οὔ που σπανίζων τοῦ καθ' ἡμέραν βίου;

Ορ. ἔχει μέν, ἀσθενὴς δὲ δὴ φεύγων ἀνήρ.

235 ἦ που σπανίζει Dio

(D) *El.* 630-1

Ορ. οὔ πού τις ὅστις γνωριεῖ μ' ἰδών, γέρον;

Πρ. δμῶες μέν εἰσιν, οἵ σέ γ' οὐκ εἶδόν ποτε.

L 写本において、οὔ που が本文に残されており、本文上部の空間 (supra lineam) その他に、Triclinius が ἦ που という修正読みを書き加えているもの：

(E) *IT* 930-1(6)

Ιφ. οὔ που νοσοῦντας θεῖος ὕβρισεν δόμους;

Ορ. οὐκ, ἀλλ' Ἐρινύων δεῖμά μ' ἐκβάλλει χθονός.

930 οὔ που L: οὔ πω Tr: ἦ που in margine

(F) *Hel.* 135-6

Ελ. οὔ πού νιν Ἑλένης αἰσχρὸν ὤλεσεν κλέος;

Τε. φασίν, βρόχῳ γ' ἅψασαν εὐγενῆ δέρην

135 οὔ που L: οὔ πω Tr^2: ἦ που Tr^{2s}

(G) *Hel.* 575-6(7)

Με. οὔ που φρονῶ μὲν εὖ, τὸ δ' ὄμμα μου νοσεῖ;

Ελ. οὐ γάρ με λεύσσων σὴν δάμαρθ' ὁρᾶν δοκεῖς;

575 οὔ που L: ἦ που Tr

(H) *Hel.* 600-2(8)

Με. τί δ' ἔστιν; οὔ που βαρβάρων συλᾶσθ' ὕπο;

Θε. θαυμάστ', ἔλασσον τοὔνομ' ἢ τὸ πρᾶγμ' ἔχον.

Με. λέγ' ὡς φέρεις τι τῇδε τῇ σπουδῇ νέον.

600 οὔ που L: ἦ που Tr

(I) *Hel.* 791-2(9)

Ελ. οὔ που προσῄτεις βίοτον; ὦ τάλαιν' ἐγώ.

違うことがあり得る。Tr. による写本 L への数次にわたる介入が、インクの色その他で識別出来るというのが Diggle の考えで、その判断が Tr の記号の下位分類に表れている。黒白フィルムで見た者としては従うしかないので、Diggle の表記をそのまま使っている。黒白フィルムで補えることは、以下の注でいくつか報告してある。

(6) Diggle *OCT* には全く報告されてないが、L には ap.cr. に示したように記されている。Tr の下位分類は、黒白フィルムでは決定出来ないが、他の例から判断するに、Tr^2 であろう。報告されていない、とは言ったが、そのことで Diggle *OCT* を批判している訳ではない。校訂本文につける ap.cr. は、写本伝承を明かにする為にだけ付けられるものではないからだ。

(7) 注 6 に同じ。

(8) 注 6 に同じ。

(9) 注 6 に同じ。

Mε.　τοὔργον μὲν ἦν τοῦτ', ὄνομα δ' οὐκ εἶχεν τόδε.

791 οὔ που L: ἦ που Tr

L 写本において、本文に Triclinius が介入して、変更を加えているもの：

(J) *IA* 670-1(10)

Iφ.　οὔ πού μ' ἐς ἄλλα δώματ' οἰκίζεις, πάτερ;

Aγ.　ἐᾶτέ'· οὐ χρὴ τοιάδ' εἰδέναι κόρας.

670 οὔ ・πού L

(K) *Suppl.* 153-4(11)

Θη.　οὔ πού σφ' ἀδελφὸς χρημάτων νοσφίζεται;

Aδ.　ταύτῃ δικάζων ἦλθον· εἶτ' ἀπωλόμην.

153 οὔ που Kirchhoff: οὔπω L: ἦ που Tr²

(L) *HF* 1101-4

Hλ.　οὔ που κατῆλθον αὖθις εἰς Ἅιδου πάλιν,
Εὐρυσθέως δίαυλον ἐξ Ἅιδου μολών;
ἀλλ' οὔτε Σισύφειον εἰσορῶ πέτρον
Πλούτωνά τ' οὐδὲ σκῆπτρα Δήμητρος κόρης.

1101 οὔ που Dindorf: οὔπω L

(M) *HF* 1172-5(12)

Θη.　ἔα· τί νεκρῶν τῶνδε πληθύει πέδον;
οὔ που λέλειμμαι καὶ νεωτέρων κακῶν
ὕστερος ἀφῖγμαι; τίς τάδ' ἔκτεινεν τέκνα;
τίνος γεγῶσαν τήνδ' ὁρῶ ξυνάορον;

1173 οὔ που Dindorf: οὔ που τι L ut vid. (legendum?): οὔ πω τι L^PC

以上の痕跡は L 写本に見られる。既に言ったことであるが、「選集」によって伝承された悲劇には、οὔ που という文字の痕跡は中世写本中にはない。しかし、これらに属するにもかかわらず、*Med.* 1308 にも上記の例に準じた伝承上の証拠能力があるとみなすべきだろう(13)：

---

(10) 写本報告は Kannicht に従う。確かにはっきりとした点が 2 語に分つように打たれている。

(11) ap.cr. に記した Diggle の報告と、Collard の報告 (ἧ που Tr²) とが食い違う。恐らく Collard の間違い。η という字は ου (L) をつぶして太い字で書き直されている。さらに、L の οὔ についた気息記号と鋭アクセント記号をそのまま使って、Tr. は気息記号と、(鋭アクセント記号のさらに右側に重アクセント記号のようなものを書き加えて作った屋根型の) 曲アクセントを作り出して、並列させている (' ^)。一見、οὔ > ἥ > ἦ と変化していったようにも見えなくはないが、ἥ が文字として機能したことはない、と思われる。

(12) 注 19 参照。

(13) Kannicht 2. 54-55 も同じ見解である。Diggle は、Wecklein と同様に、中世写本の読みの方を採用している。この両者のどちらを選択するかという問題に限れば、全般的に Diggle は Wecklein にほぼ従った判断をしていると言えるようだ。合唱隊はイアソンの切実な問いに対していくらかズレた回答をしているように見える。彼女

(N) *Med.* 1308-9

Ια. τί δ' ἔστιν; οὔ που κἄμ' ἀποκτεῖναι θέλει;

Χο. παῖδες τεθνᾶσι χειρὶ μητρῴᾳ σέθεν.

1308 ου που Π (P. Harris 38): ἦ που Πˢ: ἤ πω vel ἦ που codd.

Denniston, 492 には、οὔ που という形式が、E. に固有な用法であるという事実が記されている。また、οὔ που と οὔ τί που は意味が同じで (そのとおりであると本稿筆者も判断する―後述第 3 章参照)、incredulous or reluctant questions を導入する機能を有する、という記述も見られる。そして、Denniston が世に出た後は、ただその記述を引用するという形でのみ、この両者のうちのどちらを読むかという問題がある箇所は、処理され検討されて来たと言ってよいであろう(14)。この問題について、Denniston 以上の権威は存在しなかったのだ。しかし、結論から先に言ってしまえば、この種の判断を迫られる箇所について、Denniston の記述は漠然とし過ぎているということになるのだろう。だから、以下では、「文体」的にもう少し接近を試み、そして、この種の判断に関して汎用可能な記述を試みる。

2

上の例から得られる E. の οὔ που 疑問文にほぼ共通の規定は次のようなものではないか。

a［疑問の内容］この疑問文を発している者は、自分自身 (D, F, G, J, L, M, N) や自分に極めて近しい人の安全や、名誉、利益等にとって極めて好ましくないこと、だからこそまた認めたくないことが起きているのではないか、あるいは起きようとしているのではないか、という疑いを持っている。K は、やや性質が異なっているように見える。上の例と関連させる形でその疑問の内容を記述すれば次のようになるだろう。話者は、自分の人間観や社会観、あるいは社会の通念に照らせば、とうてい認め難いことが起きたのではないかと疑っている、と。これらをまとめて、別の言い方をすればこう記述することもできるだろう。この疑問文を発する者は、自分自身を冷静な第 3 者の立場に置くことが出来ないような事柄について、重大なことが起きたか、起きつつあるか、起ころうとしている、と疑って、この形式の疑問文を発している。

b［回答を迫る圧力］発せられた疑問文は、対話の相手に回答を強要するだけの圧力を持っている。これは a に記した οὔ που 疑問文を構成する疑念の性格と一致している。ひとは単に興味を抱いた、自分を第 3 者の位置に置くことができるような種類の疑念を巡って、対話相手に回答圧力を感じさせるような疑問文を発することなど出来はしない。いちおう、例を確認しておく。例外らしく見えるものに説明を加えておけば十分であろう。L と M は対話相手を欠いているので、普通の意味での対話相手からの回答を持たない。しかし、ヘラクレスもテセウスも、自分自身がそ

たちは、τί δ' ἔστιν; という問いには答えているが、「自分も殺すのでは？」というイアソンの本当の問いには答えていないからだ。「回答を迫る圧力」という点に関して、οὔ που を読むにはいくらか問題を残す。この問題に関しては第 3 章で再び論じる。

(14) たとえば、Diggle *Studies* 58 を見よ。

の対話相手となって、回答を迫る圧力を受け取る。そしてその疑問に答えるべき手がかりを舞台の上に探し、その手がかりを見つけた上で答えを自分で出している。Mについては、さらに補足が必要だろう。テセウスが自分が感じた疑問に関して舞台から直接得ることのできた手がかり(つまり引用された範囲内で得たもの、ということになる)は、確実な回答を構成しうるまでに至っておらず、まだ疑問文の形をしている(1174b-5)。かれはまだ「この情景の意味は何か?まさか、自分の不名誉につながることではないだろうな」という疑念を捨てることができず、続く、アムピトリュオンとの場での一問一答(〜1202)の連続をつうじて回答を得るという形になっている。すべて引用すると長くなり過ぎるので引用を短縮したにすぎない。それほど疑念は発言者そのひとにとって深刻で切迫したものなのだ。Jについても説明が必要だろう。表面上、ここでは回答が拒否されており、その意味では、Aと似ているからだ。Aとの比較を一部先取りして解説すると、アガメムノンの回答は、本来答えるべきかも知れない正しい情報が、自分では答えることが出来ない、あるいは答えたくない内容なので、こういう形をしているのだ。そして、その回答拒否そのものによって、イピゲネイアの疑念(自分が属すべき家が変るのでは、という疑念)が真相をついているものであることを我々に告白している。そのような回答拒否である。この種の回答拒否は我々もよく知っているはずである。イピゲネイアの発した疑問文は結局、否応ない回答を相手から引き出すだけの圧力を持っていたのだ。

c［叫び声、その他］もうひとつ、οὔ που 疑問文が引き起こす、文字に表れざるを得ない特徴がある。それは、問いの深刻さに応じて、その発話者に生じる緊張である。驚きと呼んでいいかもしれない。そして、その緊張が発生させるところの、短い驚きの言葉、呼格、等である:γέρον (D), τί δ' ἔστιν; (H, N), ὦ τάλαιν' ἐγώ (I), πάτερ (J), ἔα (M)。

以上、要するに、οὔ που 疑問文は、深刻な、場合によっては発話者の存在そのものを揺るがしかねないような疑念を核に成立している、と結論付けてよいだろう。本稿が目的としている本文批判上の問題について直接論じる前に、以上のような οὔ που 理解を前提に、ἦ που の問題にも触れておきたい。Denniston 286 は、ἦ που の機能を affirmative と interrogative に分けており、それぞれ、ほぼ拮抗する数の例文をあげている。割いているスペースも同程度である。このことが既に ἦ που の、οὔ που と比較した場合の、ある決定的な特徴を言い表わしている。ἦ που に導かれる文に疑問符を付するか否かは、その疑問文が突き付けられた相手の反応如何にかかっているのだ。あるいは、その反応をどう判断するかという本文編者の判断如何にかかっているのだ。否応ない回答を迫る圧力はけして大きくはない、と判断してよいであろう。また、Denniston が、affirmative な例に 2 回繰り返して付けている 'ironical' というコメントから、さらに、interrogative なものと分類している例に付けるべき代表的な訳としてかれが提示している 'I expect....?' などから、次のようなかれの判断を引き出しても不当ではないだろう、と思う。つまり、もし仮に疑問符を付すべきだ、とかれが判断している例でも、その疑問文には発言者の深刻な疑念は含まれてはいない、とかれは考えている。あるいは先に記述した οὔ που 理解に関連させていうなら、そこに含まれている疑念は、疑問文の発言者が自分自身

を疑念に対する第3者としての場所に置くことができる種類のものだということになる。ἦ που 疑問文に関する以上のような Denniston の解説に対しては、本稿筆者は基本的には、疑問を持っていない(15)。

以上に提示した οὔ που が持ちうる意味の広さは、E. における οὔ που が実際に持っていた意味の領域よりも狭い恐れがある(広いという恐れはない)。なぜなら中世写本その他にいかなる痕跡もない、純粋に近代の編集者の判断によって認められている οὔ που 疑問文の例が実際にまだあり、それらは本稿の検討の対象にならなかったからだ。そしてそこに、本稿の想定した意味範囲を越えるものがあるかもしれないからである。しかし、本稿の対象とした具体的な例(例文 A, B)に限れば、以上に定めた範囲で判断を下すことが出来るように思える。

ポセイドンの発言は、先ほどの a-c のどの基準も満たさない。Wecklein-Diggle に従って οὔ που を読むのは、悪しき判断であろう。写本の読みを維持すべきである。疑念を巡ってポセイドンの緊張が高まっているとは言えない。少なくともこれまで見た例に見られた interjection の類を、かの神はここでは発してはいない。また、アテナが、死すべき人間どもの一部にしか過ぎないトロイア人に対して、かつて持っていた敵意を捨てて同情を持つようになったところで、ポセイドンの生存や名誉に重大な脅威を与えるはずもない。アテナは、この問い(疑問文の形で印刷する従来の判断は言うまでもなく正しい)に対してまともに答えることを拒否する。しかし、この拒否は、アガメムノンがイピゲネイアの問いに答えることを拒否した J と、同じ意味を持つものではない。ポセイドンの疑念がアテナについての、答えることのできない真相を明らかにしているので、アテナが回答を拒否したとは誰も読まない。実際、引用部以降のアテナの台詞からも分るように(69-73、後述参照)、「同情」というポセイドンの推定のキーワードは的はずれなものなのだ。

彼女の回答拒否(61)は、たんに話題が彼女にとって好ましくない、もっと自分が話題にしたいことがある、という意味での、話題継続拒否しか意味しない。ポセイドンの問いは、ironical という Denniston の評語に頼って言うと、揶揄に近い、冷やかし、ともいうべきニュアンスを持っている、と読むべきだ。また、ἐκεῖσε πρῶτ' ἄνελθε· (61)には、的はずれな揶揄に対する不快感の表明を読むべきだろう。

もっとも、揶揄や冷やかしが根深い(切迫した、というのとも違う)問い、あるいは疑念に根ざしていることもあり得る。そのことは、引用部分の後のやりとりが示している。ポセイドンは、「協力するのか」というアテナの問いかけに、あっさり「承知した」と答える。そして再び 59-60 の疑問文をかれに言わせた疑念に立ち戻ってしつこくアテナに尋ねる。ポセイドンの疑念の本来の形は「アテナの心変りの理由は何か」というものであることが明らかとなり(67-8)、ついにその問いに対してアテナから満足すべき答を得る。彼女の心変りの本当の理由は、トロイア人への同情ではなくて、アカイア人たちが彼女に対して行った無礼に対する怒りであったのだ。

ポセイドンの 59-60 の問いは、かれがアテナのふるまいに対した抱いた、抑え切

(15) interrogative な例として Denniston が E. から引用しているもののうち、*Med.* 1308 は先に指摘し、後でも論じるように、削除すべきだろうと本稿筆者は判断する。*Or.* 435 も極めて疑わしい例である。ここでは議論しないが恐らく οὔ που を読むべきところ。

れない好奇心あるいは不審感 —οὔ που 疑問文の底にある「恐れ」の感情と対比せよ— のひとつの発現形態であると言ってよい。そのような感情に基づく追求が切迫感に満ちた問いで開始される理由はない。好奇心を満足させるしつこい尋問あるいは追求が、軽い調子の質問から始まることがあることは、我々もよく知っているはずだ。

逆に、B では、写本にかかわらず、οὔ που を読むべきだと、本稿筆者は判断する。つまり、οὔ που を ἦ που で置き換える介入が本文伝承の過程で起きたと考えている。短い叫び声の類いが発せられており (οἴ 'γώ)、自分達の生活の根幹に関わることがらについて、合唱隊を構成する女性たちは疑念 (故郷を、そして自分を守るものを失うという恐怖) を抱いている。また、そういう深刻な問いであるからこそ、ヘカベも、知識がないから、諾否を明確には言えなくとも、少なくともまっすぐに答えてはいる。そういう意味では、写本にもかかわらず οὔ που を読むことに躊躇はない。

唯一躊躇があるとすれば、これが anapaest の中でやりとりされている発言の一部だとという事実にある。これまでに見た οὔ που 疑問文はいずれも iambic trimeter でのやりとりの中で使われているからだ。つまり、B で οὔ που を読むかどうかという問いは次のような問いと絡み合っている。1 οὔ που 疑問文は、colloquial / elevated というような文体上の水準でどこに位置するのか、2 anapaest という韻律がどの程度 elevated language と必然の糸で結ばれているのか、3 οὔ που 疑問文がどうして E. の iambic trimeter 内でしか、他では使われていないのか、というような問いである。

いずれも、安心して依拠することのできる解答を私たちの学問がすでに得てしまった、という種類の問題ではない。また、それを得ようとすれば、おおがかりな調査が必要になる問題である。もちろん、この小論が収容しきれる問題ではない。ここでは、さきほど触れた「躊躇」に関する限りで言いうることだけを言っておきたい。そして、もうひとつ、本稿が、ことがらの性質上、是非触れておかねばならない問題も、最後に論じておきたい。つまり、οὔ που / οὔ τί που に違いはあるのか、という問題である。

3

まず、οὔ που / οὔ τί που の違いということから明らかにしたい。以下、E. における οὔ τί που の全例をあげる：

(O) *HF* 965-7

Εξ. Ὦ παῖ, τί πάσχεις; τίς ὁ τρόπος ξενώσεως
τῆσδ'; οὔ τί που φόνος σ' ἐβάκχευσεν νεκρῶν
οὓς ἄρτι καίνεις;

(P) *Ion* 1113-5

Χο. οἴμοι, τί λέξεις; οὔ τί που λελήμμεθα
κρυφαῖον ἐς παῖδ' ἐκπορίζουσαι φόνον;
Θε. ἔγνως·

(Q) *Or.* 1510-1

Ορ.　οὔ τί που κραυγὴν ἔθηκας, Μενέλεῳ βοηδρομεῖν;
Φρ.　σοὶ μὲν οὖν ἔγωγ' ἀμύνειν· ἀξιώτερος γὰρ εἶ.

(R) *Hel.* 94-6

Τε.　Αἴας μ' ἀδελφὸς ὤλεσ' ἐν Τροίᾳ θανών.
Ελ.　πῶς; οὔ τί που σῷ φασγάνῳ βίου στερείς;
Τε.　οἰκεῖον αὐτὸν ὤλεσ' ἅλμ' ἐπὶ ξίφος.

(S) *Hel.* 475-6

Με.　πότ'; οὔ τί που λελήσμεθ' ἐξ ἄντρων λέχος;
Γρ.　πρὶν τοὺς Ἀχαιούς, ὦ ξέν', ἐς Τροίαν μολεῖν.

(T) *Hel.* 541-2

Ελ.　ἔα, τίς οὗτος; οὔ τί που κρυπτεύομαι
　　Πρωτέως ἀσέπτου παιδὸς ἐκ βουλευμάτων;

疑問文のニュアンスを表現する小辞として、少なくとも E. の中では、οὔ τί που と οὔ που に差違はなかった、という結論を出してもよいのではないだろうか。切迫した感情を表現する短い文を先行させたり、呼格や叫び声をともなっている (O, P, S, T)。そこに表現された疑念は、直接、疑問文の発言者自身の (P, Q, S, T)、あるいは発言者に極めて近しい人の (O) 安全や、利益や名誉に関わっている。R はそれらとは種類を異にする疑念を表明しているが、この疑念の核はどうやらヘレネの倫理観の根底にかかわっていることがらのようだ(テウクロスがアイアスを殺したのか？兄弟殺しないしは主殺しがなされたのか？)。Kの例を参照してほしい。οὔ που によって導入される疑問文にも同じ種類のものはあったのだ。

回答についても見ておこう。O と T を除いて対話者は疑問文に対して直接回答している。O では対話の相手は狂ったヘラクレスであるから、当然言葉による反応はない。しかし、かれの狂った深刻な反応によって、疑問文が相手に回答を迫るだけの圧力を持っていたことを明らかにしている。疑問のやりとりが使者の報告の中に組み込まれているので、複雑に見えるが、疑問文がその対話者に回答を迫る圧力を持っていたことだけは、報告も明らかにしている(16)。T では、まだ対話者を得ていない登場人物(ヘレネ)がひとりで、自分の安全の脅威となりうる人物を(実際はメネラオスである人物をテオクリュメノスであると誤解して)舞台の上に発見して、引用された疑問文を発している。彼女に生じた感情は言うまでもなく身の安全に対する恐怖である。それが深刻で切迫した疑念であることは、続く彼女の行動で明らかだ。545 までの彼女の発言は、彼女がその疑念に対して取った行動の自己描写で

(16) 伝令の報告の中に、引用部分はある。いわば劇中劇であるので、疑念をめぐる人間の心理的な関係は複雑になっている。伝令の立場から言えば、「まさか、息子は狂ったのではないか？」という父親の疑問を伝えた以上、その回答も伝えねばならない義務が伝令の中に生じたということになる。そういう圧力を οὔ που 疑問文は持っている、ということであろう。そして、演劇的に言えば、そういう疑問文を伝令が伝えた以上、その回答を聞かずにはいられない感情が、その報告を聞いている合唱隊のなかに生じたのだ、と言うべきだろう。もちろん、この回答を聞かずにはいられない感情は観客の間にも生じたに違いない。

ある。彼女は、瞬時にその疑念に対する回答を求めるべく行動を開始し、回答を見つけ出し、そしてその回答が示している危険から自分の安全を確保するための行動を取るのだ。L, M を参照のこと。つまり、οὔ τί που / οὔ που 疑問文では、仮にその切迫した疑問をぶつけ、回答を得るべき相手が舞台の上に存在しない場合でも、舞台の上の進行によって、その回答はすぐに求められるのだ。そのように E. は舞台を組み立てているのである。

さらにもう一点付け加えておきたい。*Med.* 1308 (例文 N) では、P. Harris 本文の伝える読み (οὔ που) の方を、中世写本が一致して伝える ἦ που を排して印字している。この選択が正しいものであるという根拠のひとつを、R や S との比較で得ることが出来るのではないかと本稿筆者は考えている。つまり、N で οὔ που を読めば、疑問文とそれへの回答からなる 3 組の対話 (N, R, S) は、対話としての構造を共有することになり、E. に固有な対話組み立て法として、その 3 例をひとつのものとして受け取ることを可能ならしめるのではないかと考えるのだ。

ある深刻な疑念を抱いた人物が、ごく短い、最初に頭に浮かんだ包括的な疑問文を発する (τί δ' ἔστιν; πῶς; ποῦ;)。この短い発言は、発言者の緊張の現れでもある (οὔ που 疑問文の特徴 c)。そして、その短い疑問文では表現として足りなかった部分、すなわち疑問の具体相、個別相を、短い疑問文に対するいわば説明として、質問者は付け加える。回答者は、質問者のそういった心理を深く理解しない者であるから (だから、同時に後半の οὔ που 疑問文の持つ回答を迫る圧力も理解しない)、最初の短い包括的な疑問に答える。そしてその回答によって、質問者は、自身の心理のより深いところに関わるそれぞれの 2 つ目の切迫した疑念への答をも得て、一応、質問と回答という組は完成する。このように関連させて理解するならば、E. の対話部構成法の一部についてある統一した、方法ないしは癖と呼ぶに値するものを、私たちは得ることができるのではないか(17) ?

οὔ τί που と οὔ που の間には、ある一定の性格を持った疑問文を導入する、という機能の部分ではどんな差違もなく、唯一異なるのは、韻律上の価値である。そういう意味で、Stevens の「両者は metrical variant である」とする見解(18) を賛同とともに引いておきたい。長・長 (οὔ που) の方が、長・短・長 (οὔ τί που) より、この idiom を iambic trimeter 内で使う際に便利だということがまずあるだろう。なぜなら、この idiom は、疑問文の文頭に来るという性質からして、iambic trimeter の冒頭で使われることが極めて多いからである。その上で、恐らく τι と που がどち

(17) Kannicht (2. 55 n20) は、例 H との類似を理由に (もちろん最大の理由は P. Harris 38 本文が οὔ που を読んでいるということなのだが)、*Med.* 1308 で οὔ που を読むべきだとしている。つまり、τί δ' ἔστιν; という短い疑問文に οὔ που 疑問文が続くという両者の類似を根拠としている。似てはいるが、H では、従者の答がややあいまいであったが為に、さらにメネラオスの追求が続く点、ここであげた例とも *Med.* 1308 とも異なっている。類似は表面的かもしれない。ここで説明した問いと答の形式を E. が好むと理解した方がより正確であり、作劇技法的にも意味深いように思える。3 例ともに、具体的で深刻な問いの方に答が向かないのは、ひょっとしたら、οὔ που 疑問文を直接相手に向けないで、観客の方に向かって言ったからかもしれない。なお、この問いと答のズレという特徴は、Mastronarde 35-51 も議論している。議論の狙いは違っているが。

(18) Stevens 24

らも文副詞として働き、しかも意味においても「不定の程度」を表すという類似したものであるということから、一方の脱落を引き起こしたのではないだろうか[19]。

関連して、この idiom を (οὔ που について、疑問符つきで Kannicht[20]、双方について、Stevens[21]) 日常語的な表現であるとする評価について言葉を加えておきたい。日常語的な表現かどうかという判断を単純に下すことは、少なくともこれらの例については本稿筆者は避けたい。前5世紀末のアテネにおける日常語の使用に関して、私たちは十分な資料を持っているとはとうてい言えないからだ。Kannicht の疑問符もそういう意味だと思う。特殊な表現であったことは間違いない。だから、古代後期や中世の書写者による書き換えを誘発したのだ。日常語だというラベルを貼る言語学者たちの見解に全く根拠がないとは言えない。ただ、私たちが間違いなく言えることは、その実際の使用分布からして、そして、ここまでに明らかにした、回答を強く迫る表現上の機能を持つという性格からして、極めて対話的な idiom であったということ、ここまでではないだろうか。

日常語だというラベルが正しいかどうかよりはるかに重要だと思われることがあるので、そのことに簡単に触れておきたい。先に引いた Denniston は、οὔ που と οὔ τί που の解説の際、E. 悲劇の深い特質に関わるであろう事実を書き加えている。かれの解説によれば、アイスキュロスは、どちらの形も使っていない。ソフォクレスでは、後期の悲劇 (*Ph.*) で一回だけ οὔ τί που が使われている。E. では、本稿でこれまでに引いたものだけで、双方を合わせれば 20 例前後が使われている。現行の校訂本に依拠すれば、この数は確実に増える。かれは metrical variant さえ作り出した (少なくとも、他の作家が使わなかったのに、使った)。οὔ που あるいは οὔ τί που が使われやすいように E. の悲劇は出来ている、と言えるのではないか。あるいは、そういう言葉を口にすることの多い人物がかれの舞台には登場する、ということではないだろうか。例えば、アイスキュロスの『アガメムノン』で、クリュタイメストラがアガメムノンの背後に、連れて来られたカッサンドラを認める場面がある (950ff.)。この場面で、クリュタイメストラが「まさかあなたは私の正妻としての名誉を…？」というような疑問文を口にするというような場面を、アイスキュロスが創作の際に、採用すべき選択肢として、検討の対象にしたとは私には思えないのだ。いや、頭に浮かべたとさえ思えないのだ。かれの全作品が私たちのところに伝わっていたとしても、その類の、登場人物が自分の生命や名誉についてうろたえる場面が、あったとは思えない。οὔ που 疑問文が言語として日常的かあるいは高貴

(19) ここで引用例 M とその ap.cr. を見て欲しい。印刷している Diggle の採用している本文は、Dindorf の修正提案である。この提案は最近のすべての校訂者が採用している。もちろん、中世写本の伝える形は韻律上極めて異例の形をしていて何らかの外科的処置が必要であることは認めなければなるまい。そして、οὔ πού τι を残す外科的処置が提案されたこともないし、本稿筆者も思いつかない。しかし、οὔ πού τι という語順を間違いなく L が伝えていることは注目すべきことである。この形を残すことが出来れば、非常に大きな確率で、E. が iambic trimeter の影響下に οὔ που という idiom を作り出した、と言うことができるのではないかと思う。οὔ τί που という定順が、iambic trimeter の影響で形をくずした例が文字の跡に残されていることになるからだ。

(20) Kannicht 2. 54

(21) Stevens 24

か、という疑問よりこのほうがはるかに、少なくとも悲劇作者としてのE.（や、あるいはアイスキュロス）に肉迫するという意味では、重要であるように思える。

Anapaest律と、οὔ που の採用如何ということに関しては、今のところ上のような曲球を投げるしかない。ただ、さらにここでひとつ言えることがあるとすれば、Bで読みたいοὔ που はanapaestを構成してはいるが、同時に対話の一部でもあるということである。他にοὔ που あるいはοὔ τί που を確実に認めることが出来るのは、すべて対話か、仮想対話（すなわち自分との対話）である。悲劇におけるanapaest律はかなり広い概念であり、Bで見つかるanapaestは、その中でも、対話を構成する部分で使われている点を考えれば、最もiambic trimeterに近いところに位置するanapaest文であることは間違いないことであろう。

以上、まとめるならば、次のようになる。Aについては、Wecklein-Diggleにかかわらず、中世写本の読みを維持すべきであること。これについては、本稿筆者は、得られたデータからそうするべきだと確信している。Bについては、ひとつ懸念があるものの、本論が明かにしたοὔ που のふるまいを勘案するならば、中世写本の伝えるῆ που という読みは、本来のοὔ που という読みが伝承の過程で置き換えられてしまった箇所であると判断するのがより正しい、と考えている。

文献表

（各項の最初の表示の形で本文や注では言及している）

Barett: W. S. Barrett, *Euripides, Hippolytos,* edited with introduction and commentary, Oxford 1964

Collard: C. Collard, *Euripides, Supplices,* 2vols, Groningen 1975

Denniston: J. D. Denniston (rev. by K. J. Dover), *The Greek Particles,* 2nd ed. Oxford 1954

Diggle, *OCT*: J. Diggle, *Euripidis Fabulae,* Oxford 1981 (ii), 1984 (i), 1994 (iii)

Diggle, *Studies*: J. Diggle, *Studies on the Text of Euripides,* Oxford 1981

Diggle, *Euripidea*: J. Diggle, *Euripidea,* Oxford 1994

Kannicht: R. Kannicht, *Euripides: Helena,* herausgegeben und erklärt, Bd.1-2, Heidelberg 1969

Mastronarde: D. J. Mastronarde, *Contact and Discontinuity: Some Conventions of Speech and Action on the Greek Tragic Stage,* Berkeley-Los Angels-London 1979

Page: D. Page, *Euripides, Medea* edited with introduction and commentary, Oxford 1952

Stevens: P. T. Stevens, *Colloquial Expressions in Euripides,* Wiesbaden 1976

Turyn: A. Turyn, *The Byzantine Manuscript Tradition of the Tragedies of Euripides,* Rome 1970

Wecklein: R. Prinz et N. Wecklein, *Euripides, Fabulae,* Leipzig 1878-1902

Wilamowitz: U. von Wilamowitz-Moellendorf, *Euripides, Herakles* Bd. 1-3, Berlin 1895

Zuntz: G. Zuntz, *An Inquiary into the Transmission of the Plays of Euripides*, Cambridge 1965

（北海道大学）

Aristophanes, *Pax* 1268-1304
—叙事詩およびエレゲイア詩のパロディーについて

佐野好則

I

アリストパネース『平和』には、ラーマコスの息子とクレオーニュモスの息子が登場し、それぞれ叙事詩とエレゲイア詩を歌うパロディー場面 (1268-1304) がある。ラーマコスの息子が歌う最初の部分は Epic Cycle の『エピゴノイ』の冒頭であり、クレオーニュモスの息子が歌うのはアルキロコス断片 5 (West) である。これら二人の子供が歌う叙事詩とエレゲイア詩は、『エピゴノイ』とアルキロコスの断片を校訂する際の重要な資料である。

一般に喜劇において他の作品が引用される場合、しばしば変更が加えられる。『エピゴノイ』とアルキロコスの断片を校訂する場合にも、アリストパネースによって加えられた変更を見極める必要がある。実際、『エピゴノイ』とアルキロコス断片校訂者の間には、アリストパネースによって加えられた変更の範囲に関して見解の相違がある。この変更の範囲を見極めるためには、他の著作家や『平和』の古註記者によって引用された『エピゴノイ』やアルキロコス断片5の詩句との比較とともに、『平和』の文脈の中で、いかなる効果を持つものとしてそれらの叙事詩やエレゲイア詩が引用されているのかを検討する必要があろう。

本稿において、一方では『エピゴノイ』およびアルキロコス断片5の引用と『平和』の文脈との関連性を考慮に入れ、これらの引用によって得られる喜劇的効果を検討する。他方、そのことによって、アリストパネースがそれぞれの作品を引用する際に加えた変更の範囲を検討し、『エピゴノイ』とアルキロコスの断片校訂に関する議論に寄与することを目的とする。

II

トリュガイオスはラーマコスの息子[1]が登場する際に、「これから歌うものの、歌い始めの予行をするために (ἵνα ἅττ' ᾄσεται προαναβάληται)」外に出てきたようだと述べ (1266-7 行)、その子供に対して「まず歌い始めをやってみなさい (πρότερον ἀναβαλοῦ)」と言う (1269 行)。それに続いてラーマコスの息子はダクテュロスの韻律で歌い出す。

Π. Λ.　νῦν αὖθ' ὁπλοτέρων ἀνδρῶν ἀρχώμεθα ——
Τρ.　　παῦσαι
　　ὁπλοτέρους ᾄδων . . .　(1270-1)
ラ.の息子　さあ今度は若武者たちから歌い始めよう——
トリュ.　　やめてくれ、
　　若武者たちを歌うのは。

(1) この少年が誰の息子であるかは 1290 行で判明する。

1270行についての古註はこれを『エピゴノイ』の冒頭であるとし(2)、また『ホメーロスとヘーシオドスの歌くらべ』(以下 *Certamen*)でも『エピゴノイ』の冒頭として第五脚まで同一の詩句が引用されている。

Ἐπιγόνους . . . ἧς ἡ ἀρχή·

νῦν αὖθ' ὁπλοτέρων ἀνδρῶν ἀρχώμεθα Μοῦσαι.

(*Certamen* 258-9 Allen = *Epigoni* fr. 1 Davies *EGF*)

従って1270行は『エピゴノイ』の冒頭から取られたものであることは確実であろう。1270行末のトリュガイオスの科白となっている παῦσαι という語は、もとの『エピゴノイ』の行末の Μοῦσαι との発音の類似を意識して選ばれたものとみなしうる。

しかし、その後にラーマコスの息子が歌う詩行(1273-4, 1276, 1282-3, 1286-7)に関して、それらも『エピゴノイ』の断片である可能性について研究者たちの間に見解の相違がある。Allen は1282-3行と1286-7行について、『エピゴノイ』の断片である可能性を示唆している(3)。Bernabé は Allen の見解に沿って1282-3行を『エピゴノイ』Fragm. Dub. 6とし、1286(末尾除く)-1287行を『エピゴノイ』Fragm. Dub. 7とする(4)。それに対して Davies は Allen の見解を受け入れず、1270行以外のラーマコスの息子が歌う詩行を『エピゴノイ』の Fragm. Dub. とはしない(5)。West も同様である(6)。

『エピゴノイ』校訂者たちの間の以上の相違を踏まえた上で、ラーマコスの息子とトリュガイオスのやりとりを検討したい。1270行の『エピゴノイ』からの引用の中の ὁπλοτέρων (より若い者たち)という言葉に反応して、トリュガイオスは παῦσαι ὁπλοτέρους ᾄδων (「ὁπλοτέρους を歌うのはやめろ」)と述べている。これは「より若い」を意味する ὁπλότερος という形容詞を ὅπλα (武器)と結びつけた曲解に基づいている(7)。ὅπλα という語はこの前の武器商人たちとのやりとりでも用いられている。

. . . . καὶ γὰρ οὑτοσὶ

ὅπλων κάπηλος ἀχθόμενος προσέρχεται. (1208-9)

というのもそこに

武器商人たちが不機嫌な様子でやって来るから。

ὅπλότερος の曲解をしてトリュガイオスが述べる παῦσαι ὁπλοτέρους ᾄδων という発言は、先行する場面でトリュガイオスと ὅπλων κάπηλος とのやりとりがあり、おそらく実際に小道具としていくつかの武具が持ち出されたこととの関連性を作り出す

(2) Schol. VG ad 1270: ἀρχὴ τῶν Ἐπιγόνων Ἀντιμάχου.

(3) Allen, p. 116: "fortasse ex Epigonis sumpsit Aristophanes et quos post fr. I citat versus: . . . (*Pax* 1282-3, 1286-7 の引用) . . . . de quibus tacet quidem scholiasta, sed idem Certaminis auctor ita 1282, 1283 adhibet (107, 108) ut 1282 Hesiodo adscribat, lecto tamen δεῖπνον ἔπειθ' εἵλοντο in initio."

(4) Bernabé, p. 31.

(5) Davies, pp. 26-7.

(6) West, *Greek Epic Fragments*, pp. 54-9.

(7) ὁπλότερος は語源的には ὅπλα と結びついており、「武具を持つによりふさわしい」の意味であったことが推測されるが、実際の用例においては νεώτερος と同じ意味で用いられている。Cf. LSJ, s. v. 'ὁπλότερος'; Olson, ad *Pax* 1270-3.

ものと思われる。

さらにラーマコスの息子は叙事詩の朗唱を続ける。

Π. Λ. οἵ δ' ὅτε δὴ σχεδὸν ἦσαν ἐπ' ἀλλήλοισιν ἰόντες,
σύν ῥ' ἔβαλον ῥινούς τε καὶ ἀσπίδας ὀμφαλοέσσας.
Τρ. ἀσπίδας; οὐ παύσει μεμνημένος ἀσπίδος ἡμῖν;
Π. Λ. ἔνθα δ' ἅμ' οἰμωγή τε καὶ εὐχωλὴ πέλεν ἀνδρῶν. (1273-6)
ラ.の息子 さてお互いの方へと向かって進み、間近になったとき、
彼らは革盾と鋲のついた盾を撃ち合わせた。
トリュ. 盾だと。盾のことを俺たちに言うのはやめてくれ。
ラ.の息子 そこで一斉に男たちのうめき声と勝ち誇った叫びが生じた。

1273-4 行および 1276 行については Allen も Bernabé も『エピゴノイ』からの引用である可能性を示唆していないが、Olson は以下のようにその可能性に言及する。

> It is not impossible that these lines (ignored by Bernabé) are part of (or at least adapted from) the proem to the *Epigoni*, and the rel. clause would be a typical feature (cf. H. *Il.* 1.2-5; *Od.* 1.1-2; *h.Ap.* 2; *h.Ven.* 2-5). As ῥινούς τε καὶ ἀσπίδας is a glaring tautology, however, this is more likely a free Aristophanic composition, roughly based on Homeric models such as *Il.* 4.446-51=8.60-5.(8)

この引用の前半で Olson は、1273-4 行が『エピゴノイ』の序歌の一部またはその翻案である可能性を論じている。しかし、これらの詩行は戦闘場面の描写に属するものであり、内容的に序歌に属するとは考え難い。また Olson は 1273 行の関係節について、叙事詩の序歌にしばしば関係節が用いられることと合致するとみなしている。しかし、1273 行では関係代名詞 οἱ に接続詞 δέ と時の接続詞 ὅτε が続いており、先行詞が属する文からの時の経過を含意している。このような関係節は叙事詩の序歌に特徴的なものではない。従って、1273-4 行および 1276 行は『エピゴノイ』の序歌から採られたものではありえないと考えてよい。

それに対して、これらの詩行は、上の Olson の引用の後半で述べられているように、ホメーロス叙事詩の詩句をもとにしてアリストパネースが構成したものであることの蓋然性は高いと思われる。Olson の引用の最後にある『イーリアス』第四巻と第八巻の箇所は以下の通りである。

οἱ δ' ὅτε δὴ ῥ' ἐς χῶρον ἕνα ξυνιόντες ἵκοντο,
<u>σύν ῥ' ἔβαλον ῥινούς</u>, σὺν δ' ἔγχεα καὶ μένε' ἀνδρῶν
χαλκεοθωρήκων· ἀτὰρ <u>ἀσπίδες ὀμφαλόεσσαι</u>
ἔπληντ' ἀλλήλῃσι, πολὺς δ' ὀρυμαγδὸς ὀρώρει.
<u>ἔνθα δ' ἅμ' οἰμωγή τε καὶ εὐχωλὴ πέλεν ἀνδρῶν</u>
ὀλλύντων τε καὶ ὀλλυμένων, ῥέε δ' αἵματι γαῖα. (Δ446-51 = Θ60-5)

Δ446 行は 1273 行と類似しており、Δ447-8 行の下線部を τε καί を用いて合わせると 1274 行になる。また Δ450 行は 1276 行と同一である。さらに 1273 行と同一の詩行は『イーリアス』に十二回見出される(9)。1273 行と 1276 行が『イーリアス』

(8) Olson, ad *Pax* 1273-6.

(9) Γ15, Ε14, 630, 850, Ζ121, Λ232, Ν604, Π462, Υ176, Φ148, Χ248, Ψ816.

の詩行をそのまま用いた可能性が高いのに対して、1274 行はアリストパネースが手本を組み合わせて作った行である可能性が高い。この行については Olson が上の引用の中で 'glaring tautology' と呼んでいるように、「盾」を意味する二つの語が並べられていること (ῥινούς τε καὶ ἀσπίδας) が目立つ。この行に続く 1275 行のトリュガイオスの科白の中で ἀσπίς が二度用いられていることにより、盾はさらに強調される。この行での μεμνημένος ἀσπίδος ἡμῖν (盾を我々に思い出させる) において、ἀσπίς という語は軍務を全般的に表しているとみなすことができる。336 行の ἐκφυγὼν τὴν ἀσπίδα においてもこの語は軍務を全般的に表している(10)。 それと同時にここでの執拗なまでの盾の強調は、クレオーニュモスの息子が歌うソローンのエレゲイア詩の中で ἀσπίς に焦点が当てられること (1298) への伏線となっていると考えられる。

ラーマコスの息子にどのようなことを歌えばよいのか尋ねられて (1279)、トリュガイオスは歌うべき題材として食事場面の詩句を例として示す。

'ὣς οἱ μὲν δαίνυντο βοῶν κρέα' καὶ τὰ τοιαυτί·
'ἄριστον προτίθεντο καὶ ἄτθ' ἥδιστα πάσασθαι.'　　(1280-1)。
「そのように彼らは牛の肉を食べた」の類いだ、
「彼らは朝食を用意した、食べるにおいしいものを」とか。

それに応じてラーマコスの息子は以下の二行を歌う。

ὣς οἱ μὲν δαίνυντο βοῶν κρέα καὐχένας ἵππων
ἔκλυον ἱδρώοντας, ἐπεὶ πολέμου ἐκόρεσθεν.　　(1282-3)
そのように彼らは牛の肉を食べ、汗にぬれた馬の首を
解き放した、戦争に飽きた後で。

前述のように Allen はこれら二行が『エピゴノイ』から採られたものである可能性を指摘し、それに追随して Bernabé はこの二行を『エピゴノイ』の Frag. Dub. としている。この二行とほぼ一致する二行が *Certamen* にある。

δεῖπνον ἔπειθ' εἵλοντο βοῶν κρέα καὐχένας ἵππων
ἔκλυον ἱδρώοντας, ἐπεὶ πολέμοιο κορέσθην.　　(*Certamen* 107-8)

1270 行の場合には、*Certamen* の中で『エピゴノイ』からの引用であることが明示されており、『平和』の古註にもそのことが記されている。しかし、この二行については *Certamen* にも『平和』の古註にも『エピゴノイ』からの引用であるという記述はない。1282-3 行とほぼ一致する詩行が *Certamen* にあること自体は、この二行が 1270 行のように『エピゴノイ』から採られた可能性には結びつかないと思われる(11)。従って、1282-3 行が『エピゴノイ』からの引用である可能性については、『平和』の文脈の中で判断されるべきであると思われる。

1270 行で『エピゴノイ』の冒頭を歌った後、ラーマコスの息子が 1273-4 行お

(10) Olson, ad *Pax* 335-6.

(11) *Certamen* 107-8 行は、意味が通じない詩行にもう一行付け足すことにより意味が通じるようになる詩行が集められている箇所で、その一例として挙げられている。すなわち 107 行のみを取り上げると、αὐχένας ἵππων が βοῶν κρέα と並んで εἵλοντο の目的語として δεῖπνον の内容となる。『平和』1282 行においても、一行のみを取り上げたときの滑稽さが意図されていた可能性はないとは言い切れないかもしれない。

よび 1276 行で歌う詩行は、先に検討したように『エピゴノイ』の序歌から採られたものとは考え難く、また『イーリアス』の戦闘場面の詩行 (特に Δ446-51 = Θ60-5) を模倣・翻案したものである可能性が高い。Allen も Bernabé も 1273-4 行と 1276 行については、『エピゴノイ』からの引用である可能性について示唆していない。またラーマコスの息子は 1270, 1273-4, 1276 行で歌った詩行についてトリュガイオスに非難され、1279 行で何を歌ったらよいか尋ね、1280-1 行でトリュガイオスによって手本を示され、それに基づいて 1282-3 行を歌う。ラーマコスの息子がトリュガイオスの手本に従って歌っていることは、1282 行の第五脚までが 1280 行のトリュガイオスの言葉の繰り返しとなっていることによって強調される。従って、ラーマコスの息子はあらかじめ歌おうとして用意していたものとは別のものを 1282-3 行で歌っているという体裁となっている。従って『平和』の文脈は、ラーマコスの息子が一貫して『エピゴノイ』からの詩行を歌っている可能性を示唆するものとはみなしえない。

1280-4 行で食事が強調されることは、『平和』全体の構成と関連性がある。この劇は戦争中の食料の不足状態から始まり、平和の女神が回復された後は、田舎へ戻る農民たちの農耕と収穫への期待と、トリュガイオス祝婚の宴へと転換する。このような戦争から豊かな食事へという劇全体の動きが、ラーマコスの息子の場面にも反映されることとなる。

ラーマコスの息子による叙事詩朗唱の最後は次のようになっている。

Π. Λ. θωρήσσοντ' ἄρ' ἔπειτα πεπαυμένοι, ——
Τρ. ἄσμενοι, οἶμαι.
Π. Λ. πύργων δ' ἐξεχέοντο, βοὴ δ' ἄσβεστος ὀρώρει.
Τρ. κάκιστ' ἀπόλοιο, παιδάριον, αὐταῖς μάχαις· (1286-8)
ラ.の息子 それからやめて、武具を身につけた——
トリュ. 喜んでそうしたと思う。
ラ.の息子 そして城壁から出撃し、消しようのない雄叫びが上がった。
トリュ. 悪餓鬼め、戦闘と一緒に惨めに滅びてしまえ。

前述のように Allen と Bernabé は 1286-7 行 (但し 1286 行末のトリュガイオスの科白になっている部分を除く) が『エピゴノイ』からの引用である可能性を認めた。しかしこの二行が何らかの作品からの引用であることを示す古註などの記述は存在しない。またこれらの二行についても、『平和』の文脈からは、それらが『エピゴノイ』からの引用である可能性を推測し難いことは、1282-3 行の場合と同様である。

1286 行のトリュガイオスの科白は、θωρήσσω という語の両義性に基づいている。この動詞の意味は (1)「θώραξ (胴鎧) を身につける、武装する」という原義の他に、(2)「(飲酒によって) 活力を与える」の意味でも用いられている[12]。ラーマコスの息子が (1) の意味で「彼らは胴鎧を身につけた、武装した」と述べるのに対して、トリュガイオスは (2) の意味で「彼らは (飲酒によって) 活力をつけた」と解している。この動詞の両義性に基づく言葉遊びは、『アカルナイの人々』におけるラーマコスと

(12) LSJ, s. v. 'θωρήσσω', I '*arm with a* θώραξ: generally, *arm*', II '*fortify with drink*'. LSJ は II の意味の用例として、Hp. *Epid.* 2. 5. 10, *Morb.* 4. 56, Thgn. 413, 470, 842, Pi. *fr.* 72 等を挙げている。

ディカイオポリスのやりとりの中にも見出される[13]。

ΛΑ. φέρε δεῦρο, παῖ, θώρακα πολεμιστήριον.
ΔΙ. ἔξαιρε, παῖ, θώρακα κἀμοὶ τὸν χοᾶ.
ΛΑ. ἐν τῷδε πρὸς τοὺς πολεμίους θωρήξομαι.
ΔΙ. ἐν τῷδε πρὸς τοὺς συμπότας θωρήξομαι. (*Acharn.* 1132-5)

ラーマコスは θωρήξομαι を「私は θώραξ を身につけよう」の意味で用いているが、ディカイオポリスは同じ動詞を「私は飲酒で (cf. χοᾶ 1133) 活力をつけよう」の意味で用いている。

『平和』の 1286 行での θωρήσσω の用法については、武具商人場面 (1210-1264 行) との関連をも考慮に入れるべきであると思われる。武具商人場面では λόφος (兜飾り)、θώραξ、σάλπιγξ (ラッパ)、κράνος (兜)、δόρυ (槍) がおそらく小道具として持ち出され、それらについての買い取りの交渉が行なわれる。θώραξ については、これを便器として買い取ることをトリュガイオスが申し出て、それを便器として使う格好をしてみせる (1224-1239 行)。他の武具と比べて、θώραξ にはより多くの詩行が割かれている。ラーマコスの息子とのやりとりでの θωρήσσω の意味の取り違えによって、前の場面での θώραξ をめぐるやりとりとの関連性が作り出されるということができるであろう。

1287 行と類似の詩行は『イーリアス』第十六巻 267 行 (ἐκ νηῶν ἐχέοντο· βοὴ δ' ἄσβεστος ὀρώρει.) にある[14]。行の後半と同一の詩句はそれ以外に『イーリアス』に四回見出される[15]。1286 行は θωρήσσω の両義性を活用することを目的としてアリストパネースによって作られ、1287 行は『イーリアス』の類似詩行を参考にして作られたものである可能性が高いと思われる。

ラーマコスの息子が歌う叙事詩の詩句のうち、『エピゴノイ』の冒頭であることが確実な 1270 行以外の詩行 (1273-4, 1276, 1282-3, 1286-7) については、以上の考察により『エピゴノイ』の断片である可能性は考え難い。むしろ、アリストパネースは、ラーマコスの息子とトリュガイオスのやりとりと、先行する武具商人場面や続くクレオーニュモスの子供とのやりとりとの関連性を作り出すために適当な詩句を、主に『イーリアス』の詩句を手本として翻案したものと考えるべきである。『エピゴノイ』断片校訂に関しては、1282-3 行および 1286-7 行を Frag. Dub. として扱うことは適切ではないと思われる。

III

ラーマコスの息子とのやりとりの後で、クレオーニュモスの息子とのやりとりの場面 (1295-1301) となる。 この場面でクレオーニュモスの息子はエレゲイア詩の朗唱の練習をする。

Π. Κ. ἀσπίδι μὲν Σαΐων τις ἀγάλλεται, ἣν παρὰ θάμνῳ,
ἔντος ἀμώμητον, κάλλιπον οὐκ ἐθέλων ——
Τρ. εἰπέ μοι, ὦ πόσθων· εἰς τὸν σαυτοῦ πατέρ' ᾄδεις;

(13) Olson, ad *Pax* 1286-7.
(14) *Ibid.*
(15) Λ500, 530, Ν169, 540.

Π. Κ.　　ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα ——

Τρ.　　　　　　κατῄσχυνας δὲ τοκῆας.　(1298-1301)

ク.の息子　サイオイ族の誰かが、盾に得意がっている。それを茂みの近くに、非のうちどころなき武具を、私は気が進まぬながら残した——

トリュ.　言ってくれ、坊や、お前の父親について歌っているのか。

ク.の息子　だが命は救った——

トリュ.　　　　でもお前は親の面目を失わせた。

この箇所への古註は、このエレゲイア詩をアルキロコスのものとし、詩の続きを引用する。

καὶ τοῦτο Ἀρχιλόχου ἐστὶν ἑξῆς

ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα. τί μοι μέλει ἀσπὶς ἐκείνη;

ἐρρέτω.　(Schol. V ad *Pax* 1301)

このエレゲイア詩 fr. 5 (West) は複数の著作家たちによって引用されており、その一行目と二行目 (*Pax* 1298-9) については、アルキロコスの校訂者たちの間で、アリストパネースの伝承のままとすることで見解が一致しているが、三行目については見解が相違している。主な伝承における第三行目の前半は以下の表の通りである。

(1) ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα Ar. *Pax* 1301.

(2) αὐτὸν μὲν μ' ἐσάωσα Olympiod. in Plat. *Gorg*. p. 128, 13 Norv.

(3) αὐτὸν μ' ἐξέσαωσα Elias *proleg. philos*. 8 p. 22 Busse.

(4) αὐτὸς δ' ἐξέφυγον θανάτου τέλος Sext. Emp. *Pyrr. Hyp*. 3. 126.

アルキロコスの校訂者、注解者のうち Lasserre, Treu, Perrotta-Gentili は、(1) のアリストパネースの読みをそのまま採用している。また、Buchholz-Peppmüler, Tarditi は、(4) の Sextus Empiricus の読みをそのまま採用している。それに対して、Hoffmann は αὐτὸν δ' ἐξέσαωσα という読みを提案した。これは (2) と (3) にある αὐτόν と (1) と (4) にある δέ を組み合わせたものである。δέ はアルキロコス断片一行目の μέν と対応する。また、αὐτόν のみで再帰代名詞となるのはホメーロス叙事詩にはあるが(16)、アッティカ方言の用法ではない。(2) と (3) のように με が添えられた読みは、アッティカ方言に適合させられたものであると理解できる。(4) にも行頭に αὐτός の変化形があったことが反映されている(17)。Hoffmann によって提案されたこの読みは Diehl, Husdon-Williams, Campbell, West, Adkins, Gerber によって採用されている。本論考の筆者もこの読みを支持する。

他方、アリストパネース『平和』1301 行において αὐτόν が ψυχήν に変更された理由について、Dover はアッティカ方言への適合 ("an accommodation to Attic usage")(18) としている。さらに West は Dover の見解に基づいて "Aristophanes'

---

(16) Schwyzer. *Gr. Gr*. II. p. 196. Cf. Dover, p. 11.

(17) West, *Studies*, p. 118: "Sextus is quoting from memory; he remembered αὐτο. δ' ἐξε- from the true text, but, influenced by what he had just written (σεμνυνόμενος ἐπὶ τῷ τὴν ἀσπίδα ῥίψας φυγεῖν), made it into αὐτὸς δ' ἐξέφυγον θανάτου τέλος, and then gave up."

(18) Dover, p. 11.

version represents an 'oral variant', i.e. a popular misquotation"[19] と述べている。さらに、特に ψυχή という語が用いられたことについては、West や Dover が挙げる理由に加えて、別の理由をも考慮する必要があると思われる[20]。

『平和』の中で ψυχή という語は 1301 行以外に三度用いられている[21]。それらのうち以下の箇所でのこの語の用例は、1301 行との関連において注目すべきである。

Ἑρ. ποῖός τις οὖν εἶναι 'δόκει τὰ πολεμικὰ
ὁ Κλεώνυμος;
Τρ. ψυχήν γ' ἄριστος, πλήν γ' ὅτι
οὐκ ἦν ἄρ' οὗπέρ φησιν εἶναι τοῦ πατρός.
εἰ γάρ ποτ' ἐξέλθοι στρατιώτης, εὐθέως
ἀποβολιμαῖος τῶν ὅπλων ἐγίγνετο. (*Pax* 674-8)

ヘル. 戦争に関して、どのような人であると思われていたのか、
クレオーニュモスは。
トリュ. 魂についてはとても勇敢な者です。但し彼は、
自分の父親と言っていた男の子供ではないことがわかった。
というのも彼が兵士として出征するときにはいつも、直ちに
武具を投げ捨てる者となったからだ。

ここではクレオーニュモスがどんな人物であるかヘルメースに訊ねられて、ψυχήν γ' ἄριστος「魂において最も優れた、勇敢な」人物であるとトリュガイオスは答える。アリストパネースの作品においてクレオーニュモスは臆病な人物の典型であるため、ψυχήν γ' ἄριστος は痛烈な皮肉となっている。さらにこの引用箇所において 678 行の ἀποβολιμαῖος τῶν ὅπλων という表現は注目に値する。ἀποβολιμαῖος は ὑποβολιμαῖος（すりかえられた子供）をもじって、ἀποβάλλω（投げ捨てる）から作られた造語である。ἀποβολιμαῖος τῶν ὅπλων という表現は、クレオーニュモスが戦闘で盾を投げ捨てて逃亡したことへの言及となっている。従って、673-8 行でのクレオーニュモスについての叙述は、1298-9 行と 1301 行でクレオーニュモスの息子が歌うエレゲイア詩と、ψυχή という語が使われていることのみではなく、盾を投げ捨てる行為への言及においても共通することとなる。さらには、1300 行のトリュガイオスの言葉は、クレオーニュモスの息子が歌うエレゲイア詩を、クレオーニュモスが盾を捨てたことに結びつける。

『平和』の中には他にもクレオーニュモスへの言及がある。

Τρ. κεἴ τις ἐπιθυμῶν ταξιαρχεῖν σοι φθονεῖ
εἰς φῶς ἀνελθεῖν, ὦ πότνι', ἐν ταῖσιν μάχαις —

(19) West, *Studies*, p. 118.

(20) Olson (ad *Pax* 1301) は "After Tr.'s interruption, however, αὐτόν would naturally be taken as referring back to πατέρα (1300) rather than as standing for ἐμαυτόν, and Ar. accordingly substitutes ψυχήν." と述べている。クレオーニュモスの息子が 1300 行のトリュガイオスの言葉に反応して 1301 行を歌うという演出であれば、Olson が挙げる理由も αὐτόν が他の語に変えられた理由とみなしうるであろう。しかし、クレオーニュモスの息子が、トリュガイオスの言うことを無視して 1299 行に続く内容を歌うという演出は可能であると思われる。

(21) *Pax* 675, 829, 1068.

Xo. πάσχοι γε τοιαῦθ' οἷάπερ Κλεώνυμος. (444-6)

トリュ. そして、もし誰かが戦闘司令官になることを欲して、あなたが光の中へ出て来るのを妬むなら、女神よ、そいつは戦闘の中で—

コロス クレオーニュモスと同じようなことを蒙りますように。

ここで οἷάπερ Κλεώνυμος「クレオーニュモスと同じようなこと」とは何であるか明示的に述べられていないが、盾(または武具)を捨てて逃げたことおよびその結果としての臆病の評判を指すことは明らかである[22]。クレオーニュモスのこの行為あるいは臆病さは『平和』の中で後に 678 行と 1299-1301 行で言及されるのみでなく、アリストパネースの他の劇でもしばしば言及されている[23]。『平和』の中ではクレオーニュモスに関して 446 行で軽く触れられた後、673-8 行で ψυχήν γ' ἄριστος という痛烈な皮肉を含んだ表現と、ὑποβολιμαῖος をもじった ἀποβολιμαῖος τῶν ὅπλων という表現で臆病さと武具を投げ捨てた行為が印象的に述べられる[24]。その後で、クレオーニュモスの息子が登場して歌うエレゲイア詩が盾を置いて逃亡した内容の詩であり、これをトリュガイオスがクレオーニュモスと結びつけるというように、クレオーニュモスについての言及はこの劇の中で積み重ねられている。ラーマコスへの言及についても同様の積み重ねが見出される。すなわち、ラーマコスについての言及が 304 行[25] と 473-4 行[26] で二回なされた後、ラーマコスの息子が登場する。

クレオーニュモスについての言及の積み重ねの中で、1301 行での ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα という表現は、675 行の ψυχήν γ' ἄριστος という痛烈な皮肉を観客に思い起こさせるという喜劇的効果を持つものとみなすことができる。他方この効果に着目すると、アルキロコスのエレゲイア詩におけるもとの詩句と『平和』におけるその引用との関係についても新たな見方を得ることができる。すなわち、上述のようにアルキロコスのもとの詩句であったと推測される αὐτὸν δ' ἐξεσάωσα とは異なる ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα が『平和』で引用された理由として、674-8 行でのクレオーニュモスへの言及との関連性を作り出す効果のために、αὐτόν が 675 行で用いられた ψυχήν に変更されたためとみなすことができる。この見方は、アルキロコスのもとの詩句が αὐτὸν δ' ἐξεσάωσα であったとして、『平和』において αὐτόν が ψυχήν に変更されたことについて、Dover や West よりもさらに積極的な理由づけを提供するものである。

主要参考文献

A. W. H. Adkins, *Poetic Craft in the Early Greek Elegists*, Chicago, 1985.
T. W. Allen, *Homeri Opera*, tom. v, Oxford, 1912.

---

(22) Olson, ad *Pax* 446.

(23) *Eq.* 1369-72; *Nu.* 353-4; *V.* 15-27, 592, 821-3; *Av.* 288-90, 1473-81.

(24) 盾を投げ捨てる行為については、他に『平和』1186 行 (ῥιψάσπιδες) にも言及がある。

(25) ἡμέρα γὰρ ἐξέλαμψεν ἥδε μισολάμαχος. 引用中の最後の語は「ラーマコスを嫌う」という意味の造語。

(26) ラーマコスは、平和の女神を救い出すために綱を引く者たちの邪魔をして、トリュガイオスに叱責される。

A. Bernabé, *Poetae Epici Graeci*, pars i, Leipzig, 1987.
E. Buchholz/R. Peppmüller, *Anthologie aus den Lyrikern der Griechen*, Leipzig/Berlin, 1911.
D. A. Campbell, *Greek Lyric Poetry*, New Edition, Bristol, 1982.
M. Davies, *Epicorum Graecorum Fragmenta*, Göttingen, 1988.
E. Diehl, *Anthologia Lyrica Graeca*, fasc. iii, ed. tertia, Leipzig, 1952.
K. J. Dover, 'Archilochus' (rev. of F. Lasserre/A. Bonnard, *Archiloque: Les Fragments*), *C. R.* 10 (1960), pp. 10-12.
D. E. Gerber, *Euterpe: An Anthology of Early Greek Lyric, Elegiac and Iambic Poetry*, Amsterdam, 1970.
T. Hudson-Williams, *Early Greek Elegy*, Cardiff, 1926.
F. Lasserre/A. Bonnard, *Archiloque, Fragment*, Paris, 1958.
S. D. Olson, *Aristophanes: Peace*, Oxford, 1998.
G. Perrotta/B. Gentili, *Polinnia: Poesia Greca Arcaica*, Firenze, 1965.
I. Tarditi, *Archilochus*, Roma, 1968.
M. Treu, *Archilochos*, Göttingen, 1959.
M. L. West, *Iambi et Elegi Graeci*, ed. altera, Oxford, 1971.
M. L. West, *Studies in Greek Elegy and Iambus*, Berlin, 1974.
M. L. West, *Greek Epic Fragments*, Cambridge (Mass.), 2003.

本稿は平成 17・18・19 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「西洋古典文学における間テクスト解釈理論に基づく実証的作品論研究」(課題番号 17520186) による研究成果報告の一部である。

(国際基督教大学)

プラトン『国家』の新しい校訂版について

− S. R. Slings, *Platonis Rempublicam*, OCT −

納富信留

1、OCT: *Platonis Opera* の改訂

プラトン著作集の原典校訂は、John Burnet による Oxford Classical Texts (OCT 版), *Platonis Opera*, 全五冊として二十世紀初頭に出版された(1)。この校訂はその後増刷され続け、一世紀にわたってプラトン研究の定本となってきた。しかし、Burnet の OCT 版には不十分な点も多く、改訂の必要が長らく認識されてきた。新たな OCT 校訂は、複数の国々の文献学者、哲学者らが参加し、1995 年以来、新版が旧版に代わり始めている(2)。旧 OCT 版が抱える問題のいくつかを指摘しておく。1) まず、Burnet 校訂版の取り扱いに注意が必要である。例えば第一巻は、通常、1900 年の初版がくり返しリプリントされたものと誤解されている (その原因は、OCT が表紙裏に、初版 1900 年とリプリント年だけを記していることによる)。しかし、私たちが用いているのは、1905 年に改訂された第二版のリプリントである(3)。実際、Praefatio には、1905 年 11 月に W 写本についての情報が追加されていることが付記され (x)、1905 年に公刊された H. Diels & W. Schubart の Berlin Papyrus 9782 校訂版も *Tht.* 校訂に用いられている (xiv)。1900 年版から 1905 年

(1) J. Burnet, *Platonis Opera, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis* (Oxford University Press): Tomus I (Tetralogia I-II), 1900; Tomus II (Tetralogia III-IV), 1901; Tomus III (Tetralogia V-VII), 1903; Tomus IV (Tetralogia VIII), 1902; Tomus V (Tetralogia IX, Definitiones, Notheuomenoi), 1907: 但し、これらの年代 (書誌情報) には注意が必要である (後述)。

(2) OCT 新版の経緯については、現在第二巻の校訂作業に携わっている Swansea 大学の Fritz-Gregor Herrmann から教示を受けた。第一巻の作業は、William S. M. Nicoll (*Ap.*) と David B. Robinson がエディンバラで計画に合意したことから始まり、Winifred F. Hicken (*Tht.*) と Elizabeth Duke (間接伝承)、そして J. Christopher G. Strachan が加わり、1995 年に出版に至った。オランダでは Slings が独立に *Rep.* の作業を始めており (当初は Teubner 社から出版する計画であったという)、この対話篇を独立に出版してすぐに彼が亡くなってからは、Boter がその校訂版を収めた第四巻の編集にあたっている。第二巻については、Nicoll, Robinson, Strachan, Herrmann が第三テトラロギアの校訂を、Newfundland 大学の Marc Joyal が第四テトラロギア校訂にあたっており、Joyal はいずれ第三巻に進む希望があるという。第五巻 (第九テトラロギア) については、E. de Places による質の高い Budé 版があることから、目下のところ改訂の必要は感じられていないという。OUP は全体として編集の統括を図っておらず、各巻の編集方針も一貫していない。

(3) この点は、Denis O'Brien が指摘している: D. O'Brien, "Parmenides and Plato on What Is Not", *The Winged Chariot, Collected Essays on Plato and Platonism in Honour of L. M. de Rijk*, ed. M. Kardaun and J. Spruyt (Leiden: Brill, 2000), 99, n.30 (cf. 39, n.74).

版への改訂も含めて、諸版の異同について調査が必要であろう (同種の問題は新 OCT 版でも生じている : 3(2) 参照)。

2) Burnet 自身が後に出版した二つの論文 (1914, 1920) では、自身の OCT 版と大きく異なるテクストの読みが多数提案されている(4)。旧 OCT 版は、これらの知見を活かしていない(5)。

3) Burnet は校訂にあたり、写本の扱いについては先行する照合成果に負う所が多く、apparatus criticus は (当時の標準としても) 必ずしも十分ではない。この欠点は二十世紀初頭から認識されていたが、旧 OCT 版が絶大な信頼を勝ち得たのは、プラトンのギリシア語テクスト校訂にあたっての Burnet のセンスと、確立されたテクストの良質さにあった (apparatus の点では新版は格段の進歩を見せるものの、text の点で旧版を乗り越えたかには疑問が寄せられている)。

では、二十世紀末から本格化した新校訂作業は、Burnet 版を乗り越え、それに代わる、より信頼できるテクストを提供し得ているのか。2003 年にオランダの文献学者 S. R. Slings が校訂した『国家』新版を中心に、これを検証していきたい。

2、『国家』テクスト校訂の歴史

(以下の記述における写本記号は、Boter (α) = Slings (A6) に従う)

(1) 各種の校訂本

A0. I. Bekker, 1816-18: 現代文献学の出発点となるプラトン校訂 (*Rep.* 校訂は 1817)。Bekker は十二の写本を照合し、Stephanus 版 (1578, vulgata) 以来の読みを刷新。

A1. B. Jowett & L. Campbell, *Plato's Republic*, the Greek text edited with notes and essays, 3 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1894): Jowett によって進められたオクスフォード・シリーズで、彼の死後に Cambell が出版した。Vol. I にテクスト、Vol. II に Jowett と Campbell それぞれの論考、Vol. III, Notes は、Jowett による註釈を Campbell が整理した巻。二人の意見が食い違う場合だけ、イニシャルで文責を明示している。テクスト校訂にあたっては、Bekker (A0) 以来、Stallbaum (1823[1]), Schneider (*Platonis Civitas*, 1830-33), Baiter (Zürich 版 , 1839), Hermann (Teubner 版 , 1852) らの校訂に依拠しつつ、A 写本を Campbell 自身が照合している。Vol. II, i-xxix (Jowett), 67-164 (Campbell) にテクストについての論考が付されている。十九世紀ドイツ文献学の推測による改訂傾向 (Hermann, Baiter, Cobet ら) に反対。この姿

(4) J. Burnet, "*Vindiciae Platonicae* I", *Classical Quarterly* 8 (1914), 230-236; "*Vindiciae Platonicae* II", *Classical Quarterly* 14 (1920), 132-138.

(5) 例えば *Sph.* 240 については、N. Notomi, *The Unity of Plato's* Sophist: *Between the Sophist and the Philosopher* (Cambridge University Press, 1999), 158, n.77, 159, n.78, 160, n.85 参照。

勢はBurnet (A3), Adam (A2, 4) らイギリス文献学に受け継がれる。

A2. J. Adam, *The Republic of Plato*, edited with critical notes and an introduction of the text (Cambridge University Press, 1899) (repr. 1900): Adamが1897年に最初に校訂したテクスト。A写本については1891年に自身で照合している。1907年のJ. Adamの死後、A. M. Adamの手で改訂されたものが1909年に再版されたが、それは1902年版(A4)に従った校訂で、1897年版とは異なる。

A3. J. Burnet, *Platonis Opera*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Tomus IV, tetralogiam VIII continens, Oxford Classical Texts (Oxford University Press, 1905): BurnetはOCT全集の校訂において、まず*Rep.*を1902年に独立に出版し、その後、第八テトラロギアにまとめて出版。*Rep.*については、Burnet自身は照合作業をしておらず、A写本については、Campbell (A1), Adam (1897版, A2)、D、M写本については、Campbellが依拠した照合、F写本についてはSchneiderの報告に拠っている。

A4. J. Adam, *The Republic of Plato*, edited with critical notes, commentary and appendices, 2 vols. (Cambridge University Press, 1902) (2nd. ed. 1963, with a new introduction by D. A. Rees): Adamは1897年に最初に出した*Rep.*校訂をさらにA写本の読みに近づけて改定し、五年後に註釈付の大版(二冊)にまとめた。Burnet (A3)と同時期に出たため、後半の一部でのみそれを参照したと断っている。現在に至るまでもっとも包括的で定評ある註釈書。Schneiderの註釈に大きく影響されたと述べている(vol. 1, ix)。Reesの解説によると、テクスト校訂方針の近さもあり、Burnet版と概して違いは少ない結果となっている(xvii)。但し、両者にはF写本の位置づけをめぐる立場の違いと論争があった。Boter (α)は、むしろCampbell (A1)とテクストの扱いできわめて近いとする。

A5. E. Chambry, Platon, *Oeuvres Complètes VI, La République I (I-III)*, avec introduction d'A. Diès (Paris: Budé, 1932): ビュデ版のシリーズで、全三巻からなる。テクスト、対訳、脚注と、A. Dièsによる解説が付されている。写本については、cxxxviii-cxlviで検討。基本的にBurnetの写本の扱い(A, D, F)に従っている(A, FとT)。本人の照合。このChambry版以降、二十世紀中には新たな*Rep.*の校訂本は作られなかった。

A6. S. R. Slings, *Platonis Rempublicam*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Oxford Classical Texts (Oxford University Press, 2003): OCT改訂作業の一環で、第八テトラロギアをオランダ研究者が担当[6]。1977年よりVrije Universiteit, AmsterdamのSiem Slingsが文献学的調査を組織し、Gerard Boterのテクスト研究(α)を受けて出版された最新校訂版。*Clit.*をCUPからまず出版し[7]、続いて*Rep.*を独立に出版。彼が*Crit.*の校訂を残して死去した後、*Tim.*校訂と第八テトラロギアの完成はBoterに委ねられる。テ

(6) 校訂作業の経緯については、註2を参照。

(7) S. R. Slings, *Plato*: *Clitophon*, edited with introduction, translation and commentary (Cambridge University Press, 1999).

クスト校訂にあたっての判断の解説は、各巻ごとに *Mnemosyne* に発表され、単行本化されている(8)。どのような根拠や写本状況によって現行の校訂がなされているか、その論考から窺うことができる。

a. G. Boter, *The Textual Tradition of Plato's Republic* (Leiden: E. J. Brill, 1989): Slingsによって組織された第八テトラロギア校訂作業にあたり、教え子の文献学者 Boter が分担によって新 OCT 版 (**A6**) の前提となる文献学的作業を行なった。*Rep*. の写本について徹底した検討を施し、古代から中世・ルネサンスの間接伝承も網羅的に調査する。十九〜二十世紀に議論され定着してきた写本の扱いを整理した、もっとも包括的な写本・校訂研究。

【関連文献】

B1. P. Shorey, *Plato, The Republic*, 2 vols. (Harvard University Press, 1930-1935) (1937²): テクストと英訳が付いた Loeb Classical Library シリーズの中では、一般に信頼できる訳と脚注であると言われている。但し、Shorey は「序文」で、当時の文献学的な校訂作業を煩瑣で無意味と批判し、テクストは Hermann の Teubner 版に依拠している。

B2. M. Vegetti, *Platone, La Repubblica*, vol.I (Libro I) (Napoli: Bibliopolis, 1998): 最新のイタリア語訳で脚注も充実している。テクストは付されておらず、基本的に Burnet の旧 OCT 版 (**A3**) に依拠している(9)。第 I 巻では Vegetti による解説に加えて、数名の研究者による解説 (十一項目) が付されている。2006 年春の時点で、シリーズ第 II 巻以降も VI 巻 (第八〜九巻) までが刊行されている。

(2) 写本の扱いについて

1)『国家』の写本について

Rep. が含まれる第八テトラロギアの写本伝承は、**BTW** に主に依拠する第一〜七テトラロギアとは著しく異なっている。**B** 写本は第六テトラロギアまで、**T**、**W** 写

(8) S. R. Slings, "Critical Notes on Plato's *Politeia*": I, *Mnemosyne* 41 (1988), 276-298; II, 42 (1989), 380-397; III, 43 (1990), 341-363; IV, 49 (1996), 403-425; V, 52 (1999), 385-407; VI, 54 (2001), 158-181; VII, 54 (2001), 409-424; VIII, 55 (2002), 538-559; IX, 56 (2003), 449-462; X, 56 (2003), 513-534; Slings の生前に刊行されたこれらの論文は、彼の死後、S. R. Slings, *Critical Notes on Plato's* Politeia, edd. G. Boter and J. van Ophuijsen (Leiden: Brill, 2005) にまとめられ、編者による若干の訂正と補足が加えられている。元の論文になかったコメントが若干単行本に記載されている点 (第一巻の範囲では、332c4-5 (5) と 337a3 (6-7))、及び、雑誌論文ではかなり豊富であった写本情報が単行本では新 OCT 版の表記に合わせて簡素化されている点など、両者の扱いには若干の注意が必要である。本稿では、単行本の頁で言及し、*Mnemosyne* での頁を括弧内に付す。

(9) 2006 年 2 月にイタリアで Vegetti 教授に直接確かめたところ、シリーズ初期には Burnet 版を使わざるを得なかったが、翻訳作業の終盤には (最後の数巻 ?)、Slings の新校訂も参照したとのことである。

本は第七テトラロギアまで(同じT写本でも、古い部分は十世紀に書かれたものであるが、*Rep*.389d7以降の部分は十五世紀の書写で重要性は少ない)。プラトン著作集 *Corpus Platonicum* は全体として二部に分かれて書写・伝承されていた。

Rep. について、A写本を最良とする見方は Bekker (A0) 以来、十九世紀に確立、D写本を次いで参照することもほぼ定着している。F写本を独立と見なして重視する態度は、Schneider から Burnet (A3), Chambry (A5) に現れ、Adam らが反対したが、Boter (α) は Adam の反論を退ける。F写本への注目は、*Gorg.* について E. R. Dodds (1959), *Men.* について R. S. Bluck (1961) が校訂作業で論じている[10]。

十九世紀始めに十二の写本を照合した Bekker の校訂作業は、誤りや不十分さが認識されていたが、それらすべての写本を照合しなおす作業には、長い時間がかかっている。

A、D、F の基本 MS を確認したのは、Boter (α) の成果であり、Slings の新校訂 (A6) は、その基盤に立った決定版と言える。

＜主要写本＞

A　Parisinus 1807:　プラトン最古の写本(九世紀)で、B写本(895年)よりやや古い。第八・九テトラロギア、偽作を含む。

D　Venetus 185 (coll. 576):　十二世紀の写本で、第一〜四テトラロギアと *Clit. Rep.* を含む。Schanz 以来、A写本とは独立と認められている (Chambry (A5) を除く)。第一〜四テトラロギアについても、B写本とは独立と見なされる。

F　Vindobonensis Suppl. Gr. 39:　十四世紀(十三世紀?)。第六テトラロギア後半 (*Gorg.*, *Men.*) から第七・八テトラロギアと第九テトラロギア冒頭 (*Min.*) を含む。Burnet (A3) が初めて独立の価値を認めた。Adam, Stuart Jones と Burnet の間には論争があったが、二十世紀をつうじて位置づけは確立した (Boter (α), 99-110)。

2) 推測改訂への態度

「推測」による改訂は、Hermann, Baiter に代表される十九世紀ドイツ文献学に顕著であった。これに対して Campbell, Adam, Burnet ら十九世紀末から二十世紀初のイギリス文献学者はそれを慎重に避ける傾向を見せた。一般的に言えば、Campbell と Adam がより写本に忠実・保守的で、Burnet は時折推測の読みを採用、あるいは apparatus criticus で紹介している。Adam の校訂作業でも、1897年版(A2)と1902年版(A4)の間で、多くの箇所でよりA写本の読みに戻す方向をとったとされる (A. M. Adam による1909年版への序文参照)。

3) 系図法の活用

写本間の関係については、ドイツでは K. Lachmann 以来の Stemmatology (系図法)に基づき、Schanz らが重要な考察を行なった。Adam, Burnet らイギリ

(10) E. R. Dodds, *Plato, Gorgias*, a revised text with introduction and commentary (Oxford University Press, 1959), 34-67;　R. S. Bluck, *Plato's Meno*, edited with an introduction, commentary, and an appendix (Cambridge University Press, 1961), 129-147.

ス文献学者はそれへの反動から、系図による整理を嫌ったとされる。それに対して、Boter (α) は新たな写本系図を整理することで (xvii-xviii の表)、新校訂の基礎を固めた。Slings の校訂版はその系図を全面的に用いることで、きわめて簡潔な apparatus criticus を実現している。具体的には、ADF の主要三写本の情報のみを常時記載し、M を含む他の写本をすべて二次的なものとして、必要な場合以外は報告していない。

系図法による写本情報の整理がどこまで確実かについては、二十世紀後半でも大きな議論が続いている。とりわけ「開かれた伝承」の場合、系図法は実効性が少なくなること、並びに、古代・中世でよく読まれたテクストほど深刻な「混成」を示す傾向にあることが、文献学者たちによって指摘されている(11)。プラトンのテクストには、古代においてすでに幾通りかの伝承があったと想定され(12)、もっとも普及していたと考えられることから、果たして三つのファミリーに整理しきれるのかは疑問なしとは言えない。Boter (α)-Slings (A6) は、系図法への全面的な信頼と依存というオランダ文献学の特徴が発揮された校訂作業として、注意して取り扱うべきであろう。

4) 間接伝承、及び、他の資料について

間接伝承については、Jowett & Campbell (A1) はほとんど考慮していないが、Burnet (A3) は配慮して時折用いている。Adam (A2) は、間接伝承を Schneider の照合から、若干取り入れている。Boter (α) が間接伝承をすべて検討し、Index Testimoniorum (pp. 290-365) を作成。Slings (A6), pp. 411-428 が Index を増補。

直接引用は、Stobaeus, Eusebius, Iamblichus, Galenus (頻度の順) にあり、適宜参照されている。また、アラビア語での引用は Al-Farabi, *De Platonis Philosophia*; Galenus, *Compendium Timaei Platonis* にあり、Averroes の註解がヘブライ語で伝えられている。

コプト語での伝承 (588b1-589b3; *Cod. Nag Hammadi* VI 5) は、Boter (α), 279-280 が検討。Slings (A6) の校訂に取り入れられている (cf. Praefatio)。

Rep. の部分を含むパピルス (後二〜三世紀) は Chambry (A5) が最初に使用して以来、テクスト情報としての必要性が認識された。Boter (α), Ch.6 は、十一のパピルスを検討している (今回検討した第一巻には、該当箇所はない)。

(11) L. D. レイノルズ、N. G. ウィルソン『古典の継承者たち－ギリシア、ラテン語テクストの伝承にみる文化史－』(西村賀子、吉武純夫訳、国文社、1996 年)、第六章参照。系図法への批判は、P. Maas, *Textual Criticism*, trans. B. Flower (Oxford University Press, 1958) 等に見られ、実際に系図法を避けて写本情報をそのまま記載する校訂も、一部でなされている。

(12) プラトンの学園アカデメイアの中で学問的に正統に伝承されたテクストと、パピルスの出版物として一般に普及したテクストとでは、早い時期から大きな相違があったことは容易に想像される。また、プラトン生前の出版の有無や、アレクサンドリアでの編纂作業など、他にも様々な問題がある。但し、アカデメイア版は各時代のプラトン主義者の解釈を反映し、手を加えられていた可能性もあり、流布版が一概に信用できないとは言えない。例えば、A-Family がアカデメイア版に、F-Family が流布版に対応するといった仮説が検証され得るか、今後も多角的な研究が必要であろう。

3、新校訂の特徴

(1) M. Schofield による書評とその影響

Slingsの新OCT版には、2004年にケンブリッジ大学のM. Schofieldによる書評が出ており、全体としての高い評価と共に、一つの改訂箇所に重大な疑問が投げかけられている[13]。*Phronesis*のエディターを長く務めた古典哲学者の評価として、新版がこれからどう受け入れられていくかについて、大きな影響力をもつものと思われる(実際、ケンブリッジ、オクスフォードの学者たちの間では、すでにSchofieldの批判にそった－だが、一面的でより否定的な－評価が口にされている)。

Schofieldはまず、多大な労苦の末に完成した新版が、Burnetによる旧版のテクストと大きく異なることはないが(これはSlingsが新OCT版第一巻に対して下していた判定でもある)、apparatus criticusの飛躍的な充実があることを指摘する。その進歩には、写本間の関係・優劣の確定、及び、間接伝承の積極的な査定が大きな理由として挙げられる。

次に、Schofieldは二つの点に疑義を投げかけ、転じて、新しいテクストの微細ではあるが着実な改善や充実ぶりを具体的に検証していく。

批判的にコメントした第一の点は、第六巻末部511c2-d2のテクストの読みに向けられる(608-610)。そこでSlingsは、写本伝承ではまったく異読のない“καίτοι νοητῶν ὄντων μετὰ ἀρχῆς”の一節をBollingの提案によって削除し、[ ]に入れる[14]。Slingsは*Critical Note on Plato's Politeia*, 113-119 (= *Mnemosyne* 54, 173-180)でこの箇所の扱いを詳細に論じているが、削除提案の理由は大きく、文法と内容の両面にある。文法面では“καίτοι”が分詞構文をとる例は後世の用法として疑われる。そして内容解釈でSlingsは、この一節が文脈に合わないと断定して後世の挿入を示唆する。

「線分の比喩」のまとめに当たり、数学的対象の存在論的身分を語るグラウコンの発言は、プラトン哲学の核心として古今解釈の焦点となっている。Slingsの提案に従うテクストを削除することは—彼自身の論拠があるにしても—、Schofieldらの批判に耐えるには根拠が乏しく感じられる。文法的にも内容的にも説得的な弁護が可能であり、写本の上では一抹の疑いもない読みである以上、判断の行き過ぎが批判されるのは当然とも言える。

この点では、Slingsも削除句をapparatus criticusに落とすことはせず、[ ]に入れていることは、読者の判断に一部委ねるという意味ではまだ良心的と言える(後

(13) M. Schofield, “Re-editing the *Republic*” (Featured Review), *American Journal of Philology* 125 (2004), 607-614. この他に、T. Dorandi, *Mnemosyne* 58 (2005), 136-137に書評(De novis libris iudicia)が出ている。

(14) Cf. G. M. Bolling, “καίτοι with the participle”, *American Journal of Philology* 23 (1902), 319-321; U. von Wilamowitz-Moellendorf, *Platon* II (Berlin, 1919), 345, n.1. このテクストへの疑問は、Adam, *The Republic of Plato*, vol. II, 86-87 (Apendix XI)が表明していたが、校訂版ではSlings以前に削除を提案したものはない。

で触れるように、新OCT版第一巻では、削除に［ ］記号を用いずに、テクストから落とす傾向がある）。しかし、Schofieldも危惧するように、権威あるOCT版の印刷は影響力が大きい。

Slingsは“Praefatio”で校訂にあたって従う七つの原則を挙げ、その第二を“editori non licet ignavo esse”とし、511d2の改訂をモデルケースに挙げている(xiv)。概して保守的で堅実な校訂において、一つの目玉と考えたのかもしれない。

Slingsはこの箇所の校訂にあたり、オクスフォード大学のM. F. Burnyeatと議論を交わし、その経緯は*Critical Notes*にも注記されている(113, n. 1 = 173, note)。結局Burnyeatは Slingsの論拠に説得されなかったが、彼の元同僚Schofieldの書評も合わせて、Slingsの新校訂の評価がこの箇所の扱いに集中し、哲学者の間で否定的な評価を生んでしまっているのは、残念なことである。私も511dの削除提案は行き過ぎであることを認めるが、四百頁を超える校訂作業を一行で否定するのもまた行き過ぎであろう。

実際、Schofieldの書評では、これ以外ではごく小さな批判が一つ、即ち、第三巻の問題ある箇所(389b2-d6)について異動提案など何らか注記すべきではなかったかという批判がなされているだけである[15]。続いて、Slingsの優れた校訂が具体的に検証され、書評が高い評価で締めくくられている[16]。

(2) OCT第一巻校訂との比較

Slingsによる*Rep.*新校訂は、OCTの*Platonis Opera*改訂作業の一環であり、その意味では、先立って1995年に出版された第一巻（第一、二テトラロギアを収める）の校訂作業と比較することが有効であろう[17]。新OCT第一巻については、Slings自身が1998年に書評を執筆しており[18]、そこでの批判や評価は、彼自身の校訂作業を見定める上で重要な意味をもつ。

(15) Schofieldは新OCT版第一巻の*Crat.*校訂について、いくつかの移動提案がapparatus criticusに記録されている点を挙げるが（そのうち385b-dの移動は、彼自身による提案）、これはSchofield自身の関心を反映するものであり、一般的にそれほど重要とは感じられない。逆に言えば、Slings校訂にそれ以外に大きな問題点は見出せなかったということかもしれない。

(16) Schofieldによる次の評価は、イギリスの学者らしい抑制の効いた、ほぼ最高の讃辞として読まれる：“In laying out the evidence for the text, the new OCT is richer than its predecessor in information and stimulation alike. Slings' edition is not perfect, but I find it hard to believe there will ever be a significantly better or more concise presentation of the text of the *Republic*.”(613)

(17) E. A. Duke, W. F. Hicken, W. S. M. Nicoll, D. B. Robinson, et J. C. G. Strachan, *Platonis Opera*, Tomus I, tetralogias I-II continens, recognoverunt brevique adnotatione critica instruxerunt, Oxford Classical Texts (Oxford University Press:1995). 但し、二つの校訂本の間に、編集方針や表記の統一性はない（註2参照）。

(18) S. R. Slings, “De novis libris iudicia: E. A. Duke, W. F. Hicken, W. S. M. Nicoll, D. B. Robinson, J. C. G. Strachan, *Platonis Opera*, Tomus I tetralogias I-II continens (Oxford Classical Texts), 1995”, *Mnemosyne* 51 (1998), 93-102.

第一巻に収められた二つの四部作(八作品)は五人で分担して校訂にあたっている。それゆえ著作ごとに方針や出来にバラつきが生じており、Slingsは、*Crat.*のテクストは群を抜いて良いとし、*Euthyphro*, *Crito*にも進歩を評価しているが、*Tht.*については厳しく批評し、残り作品については現時点では最善とした(101-102)。

Slingsは書評の冒頭で、テクストはBurnet版から大きくは異ならないが、それは正当なことであると述べ、新版の最大の成果は充実したapparatus criticusにあると評価する。他方で、とりわけ第二の四部作について写本関係の確定が不十分であることを、先行研究や具体的な検討から指摘する。新OCT版ではD写本はB写本から独立と見なされているが、D写本の独立性には強い疑いが残り、将来徹底した調査が必要であると提言している(94-97)[19]。もしSlingsの指摘のように写本間の位置づけが未確定であるとしたら、apparatusでのD写本の情報の扱いに不十分さ(余剰?)が残ることになろう。

この点では、第八テトラロギアを担当したオランダ研究者たちは、Slingsの指揮の下、G. J. Boter , G. Jonkersによって、まず写本関係の確定を行なって校訂にあたっている点は、第一巻への批判に対応している[20]。

ここで第一巻から『ソフィスト』校訂を取り上げ、具体的に検討してみよう。

Slingsは*Sph.*についてあまりコメントを寄せていないが、エディンバラ大学の古典学者D. Robinsonが校訂にあたったテクストには、多くの改善と同時に、改悪とも思われる推測が加えられている[21]。そのテクスト校訂では、W. S. M. NicollがBDTWPの写本情報を提供し、E. A. Dukeが間接証言を調査している。

Robinsonは、*Sph.*テクストの改訂箇所(すべてではない)について解説を公刊している[22]。そこで彼は、まず旧版との相違について概数を挙げている:

(1) 主要写本と証言の中で、異なった読みを選択: 25箇所
(2) Burnet版での写本の読みから、推測による読みに変更: 17箇所
(3) Burnet版での推測から、写本の読みに戻す: 8箇所
(4) Buenet版が採っていた推測とは、別の推測を採用: 6箇所

この結果、旧版より9箇所あまり多く推測の読みが採用されていることになる。だが、Burnetはすでに、二次的な写本から12箇所、Stephanus以降の近代推測から

(19) Boter, *The Textual Tradition of Plato's Republic* (1989), 58は、第一〜四テトラロギアについて、現在ではD写本がB写本から独立と考えられてると報告。

(20) Slings, *Plato*: *Clitophon*, 340-344; Boter, *The Textual Tradition of Plato's Republic*; G. Jonkers, *The Manuscript Tradition of Plato's Timaeus and Critias*, diss. Vrije Universiteit (Amsterdam, 1989).

(21) 2005年9月にギリシアで開催されたAD Fontes主催の"Plato's *Sophist* Seminar"でも、Myles Burnyeat, Michael Frede, Lesley Brownらとの議論の中で、いくつかの改訂箇所について検討し、否定的な評価が下された。

(22) D. B. Robinson, "Textual notes on Plato's *Sophist*", *Classical Quarterly* 49 (1999), 139-160。なお、彼は*Plt.*については、次の論文で同様のコメントを発表している: "The New Oxford Text of Plato's *Statesman*: Editor's comments", C. J. Rowe ed., *Reading the Statesman* (Sankt Augustin: Academia Verlag, 1995), 37-46.

75箇所の計87箇所の推測を採用しており、そこからの変更は穏当なものである、と校訂者は弁明している。

報告された以上の数字は、それ自体では不自然に感じられないかもしれない。しかし、Slingsの校訂版は、Burnetが時折採用する推測の改訂をできるだけ主要写本の読みに戻そうとしていることが顕著であるのと比べると(次節参照)、Robinsonの校訂が旧版以上に主要写本から離れているのは驚くべきことに思われる。また、これは単に数の問題ではなく、重要箇所の扱いについては、写本やギリシア語の読み以上に、校訂者の誤った読解がテクストを歪めてしまっている点がある。Burnetの校訂を明らかに改悪していると考えられる、典型的な二箇所を検討しよう。

1) *Sph.* 251a2-3

τὸν γοῦν λόγον ὅπηπερ ἂν οἷοί τε ὦμεν εὐπρεπέστατα <u>διακριβωσόμεθα</u> οὕτως ἀμφοῖν ἅμα.

appratus: διακριβωσόμεθα vel διαβεβαιωσόμεθα Robinson (διορθωσόμεθα iam Mueller): διωσόμεθα **β**TW: διασωσόμεθα Stallbaum)

この一語の読みについては、十九世紀にはStallbaum (διασωσόμεθα) 以外に、Wagner (διοισόμεθα)、Heindorf (διωξόμεθα)、Hermann (διαθησόμεθα) らの推測が提案されていた。しかし、Campbellが写本通り“διωσόμεθα”と読み「スキュラとカリュブディスの間を抜ける航海」の比喩を用いた表現と解してから、現代ではG. E. L. Owenらによってその読みが支持されてきている[23]。それに対してRobinsonは“Textual Notes”の中で、そういった比喩を読み込むことを幻想であると退け(153-155)、写本的には根拠のない自身の推測をテクストに印刷している。

Robinsonは写本通りの読みがギリシア語として十分に可能であることを認めた上で、彼の文脈理解に基づいてその読みを退け、動詞の一部が欠けているとの想定を最善としている。この一節についての彼の解釈は(私の解釈では)根本的に文意を捉え損なっているが、さらに、校訂版に“δι<ακριβ>ωσόμεθα”と表記せず(ここではそういった工夫が可能)、推測をそのまま印字することで、読者にこの推測が何の問題もないように受け取られてしまう危険を与えている。

2) *Sph.* 240b

New OCT,	b7:	Οὐκ ὄντως ὂν ἄρα λέγεις τὸ ἐοικός, ...
	b12:	Οὐκ ὂν ἄρα ὄντως, ...
Burnet OCT,	b7:	Οὐκ ὄντως [οὐκ] ὂν ἄρα λέγεις τὸ ἐοικός, ...
	b12:	Οὐκ ὂν ἄρα [οὐκ] ὄντως ...
Notomi,	b7:	Οὐκ ὄντως οὐκ ὂν ἄρα λέγεις τὸ ἐοικός, ...
	b12:	Οὐκ ὂν ἄρα οὐκ ὄντως, ...

ここはギリシア語が難解で多くの読みや改訂が提案されている箇所であるが、写

(23) L. Campbell, *The Sophistes and Politicus of Plato*, with a revised text and English notes, Oxford University Press, 1867, *Sph.* 135-136; G. E. L. Owen, “Plato on not-being”, G. Vlastos ed. *Plato, A Collection of Critical Essays I* (Notre Dame, 1971), 230.

本は総じて各行に二つづつ否定辞“οὐκ”を読んでいる。Burnet は OCT 校訂の時点では Badham の改訂に従って二つ目の否定辞を [ ] に入れて削除を指示したが、1920 年の論文では写本通りに読む別の提案をしている(24)。私は 1999 年に出版した本で、写本の読みに従うことでプラトンが意図した「像」の定義が得られることを論証したが(25)、Robinson は 2001 年の論文で、私の提案を批判し、二つ目の“οὐκ”はプラトン主義者による過剰な存在論がもたらした後世の挿入であるとする自説を展開した(26)。さらに彼は、新 OCT 版テクストの 1997 年の再版で、240a8-c1 までの引用括弧に入れるという改訂を行なっている。引用括弧の導入は、一連の対話を「仮想ソフィストとのやりとり」と位置づける意図による。校訂者は“the addition of what are, I hope, helpful improvements of presentation”と述べ、基本的に彼の当初の読み方に忠実な修正と考えている (*CQ*, 435)(27)。

校訂者の解釈は一つの提案として不思議なものではないが、Burnet 版が [ ] によって明示していた写本上の情報を、完全に apparatus に落としてしまうことで、独断的な扱いとの印象は拭えない。

以上 *Sph.* のテクストについて論じた二箇所は、解釈上の問題というだけでなく、テクスト校訂としてミスリーディングである。第二点に関して削除記号を本文で用いていないことは、実は新 OCT 版第一巻に共通する特徴 (あるいは、方針) であり、校訂者が後世の挿入と見なした箇所は、写本情報の強弱に関わらず、すべて本文から apparatus に落としていることを意味する。この点は、Slings が書評ですでに適確に批判している(28)。これに対して Slings 自身の校訂では、[ ] 記号も旧版と同様に用いている。

(3) Slings 校訂の傾向　－ *Rep.* I の調査結果－

慶応大学大学院演習 (堀江聡、納富信留、栗原裕次の共同ゼミ) では、2005 年 4 月から『国家』講読を始め、新 OCT 版 (Slings, **A6**) を定本とし、それ以前の諸版 (J&C, **A1**; Burnet, **A3**; Adam, **A4**) との異同にも注意を払ってきた。異同の詳細は資料編にまとめてあるが、その要点は次のとおりである (行数の言及は新 OCT 版に拠る)。

(24) J. Burnet, “*Vindiciae Platonicae* II”, *Classical Quarterly* 14 (1920), 137.

(25) N. Notomi, *The Unity of Plato's* Sophist, 155-162 (esp. 158-161).

(26) D. B. Robinson, “The phantom of the *Sophist*: τὸ οὐκ ὄντως οὐκ ὄν (240a-c)”, *Classical Quarterly* 51 (2001), 435-457.

(27) ここでの問題は、1995 年の初版から 1997 年の再版への変更箇所が不明瞭で、両版の相違を記した書誌情報がまったく記載されていないことにある。これは基本的に OUP の責任であり、旧版の扱いにも同様の問題が見られた (註 3 参照)。

(28) Slings, 98-99 は、諸写本が一致して伝承しているが校訂者の判断で削除するという意味で [ ] を用いる従来の表記を擁護し、この括弧を (記号としては妥協であるとしても) 完全に用いずに済ませることは、プラトンのテクストが実際以上に確実に伝承されているかの誤った印象を与える、と批判している。

以下の数字は、「資料：プラトン『国家』第一巻のテクストについて」に付された番号である。

< Burnet の旧 OCT 版からの変更>

i) マイナー写本や証言から主要写本の読みへ:

1 (A^3 → ADF), 7 (Theo → ADF), 11 (Stob. (A) → ADF Stob. (SM)), 12 (Stob. → ADF), 42 (Stob. → ADF), 50 (Mγ → ADF Stob.)

ii) 近代の推測から主要写本の読みへ:

2 (Nitzsch → ADF), 34 (D に依拠した Burnet → AF)

iii) A 写本から F 写本の読みへ:

8 (AD → F, Stob.), 10 (AD → F, Stob), 18 (AD → F), 22 (AD → F), 26 (ADF^3 → F^a), 32 (AD → F, Eus.), 35 (AD → F), 37 (A → F), 38 (AD → F), 44 (A → DF, Stob.)

iv) A 写本から D 写本の読みへ:

15 (AF → D), 28 (A → Asl D)

v) A 写本の読みへ:

16 (D → AF), 20 (DF → A), 21 (DF → A), 24 (F → AD), 30 (F^a → ADF^3), 45 (DF → A), 52 (F Stob. → AD), 53 (F Stob. → AD)

vi) 写本の読みから近代の推測へ: 46 (ADF Stob. → Tucker の削除)

vii) 写本の読みから独自の推測へ: 40

viii) 写本情報不明: 29

1) 校訂の保守性

読みの選択は概して写本に忠実で、より保守的と言える。とりわけ、近代の推測やマイナー写本から主要写本に戻すケースが多い。逆に、自らの推測を提案する 40 (349b7) を除いて、反対のケースは見られない。3 (2) で紹介した D. Robinson の校訂とは対照的である。

2) F 写本の重視

A 写本 (と D 写本) から F 写本 (と Stobaeus) の読みに移す例が目立つ (十例)。F 写本を重視する方向は Dodds の *Gorg.* 校訂に代表される二十世紀後半の傾向を進めるものであろう。この点では、F 写本を考慮しない Jowett & Campbell と Adam が A 写本の読みをとっている箇所で、対照的に Burnet と Slings が共に F 写本の読み (しばしば Stobaeus も) をとる例も多い (八例 : 4, 23, 33, 39, 41, 48, 54, 56)。このことは、Slings が、すでに Burnet が多く採用していた F 写本からの読みをさらに増やしていることを示す[29]。またそれらの箇所では、Campbell と Adam は F 写本の読みをほとんど考慮していなかったことが判る。

F 写本は、Schneider, Burnet によって古代の "vulgata" の代表とされ、

(29) Boter, 75 は、Burnet が AD に優先して F の読みを採用している多くの箇所について、確実性が低いとコメントしている。

Eusebius, Iamblichus, Stobaeus など古代の引用との一致が顕著と指摘されている。Stuart Jones はこれに反対し、学術的校訂ではなく一般に流通した"commercial text"の代表とした(30)。Boter は、誤りが多いテクストであるが(特に小辞の付加・省略が目立つとされる)、他の写本にない正しい読みも多く保存されていると評価する(31)。Slings も、古代後期に遡る数々の読みの、唯一の証人と位置づけているのである。

3) 付加の削除

Burnet が含めていた語句を「付加」と見なして落とした場合が目立つ(32): 11 (καὶ κοσμίῳ), 16 (οἰκοδομικοῦ τε καὶ), 18 (ὅτι ἔστιν δίκαιον), 23 (ἀρχομένοις).

4) まとめ

第一巻に関しては、改訂によって哲学的な内容に大きく響く変更は見られなかった。今後も新校訂テクストを検討していく中で、プラトン哲学の解釈がどれくらい変わってくる可能性があるかについても、注意深く見ていきたい(33)。

(慶応義塾大学)

(30) H. Stuart Jones, "The 'ancient vulgate' of Plato and Vind. F" *Classical Review* 16 (1902), 388-391.

(31) Boter, 99-110 は、F は数多くの誤りがあるにもかかわらず、テクストを校訂する上では D にもまして価値があると見なす。その大きな根拠は、D が F よりもより一層 A 系統と混淆していることにある。Boter は、Burnet が F をやや多用し過ぎていると指摘しながら(註 29 参照)、間接伝承によってしばしば読みが補強される F が、正しい読みを保持する唯一の主要写本であることを評価している。

(32) これは、Slings, *Critical Noets on Plato's Politeia*, 6 (= *Mnemosyne* 41, 284-285) で説明された校訂の方針によるものであろう。

(33) 本論考は、2005 年度の慶応義塾大学大学院での演習の調査・議論をもとにまとめられた。また、2005 年 10 月 16 日に慶応義塾大学三田キャンパスで開催された「フィロロギカ研究大会」でも報告し、議論していただいた。それらの機会に貴重な意見を頂戴した方々に感謝申し上げたい。共同演習を担当して下さっている栗原裕次氏、校訂作業について情報を寄せていただいた Fritz-Gregor Herrmann 氏、そして『フィロロギカ』の査読者の方々には、とりわけお礼を申し上げたい。

資料： プラトン『国家』第一巻のテクストについて
―Slings 新校訂と旧校訂との異同―

主要な四つの校訂版(J&C, Burnet (旧 OCT 版), Adam (1902 版), Slings (新 OCT 版)) 間の異同について、調査した結果を順に報告をする。なお、この四つの校訂版の間では異同がないが、写本の読みに関して検討すべき場合を「参考」として扱った。

写本記号は Boter に従い、行数は Slings (新 OCT 版) に従う。

*印は、検討によって、納富がより適当と判断した読みを示す。

1) 327c10: *ἐλλείπεται, ADF: Hermann, Slings
γρ ἒν λείπεται, A³: J&C, Burnet, Adam
[Slings, CN. 1 (279-280) は、*Phlb.* 18d とのパラレルにより弁護。以前は、写本の裏付けが弱く文法的に必然ではないが、より明瞭にするための読みが広く取られていた (cf. J&C)。しかし、Slings は有力写本に戻ってそのまま読む。A³ の記載 "γρ." は写本情報ではなく推測であろうと Slings は判断]

2) 328c6: *οὐδὲ, ADF: Adam, Slings
οὐ δὲ: Nitzsch, J&C, Burnet
[様々な改訂の提案 (alii alia) に対して、Slings は写本通りに読む]

3) 328c7: ἦν, AF: J&C, Adam
*ἦ, D Schol.Hom.: Burnet, Slings

4) 328d6: νεανίαις, A Thom.Mag.: J&C, Adam
*νεανίσκοις, DF Stob.: Burnet, Slings

5) 328d8: *γε, D Stob.: J&C, Burnet, Slings, Denniston
τε, F
om., A: Adam

6) 329c2: *ἀσμενέστατα, AF Theo, Clem., Stob., Olympiod.: Burnet, Slings
ἀσμενέστατα: J&C, Adam, LSJ
ἀσμεναίτατα, D, Philoxenus
[写本上は有気息とされるところを、語源からの言語学上の理由で無気息に改めている (LSJ の "ἄσμενος" の項参照)。Slings らが写本通りとしているのが、言語学上の理由か、写本優先かは不明]

7) 329c4: *ἀποφυγών, ADF Plut., Clem., Stob.: J&C, Adam, Slings
ἀποδράς, Theo: Burnet
om., Clem., Stob.
[Burnet が採用した間接証言 (他の校訂者はとらず) の読みを退け、Slings は写本に従う]

8) 329e4-5: *πολλὰ παραμύθια φασὶν εἶναι, AD: J&C, Burnet, Adam
πολλά φασι παραμύθια εἶναι (παραμυθία (sic), F Stob.): Slings
[Slings が、何故あえて F, Stobaeus に依拠した読みに変えたかは不明]

参考 1) 329e7: *μέντοι γε ὅσον, ADF Arethas: J&C, Burnet, Adam, Slings
μέντοι ὅσον γε, Procl.
μέντοι ὅσον, Stob.
[Denniston, 405 にあるように、"μέντοι γε" という小辞の組み合わせはこの箇所と *Crat*. 424c しかない。しかし、Adam は話者ケパロスがアテナイ人ではない点を指摘。Slings, CN. 1-2 (280-281) 参照]

9) 330b6 *τούτοισιν, ADF: Burnet, Adam, Slings
τουτοισί: Bekker, J&C
[“τούτοισιν” という archaic dative を避け、deictic (to my sons here) とする Bekker の改訂がある。しかし、archaic dative は他に用例があることに加えて、Adam はシュラクサイ出身の老人ケパロスに相応しい古い型として擁護]

10) 330c5 *περὶ τὰ χρήματα σπουδάζουσιν, AD: J&C, Burnet, Adam
τὰ χρήματα σπουδάζουσιν, F Stob.: Slings
[Slings, CN. 2-3 (281) は、動詞 “σπουδάζω” は前置詞を伴っても伴わなくても用いられるが、ない方が lectio difficilior とする]

11) 331b1 *ἐπιεικεῖ, ADF Stob. (SM): J&C, Adam, Slings
ἐπιεικεῖ καὶ κοσμίῳ, Stob. (A): Burnet
[329d5 “κόσμιοι” からの gloss である可能性が高い]

12) 331b5 *ἀλλά γε ἕν, ADF: J&B, Adam, Slings
ἀλλὰ ἕν γε, Stob.: Burnet (cf. Denniston, 23)
[“ἀλλά γε” の組み合わせは古典期でも後期でも用例は稀で、Pl. で写本上見られる五箇所はいずれも疑われている (*Rep*. 543c, *Phd*. 86e, 116d, *Hi. Mj*. 287b, *Phdr*. 262a)。Slings, CN. 3-4 (282-283) は、この稀な言い方に後に改訂された理由が不明である点、ケパロスがシケリア出身である点 (この組み合わせが、Gorg. *Pal*. 10, 14 に 2 箇所ある)、Pl. が “ἕν” の併置の間に小辞を入れた例もない点から、議論の余地ありとしつつ写本の読みを維持する]

13) 331d8 *ἔφη, ἐγώ, ADF: Burnet, Adam, Slings
ἔφην ἐγώ, E: J&C
[話者の割振り変更を含意する改訂があるが、有力写本の通りで内容的にもよい]

14) 332b7 *δέ γε, ADF: J&C, Burnet, Slings
δὲ, E, Bessarion: Adam

15) 332c5 Ὦ πρὸς Διός, AF: J&C, Burnet, Adam
Πρὸς Διός, D: Slings
[Slings, CN. 5 は表現の位置を問題とし、Pl では “Ὦ πρὸς Διός,” という形が文頭では用いられないことを理由としている (*Mnemosyne* 41 には説明なし)]

16) 333b8 *κιθαριστικοῦ, AF: J&C, Adam, Slings
οἰκοδομικοῦ τε καὶ κιθαριστικοῦ, D: Burnet

参考 2) 333e1 *οὐκ ἂν οὖν, A marg.: J&C, Burnet, Adam, Slings, Denniston, 440
οὔκουν, ADF
［写本上ほぼ一致している読みを、文法上の理由で校訂者が一致して退けた例］
17) 333e7 ἐμποιῆσαι, ADF: J&C
καὶ ἐμποιῆσαι, D^2
*ἐμποιήσας: Schneider, Burnet, Adam, Slings
［写本上の裏づけはないが、一般にアオリスト分詞が採られている。333e6-7 の解釈は、区切り方 (ADF は "λαθεῖν" の後にコンマ)、及び、e6 "λαθεῖν" を "λαθὼν" に読み替える提案 (Schneider) と合わせて、解釈上の問題となっている。Adam, Appendix II, 62-63, Slings, CN. 5-6 (283-284) が検討］
18) 335a8 *λέγειν, F: Slings
λέγειν ὅτι ἔστιν δίκαιον, AD, F^2 (margin): J&C, Burnet, Adam
［Slings, CN. 6 (284-285) は、F における欠落の可能性よりも、AD における挿入の方が蓋然的と判断；Boter, 76 ではこの提案に賛成］
19) 335e11 *Ἐγὼ γοῦν, ADF: Burnet, Adam, Slings, Denniston, 454
Ἔγωγ' οὖν, A? (apud Adam): J&C
［J&C が採用した読みを、Adam は A 写本に帰しているが、新旧 OCT に記載なし］
20) 336e2 *εἰ γὰρ, A: J&C, Adam, Slings
εἰ γάρ τι, DF: Burnet
21) 337a3 ἀνεκάκχασε, A: Slings
*ἀνεκάγχασε, DF: J&C, Burnet, Adam, LSJ
ἀνεκάχασε, Phot.
［Slings, CN 6-7 (*Mnymosyne* 41 に説明なし) は、*Euthd.* 300d と合わせて、"-καγχ-" という形を後代のものと推測］
参考 3) 337a6 *ἐθελήσοις, AD: J&C, Burnet, Adam, Slings
ἐθελήσεις, F, Sc
参考 4) 337a7 *ἀποκρινοῖο, βpc: J&C, Burnet, Adam, Slings
ἀποκρίνοιο, AF
ἀποκρίναιο, D
参考 5) 337a7 *ἐρωτᾶι, AD: J&C, Burnet, Adam, Slings (ἐρωτᾷ)
ἐροῖτο [sic], F
ἐρωτῷ: Goodwin
［337a6-7 (参考 3-5) には様々な読みの提案があり、Slings, CN. 7-8 (285-286) が検討。写本が乱れているが、現代の校訂は安定している。他に、a7 ποιήσοις を削除する Cobet の改訂案もある］
22) 337b5 *τῷ οὕτως, AD: J&C, Burnet, Adam
οὕτως, F: Slings
23) 340a7 τοῖς δὲ, DF: Burnet, Slings
*τοῖς δὲ ἀρχομένοις, A: J&C, Adam
［文脈から意味に疑いはないが、対の内容を明示する A の読みがよいのでは］
24) 340e3 *ἐπιλιπούσης, A^aD Stob.: J&C, Adam, Slings

ἐπιλειπούσης, FMγA[5] (or A[2]?): Stallbaum, Burnet, Allan

[アオリスト分詞(時点)を読むか現在分詞(過程)を読むかで、前後の議論内容に変化がでる可能性がある。Slings, CN. 8-9 (286-287)]

25) 341b6 *ὅ, Apc, DF: Burnet, Adam, Slings
ὄν, Benedictus: J&C

26) 341e6-7 ἐπὶ τοῦτο, F[a]: Slings
*ἐπὶ τούτῳ, ADF[3]: J&C, Burnet, Adam, Allan

[Slings, CN. 9 (287-288), 187 (additional note)で、353a5と同じと提案]

27) 342a5 *ἐκποριούσης, βpc: Burnet, Adam, Slings
ἐκποριζούσης, ADF: J&C

[Campbellは、現在形と未来形の組み合わせはよくあるとする(cf. X 604a)。だが、未来形の並列の方が自然]

28) 344a2 *ὅσῳ, A: J&C, Burnet, Adam
ὅσον, F
πόσῳ, Asl D: Slings

[旧OCTでは "ὅσῳ, ADM / ὅσον, F" と記載されていた]

29) 344a3 *αὑτῷ: Adam, Slings
αὐτῷ: J&C, Burnet

30) 344e1 *ἀλλ' οὐ, ADF[3]: J&C, Adam, Slings
ὅλου, F[a]: Burnet, Lorimer (*CR* 45 (1931), 213)

[Slings, CN. 10 (288)で検討]

31) 345c4 *πιαίνειν, A Eus., Gal.: Burnet, Sling
ποιμαίνειν, A[1]mg D: J&C, Adam, LSJ
παχύνει, F

[J&C, Adamは註で議論しており、前後の文脈の上で重要。Slings, CN. 10-11 (288-289)が擁護するAの読みがよい]

32) 345d5 *δὲ, AD; J&C, Burnet, Adam
δή, F Eus.: Ast, Stallbaum, Slings

[Adamは、illativeよりconnectiveがよいとする]

33) 345e2 τοὺς ἀληθῶς, AD: J&C, Adam
*τοὺς ὡς ἀληθῶς, F Eus.: Burnet, Slings

[343b4-5を受ける表現とすると、"ὡς"がある方が精確]

34) 346a6 *ἑκάστη, AF: J&C, Adam, Slings
ἑκάστην τούτων, D
ἑκάστη τούτων: Burnet

35) 346b4 συμφέρον, ADF[3]: Burnet, Allan
*συμφέρειν, F[a]β: J&C, Adam, Slings

[Burnet, *CR* 18 (1904), 204; Allan, 104が前者の読みを、Adam, Slings, CN. 11-12 (289-290)が後者をそれぞれ擁護している。文法的には後者が自然]

参考 6) 347a4 *δεῖν, ADF[3]: J&C, Burnet, Adam, Allan, Slings
δεῖ, F[a] Eus.

[Slings, CN. 12 (290), 187 (additional note) 参照]

参考 7) 347e5　*ποτέρως, ADF: J&C, Burnet, Adam, Slings
πότερον: Ast, Shorey

参考 8) 347e5　*πότερον ἀληθεστέρως, F: J&C, Burnet, Adam. Slings
πότερον ὡς ἀληθεστέρως, AD
ποτέρως ἀληθεστέρως: Ast, Shorey

36) 347e7　*ἔγωγε, prA F: Burnet, Slings
ἔγωγ' ἔφη, Apc D: Chambry
ἔγωγε, ἔφη: J&C, Adam
[会話の語尾が報告体に影響される例は、349c6 "οὐκ; ἔφη, ὅς" にもあるので、Dの読みも不可能ではない]

37) 348a1　*οὖν, F: Slings
om., A: J&C, Burnet, Adam
οὗς, D
[旧 OCT には F の読みの記載はなかった]

38) 348b6　*ὁποτέρως, AD: J&C, Burnet, Adam
ποτέρως, F: Shorey, Slings
[婉曲な疑問 (J&C)、間接疑問として主動詞を補う (Adam) といった解釈があるが、Slings, CN. 12-13 (291) は "οὖν" との連結を問題にする (cf. Denniston, 422)]

39) 348c7　*ἐπειδὴ καὶ, AD: J&C, Adam
ἐπειδή γε καὶ, F: Burnet, Slings
[同文中、四語前にも "γ'" があり、くどいのではないか、と納富は判断]

40) 349b7　*οὐδὲ τῆς δικαίας, ADF Stob.: J&C, Burnet
οὐδὲ τῆς <πράξεως τῆς> δικαίας: Adam
οὐδὲ <ταύ>της [δικαίας]: Slings
[Slings が第一巻の校訂で、唯一自らの推測を提案している箇所 (CN. 13-14 (291-292))。だが、写本通りの読みで（やや不自然としても）不可能ではない]

41) 349b9　ἡγοῖτο δίκαιον, AD: J&C, Adam
*ἡγοῖτο, F Stob.: Burnet, Slings
[F 写本の重視は、Boter, 76 参照。ここは "δίκαιον" を gloss と取る]

42) 349c7　*ἀδίκου, ADF: J&C, Adam, Slings
ἀδίκου γε, Stob.: Burnet
[Slings, CN. 14-15 (292) は、古代後期の写本や間接伝承は "γε" を加えがちとする]

43) 349d10　*ὁ δὲ μὴ ἐοικέναι, ADF, Stob.: Adam, Burnet, Slings
ὁ δὲ μὴ μὴ ἐοικέναι, xq: Stephanus, J&C
[Adam が註で主要写本の読みを擁護。新 OCT は異読の記載もしていない]

44) 349e6　οὐκοῦν καὶ, A: J&C, Burnet, Adam
*οὐκοῦν, DF Stob.: Slings

45) 350c12　δὲ, A: Adam, Slings
*δὴ, DF: J&C, Burnet, Allan, Denniston

[J&C, note; Denniston, 238 が例示するように、新たな段階を示す connective δή が相応しい]

参考 9) 351a2 *ὅτι καὶ, AD: Burnet, Adam, Slings
καὶ ὅτι, F

参考 10) 351a3 *ἔφην, F: J&C, Burnet, Adam, Slings
ἔφη, AD

46) 351c1 *ἔχει, ADF Stob.: J&C, Burnet, Adam
ἔστιν, N (Bessarion)
[ἔχει]: Tucker, Slings

[写本通り "ἔχει" を読むと、不可能ではないにしても非常に不自然となり、諸提案がなされている。Slings, *Mnemosyne* 296-297 ではダガーを付けていたが、新 OCT では削除の [ ] に入れた。CN, 187 (additional note) で再考を記している]

47) 352a1 *ποιεῖν, D: Burnet, Adam, Slings
ποιεῖ, AF: J&C

["φαίνεται" に支配させる新 OCT だが、AF の読みにも "fortasse recte" と付記しており、Slings の判断が揺れているように見える]

48) 352a6 ταῦτα πάντα, AD: J&C, Adam
*ταὐτὰ ταῦτα, F: Burnet, Slings
ταῦτα, Stob.

49) 352b1 ἔστωσαν, ADF, Stob.: J&C
*ἔστω: Burnet, Slings
ἔστων: Adam

[三人称単数命令形については、354a5 も参照]

50) 352b9 οὐδὲν, ADF Stob.: Adam, Slings
*οὐδὲ, Mγ: J&C, Burnet, Allan, Denniston

[Boter, Slings が A-family に位置づけた M が別の読みを提示している点に注目。第一巻ではここだけ (cf. 340e3 も似ているが、そこでは A 系統の読みが混在)]

51) 352e10 ἂν ... φαμὲν, ADF Stob.
*ἂν ... φαῖμεν, βpc: J&C, Adam (1902)
[ἂν] ... φαμὲν: Adam (1897), Burnet, Slings

[Slings の apparatus で言及する Adam は 1897 年版での提案であり、Adam 本人は 1902 年の註釈で自らの提案を退けている。この点では、新 OCT の表記は不親切]

52) 353a1 μαχαίραι, AD: J&C, Slings (μαχαίρᾳ)
μαχαίρα ἂν, F Stob.
*μαχαίρᾳ ἂν: Burnet, Adam

53) 353a5 *τοῦτο, AD: J&C, Adam, Slings
τούτῳ, F Stob.: Burnet

[Slings は、341e6-7 の場合と同様に扱う。だが、支配する動詞が異なっており、同一の構文で読む必要があるか、納富は疑問に思う]

54) 353b4 ἔστιν, AD: J&C, Adam
*ἐστί τι, F Stob.: Burnet, Slings (アクセント表記：ἔστι τι)

55) 353d7 *ἐκείνης, ADF Stob.: J&C, Burnet, Slings
ἐκείνου, Eq² Par²pc: Adam
secl. Madvig

[Adam が女性型が文法的に不可能であるとして、マイナー写本の読みを採用したのに対して、Slings, CN. 18-19 (297-298) は文法的可能性を擁護。但し、彼が OCT で写本情報を記載しないのは不親切]

56) 353d9 ψυχῆς, AD: J&C, Adam
*οὐ ψυχῆς, F Stob.: Burnet, Slings

57) 354a5 ἔστωσαν, AD (F deficit): J&C
*ἔστω, Stob.: Burnet, Slings
ἔστων: Hartman, Adam

[352b1 と同様に、三人称単数命令形をめぐる相違]

<新 OCT 版 (Slings) の旧版 (Burnet) からの変更箇所>

1, 2, 7, 8, 10, 11, 12, 15, 16, 18, 20, 21, 22, 24, 26, 28, 29, 30, 32, 34, 35, 37, 38, 40, 42, 44, 45, 46, 50, 52, 53

The Text of the Hippocratic *Treatise On The Eye*

Elizabeth Craik

I Introduction

The study of ancient medicine is very different from the study of Greek tragedy. A major difference is that the manuscripts of tragic texts have been well worked over and the collations of many predecessors are available. Of course these are not uniformly reliable, and stemmatic study is subject to constant refinement: for example, Dawe's work on horizontal tradition demonstrated convincingly the deficiencies of Murray's Oxford Classical Text of Aeschylus, and Lloyd-Jones' Sophocles differs substantially from that of Pearson — but their work and that of Diggle on Euripides will not quickly be superseded. Some Hippocratic texts have received similar attention, especially from Jouanna and his colleagues in Paris; but many are still quite neglected.(1)

Organ of Sight occupies a mere four pages of Greek in the modern printed text.(2) The treatise is brief and allusive in content; in addition, the text is seriously corrupt. In part, the pervasive corruption lies in the technical nature of the work, which deals with procedures naturally unfamiliar to scribes, as to scholars. In part, it lies simply in visual or aural error on the part of scribes, liable to make mistakes when faced with difficult and unfamiliar material, and liable to treat such a short piece as relatively unworthy of attention. Sichel laments the 'état de mutilation tel qu'il est impossible de reconstituer un texte irréprochable'; Ermerins finds both the corrupt state of the text and its technical content such obstacles to comprehension that he declines to translate large parts of it; Joly (who follows Sichel closely) concurs that 'les problèmes ... ne comportent pas de solution tranchée'.(3) A further problem is that, while there is no shortage of mss containing the work, the tradition is uniform and so uniformly corrupt.(4)

(1) On Hippocratic mss, see Diels, H., *Die Handschriften der antiken Ärzte*, I Teil: 'Hippokrates und Galenos', *Abh. Königl. Preuss. Akad. Wiss.*, phil.-hist. Klasse (Berlin, 1905).

(2) Sichel *ap*. Littré 9, 152-61 (Paris, 1861); Ermerins 3, 279-83 (Utrecht, 1864); Joly, CUF t. 13, 168-71 (Paris, 1978). Other major editions cited are those of Cornarius (Basle, 1538); Foesius (Frankfurt, 1588); van der Linden (Leiden, 1665); reference is made also to the Latin translation of Calvus (Rome, 1525) and to Iugler, *Hippocratis de visu libellus* (Helmstadt, 1792).

(3) Sichel 152; Ermerins Praefatio XL-XLI; Joly 163.

(4) M = Marcianus gr. 269, s. X
H = Parisinus gr. 2142, pars antiquior, s. XII
I = Parisinus gr. 2140, s. XIII

The text depends entirely, directly or indirectly, on the tenth century ms M (Marcianus 269).(5) In the absence of evidence from the separate strand of the tradition represented by V (Vaticanus gr. 276, twelfth century) and mss descended from V such as C (Parisinus gr. 2146), much used by Littré, the deep-seated corruption in the text with its single medieval source is intractable.(6) Sichel knew readings of M through information from Daremberg, but did not recognise M's early date, priority and relative importance. Similarly Ermerins knew M only indirectly, through readings communicated by Cobet. Sichel collated and recorded the readings of the *recentiores*, especially the Parisian *recentiores*, with great thoroughness. Ermerins supplemented Sichel's critical apparatus with information from one further ms in the Netherlands (Q). Joly collated M and relied on Sichel for the rest.

For this edition, I have seen all but two mss (Haun. and Mo., both recently collated by others). Several minor mistakes in Joly's representation of the text of M have been corrected. On checking Sichel's apparatus for the *recentiores*, I find many instances where the punctuation is wrongly recorded. This is unsurprising, as versions of the punctuation vary greatly (especially in relation to headings or quasi introductory material) and are frequently awry, betraying a complete lack of comprehension on the part of scribes: there is a tendency to reduce the text to staccato bursts of short clauses, or apparent semantic units, devoid of overall syntactic sense. These different versions have no interest except as a means of suggesting links among the *recentiores*. Scrutiny of the mss merely reinforces the impression of careless transmission. It is remarkable that several obvious errors in M go almost universally uncorrected

R	=	Vaticanus gr. 277, s. XIV
Ca	=	Cantabrig. Caius Coll. 50, s. XV
E	=	Parisinus gr. 2255, s. XV
F	=	Parisinus gr. 2144, s. XIV
G	=	Parisinus gr. 2141, s. XV
Haun.	=	Hauniens. Gl. Kgl. 224, s. XVI
J	=	Parisinus gr. 2143, s. XIV
K	=	Parisinus gr. 2145, s. XV
Laur.	=	Laurentianus 74, 1, s. XV
Mo.	=	Monacensis gr. 71, s. XV
Mut.	=	Mutinens. Estensis gr. 220, s. XV
O	=	Baroccianus 204, s. XV
Q	=	Vossianus fol. 10, s. XVI
U	=	Urbinas 68, s. XIV
W	=	Vaticanus gr. 278, a. 1512
Z	=	Parisinus gr. 2148

(5) On M, see esp. Jouanna, J., 'L'Hippocrate de Venise (Marcianus gr. 269; coll. 533): nouvelles observations codicologiques et histoire du texte', *REG* 113 (2000), 193-210.

(6) But see Jouanna, CUF t. 4, *Epid.* 5 and 7 (Paris, 2000), 95-7 on the closeness of M and V.

(αὐτόμαται, 1.1; θαλασσοειδῆ, 1.2; μηλησίῳ, 4.1). There is an almost total lack of marginalia (even in mss where these abound for other works) and such glosses as do exist are banal in the extreme (in G, δεύων glossed βρέχων, 3.2). There is, however, a general regard for marking new topics: a red initial letter or a small space precedes a separation into 'chapters' similar to that adumbrated in notes by Cornarius, then pioneered in his text by van der Linden, refined by Iugler and followed in modern editions. M has a sizeable space only before 7 init., but has slight spaces before each of the repeated ἔπειτα 'then' conjunctions in 3.1; while there is not complete unanimity in the *recentiores* over the existence or placing of these sense divisions there is most general agreement over the start of our chapters 7, 8 and 9. R, however, has spacing before 4, 7 and 8 and Laur. only before 6 and 8.

In M, f. 212 starts with the words ὁ κάτωθεν 3.3 and ends with the words ἐπανιεὶς δὲ, 7.1. At both points, where scribal inattention is explicable, the text is particularly problematical and can be understood only with substantial extension and emendation. Although the precise nature of the relation of the later mss to M and to one another is much debated and there is no agreement on details of classification, the general lines of affiliation are clear. The mss H and I are both close to M, either through faithful copying or — as has been suggested — because they share a common (lost) source; they are in turn the basis of the later tradition. The consensus view that I had a great influence on the later tradition — for instance being source of F, source in turn of G, source in turn of Z — is corroborated in the case of this work. That different sources can be seen in R is clear also: R agrees more often with H (and is familiar with the second hand in H) but at the same time shares several readings with I. There is no evidence from this treatise that R had access to significant material extraneous to the tradition of MHI. Detail in the critical apparatus is confined to the readings of M, H, I, R. In the final analysis, precise textual study is of no help whatsoever in retrieving the original lost text of this work. As elsewhere, it may be suspected that scribes were more concerned with general fidelity to content than with an exact record. In this edition, clues to the source and nature of corruption are sought in other Hippocratic works, and in parallel passages of Celsus and Galen. This is, of course, a hazardous enterprise. It must be stressed that, where emendations are suggested on this basis, they lay no claim to verbatim restitution of the lost original; rather to recovery of the lost gist expressed in wording which is possible and plausible. The only justification is that manifest nonsense is here converted to patent sense fitting its context.

Earlier editors and translators made distinctive contributions, in line with their work on other Hippocratic treatises. Both Calvus and Cornarius, generally conservative and literal, used translation as a means of explication

and interpretation. Calvus, using the ms W at Rome in 1512, made the obvious correction of μηλησίῳ to μιλησίῳ, 4.1 and recorded the variant, or intelligent conjecture, ξύσιος for κρίσιος, 4.2; the translation *scapulares* 'scapulars', 3.1, may be significant. Cornarius' annotations, comprising both observations and corrections, contained in his personal copy of the Aldine text of 1526 survive, as was realised by Sichel, who checked and recorded his notes in the copy at Göttingen; from this it is possible to see the use Cornarius made of further ms sources.(7) Foesius, thanks to an influential patron, had access to three mss held in the royal library at Fontainebleau where they were transferred in 1544 and catalogued in 1550; he had also seen the Vatican ms now known as R. Foesius printed a text in line with the current vulgate, but permitted himself some deviations from this in translation and comment, notably in 4 and 7. Van der Linden followed Foesius but not slavishly; he is familiar with Ermerins' ms Q. The philological value of these early printed texts lies primarily in the access of scholars then to a wider range of manuscript sources than we now possess. In practice, however, the sources they cite add little to our knowledge and do not mitigate our dependence on M. The medical value of these early printed texts is considerable, especially for such surgical works as *Organ of Sight*. All contributors were practising doctors who had personal experience of bloodletting and cupping — and of such activities before Harvey's work of 1628 changed our perception of the blood vessels and their course in the body.

It has commonly been asserted that there is no ancient reference to *Organ of Sight*, which would authenticate its place in the Hippocratic Corpus of antiquity. This negative view can be contested with regard to the Galenic gloss ἄτρακτον, relevant to 4.1; Erotian's gloss φολίδα, relevant to 6 and possibly also οὐλῷ relevant to 4.1 (falling in the appropriate position in Erotian's list: in the third category, Therapeutics, placed with the lost work *On Wounds and Missiles*, between *Head Wounds* preceding and *Fractures* with *Articulations* following); διαφανέσι 2 and 5, ταχύ, 3.4 and ξυσμῷ, 6.1 may be candidates also. That many words glossed by Galen are present in the treatise confirms that the vocabulary has a Hippocratic, if at times recondite, character. Hesychios too contains much of relevance to the work.

II Emendations

(1) 2 *init.* τὰ λημία ἐν τοῖσιν ὀφθαλμοῖσι, τῆς ὄψιος ὑγιέος ἐούσης τῶν νεωτέρων

(7) On Cornarius, see Montfort, M.-L., 'Le traité hippocratique *De videndi acie* est-il d'époque impériale?', in I. Boehm & P. Luccioni (edd.), *Les cinq Sens dans la médecine de l'époque impériale* (Lyon, 2003).

ἀνθρώπων, ἤν τε θηλεία ᾖ, ἤν τε ἄρσην, οὐκ ἂν ὠφελοίης ποιέων οὐδέν, ἕως ἂν αὔξηται τὸ σῶμα ἔτι

τὰ λημία Craik: τὸ ὄμμα MH: καὶ τὸ ὄμμα RI *fere recc.*

It is stated that a certain condition appearing in childhood is to be left alone until the sufferer is fully grown, then treated by surgery to the eyelid. The first consideration is that the transmitted text gives nonsense. The opening words τὸ ὄμμα ἐν τοῖσιν ὀφθαλμοῖσι 'as to the eye in the eyes' are meaningless, and the ensuing genitive absolute, introducing ὄψις 'sight' merely compounds the difficulty. The word ὄμμα, said by LSJ to be poetic and rare in prose, is in itself unexceptional, being Ionic rather than poetic (seventy-three occurrences in the Hippocratic Corpus and in some works, such as *Prorrhetic* 1, preferred to ὀφθαλμός).

A simple emendation, corroborated by Hippocratic parallels, gives perfect sense: τὰ λημία ἐν τοῖσιν ὀφθαλμοῖσι 'as to sores in the eyes'. The corruption is readily explained, on grounds both of visual similarity, which would be especially marked at the majuscule stage, and of intrinsic plausibility, a technical term being supplanted by a common word, apparently suitable in context. The emendation has the added merit that it provides a quasi-heading at the start of a new topic, as is common in such nosological accounts (cf. the emphatic first words of 1, 5, 7 and 9). The term λήμη with the common diminutive form λημίον refers to noxious matter collecting in or flowing from the eyes: 'rheum', 'discharge', 'secretions'. Properly speaking, 'rheum' is not a disease but a symptom. Here, it can be viewed as a protracted irritation in the eye which might lead to any one of a range of chronic conditions: the characteristic symptoms of conjunctivitis (soreness, grittiness, eyelids sticking together overnight with secretions at lid margins) and of blepharitis (red eyelids with scaling along the margins) are essentially similar to conditions such as entropion, where the lower lid is rolled over and the lashes irritate the eye, and ectropion or eversion of the lids, where there is similar concomitant irritation. The term was widely used in a metaphorical sense (most famously applied by Pericles, to the island Aigina seen in relation to the Peiraieus) and proverbially (Ar. *Nu.* 327); the prevalence doubtless reflects a high incidence of eye disease.

In *Prorrhetic* 2 (*Prorrh.* 2. 18), the effects of λημία σμικρὰ περὶ αὐτὰς (sc. τὰς ὄψιας) 'small sores around the sight' are discussed, in a long and detailed discussion of ὀφθαλμοὶ . . . λημῶντες 'eyes suffering sores' where different developments of such a condition are considered. In this passage, λήμη (singular) is a key word, repeated eight times, with the diminutive λημία (plural) once. A succinct but clear description of eye troubles is found in

Ancient Medicine, there embedded in an account of the pathological effects of flux to nose, eyes and throat, i.e. chest (*VM* 18-19). The processes in the three fluxes are presented as parallel, with parallel features. The account in *Ancient Medicine* has strong similarities with material in *Prorrhetic* 2: emphasis on discharge called λήμη, ulceration of the eyelid (here clearly the lower lid, as it is stated that ulceration may extend to the cheek), ulceration in the eye (τὸν ἀμφὶ τὴν ὄψιν χιτῶνα 'the tunic around the sight', i.e. the sclerotic membrane); symptoms of streaming, pain and inflammation. In *Glands*, matter in flux from the brain, causing disease if it is not removed, is uniquely designated λύματα 'impurities', 'purgations' (*Gland.* 12): it may be suspected that this apparent hapax legomenon is in fact another corruption of λημία, this time by an aural error of a notoriously common type.

(2) 3. 1-4 ὅταν δὲ φλέβα παρακαύσῃς ἢ διακαύσῃς, ἐπειδὰν ἐκπέσῃ ἡ ἐσχάρη, ὁμοίως τέταται ἡ φλὲψ καὶ πεφύσηται καὶ πλήρης φαίνεται, καὶ σφύζει ὅτε ἄνωθεν τὸ ἐπιρρέον· ἢν δὲ διακεκαυμένος ὅτε κάτωθεν, ταῦτα πάντα ἧσσον πάσχει.

ἢ διακαύσῃς del. Ermerins ὅτε ἄνωθεν . . . ὅτε κάτωθεν Craik: ὅτε κάτωθεν . . . ὁ κάτωθεν *codd.* : ὅτι κάτωθεν (*del.* ὁ κάτωθεν) Ermerins: ὅτε κάτωθεν . . . (*del.* ὁ) κάτωθεν Joly

The subject of this chapter is cautery of the vessels. Sichel comments that we have 'préceptes généraux sur le mode d'exécution de l'ustion des veines', asserting (wrongly) that cautery in the back is taken as an example, 'comme applicable à un plus grand nombre de maladies' and (rightly) that cautery in all parts of the body is believed to follow the same principles. He wonders, following Cornarius, whether the chapter is somehow misplaced. Ermerins allows cautery to be relevant because of its use in ophthalmology, but finds the sense awkward and has recourse to some emendation and extensive deletion. Joly sees no relevance in the chapter, commenting dismissively 'Ce chapitre semble égaré dans une oeuvre d'ophthalmologie'.[8] It is here argued that cautery of the vessels in the back of the head and neck is intended, and that the purpose is to arrest a flux of noxious matter primarily affecting the eyes and secondarily threatening lower parts of the body: there is no need to suppose a lacuna at 3.1 and emendation is required in 3.3.

The effects on the eyes of two types of flux (cf. *Places in Man* 1.3, 13.3) are here allusively indicated: flux A (superficial, mucus-like in content, coursing from the scalp to the temples, with potential to stray further, if unchecked) and flux B (deep, salty in content, coursing from the brain to the inner corners of the eyes, with potential to stray dangerously further if unchecked — and

(8) Sichel 139; Ermerins *Prolegomena* XL and 280, n. 3; Joly 169, n. 1.

viewed as hard to arrest). In ancient ophthalmology, cautery of the vessels of the temples was a routine treatment for flux A; in the case of flux B, other vessels were addressed, the aim always being to prevent peccant matter from spreading further down the body. In *Places in Man* the vessels which 'press on the eye, those which constantly beat and are situated between ear and brow' are cauterised (*Loc. Hom.* 13.7). In *Diseases* 2 these vessels are cauterized, but treatment extends comprehensively to six other vessels of the head: two alongside the ears, two at the inner corners of the eyes, and two ὄπισθεν τῆς κεφαλῆς ἔνθεν καὶ ἔνθεν ἐν τῇ κότιδι 'behind the head on either side at the occiput' (*Morb.* 2. 12. 6; cf. 2. 1 and 2. 8). In addition, cautery of the neck was practised in order to stop the progress of noxious matter to the flesh ὄπισθεν 'behind' by the vertebrae and to divert it to the nose for expulsion (*Loc. Hom.* 21.1). The usage of ὄπισθεν 'behind' in these passages to indicate the back of the head or neck, rather than the back itself, parallels usage here; similarly a contrast between ἔμπροσθεν and ὄπισθεν with reference to the front and back of the head can be seen in *Head Wounds* (*VC* 2, 3).

It is significant that the adjective νωτιαῖος with or without the substantive μυελός is commonly applied to the spinal fluid, rather than to the blood vessels of the back (*Artic.* 45, 46, 47 etc.; *Mochl.* 1; *Gland.* 11, 14); and while ὀστέον may refer to the sacrum (usually as τὸ ἱερὸν ὀστέον) it is not used of the backbone generally. Thus, the vessels loosely designated 'of the back' may be more precisely designated as the vessels which run from head to neck and to back, that is those through which the νωτιαῖος μυελός 'marrow' or 'spinal fluid' was believed to course from the brain to the lower body. The simple term ὀστέον lit. 'bone' is commonly used of the skull, where context makes it clear that the skull is intended (as throughout *Head Wounds*).

Confirmation that the author's concern is with specialist matters of ophthalmology comes from Celsus. Several points in Celsus' account of eye therapy pick up and illumine passages of *Organ of Sight*, where the narrative is compressed and allusive to the point of unintelligibility, notably the phrases 'having bound' and 'having traced': Celsus explains how a ligature is placed round the patient's neck, and how the vessels of the temples and the top of the head are marked with black ink (7. 7. 15 H). Further, Celsus' leisurely explanation permits emendation of the puzzling repeated phrase 'from below' in 3.4. In an extended discussion of treatments for phlegm descending from the head to the eyes (7. 7. 15), Celsus distinguishes between a flux of phlegm from the upper vessels that lie between skull and scalp, i.e. above the skull; and a flux of phlegm from the lower vessels that lie between skull and membrane of the brain, i.e. below the skull. The first case is common and readily treated, the second is serious and intractable. The reason for this is that the vessels in the first case are accessible (above the skull, coursing

to the temples) whereas in the second they are inaccessible (below the skull, coursing from brain to eye). Celsus allows for the possibility of flux from both sources simultaneously.

Celsus is quite emphatic that this knowledge is widespread, and that procedures to arrest the flow of phlegm by treating the vessels are a matter of common and universal practice, 'celebrated not only in Greece but among other peoples too, to the extent that no part of medicine is more widely practised throughout the world'. While the aim was universal, a wide range of diverse procedures was used in different communities and at different dates to attain it: some made a series of incisions at various points in the scalp; some used cautery at various points instead or as well. This considerable local variation in the choice of the precise point to be targeted is corroborated by the evidence of other medical authors, and by papyri of ophthalmological content.(9) In some societies too the procedure was routinely applied to neonates (among the Ethiopians, Severus *ap.* Aetius 7. 93) or to young children (at the age of four years, among the Libyans, Hdt. 4. 187. 2), while in others it was a response to a pathological state.

A Galenic work supplements and verifies the substance of Celsus' account. In a late section of *de methodo medendi*, a vast compilation in 14 books occupying over 1,000 pages in Kühn's edition, similar views on aetiology and therapy are propounded. As it is the head which sends ῥεῦμα 'flux' to the eyes, the head must be treated first; sometimes flux comes from the brain and sometimes from the vessels; when it comes from deep ἀγγεῖα 'pockets' (sc. in brain) it is hard to treat; the general treatment is by phlebotomy. Detailed instructions for this are given: shave the head; carefully address the vessels ὀπίσω 'behind' and those by the ears and those in the forehead and brows; cut those which beat most; it is better to apply a cord (βρόχον, lit. 'noose') before cutting. It is explicitly stated that some doctors cut out part of the vessels in the belief that this is the only effective treatment (10. 937-42 K.). The vessels treated are 'those in the back of the head, in the region of the ears, and those in the temples'. There is not much reference to cautery in Galen; but cautery is recommended ἐπὶ τῶν ῥευματιζομένων ὀφθαλμῶν 'for eye flux' in the pseudo-Galenic *introductio seu medicus* (14. 782 K.).

The general intent of our surgeon's preparations is clear and the scene in the surgery can be visualized as follows. The patient lies prone, legs extended, on a couch, probably leaning on the floor with his hands in such a way that the head is below the level of the trunk, causing the vessels in the head to become engorged and so more visible. The surgeon is sitting (or standing,

(9) Marganne, H.-H. *L'ophtalmologie dans l'Égypte gréco-romaine d'apres les papyrus littéraires grecs* (Leiden, New York, Cologne, 1994), esp. 147-72, with figs 13-18.

depending on the height of the couch) alongside or slightly in front, where he can reach over the head of the patient, in such a way that he can apply a ligature to the neck, trace the precise location of the vessels of the head (in the crown and occiput; also beside the ears, in the temples and in the neck) — or perhaps even the entire course of the vessels is to be traced for purposes of didactic demonstration — and then operate with instruments handed to him by an assistant.

There is no need to postulate a lacuna before the first of the five 'then' conjunctions of 3.1; in this breathless composition the Greek can readily be understood as it stands as a series of memos. There is a double parenthesis after the first 'then' conjunction, which is recapitulated in the second: 'Then (having bound, having stretched out the legs, having set below a couch from which he can lean with his hands) — let someone hold his waist — then . . .' The aorist participles indicate preparatory actions, and the associated infinitives main procedures (in reverse order). This is a series of technical instructions, to be followed in a precise sequence.

With the reading ὅτε κάτωθεν . . . ὁ κάτωθεν in 3.3, the repeated κάτωθεν 'below' is problematical. Where we have two closely placed phrases, parallel in expression, we expect them to be parallel in sense also. Ermerins emends the first expression and deletes the second; he also reads διακεκαυμένη feminine for masculine (sc. φλέψ), and translates *similiter vena tenditur, et inflata est et pulsat, quia ab inferiore est id, quod influit; sin perusta est, haec omnia minus patitur*, 'the vessel is similarly stretched and swollen and it beats because the matter which flows in comes from below; but if it is thoroughly cauterised it suffes all this to a lesser degree'. Sichel does not emend and translates very loosely: 'lorsque le sang afflue de bas en haut . . . à une partie inférieure du dos'. But the point of this is quite unclear. Joly emends the second expression by deleting ὁ, then essentially follows Sichel's translation, ' ... elle bat lorsque le sang afflue de bas en haut; si la cauterization profonde est faite en bas (du dos), tout cela a lieu à un moindre degré ...'; he explains that cautery was being effected at as low a point as possible in the body in order to prevent the upwards return of peccant humours. But if this is the point, the expression is unduly contorted, and there remains a lack of parallelism between two apparently corollary expressions.

With the proposed emendation ἄνωθεν . . . κάτωθεν 'from above ... from below' the reference is to two opposed locations, rather than to two identical locations. The reference is to flux from the upper part of the head, or flux from the lower part. Flux from the upper part runs to the temples, and so the pulse is a good diagnostic indicator; flux from the lower part (the brain) runs to the inner corners of the eyes, and so the pulse is not significant in diagnosis (*Loc. Hom.* 13.3; Celsus 7. 7. 15).

(3) 7 *init.* νυκτάλωπος· φάρμακον πινέτω ἐλατήριον, καὶ τὴν κεφαλὴν καθαιρέσθω. καὶ κατασχάσας τὸν αὐχένα ὡς μάλιστα, πιέσας πλεῖστον χρόνον, ἐπανιεὶς δὲ διδόναι ἐν μέλιτι βάπτων ‹σκόροδα› ὠμὰ καταπιεῖν μέγιστα ὡς ἂν δύνηται ἓν ἢ δύο ‹καὶ› ἧπαρ βόος.

κατασχάσας Foesius *ex Serv. ms novit*: κατάξας *codd.* διδόναι ἐν μέλιτι βάπτων ‹σκόροδα› ὠμὰ καταπιεῖν μέγιστα ὡς ἂν δύνηται ἓν ἢ δύο ‹καὶ› ἧπαρ βόος Craik: διδόναι ἐν μέλιτι βάπτων ἧπαρ βόος ὠμὸν καταπιεῖν μέγιστον ὡς ἂν δύνηται ἓν ἢ δύο *codd.*

The treatment of 'night blindness', an anomaly of vision marked by impairment of dark adaptation, is outlined. Night blindness takes two main forms; the more common is where vision in moderate illumination is good, but in feeble illumination deficient. Night blindness is not a substantive disease, but a symptom associated with deficiency of vitamin A (sometimes called 'the ophthalmic vitamin'), which is present in animal fats such as milk, butter, and eggs; and, above all, in liver. Night blindness can occur both in individuals suffering from any condition which depletes blood vitamins, especially such febrile conditions as pneumonia, pulmonary tuberculosis, or malaria; and also in communities affected by famine or severe malnutrition. In ancient medicine, symptoms such as night blindness and even fever were frequently regarded and treated as diseases in their own right. There was, however, much awareness of, and interest in, the ways in which different 'diseases' might interact, developing or mutating into something apparently different, and the Hippocratic doctors were fully aware of the typical associative context of night blindness, recognizing the ways in which it tended to accompany other illnesses; also, more generally, the ways in which the eye might be affected by complications in other apparently unrelated diseases.(10)

The text of this short chapter is compressed, or, rather, truncated and corrupt. There are two main problems, relating to two aspects of the prescribed treatment, which is expressed in a series of superlatives: first (surgical), two things are done to the patient's neck 'as much as possible' and 'for a very long time', but M's κατάξας 'having broken' is nonsense and πιέσας 'having pressed' is unclear; second (dietary), the injunction to eat a lot of raw liver with honey is both intrinsically improbable and quite unparalleled. Sichel keeps κατάξας but describes the verb as obscure and probably corrupt; he takes it in the sense of 'l'appui des ventouses scarifiées'. Ermerins reads

(10) See Grmek, M. D., 'La description hippocratique de la "toux épidémique de Périnthe"', in M. D. Grmek and F. Robert (eds), *Hippocratica*, CIH III (Paris, 1980), 199-221.

κατασχάσας 'having cut' but leaves the entire section untranslated, dismissing it as *locus male scriptus* 'a badly transcribed passage' and more severely *totus locus pessime se habet* 'the whole passage is in a dreadful condition'; in the introduction he commits himself only to the curt *nyctalopis curatio describitur* 'a treatment for night-blindness is described'. Joly marks the verb with daggers of corruption, and attempts no translation.[11] The second problem, which has attracted considerable scholarly interest, is that the loosely appended expression 'one or two' is unclear, as is the reference of μέγιστον 'very big'. Debate has centred on whether one or two huge ox livers are to be eaten (so Joly, 'il faut faire avaler, crus et trempés dans du miel, un ou deux foies de boeuf, aussi gros que possible'), whether one huge ox liver is to be eaten one or two times (so Sichel, 'il faut faire manger, une ou deux fois, un foie de boeuf cru aussi gros que possible, trempé dans du miel'), or in one or two portions (so Ermerins, who suggests the insertion of μέρος 'portion').

The difficulties may be resolved by comparison with content in other treatises (especially *Diseases* 2, *Prorrhetic* 2 and *Epidemics* 6; but also *Diseases* 3, *Epidemics* 2, *Koan Prognoses*, *Prognostic* and *Places in Man*). In particular, from the association of night blindness with the disease known as κυνάγχη 'the choker' it is possible to put the treatment here prescribed in a wider context. We can emend and expand the text to give a sense in accord with parallel treatments of night blindness and associated conditions in the Hippocratic Corpus and other sources. However, while the text may be satisfactorily explicated in this way, and it is clear that something has been lost, restoration is offered for example only. It does, however, seem certain that a reference to garlic has dropped out. The two aspects of the therapy prescribed are: first, cupping (as Sichel perceived, on the basis of medical probability, but without emendation or argument); and second, a dietary régime of (raw) garlic and (cooked) liver.

The condition of night vision is discussed at *Prorrhetic* 2. 33 and 34 from a theoretical standpoint: it tends to affect boys and young men, who sometimes recover spontaneously in seven months time; elimination of noxious matter, especially downwards, is beneficial; patients with this disease or a flux of tears of long duration should be asked if they suffered headache before these concretions. As in *Organ of Sight*, it is explicitly stated that purging is useful in therapy, and implicitly supposed that bodily fixation is significant in aetiology. A more pragmatic approach to the condition is found in *Epidemics* 6. 7.1: night blindness is associated in a particular year with painful 'ophthalmias' and with other symptoms or ailments, above all, with coughs, pneumonia and 'chokers'. The doctor of *Epidemics* 6 found the array of symptoms intractable. Treatments essayed, without great success, included laxatives, emetics and

(11) Sichel 150, Ermerins XL, Joly 171.

phlebotomy, including surgery on the tongue. Among the patients some endured great pain, especially those who suffered from swollen vessels in the temples and the neck. Night blindness is associated with a similar range of unpleasant symptoms in a shorter account at *Epidemics* 4. 52: ears and mouth are affected (toothache and mouth ulcers); there is cough, fever and digestive disorders. The association between eye trouble and 'the choker' appears also in *Epidemics* 2. 6. 12, in the brief instructions 'carry out phlebotomy for the choking disease and for opthalmia'. Also, at 2. 2. 24, there is a full clinical description of symptoms apparent in 'the choker': the focus here is on appearance of, and sensations in, neck, throat and jaws.

There are many other references to the same disease, or rather, perceived group of diseases. In *Koan Prognoses* (*Coac.* 357-72), many bad or mortal signs are specified in the group of diseases designated τὰ κυναγχικά 'the choker types': much attention is paid to observation of throat (internal) and neck (external) and when the disease 'turns to' the lung, sufferers either die in seven days or become purulent; in *Prognostic* (*Prog.* 23) ulceration of the throat is a similarly bad sign. Bleeding from the neck is there regarded as the safest and best course but it is recognized that there are dangers in the treatment as well as in the condition itself. Writing on throat ulceration, the author refers to the risks attendant in cutting the uvula; the verbs used are ἀποτάμνεσθαι and ἀποσχάζεσθαι (discussed further below). In *Affections* also (*Aff.* 4), the verb σχάζειν is used of the same operation: if the swelling of the uvula does not go down, the treatment is ὄπισθεν ξυρήσαντα τὴν κεφαλήν, σικύας προσβάλλειν δύο, καὶ τοῦ αἵματος ἀφαιρέειν ὡς πλεῖστον, καὶ ἀνασπάσαι ὀπίσω τὸ ῥεῦμα τοῦ φλέγματος, 'first shave the back of the head, apply two cupping vessels, draw off as much blood as possible and draw backwads the flow of phlegm'; then, if there is still no amelioration, the knife is applied, σχάσαντα μαχαιρίῳ ... σχάζειν. 'having cut with a knife ... cut'. In *Diseases* 3 (*Morb.* 3. 10) discussion of 'the choker' leads to treatment of παρακυνάγχη, 'a variant on the choker': for this, phlebotomy of vessels in the chest, bleeding from the arms (if the patient is strong enough), incision of vessels under the tongue and purging with *elaterion* are all prescribed; this meshes with material following on treatment of 'the choker' in *Diseases* 2. Similarly, in *Regimen in Acute Diseases* (*Acut. Sp.* 9-10) therapy of two forms of 'the choker' is by phlebotomy of vessels in the arms and under the tongue. Purgation by *elaterion* and bleeding from the arm are both prescribed also in *Places in Man* (*Loc. Hom.* 30).

In *Diseases* 2, several kinds of 'choker' are discussed and differentiated. These passages provide illumination of the treatment adumbrated in our treatise. In the first brief mention of 'the choker' in *Diseases* 2 (*Morb.* 2. 9), only one type is noted. Its locus is in the jaws and the area of the neck, sometimes also under the tongue or somewhat above the chest. In the ensuing

section, the author proceeds to discuss the clearly related disease σταφυλή 'the grape', where surgery on the swollen uvula is imperative. In the second part of *Diseases* 2, three different types of 'the choker' are discussed at some length and followed by a discussion of 'the grape'. In these three instances of 'the choker', the differences lie in symptoms, development and, accordingly, therapy indicated, also to some extent in the supposed aetiology and site of the trouble. The treatment in the first type (*Morb.* 2. 26) is to apply a cupping vessel to the first cervical vertebra, then after shaving the hair beside the ears, to apply cupping there, and once pressure is established, to leave the vessels in place for as long a time as possible (πρὸς τὸν σφόνδυλον τὸν ἐν τῷ τραχήλῳ τὸν πρῶτον . . . παραξυρήσας . . . καὶ ἐπὴν ἀποσφίγξῃ τὴν σικύην ἐᾶν προσκεῖσθαι τὸν πλεῖστον χρόνον). Extensive follow-up treatment includes purging by suppositories or enema. The treatment in the second type (*Morb.* 2. 27) is to apply a cupping vessel as in the first, then to apply a sponge soaked in hot water to neck and jaws; again, there are extensive further recommendations in which a new element is the prescription, where *empyema* is developing, of a bedtime snack of raw garlic, as many cloves as possible (σκόροδα ὠμὰ τρωγέτω ὡς πλεῖστα) accompanied by neat strong wine. In both cases, fumigation too is practised. The third type (*Morb.* 2. 28) differs from the others: it is less serious; treatment is by dietary manipulation and application of poultices. Also, the 'back of the tongue' is affected. In this respect, it seems to serve as a transition to 'the grape', the subject of the ensuing section (*Morb.* 2. 29); there too the jaws are swollen but the main problem lies in the uvula, which must be pressed against the palate and its extremity cut (ἀποπιέσας διαταμεῖν ἄκρον).

From these parallels in the treatment of 'the choker', which in incidence is associated with night blindness in *Epidemics* 6, it is evident that the procedures so peremptorily indicated in our text are application of cupping and consumption of raw garlic. Blood-letting (phlebotomy or venesection) was a favoured Hippocratic recourse in many diseases; but — in part because it was so familiar, in part because it was a technique learned by observation rather than reading — few descriptions of it survive. Celsus exceptionally gives a description, stressing its importance in diseases which, like 'the choker', constrict the throat (2. 10. 1-17). The use of honey-coated garlic — presumably the honey intended to make the garlic more palatable, or easier to swallow, like a sugar-coated pill — is repeated in a prescription to purge a strong patient overcome by fever brought on by fatigue or by a journey in the section on fevers in *Diseases* 2: σκόροδα δοῦναι ἐς μέλι βάπτων (*Morb.* 2. 43.3). In a long series of cleaning-out prescriptions found in *Internal Affections*, all vegetables save garlic are proscribed; of garlic the patient is to eat as many (but it is not clear whether the plural indicates cloves or heads) as possible, raw, baked or boiled: ὡς πλεῖστα τρωγέτω καὶ ὠμὰ καὶ ὀπτὰ καὶ ἑφθά (*Int.* 21).

Garlic, especially when eaten raw, was widely regarded as having laxative and diuretic properties (*Aff.* 54, *Vict.* 2. 54; on honey cf. *Aff.* 58). One element remains to be explained: the presence of (?raw) ox liver.

I can discover no case of a patient being made to eat raw liver, with or without honey. It is not used even in poultices or pessaries, though various unlikely and unappealing animal applications are specified, especially in the gynaecological works. The regular treatment for night blindness, authenticated in a wide range of later sources — Herophilos, Celsus, Paul of Aigina, Aretaeus, Galen and Pliny — was to give a meal of liver, while using the cooking steam or juices as an eye-lotion (gravy from roasting, *de compositione medicamentorum secundum locos*, Gal. 12. 802 K; wine used in boiling, Plin. *NH* 28. 47).(12) Frequently, goat's liver is specified, perhaps because the goat was supposed to have good night vision (billy-goat to be preferred, Celsus 6. 6. 38). While there may be an element of sympathetic magic in the prescription, there is also a sound nutritional basis, which could not have been understood but which could have been appreciated through years of empirical observation and pragmatic prescription. Night-blindness is caused by a deficiency of vitamin A, and liver is a rich source of that vitamin (hence the cod liver oil, once forced into children).

There is a slight awkwardness in that the subject of the first sentence, with its two jussive clauses (a construction used only here in the work) is the patient, while the subject of the second sentence, with three nominative participles followed by an imperatival infinitive (with another participle βάπτων 'dipping' loosely attached and a further explanatory infinitive καταπιεῖν 'to swallow' dependent on it), is the doctor; but the sense is clear and the jerky Greek is characteristic of the work.

III Conclusion

I ought to stress that the difficulties presented by this short work are not typical of Hippocratic texts, except in the general sense outlined at the outset. Such short works — we may compare the still shorter *On Anatomy* and the somewhat longer *Dentition* — are peculiarly difficult to interpret, and to place in the wider context of the Hippocratic Corpus and other writings.

Classical philologists are accustomed to consider absolute questions of authenticity and attribution, and comparative questions of influence and

(12) For a review of the evidence, see already Foesius I 736; also Staden, H. von, *Herophilus: The Art of Medicine in Early Alexandria* (Cambridge, 1989), 423-6; Gourevitch, D., 'Le dossier philologique du nyctalope', in M. D. Grmek and F. Robert (eds), *Hippocratica*, CIH III (Paris, 1980), 178-82.

the chronology of interaction. *Prima facie*, the questions addressed by the literary critic examining the language and content of Euripides' *Phoenician Women* in relation to other Theban plays, such as Aeschylus' *Seven against Thebes* and Sophocles' *Antigone*, resemble those asked by the medical historian attempting to disentangle connected strands in the works of the Hippocratic Corpus. However, in the case of the Corpus, the answers to such questions have proved elusive, and even the questions have come to seem at times pointless. Although the first person is often used, in such statements as 'I have written' or 'I shall write', it is not possible to identify authors, or even to establish common authorship; furthermore, some treatises seem to be in part collaborative. It may be said that all the Hippocratic works are mixed and derivative to some degree, and that few, if any, are original in an accepted literary sense: the terms 'redactor' rather than 'author' and 'compile' rather than 'compose' are appropriate; interpolation if detected is not to be condemned and deleted. Despite these difficulties, the search for ways to explain the formation and tradition of the corpus remains meaningful and challenging.

As to *Organ of Sight*, the closest affinities both in content and in language are with *Places in Man*. Although the content quite closely resembles the content of the section on eye diseases in *Prorrhetic* 2, the language and style are in no way similar. When we turn to other works in the Hippocratic Corpus, various elements of common content can be traced. The closest is the account of diseases affecting the head of *Diseases* 2: several sections show strong similarities and the arrangement by headings is the same. There is a further nexus of associations with treatises which give recipes (*Diseases of Women* 1, *Regimen in Acute Diseases*); and still another with treatises where cautery is employed (*Affections, Internal Affections, Articulations* in addition to *Places in Man* and *Diseases* 2). In language, alongside the striking parallels with *Places in Man,* there are some elements peculiar to our treatise and *Internal Affections* and some recurrent in the gynaecological works. There is some resemblance with some elements in *Epidemics*.

Although in two cases (discussed above) these similarities may facilitate emendation of *Organ of Sight*, where the transmitted text is problematical to the point of being meaningless, the nexus of interrelations demonstrates the complex intertextuality of the tradition. The interrelation of its geographical origins may also be more complex than commonly supposed — but that is another story.

(University of St. Andrews)

トロイアの存亡にかかわる教え
Ovidius *Ars Amatoria* 3, 439-440[1]

日向太郎

(1)「プリアムス説」

Ovidius *Ars Amatoria* (以下 *Ars*) 3, 433-466 は、付き合いを避けるべき男性について詩人が女性読者に指南する一節である。そのなかの 439-440 では、自説を信ずるよう読者を促す目的で、トロイアの存亡にかかわる教え praecepta を引き合いに出している。

> vix mihi credetis, sed credite: Troia maneret,
>
> praeceptis, Priame, si foret usa tuis.
>
> 私の言うことはなかなか信じられないだろうが、信じて欲しい。トロイアは残ったことだろう、プリアムスよ、もしあなたの言うところに従ったのであれば。

これは、主要写本 (R, Y, A) の読みである[2]。Priame は tribrach を形成するので、韻律に合わない。そこで多くの校訂者[3] は、440 にかんして以下の読みを採用する。

> praeceptis *Priami* si foret usa *sui*.
>
> もし[トロイアが]自身のプリアムスの言うところに従ったのであれば。

Priami ... sui は写本 Y 及び A に書き加えられた修正語句である。若干の recentiores も上記の読みを示している。しかし、praecepta をプリアムスに帰するこの読み (以降「プリアムス説」と称する) には 2 つ問題点があるように思われる。

第 1 に、sui (自身の) と言うとき、この所有形容詞にどれほどの意味があるだろうか[4]。エレゲイア詩にあって、pentameter の後半にこそ、通常 couplet の核心となるような語句が置かれることを思えば、sui のような埋め草的な語が用いられているのは奇妙と言わざるを得ない。recentiores のなかには sui の代わりに senis と読むものがあるが、それはこのような違和感に起因している修正だと考えられる。もっとも、Priami .... senis (「老プリアムスの」) と読んだところで、それは埋め

(1) 本考察は第 4 回「フィロロギカ」研究集会 (2005 年 10 月 15-16 日於慶應大学) で行った報告に加筆修正を施したものである。報告にご参加いただいた方々、とりわけ司会を務めていただいた大芝芳弘氏をはじめ、納富信留氏、大塚英樹氏、本城大一氏、さらに本考察の査読をお引き受けいただいた先生方からも貴重なご意見を賜った。この場を借りて謝意を表したい。

(2) Sigla は Gibson の版に従う。

(3) Housman ad 8, 251; Kenny (1961), Id (1995); Lenz; Gibson. なお、Brandt もこの読みを採用しているが、その註においては疑義を述べている。

(4) Goold 85.

草であるという感を払拭できるものではない。

第2に「プリアムス説」を採用する場合、トロイア人が王の命令に背いたばかりに国家の滅亡を招く羽目になった、といった趣旨の伝承が存在したことが前提となる。通常そのような命令はヘレネー返還と考えられており、伝承の存在を裏付けるものとして、Palmer は Ovidius *Heroides* 5, 95-96 を挙げる[5]。

quid gravis Antenor, Priamus quid suadeat ipse,
consule, quis aetas longa magistra fuit. (*Heroides* 5, 95-96)
厳めしいアンテーノールが、他ならぬプリアムスがどう説得するか相談を持ちかけなさい。この二人の教師となったのは、長い人生なのですから。

上記はオエノーネーのパリス宛の書簡であり、ヘレネーをギリシア人に引き渡すことを促している。書き手はヘレネー返還を、およそ人生経験を重ね分別が備わった人間のなすべき行為として捉えているが、プリアムスがパリスに返還を命じた、とは言っていない。実際、この行の直前には、

quae si sit Danais reddenda, vel Hectora fratrem,
vel cum Deiphobo Polydamanta roga. (*Heroides* 5, 93-94)
彼女 [ヘレネー] をギリシア人に返すべきか、兄弟ヘクトールにあるいはデーイポブスとともにポーリュダマースに尋ねてみるがよいでしょう。

との一節もある。したがって、返還命令はあくまでも仮定の話である。一連の固有名詞は、ヘレネーを手許に引き留めておくのが狂気の沙汰であることを強弁するために挙げられている、と考えるべきだろう。*Heroides* 5, 95-96 は伝承の存在を裏付けるものとは言えない。

Palmer 同様、「プリアムス説」を支持する Gibson は、*Ilias* 7 でアンテーノールがパリスに、ヘレネー及び奪った財宝をメネラーオスに返還するよう提案したことを挙げる[6]。アンテーノールの発言にパリスは反発し、財宝の返却に承諾しても、ヘレネーを引き渡すことを断固として拒絶する。このやりとりを受けて、プリアモスはパリスの言葉をギリシア軍に伝えるように命ずる。そしてプリアモスの命令は、実行されるのである。「ある伝承によれば、*Ilias* 7 にすでに仄めかされているように、プリアモスはアンテーノールのヘレネー返還の提案に同意していた」と Gibson は述べている。

しかし、*Ilias* 7 でプリアモス王はパリスの意向を一切批判せず、むしろこれを敵方への公式提案としている。アンテーノールに同意していたら、王は息子の頑なな態度をたしなめたり、ヘレネー返還を勧告してもよさそうなものだろう[7]。さらに

---

(5) Palmer ad 5,95.

(6) Gibson ad 3, 440 "A reference to Priam here would be appropriate: according to one tradition, implicit already in the *Iliad* (7. 348ff., 368ff., 386ff., 390, 393), Priam concurred with Antenor's proposal to give Helen back to the Greeks."

(7) Brandt (ad 3,440) は、*Ilias* 3, 164-165 を挙げ、戦争の原因はヘレネーではなく、神々

この提案は、同朋市民の反対に遭うことも無く、敵方に伝えられるのであってみれば、*Ars* 3, 439-440 の反実仮想の条件文で示唆されている現実とは噛み合わない。「プリアムス説」に即した伝説が「*Ilias* 7 に仄めかされている」とは到底考えられない。

また、Gibson は Ovidius *Metamorphoses* 13, 200-204[8] をも「プリアムス説」を裏付ける一節としている。この一節によれば、プリアムスはオデュッセウスの説得に心を動かされ、ヘレネーを返還する気持ちになった。だが、パリス及び彼の許で彼女を誘拐した兄弟たちは返還案に反発し、ギリシア軍の使者オデュッセウス及びメネラーウスを亡き者にしようと心を逸らせた。

『変身物語』第 13 巻のエピソードには、プリアムスがヘレネーの返還を命じたとも、何か指示を与えたとも言われていない。また、パリスとその取り巻きは返還案に聴く耳を持たなかったが、トロイア全体が提案に抵抗を示したわけでもない[9]。むしろ大多数の市民がパリスを白眼視し、返還を当然の策と見て、これを支持したと考えられるから[10]、仮にプリアムスがヘレネー返還を命じたとしても、直前の vix mihi credetis, sed credite (439) にはそぐわない。

以上から、市民がプリアムス王の教えを信じ難いものとして背いたという伝承の存在は確認できない、したがって「プリアムス説」については、その前提すらも怪しいと言わざるを得ない。

(2)「詩人説」

「プリアムス説」の裏付けに無理があることを指摘している論者のなかで、Woytek は独自の考察に基づいて、以下のような修正案を提示している[11]。

vix mihi credetis, sed credite: Troia maneret,
　　praeceptis *Priami* si foret usa *nurus*.

私の言うことはなかなか信じられないだろうが、信じて欲しい。トロイアは残ったことだろう、プリアムスの嫁 [ヘレネー] が教えに従ったのであれば。

にあるという認識に立つプリアムスが、ヘレネー返還を提案したと考えるのは無理だとしている。

(8) accusoque Parin praedamque Helenamque reposco / et moveo Priamum Priamoque Antenora iunctum; / at Paris et fratres et qui rapuere sub illo/ vix tenuere manus (scis hoc, Menelae) nefandas, / primaque lux nostri tecum fuit illa pericli. (私 [オデュッセウス] はパリスを糾弾し、分捕り品とヘレネーの返還を求め、プリアムスとアンテーノールの心を動かす。しかしパリスと兄弟たちと彼の許で掠奪を働いた者たちは (メネラーウスよ、君はこのことを知っている) 不埒な手をやっとのことで抑えた。あの日が私と君が出合った危険の最初の日だった。)

(9) 「プリアムス説」に対する Hertzberg の異議として、Brandt (242) は以下のような論点を引用している。"... waren wahrlich nicht die Troer, sondern einzig und allein Paris gegen die Auslieferung."

(10) このことは、例えば *Ilias* 6, 350-351 のヘレネーの言葉 (ἀνδρὸς ἔπειτ' ὤφελλον ἀμείνονος εἶναι ἄκοιτις, / ὃς ᾔδη νέμεσίν τε καὶ αἴσχεα πόλλ' ἀνθρώπων. [人々の怒りや人々に対する恥を知っているもっとまともな夫の妻であったらよかったのに]) によって示唆されている。

(11) Woytek 181-189.

Woytek によれば、「教え」とは詩人オウィディウス自身の教えである。オウィディウスは、*Ars* 3 の序でメーデイア、アリアドネー、ピュッリス、ディードーに呼びかけ、彼女たちが破滅したのは「愛することを知らなかった。技術が欠けていた」からだと言っている (33-42)。一方、ヘレネーは *Ars* 3 において、詩人の教えを乞う必要のない(つまり、何もしなくても男が言い寄ってくる)絶世の美女として別格の扱いを受けている(12)。オウィディウスが恋愛の師たることを自任し、恋故の災いに身を滅ぼしたヒロインを列挙するくだりは、*Remedia Amoris* においても認められる。そのなかには以下のような興味深い couplet もある。

redde Parin nobis, Helenen Menelaus habebit
　　nec manibus Danais Pergama victa cadent.　　(*Remedia* 65-66)
パリスを私に任せるがよい。ヘレネーをメネラーウスは自分のものとすることであり、ペルガマが敗れ、ギリシア人の手に落ちることもないだろう。

トロイアの存亡にかんして語っているという点で、この詩行は *Ars* 3, 439-440 と接点がある。*Remedia* 65-66 において、Woytek が重視するのは、ヘレネーがパリスの誘惑に乗ったことがトロイアの滅亡につながったという神話認識である。そして、*Ars* 3, 439-440 に先立つ部分 433-438 では、女性が避けるべき男の特徴について、詩人は語っている。

Sed vitate viros cultum formamque professos
　　quique suas ponunt in statione comas.
quae vobis dicunt, dixerunt mille puellis:
　　errat et in nulla sede moratur amor.
femina quid faciat, cum sit vir levior ipsa
　　forsitan et plures possit habere viros?　　(*Ars* 3, 433-438)
だが洗練と見目麗しさを身上とするような男たちや髪を整然とさせている連中は避けるがよい。彼らがあなた方に言うことは、千の乙女たちに言っていることである。そして、彼らの愛はふらふらとし、一箇所には留まらない。女はどうしたらよいものか、男が女よりも柔肌で、より多くの男を恋人にしかねないのだとすれば。

伊達男の描写は、*Ilias* 3 で言われているパリスの人物像 (εἶδος ἄριστε, γυναιμανές, ἠπεροπευτά [39]) に共通する。Woytek は、この他パリスのヘレネー宛の書簡である *Heroides* 16 と *Ars* 3, 433-438 との間にも語句上の類似を指摘し、伊達男の描写はパリスを連想させると言う(13)。そして 439-440 では、ヘレネーが伊達男を避けよという自分の教えに従っていたならば、トロイアは残ったであろうと詩人は歌お

(12) *Ars* 3, 251-254 non mihi venistis (...) / aut Helene, quam non stulte, Menelae, reposcis, / tu quoque non stulte, Troice raptor, habes;

(13) Woytek 185-186.

うとしている、と彼は考える(14)。

Woytekの提案の難点は、まずテクストの意味が曖昧になることだろう。praeceptaは、誰のpraeceptaなのか不明確である。単語の並びからすると、「もし嫁がプリアムスの教えに従ったならば」と解することも可能であり、むしろその方が自然だろう。

この点を不問に付すとしても、なぜヘレネーが詩人の教えに従うべきであったことが言われなければならないのか、疑問である。先にも指摘したように、詩人は同じ*Ars* 3において、セメレーとともに彼女を自分の教えを乞う必要のない人物として挙げている。ここでヘレネーは自分の言うことに耳を傾けるべきだとすれば、前言に矛盾することになってしまう。

さらに、オウィディウスは本当に433-438でパリスへの言及を読みとるよう読者に求めていると考えるべきか否か、改めて問い直す必要がある。詩人は伊達男は避けよ、と述べてから441以降でその理由を説明する。第1にそのような男たちのなかには、愛していると見せかけて近づき、女性を身ぐるみ剥ぐような卑劣な輩がいるからである(441-452)。第2に女性に対して不誠実で、ドン・ジョヴァンニのように振る舞う者が少なくないからである(453-460)。Woytekの解釈に従えば、ヘレネーは441以降で言われているような、被害を受けた女性と同類ということになってしまう。確かに、433-438で言われている男とパリスとの間には外見上の共通点はあるが、ヘレネーは詩人の教えを必要とする女性とは似ても似つかない。

加えて、パリスもスパルタの財宝を掠奪しても、恋人の所持品を奪って、彼女から泥棒呼ばわりされることはなかった。何よりもパリスのヘレネーへの愛は、見せかけの愛ではないだろう。457-460ではテーセウスやデーモポオーンが不実な男の代表例として挙げられているが、パリスは彼らとは本質的に異なる。ヘレネーを裏切ることはなく、彼女を妻とし、返還命令にも頑として応じなかった。少なくとも、彼は彼女の前では誠実な恋人である。

そのような意味で、パリスには441以降で言われているような泥棒とも漁色家ともほとんど類似点がない。類似点は、お洒落に余念がないという外観に留まる。

以上から、Woytekの唱える「詩人説」は受け入れ難い。

(3)「カッサンドラ説」対「アイサコス説」

Vix mihi credetis, sed credite (439)を考慮したとき、praecepta (440)とは、同朋市民が決して信ずることがなかった(15)カッサンドラの予言である、とみなすのが最も自然である。このような解釈(「カッサンドラ説」)に立脚して、Madvigは、主要写本RやYの読みPriameをPriamei (Priamēisの呼格)に修正しただけで次のようなテクストを提示する(16)。

(14) Woytek 187-189.

(15) Cf. Apollodorus *Bibliotheke* 3, 12, 5 "ᾗ [i.e. Κασσάνδρᾳ] συνελθεῖν βουλόμενος Ἀπόλλων τὴν μαντικὴν ὑπέσχετο διδάξειν. ἡ δὲ μαθοῦσα οὐ συνῆλθεν· ὅθεν Ἀπόλλων ἀφείλετο τῆς μαντικῆς αὐτῆς τὸ πείθειν."; Servius ad Verg. *Aen.* 2, 247.

(16) Madvig 114.

vix mihi credetis, sed credite! Troia maneret,
　　praeceptis, *Priamei*, si foret usa tuis.
私の言うことはなかなか信じられないだろうが、信じて欲しい。トロイアは残ったことだろう、プリアムスの娘よ、あなたの教えに従ったのであれば。

Madvig は Vergilius *Aeneis* 2, 246-247 (tunc etiam fatis aperit Cassandra futuris / ora dei iussu non umquam credita Teucris.) を挙げ、「あなたの教え」とはトロイア人が木馬をトロイア城内に引き入れる際の破滅の予言であると見なす。

近年では、Cristante や Ramírez de Verger といった校訂者が Madvig の提案を支持し、本文に採用している[17]。この読みは、明解で意味も良く通る。そして字面も写本に極めて近い。加えて、Priamēis という patronymicon は、*Amores* 1, 9, 37 及び *Ars* 2, 405 にも使用例がある[18]。

カッサンドラのように狂気の状態にある者の発言は、praecepta と呼ばれるに相応しくなく、理知的存在にこそ praecepta は似つかわしいのではないかと反論する研究者は少なくない[19]。しかし、Vergilius *Aeneis* 2, 345-346 ではカッサンドラを熱愛し、トロイアから離れようとしなかったため、命を落とすことになるコロエブスが「狂気を帯びた許婚の教えに耳を傾けなかった不幸な者 infelix qui non sponsae praecepta furentis / audierit」と呼ばれていることからもわかるように、狂気と praecepta は両立し得るのである。

Madvig 提案の唯一の、しかし深刻な問題は、韻律上 Priamei の語末 -ēi を synizesis と見なさざるを得ないが[20]、それが pentameter の前半を締めくくる異例の位置に現れることである。類例は、恋愛詩人の先達プロペルティウスには認められる。

Andromede monstris fuerat devota marinis:
　　haec eadem Persei nobilis uxor erat.　　(2, 28, 21-22)
アンドロメダは海の怪物に捧げられていた。同じ彼女がペルセウスの名だたる妻であった。

まさに pentameter を二分する位置に、synizesis (Pers<u>ei</u>) がある。しかし、だからといって同様の自由度をオウィディウスに認める訳には行かないだろう。彼の恋愛詩作品群の synizesis の例としては、*Amores* 1, 7, 15 (Thesei); 1, 8, 59 (aurea); 2, 13, 9 (alveo); 3, 9, 21 (Orpheo); 3, 12, 39 (Atrei); *Heroides* 6, 49 (aureo); *Ars* 3, 457 (Theseo) があるが、いずれも奇数行の末尾に現れている[21]。こうした傾向は、

---

(17) Pianezzola, Baldo e Cristante (1991); Ramírez de Verger (2003). Cf. Pianezzola, Baldo e Cristante (1989) 169; Ramírez de Verger (1993) 323.
(18) Pianezzola, Baldo e Cristante (1989) 168.
(19) Housman ad 8, 251; Palmer ad 5, 95; Kenny (1993) 466; Woytek 184.
(20) 類例としては、Horatius *Carmina* 2, 7, 5 "Pomp<u>ei</u>, meorum prime sodalium."
(21) Woytek 184 n. 71.

すでにウェルギリウスの hexameter にも窺うことができるのである[22]。オウィディウスがウェルギリウスを作詩上の規範として仰いだのだとすれば、異例の synizesis を想定することには慎重にならざるを得ないだろう。

そこで、「カッサンドラ説」を貫き、なおかつ韻律及び語法上無理のない可能性を追求すれば、以下のような Goold の案に行き当たる[23]。

> vix mihi credetis, sed credite: Troia maneret,
>   praeceptis *Priamo* si foret usa *satae*.
>
> 私の言うことはなかなか信じられないだろうが、信じて欲しい。トロイアは残ったことだろう、プリアムスの娘の教えに従ったのであれば。

Priamo ... satae は「プリアムスの娘」すなわちカッサンドラを迂言的に表す語句である。オウィディウスは aliquo natus もしくは aliquo satus など、親の名によって人物を特定する表現を好んでいたと思われるので、まず語句の選択という点で無理がない。pentameter 後半部の u<u>sa</u> <u>sa</u>tae という κακέμφατον も決して珍しいものではなく、特に問題視するには当たらない[24]。

それでは、いかなる過程を経て上記 praeceptis Priamo si foret usa satae が、主要写本の読み、praeceptis, Priam*e*, si foret usa *tuis* に変遷したのか。Goold は以下のように説明する[25]。

① usa satae が haplography (重字脱落) によって usa tae もしくは usa te となる
② 韻律上、最後は iambus を形成する語が欲しいので、usa te は usa tuis となる
③ usa tuis に合わせて、呼格形が必要なので Priamo は Priame となる

一方、Kenney[26] は、この説明の②を受け入れ難いものとする。その上で、「カッサンドラ」説の棄却を提唱する。彼は、439-440 で言及されている praecepta は、プリアムスとアリスベーの息子であるアイサコスの教えであるとする(「アイサコス説」)。実際、アイサコスはヘカベーがパリスを懐妊中に見た夢を占い、生まれてくる子がトロイアを滅ぼすことを予言した、との伝承も存在する[27]。この伝承を踏

(22) Norden 217 (ad 6, 280 ferreique). McKeown 233-234.

(23) 筆者の知る限り、*Ars* の主要な刊本のうち、この読みを採用しているのは Loeb 版 (J. H. Mozley-G. P. Goold) のみである。

(24) Goold 86-87.

(25) Goold 86.

(26) Kenny (1993) 465-466.

(27) Cf. Lycophron 224-228 "μήδ' Αἰσακείων οὐμὸς ὤφελεν πατὴρ / χρησμῶν ἀπῶσαι νυκτίφοιτα δείματα, / μιᾷ δὲ κρύψαι τοὺς διπλοῦς ὑπὲρ πάτρας / μοίρᾳ, τεφρώσας γυῖα Λημναίῳ πυρί· / οὐκ ἂν τοσῶνδε κῦμ' ἐπέκλυσεν κακῶν."; Apollodorus *Bibliotheke* 3, 12, 5 "δευτέρου δὲ γεννᾶσθαι μέλλοντος βρέφους ἔδοξεν Ἑκάβη καθ' ὕπνους δαλὸν τεκεῖν διάπυρον, τοῦτον δὲ πᾶσαν ἐπινέμεσθαι τὴν πόλιν καὶ καίειν. μαθὼν δὲ Πρίαμος παρ' Ἑκάβης τὸν ὄνειρον, Αἴσακον τὸν υἱὸν μετεπέμψατο· ἦν γὰρ ὀνειροκρίτης παρὰ τοῦ μητροπάτορος Μέροπος διδαχθείς. οὗτος εἰπὼν τῆς πατρίδος γενέσθαι τὸν παῖδα ἀπώλειαν, ἐκθεῖναι τὸ βρέφος ἐκέλευε. Πρίαμος δέ, ὡς ἐγεννήθη τὸ βρέφος, δίδωσιν

まえて、Kenney は 440 を praeceptis *Priamo* si foret usa *sati.* と読む。Priamo ... sati とはアイサコスを迂言的に表す語句である。

しかし、Kenney の対案は、Goold 案に比べ、主要写本の読みとの隔たりがより小さいというわけではない。また、真実なのに信じ難いことで定評のある予言は、やはり何と言ってもカッサンドラの予言である。カッサンドラがトロイアの滅亡にかかわるような警告を発したのに、それが無視されたのは一度ではない。エウリーピデースによれば、彼女はパリスが生まれた時に「プリアムスの国の大いなる汚名」であるとして彼を殺すことをあらゆる人に説き、長老たちに乞うた(28)。彼がヘレネーを連れて帰ったときにも(29)、そして木馬がトロイア城内に入るときにも、彼女は破滅を予言した(30)。しかし、これを真に受ける者はいなかった。

カッサンドラの予言が自らの言葉にも通ずることを、プロペルティウスも 3, 13 の結びで以下のように歌っている。

Certa loquor, sed nulla fides; neque enim Ilia quondam
　　verax Pergameis Maenas habenda malis:
sola Parim Phrygiae fatum componere, sola
　　fallacem patriae serpere dixit equum.
ille furor patriae fuit utilis, ille parenti:
　　experta est veros irrita lingua deos. (Propertius 3, 13, 61-66)

私は確かなことを語る。しかし信頼は無い。実際、かつてイーリオンのマエナス［カッサンドラ］もペルガマの災いに対して本当のことを言っているとは見なされなかった。ただ一人彼女だけがパリスがプリュギアの破滅を仕組んでいると、祖国にとって欺瞞に満ちた馬が忍び込むと言ったのである。あの狂気こそが、祖国には、父親には有益だったのだ。舌は神々が嘘をついていないことを悟っていたのに、それは何の甲斐もなかった。

真実を語りながら、人々になかなか信じてもらえないことを嘆くという点で、内容的には *Ars* 3, 439-440 によく似ている。

Ovidius *Ars* 3, 433-466 と Propertius 3, 13 との接点はこれだけに留まらない。3, 13 の incipit は、「君たちは尋ねる、どうして欲張りな乙女が夜の値段をつり上げ、財産は情事によって消尽され、損失を嘆くことになっているのか Quaeritis, unde avidis nox sit pretiosa puellis / et Venere exhaustae damna querantur opes.」であり、以降はプロペルティウスが読者の問いに対する教えを授けるという形になっている。つまり、彼はオウィディウス同様、恋愛の師として 3, 13 を展開して

ἐκθεῖναι οἰκέτῃ κομίσαντι εἰς Ἴδην· ὁ δὲ οἰκέτης Ἀγέλαος ὠνομάζετο."

(28) Euripides *Andromache* 297-300. おそらくは、Ennius *Alexander* の一節 (*Sc.* 41-42 J. = 63-64 V.[2] adest adest fax obvoluta sanguine atque incendio. / multos annos latuit. cives ferte opem restinguite.) もカッサンドラがパリスを殺すことを市民たちにけしかけている場面であろうと思われる。

(29) Colluthus 391-394.

(30) Vergilius *Aeneis* 2, 247; Tryphiodorus 373-438.

いることになる。

この歌を通じてプロペルティウスが指摘しているのは、奢侈の横行であり、社会が黄金に支配されているという由々しき事態である。拝金主義の害毒は良家の婦人や乙女までをも堕落させ、ローマには最早誠実な愛はなくなってしまった。古き良き時代の質素な生活やおおらかな男女の性愛は、黄金の支配のせいで見る影もなくなった。そして、やがてローマは滅びるだろうと予言しているのである。

このようなプロペルティウス流の明白な贅沢批判や、拝金主義に対する嘆きについては、オウィディウスは別の巻 (*Ars* 2, 273-286) で展開している[31]。一方、*Ars* 3, 433-466 においては、批判や嘆きは表立った形で現れている訳ではない。しかし詩人は、拝金主義に毒された女性が財力を装う男性に騙され、身ぐるみ剥がれるという事態を仄めかしているように思われる。443-446 に示された人物像は、通常女々しい男性の特徴を表すと考えられている[32]。しかし、それは同時に女たちから金持ちだと思われるような外観でもある。「純粋なナルドゥスの香油 liquido nardo (443)」がとても高価であったことは、よく知られている[33]。また、「生地の目が細かいことこの上ないトガ toga ... filo tenuissima (445)」は上質であり、プロペルティウスの恋人、キュンティアがまとっていることで知られているコース産の絹製高級衣服 (Propertius 1, 2, 2) を連想させる[34]。複数の指輪をはめること (446) は、成金にありがちな悪趣味でもあろう。たとえば、ペトローニウス『サテュリコン』では、トリマルキオーが音楽演奏を伴って華々しく宴席に現れるとき、左手の小指には金メッキをした大きな指輪を、その隣の指には一回り小さいが、星形の鉄製パーツをはり付けた黄金の指輪をはめていたことになっている[35]。したがって、女性はこうした外観に幻惑され、相手を金持ちだと思い込みかねない。

つまり、プロペルティウスが持たざる男性の立場に同調しているのに対し、オウィディウスは女性の利害に即して、富が絶対的な価値を持つようになってしまった社会の孕んでいる危機を指摘する。しかし、目指す方向は同じである。両者ともに、男女間の愛のあるべき姿を説き、ローマをこの危機から救おうとしているのである。だからこそ、オウィディウスはプロペルティウスに倣って、いわば警世の予言者に

(31) *Ars* 2, 277-278 (aurea sunt vere nunc saecula: plurimus auro / venit honos, auro conciliatur amor.) に認められる aurea, auro の polyptoton は、Propertius 3, 13, 49-50 (auro pulsa fides, auro venalia iura, / aurum lex sequitur, mox sine lege pudor.) のそれを意識したものであろう。

(32) Cf. Gibson ad loc.

(33)『マルコ福音書』(第 14 章第 3 ～ 4 節)によれば、ベタニアのある女がイエスに頭に注ぎかけたナルドの香油は、非常に高価なものであり、300 デーナーリウス以上したと言われている。Cf. Plinius 12, 42 "De folio nardi plura dici par est ut principali in unguentis."; Maltby 389 (commentary on Tibullus 2, 2, 7) "nard was the most prized and expensive of unguents among the ancients."

(34) Propertius 1, 2, 1-2 "Quid iuvat ... <u>tenuis</u> Coa veste movere sinus...?" ; Tibullus 2, 3, 53-54 "illa [i.e. Nemesis] gerat vestes <u>tenues</u>, quas femina Coa/ texuit, ..." (下線は筆者による)

(35) Petronius *Satyricon* 32, 3 "habebat etiam in minimo digito sinistrae manus anulum grandem subauratum, extremo vero articulo digiti sequentis minorem, ut mihi videbatur, totum aureum, sed plane ferreis veluti stellis ferruminatum."

耳を傾けることを読者に促している。それ故、*Ars* 3, 439-440 においても、オウィディウスは自らをカッサンドラになぞらえていると考えるのが自然である。

(4) 結語

現在に至るまで多くの校訂者たちが採用してきた読み、praeceptis *Priami* si foret usa *sui* は主要写本の字面 praeceptis, Priame, si foret usa tuis から離れており、神話伝承に即しているとも言い難い。恐らくは主要写本の伝える意味に合わせ、かつ韻律に合わせるために施された恣意的で安直な修正ではないかと思われる。

(1) 〜 (3) の考察の積み重ねから、第 1 に praeceptis はカッサンドラに帰される「教え」と解するべきである。そして第 2 に、主要写本の読みとの隔たりは Madvig 案に比べ大きいものの、韻律の点で問題がなく、言葉遣いにかんしても無難な Goold 案を採用するのが妥当だろう。

補遺

Tarrant は、440 にかんする Goold の修正案を受け入れた上で、433-438 が言語、論理の点でオウィディウスの標準から隔たっていることを指摘し、この一節の削除を提案する。彼が挙げる削除の根拠はさほど強固とも思われないが、Kenny (1995) や Ramírez de Verger (2003) は、この提案を参考意見としてそれぞれの apparatus criticus に含めている。したがって、Tarrant の見解にも一言述べておきたい。

Tarrant は、こう述べている。439-466 の導入部分のように見える 433-438 が強調するのは cultus であるが、それは 441-452 では副次的要素に過ぎず、453-466 では何の役割も果たしていない。441-452 と 453-466 のつながりは、男たちのある種の不誠実であり、435-436 でも言われている。しかし、それは 441 mendaci specie ... amoris で初めてその問題に入るかのように形式的に導入されている。このような導入部と後続部分のかすかな齟齬は、*Ars* のように緊密に論じられている作品には稀である、と[36]。

しかし、オウィディウスの論理はこの一節で Tarrant の考えている以上に緊密である。詩人が避けるよう呼びかけているタイプの男は、いわば伊達男であり、その典型的な外見的特徴 (身繕いが度を越しており、髪がきちんと整えられ、甘い言葉で口説き、浮気心があり、体毛処理や肌の手入れに余念がなく、どうかすると同性愛の傾向がある) が 433-438 において簡潔に述べられている。こうした伊達男の身なりや振る舞いは、ひとえに大多数の女性の歓心を買うことを目的としているが[37]、それ自体は女性にとって大した実害とも思われない。

---

(36) Tarrant 86.

(37) 体毛処理や男色傾向への言及は、直前の couplet (435-436) とはなじまないと Tarrant は考えるが、体毛を剃り、肌を滑らかに保つことは女性の歓心を買うための手管でもある。Cf. Gibson ad 3, 437-438. Martialis 2, 62, 1-4 “Quod pectus, quod crura tibi, quod bracchia vellis, / quod cincta est brevibus mentula tonsa pilis: / hoc praestas, Labiene, tuae — quis nescit? — amicae. / Cui praestas, culum quod, Labiene, pilas?” このマールティアーリスの例が示しているように、女心を買うための手管が行き過ぎると、自らを男色の稚児役とすることにつながる。*Ars* 3, 437-438 もこのような行き過ぎを揶揄していると思われる。

深刻な実害とは、第1に441-442で明確に言われているとおり、このようなタイプに少なくない盗癖である。伊達男の洗練された外観は、卑しい盗癖とはなかなか結びつかない。それは、信じ難い現実である。そこで、439-440ではその信じ難さを見越して、詩人は自らの忠告をかの伝説的なカッサンドラの予言に喩えている。さらに、443-448でより具体的に盗癖のある男の外観を示し、女性読者の警戒感を効果的に煽っているのである。

第2のあり得べき実害としては、453-454でも言われているとおり、欺瞞を挙げている。具体的には、欺瞞とは457-460のテーセウスやデーモポオーンがそうであるように、女性の愛情を悪用して誓いや約束を踏みにじることであろう。しかし、約束が守られている限り、口説き文句や浮気心には欺瞞の疑いはあるにせよ、それ自体罪ではない。そこで詩人は、防衛策として被害に遭った女性を他山の石とするよう勧めたあと(455-456)、相手の出方を窺う方法を指南しているのである(461-462)。

以上のように叙述の展開を捉えた場合、433-438は後続部分との論理的関係で何ら不都合な点はなく、難癖をつけるには当たらない。

むしろ削除によって、男性との出逢いの機会を得るため外出し、公共の場に積極的に現れることを促す先行部分(405-432)とのつながりは悪くなる。

funere saepe viri vir quaeritur: ire solutis
crinibus et fletus non tenuisse decet. (431-432)

しばしば、男の葬儀で(別の)男が求められる。髪をばらばらにして歩き、涙を抑えないことが似つかわしい。

女性のばらばらの髪は、直後の伊達男の整然とした髪と見事なコントラストを成している[38]。431のvir, viriという同一単語の繰り返しは、433のSed vitate viros ...のvirosと響き合っている。Tarrantの削除案はこの響き合いを損なうだけではない。接続詞が欠け、唐突に話題が転換するのみならず、439-440が直前に位置することになる431-432について言われているのか、それとも直後の441-442について言われているのか曖昧になってしまう。これは、致命的欠陥である。

以上により、Tarrantによる433-438の削除案は適切とは言えない。

○文献一覧

P. Brandt, *P. Ovidi Nasonis de arte amatoria libri tres*, Leipzig 1902.
R. K. Gibson, *Ovid Ars Amatoria book 3*, Cambridge 2003.
G. P. Goold, Amatoria Critica, *HSPh* 69 (1965), 1-107.
A. E. Housman, *M. Annaei Lucani Belli Civilis libri decem*, Oxonii 1926.
E. J. Kenney, *P. Ovidi Nasonis Amores, Medicamina Faciei Femineae, Ars Amatoria, Remedia Amoris*, Oxonii 1961.
Id., Ovidiana, *CQ* 43 (1993), 458-467.
Id., *P. Ovidi Nasonis Amores, Medicamina Faciei Femineae, Ars Amatoria,*

(38) 本城大一氏(cf. 註1)のご指摘による。

Remedia Amoris, Oxonii 1995.
F. W. Lenz, *P. Ovidi Nasonis Ars amatoria*, Torino 1969.
I. N. Madvigii, *Adversaria Critica* vol. 1, Hauniae 1871.
R. Maltby, *Tibullus: Elegies*. Text, Introduction and Commentary, Cambridge 2002.
J. C. McKeown, *Ovid: Amores*. Text, Prolegomena and Commentary vol. II. A Commentary on Book One, Leeds 1989.
J. H. Mozley-G. P. Goold, *Ovid II. The Art of Love, and Other Poems*, with an English translation by J. H. Mozley. Second edition revised by G. P. Goold, Cambridge Massachusetts, London 1979.
E. Norden, *P. Vergilius Maro, Aeneis Buch VI*, 8., unveränd. Aufl., reprograf. Nachdr. d. 4. Aufl. von 1957, Stuttgart 1984.
A. Palmer, *P. Ovidii Nasonis Heroides XIV*, London, Cambridge, Dublin 1874.
E. Pianezzola, G. Baldo e L. Cristante, Per il testo dell'*Ars amatoria* di Ovidio. Proposte e riproposte, *MD* 23 (1989), 151-72.
Id., *Ovidio. L'arte di amare*, Milano 1991.
A. Ramírez de Verger, Observaciones al texto de *Ars Amatoria* de Ovidio, *Emerita* 61(1993), 321-334.
Id. , *P. Ovidius Naso Carmina Amatoria*, Monachii et Lipsiae 2003.
R. J. Tarrant, Ovid, *Ars Amatoria* III. 433-42, *PCPhS* 26 (1980), 85-88.
E. Woytek, Deleantur am. 2, 11, 31 sq. et 1, 14, 17-22, reviviscat Helena (ars am. 3, 440): Textkritische Beiträge zu Ovid, *WS* 111 (1998), 167-189.

「フィロロギカ」研究活動の趣旨

1 本文批判、文字伝承研究、注釈が古典学の中で極めて重要な研究部門であることを認識した研究者たちの集団でありたい。

2 その研究は、この種の研究を直接に実行したものであるか、あるいは、この種の研究を充分に意識した間接の実行であるか、を問わない。

3 この種の研究を実行することをつうじて日本の古典学の水準向上に寄与したい。

4 外に向けて、まず第一に、多くの古典研究分野が存在する日本において、西洋古典文献学の分野における研究を提示することによって、特に文献学方法論の部分で、我々の研究が寄与しうるところがじゅうぶんにある、と信じたい(日本語による活動)。他の古典文献学分野との協同は将来に向けての検討課題である。

5 外に向けて、第二に、我々の以上のような研究は、欧米の古典学研究の中心と重なりあうものであるから、研究の水準によっては、そのまま直接の研究推進寄与となりうるであろう。この寄与をじゅうぶんに意識した集団でありたい(欧語による活動)。

―編集後記―

我々が2000年秋から始めた、小さいけれども、学問上の運動としての自覚のある活動の最初の果実をお送りします。これまで参加していただいた方々、特に、本創刊号に投稿していただいた方々に大きな感謝をささげたいと思います。また、編集委員会の規定上、編集委員会外の方々にお忙しい時期(12月～2月)に査読をお願いしました。ご協力をこの場を借りて感謝申し上げます。ことがらの性質上いちいちお名前をあげて感謝の気持を申し上げることができず残念です。それから、この号の印刷につき、技術的な協力と労力を提供して下さった北海道大学の小池生貴氏にも感謝をささげます。最後に「古典文献学のために」と号した雑誌が数号で消滅するなどということのないよう、ますます多くの方々のますます大きな貢献を期待したいと、北の空から呼びかけます。

安西眞(責)

フィロロギカ―古典文献学のために
創刊号 (2006)
発刊：フィロロギカ編集委員会
研究会・編集委員会事務局：葛西康徳研究室(大妻女子大学)
印刷・製本：株式会社　アイワード(札幌)